頭註

國譯本草綱目

第十三冊

春陽堂藏版

原著　明　李時珍

監修・校註　理學博士　白井光太郎

顧問　木村博昭

考定　理學博士　牧野富太郎

考定　理學博士　脇水鐵五郎

考定　岡田信利

考定　矢野宗幹

考定　木村康一

譯文　鈴木眞海

國譯本草綱目拾遺ノ序言

本草綱目拾遺十卷ハ支那浙江省錢塘ノ恕軒趙學敏ノ輯錄編著シタモノデ水、火、土、金、石、草、木、藤、花、果、穀、蔬、器用、禽、獸、鱗、介幷ニ蟲ノ十八部門ヨリ成リ各部下ニ多數ノ品物ガ列擧解釋セラレテアル

此拾遺ハ今カラ三百四十二年前、明ノ神宗ノ萬曆十八年庚寅ノ歲編成セラレタ本草綱目出現ノ後百七十五年ヲ經テ清ノ高宗ノ乾隆三十年乙酉ノ歲卽チ今カラ百六十七年前ニ始メテ世ニ公ニセラレタモノデアル、故ニ舊來ノ綱目ノ書ニハ之レガ添フテハキナイガ、然シ今日新シク版行セラレタル綱目ニハ或ハ之レヲ合刻シテ一部ノ書トナシタモノガアル、又時ニハ此拾遺ガ獨立ノ書帙トナツテキルコトモアル

書中所載ノ品物ハ尚未ダ一タビモ我邦學者ノ討研ヲ經タコトガ無イト信ズル、元來其事物ガ支那ノモノデアルカラ其檢定ハ中々ノ大事業デアツテ、トテモ一朝一夕ニ仕遂ゲ得ベキ事柄デナイノミナラズ到

底今日ノ我邦人デハ恐ラク一人モ之レニ當テ其レヲ判定解說シ盡ス者ハ無イデアラウ、畢竟支那ノ諸ノ事物ニ通曉セル人デナケレバ其レハ全ク不可能ナ事デアル、今其收錄シアル品物ヲ見テ行クウチニハ精粗解決シ得ベキモノモ亦無キニシモアラザレドモ然カモ其十中ノ七八ハ容易ニ裁決ノツカヌしろものデアル

上ニ述ベタ有樣デアルカラ今此拾遺ニ在テハ其品物ニ一切同定ノ指ヲ染メズニ先ヅ其儘ニシテ置キ他日其解決者ノ出ヅルヲ待ツコトニシタ、コレガ今日最モ機宜ニ適シタ處置デアルト信ズル

昭和七年十二月中澣

考定者ノ一人　牧野富太郎　識ルス

頭註國譯本草綱目拾遺　第十三册

目次

本草綱目拾遺水部第一卷

水部

本草綱目拾遺火、土、金石部第二卷

土部

金部

石部

本草綱目拾遺草部第三卷

草部上

本草綱目拾遺草部第四卷

草部中

本草綱目拾遺草部第五卷

草部下

本草綱目拾遺

卷首

錢唐 趙學敏 恕軒氏輯

本草綱目拾遺小序

ある人が予に『君は本草綱目の拾遺を作つたといふことだが、さうか』と問はれたので、『さやう』と答へると、その人がいふには『瀬湖(李時珍)は、博く羣書を極め、百代を嚢括する偉大な蘊蓄を以て、あらゆる文獻を徵考し、子、史の典籍から小說、雜記の記事に至るまで、悉く詳探して一家の言を成したものだ。且つ、かの綱目の書を編輯するについては、その費用を惜まず、當時天下の醫界を詢訪し、遍く各地の實際を調査して、遠く異域、邊陬の產物までも研究し、道家、仙境の異品までも險探したもので、癸辛雜識記載の押不蘆、輟耕錄記載の木乃伊の如きまで、瀬湖はやはりみな取り入れてある。故らに拾ひ出して記錄するほどの遺落があつたらうとは何としても思はれない。君の著作といふも、結局は指の駢、疣の贅のやうなことではないかと思ふが、どうだ』といふのであつた。その時、予は『いかにもさうだ。が、さうばかりもいへぬところもある。かの瀬湖の書はいかにも該博なものに相違ない。しかし、物は生じて久しきに亙れば種類がいよいよ繁多になり、一般人には

新奇、未知のものに對する追求欲があつて、日新らしきより更に日新らしき種種の珍異のものが無數に發見、蒐集されて行くものである。さやうな關係から、丁藤、陳藥などは本經には記載されてなかつたものだ。吉利、寄奴などいふは惟だ後代になつて傳へられたわけである。禽、蟲は思邈に及んで始めて大いに備はり、湯液は海藏に及んでまた十分に補廣されたものであつて、その研究を繼承する者がなかつたならば、新領域の開發、發展の可能は誰に向つて期待されようか。石斛は一種の植物だが、現に霍山に産するものは形が小さくして味が甘い。白朮は一種の植物だが、現に於潛に産するものは根が斑で力が大きい。これ等はいづれも近代産に現はれた變化の例であるが、かやうな事實も記錄に留めて置かなかつたならば、時代の過ぐるに隨つて全くわけが判らなくなるであらう。百草記中に、「元黃耆といふ腫毒を治するものを産する」とある事實、孫公の談圃に、「水梅花を痢疾の治療に用ゐる」とある事實の如きは如何にして取扱ひやうがあらう。後代ではそれが何物を指したかさへ判らないのだから、その色、その味に至つては如何にも判斷の手掛りがないではないか。それから考へると、かの烟草が景岳によつて說述され、燕窩が石頑に

よつて考訂され、繆氏の經疏一篇を閲すれば本經の簡誤が一見して判るのであつて、それ等は實に李氏の功臣といへる。予の拾遺の作も、又、脛を續ぎ、跖を重ねるの處はあるまいと思ふのだ』と答へた。するとその人は『なるほどさうだ』と予の主張を是認し、卷首にそのことを記して置くがよからうと勸められたので、そのままを叙として置く。

乾隆乙酉八月

雙硯草堂にて

錢唐　趙學敏　恕軒題す

凡例

一、この書は專ら李氏の遺を拾つて作つたもので、凡そ綱目に已に記載されたものにして或は治療の點になほ不備のものがあり、根や實について未詳のものがあればそれを補つた。

一、藥目にはもと次第があり、綱目の分類も自ら繁多ならざるを得なかつたのであるが、玆には概して簡に從ふを例とした。

一、用藥はその便を取るものであつて、珍貴のもの、罕に有るものを取るわけのものではないのであるが、しかし、天地の間に於ては瓌奇神異の物も無いとはいはれないので、さうした物に遭遇した場合、何等かの取扱を下して置かなければ、如何にしてその研究の手掛りを得せしめ、考證の餘地を存することが出來ようか、それ等も記載して博物者の用を助けることにした。

一、この蒐集に方つては、博く收めることを主眼としたのであるが、選錄には尤も愼重を旨とし、中には書、史、方志から得たものもあり、一般醫界、先輩識者によ

つて得たものもあり、それには必ずその確驗を審にした上で記載に編入し、幷にその書名を附記して一般の信頼を期した。やや疑義に渉るものは棄て記載に入れぬことにした。それは銀汗、釘霜、雞丹、蜂溺、雲根、石雄黄油の類の如きで、傳つた方も相當にあるけれども、いづれもその效果に責任を有てないものだ。これに類似したものは他にもあるが、概して刪削に從つた。たとひ缺略の譏を受けても甘ずるが、輕信に誤られることを避けたかつたからである。

一、草藥には類が最も廣く、諸家の所傳もさまざまで、その說に對し、予として結局深き信を置くわけに行かないが、百草鏡中にそれ等を收錄して最も詳である。この集に間ま一二を採錄したものは、曾て園圃中に種植して實際を試驗したものだから載錄したのであつて、然らざるものは寧ろ省略して敢て世を欺かぬようにと考へた。

一、綱目には藤部がなく、藤をば蔓類に歸してあるが、正確には木本を藤とし、草本を蔓とすべきもので、牽强し、混淆するを容さないものだ。故に本書では藤蔓部を區別した。綱目には花部がなく、花をば各種の物のその本條に附記してあつ

て、その中にはその物の根、葉の記載があるが、反つてその花を記載せぬものがあり、或はその花の名だけは僅に記入されてゐても、又、主治がなかつたりしたものがある。そこで別に花部の一部類を設け、枝梗などに補遺すべきものもその後に附した。梅花に梅梗を附した如きの類である。その他その例で類推されたい。

一、綱目中には、その名だけを僅に列して主治のないもの、梅花、龍涎の如きがあるが、それ等には悉く效驗を錄して增入した。考核未詳のものもあるが、他日、待用本草なるものを作り、宇宙間の藥に入れられるもので前人に未だ收採されなかつたものを蒐合して別に一書とし、後世識者の博訪に俟たうと考へてゐる。

一、綱目には誤つて分類したものがあり、誤つて併合したものがあつて、草部に既に鴨跖草の獨立した一條を列記してありながら、何故か雜草のうちにまた耳環草を列してある如き、これはその物に碧蟬兒花なる名があるので誤つて分つたものらしいが、實は碧蟬花といふは鴨跖草のことなのだ。又、長生草の條下に紅茂草を附記し、庚辛玉冊の通泉草を引據して註解したが、これは通泉草にも長生草なる名があるために誤つて併合したものと思はれるが、何ぞ知らん通泉草は蒲公英の

別名なのだ。かやうな取紛れた錯誤は數ふるに遑ないのであつて、貝母に川、象の區別を分たず、大棗に南、北の區別を分たなかつた如きに至つては、その功用の相異から誤を傳へる危險に陷ることが少くない。そこで悉くその缺を補正した

一、人部に就いて、綱目には收載されたものが少からずあつて、爪甲が刀に代り、天靈が鬼を殺すといふやうなことも詳しく說明してあるが、本書に於てその遺つたものを求めるとなれば、必ず隱怪殘賊の中に於て捜羅するといふ感心ならぬ努力をすることになるわけだ。濟生の務は實に奸を摩くにある。かの物を殺して人を救ふといふことすら天の怒を干すことだ　況や人を人の治療に用ゐるをやである。故に童腦は生勢の效があり、交骨は迷魂の作用があるといふやうなこともあるが、それは羅刹、修羅道に於てのことだと思ふ。噫、孫思邈さへ自ら誤つたのだ、老神仙さへである。吾人は何としてそれに與するわけに行かう。本書では特にそれを删り、删つた理由を此に附記して置く。

一、この錄を選輯する初には、目の下に分註し、增品して、補、治の二字で別け、凡そ綱目未載のものをば增とし、綱目已載にして治法のなほ不十分であつたものを

ば補として記したのであつたが、庚子の春、また校訂を加へて、補治に於て十中の八九を刪去した。蓋し常用のものの主治は自ら紛らはしく、綱目で採用した記載も夥しいことだから、再補の必要もないことだ。ただ綱目に収載されたもので、罕に用ゐる物にして主治の記載の甚だ少いものの場合は補治として刪らずに置くことにしたが、品類の多からぬものはやはり目下に分けて記載せねばならぬほどのものでないから概ね削つた。

一、綱目中の記載は、大目を綱とし、細目を目とし、釋名、集解があつて名稱、形狀を考證し、氣味、主治で寒熱、功用を辨別し、發明でその效果を說明し、正誤でその訛を正して說を一定し、修治でその藥性調和を示し、且つ主治に於て十分ならぬ點は附方で記述し、物質の相同じきものには附錄の一項を設けてあつて、如何にも詳細を盡したものといはねばならぬ。しかし、その例にはやはり土當歸は荷包牡丹の根であるが、釋名、集解がなく、鐵線草、金絲草には集解はあるが形狀の說明がなく、水仙花、甘鍋泥は得難いものではないのだが氣味が記載してない。既に修治なる一項を設けてあるが、諸石中には特にその法を掲げたものが

罕である。主治がないとすれば藥に入れられる筈はないのだが海獺、猾髓などいづれも遺てずに記錄してあり、尋常の味には毎に發明するところが多く、珍貴のたぐひのものには一片の解釋も下してないといふものもあるやうに、整一であるとはいへぬのであるが、前人の用心にその自信の深かつたこと、愼重であつたことをば看取し得る。予がこの述作に就いては、既に簡潔を主としたのであつて、一切の繁例をば芟ることとし、その藥品にして從來記錄され來つたものから採り、古人がそれぞれ氣味、形狀を記載されてあるもの、或は一物にして數名あるものは、すべてそのまま書き加へ、細目の區別を置かぬことにした。傳聞の事實から採つたもので、或は舊本に名、解、氣味の記載のないものも、やはり臆說を妄添することをしなかつた。たまたま思ひつきのあつたものはその後に附註して、方家諸氏の指正の資料に供したわけである。もし同志の人人の助を蒙つて、一一舛訛を指訂されるならば、更に永く不朽に誌し得るであらうと思ふ。

本草綱目拾遺總目

正誤

【鹵鹸】

瀕湖作の綱目には、各條下に本經にあるものは先づ本經を引いて掲げ、次に他書を掲げてあるのだが、土部の石鹹の一條は補遺の一條を作つて掲載した。しかしそれは神農本經の鹵鹸であつて、獨立した一條がありながらそれを列入しなかつた。本經逢原に據れば「鹵鹸、卽ち石鹹なり」とある。

【樸硝・硝石】

張石頑は『樸硝、硝石は本經の所說を後人が互錯してゐる。五臟積熱等の證は熱邪の固積したものであつて、硝石で滌除し得るところのものではない。また七十二種の石を化かすといふことも樸硝に可能性があるわけはない』といつた。この二條は從來互簡に屬するのだが、瀕湖はそれを看破せずして、やはりその誤に隨ひ、且つ硝石の發明下に土宿本草の「硝石は能く七十二石を化す」とあるを引據して、別錄にこの文が樸硝下に列してあるを誤としたが、本經としてまたその錯簡に仍つたのは如何なるわけか判らない。

【硇砂】

硇砂には二種あつて、一種は鹽硇といひ、西戎に産し、狀態は鹽塊のやうで濕へば化けて水となり、或は滲失して了ふものだ。一種は番硇といひ、西藏に産し、五色あるが太だ紅きものを上級品とし、質は石のやうでいづれも鹵氣のないものだ。瀕湖の揭げたものはいづれも鹽硇である。眞の藏硇は血、肉を化して水にする力のあるもので、煆煉しても服するわけに行かぬものだ。

【山慈姑】

山慈姑は、處州地方では白花のものを良しとする。形狀は石蒜に似たものだ。瀕湖は山慈姑の集解に註して、冬期に葉が生え、二月に枯れ、それから葉が抽き出て花を開き、花に紅、黃、白の三色があるといひ、石蒜の集解下に註して、春初に葉が生え、七月に苗が枯れ、葉が抽き出て紅色の花を開くといひ、又、一種は四五月に葉が抽き出て黃白色の花を開くといつてあるが、予は曾て平湖の仙壇寺に寄寓した時、沈道人が(二)遂安から一鉢の慈姑花を持つて來たのを親しく見たが、その花は白色でさながら石蒜花のやうであつた。彼の地の者の言に據れば、紅、黃花のもの

(二)遂安ハ縣名、晉ニ置ク、故城ハ今ノ浙江省遂安縣ノ西ニ在リ、今ハ金華道ニ屬ス。

はなく、その花は三月に開くといふことだ　しかるに張石頑は本經逢原の慈姑下に註して、九月に花を開くといつてあるを見ると、これは石蒜を慈姑としたものだ。

瀕湖は慈姑の條下の附方に、孫天仁集效方の紅燈籠草を用ゐるとあるを引いたが、これは紅姑娘草のことで、專ら咽喉、口歯を治するものだ　瀕湖が收録してある酸漿草がそれである。この方を酸漿草下に列せずして慈姑下に列したのは、慈姑に又、鬼燈檠なる名があるところから誤つたものではないかと思はれる　そもそも慈姑には解毒の功はあるけれども咽喉、口歯には入れられぬものだから混入し得べきものでない。

又、奇效方に、風痰を吐するに金燈花根を用うとあるを引いてあるが、石蒜にも金燈花なる名があるを知らなかつたのだ　慈姑根は食つても吐かぬが、石蒜は食へば吐かせるものだ　して見ると奇效方に用ゐたものは石蒜であつて慈姑ではないのである　瀕湖はかくて二重に誤つたわけだ

【金鎖匙】

草藥に金鎖匙といふがある　俗に金鎖銀開と呼ぶもので、これは藤本で蔓延する

山草である。地方人はそれを取つて喉症を治療するが極めて效驗がある。これはまた馬蹄草と名けるが、馬蹄細辛とは異ふものだ。馬蹄細辛とは杜衡のことである。瀕湖は杜衡の條末の附方に急救方中の金鎖匙を引いて杜衡と考へたが、誤である。

【蘭草】

蘭草にある數種に就いて、瀕湖の綱目に正誤はあるけれども、やはりまだ明晰でない。その釋名に於ても多くは混淆して全部の註解を下してゐる。澤蘭といふは、旣に一般に奶孩兒と呼ぶがそのものだ。この草は、莖が方、花が紫で、枝も根もみな香しく、一般人家で多く種植し、婦人が暑期に髮に插すものだ。藥に入れては血分に入る。省頭草といふは、葉は細碎で瓦松のやう、黃花を開き、氣は微に香しく、河の堤の沙岸の邊に生え、暑期に地方人が採つて市中へ賣りに出る。婦人がやはりそれを買つて髮に插す。膩や垢を除くものだといふことだが、藥に入れて用ゐたといふ事實はないものだ。又、香草といふがあつて、葉は薄荷のやうで少し香氣はあるが、やはり薄荷とは全然別のもので、五月、六月の間に人家で買つて黃魚を煎るに用ゐ、腥氣を殺すに葱の代用になるといふことだ。これは所謂羅勒と呼ぶそのも

のだ。又、孩兒菊といふがあつて、葉は山馬蘭のやうで長い、近頃ではいづれもこれを澤蘭として藥用に供し、血を治する功力があるといふ。この四種はいづれも香草であるが、奶孩兒草だけが就中峻烈なものだ。瀕湖の綱目では、蘭草の釋名下に省頭草、孩兒菊を混じて一類として取扱つてあつて、甚だ明晰を缺いてゐる。その集解に詳說した形狀に至つては、また孩兒菊を澤蘭とし、附方中ではまた省頭草を蘭草としてあつて、いづれも確實を缺いてゐる。又、羅勒を菜部に編入して「即ち蘭香だ」といつてゐるが、張璐玉の逢原に「羅勒と蘭香とは各別種のものだ」といつてある。張氏は（一）長洲の出身で、その地の習俗として食事の場合には每に香草を用ゐるところだから、その說には自ら根據がある。必ず從ふべきものがある筈だ。

（一）長洲ハ唐ノ縣名、今ノ江蘇省呉縣ノ地ナリ

【射罔法】

凡て藥には天然產のものもあれば人造のものもあるので、瀕湖の綱目には、人工で製造したものに對してはその製造方法を備にしてあつて、また博採無遺といふべきだが、獨り草烏の條に附した射罔にだけは、その主治の效用を列記してありながら、その製造の方法を備に記さず、僅に集解下に大明の一說を引いただけで、一向に詳

細でない。予は考究したところに因つて、補記して瀕湖の苦心を全たからしめる。

按ずるに、白獺羅の射罔膏を造る法は、新鮮なる草烏一二斗を用ゐ、土を洗ひ去つて籮に盛り、脚で踏んで肉の白くなるまで黒皮を去り、搗き砕いて布で濾し去つて汁が乾くまで搾り出し、滓を去つて磁盆にその汁を盛る。盆の底下に粉が沈むがその粉をば去つて用ゐない。その全部から澄し出した清汁は十碗ほどになるわけのものである。そのうちから四碗を鍋に入れて煎じ、一回滾らして沫を起たし、篾片で沫を刮り去り、磁碗に傾け入れ、前に六碗に除してある生汁をその熱汁に入れて一回攪き勻ぜ、一夜露して翌朝その澄清した汁を取り、碗内に散分して澄して滓を去り、汁の量の多少に随つて適當な大いさの碗に盛り、日中に放出して正午まで曬してまた滓脚を割去し、再び晩まで曬して澄清汁を取り、薄綿紙を二罩に鋪いて滓を濾し去る。第二日、第三日も前記の曬法を用ゐ、毎日曬すときには竹片で碗の底から一通り攪ぜて曬す。この方法を用ゐれば上が熟して下が生だといふやうなことがない。第四日の晩に至つて、濾稠した薬をそのまま取去らずに別の碗に盛り、一夜露して澄清汁を取る。底下にある硬く稠い部分をば用ゐない。第五日に前の汁全部を

二　罩ハ竹ニテ編ミタル濾ナモノ。

各碗に入れて曬し、六七日間曬して各碗が漸次に少くなつたとき、汁の多寡を計つて餘分にある碗のものを減じて少い碗に分け、各碗に均分する　曬すときにはよく注意して看守し、上に黑沙點子が起り、表面が結氷のやうで五色の雲のやうな象があり、その色が紅黑で香油のやうな狀態になつたとき、全部を盆に移し入れて清淨なる陰處に四五日間放置し、更に磚砌で高さ二尺、周圍はその內部に藥盆を容れ得るだけの一箇の爐を作り、その爐の中心に地上から一尺五寸離して木の棚を架して盆を置き、その上五寸だけに空いてゐるやうにし、藥盆の上をば布で蓋ふて烟が透走せぬやうにし、爐旁に鵞卵ほどの一箇の火門を明けて火が地から三寸高さに起るやうにし、外部に炭火十數塊、幷に梘械柴――俗に橄漆と呼ぶものだ――を用ゐ、又、皂角、花椒を用ゐて烟に燒き、烟を火門內に入らしめて藥盆を燻ずる　熟した藥の表面が結して氷のやうになれば、それは火加減が十分に加はつたのである　凡そ一時ほど燻してその結氷狀を厚からしめ、再び看て氷が厚くなつたと思ふときは火を除いて藥を取出し、冷して磁瓶に收めて固く封ずる　それで隨意に使用し得るのである。冬期で氣候が寒冷なときは、綿に包み煖處に置いて凍損せぬやうにし、

夏期で氣候の熱するときは清涼な場所に置いて潮壊せぬやうにする。凍損し潮壊して沫が出たときは、磁盆に盛つて前記の方法の爐で煉じ、藥が熱したとき止める。箭につけてある藥の場合には、皂角、花椒で烟燻すれば舊の通りになる

○前記の藥を曬す場合に、日光の力が甚だ緊かつたときは一二日曬してまた一夜露す必要がある。日光が淡く緩やかなときは露すほどの必要はない。初めに製藥に着手するには、その日の天候の晴明なることを確めてから烏頭の取扱を始め、前記の製造方法に着手するのだが、もし一二日曬して雨になつたときは、前記の燻藥爐上で照曬し、ただ炭火で焙いて盆の熱するを程度とし、攪き勻ぜてまた一二日放置し、晴天を俟つて再び曬す。烏頭は取つて來てから堆く積んで置いてはならぬ。爛壊する恐があるものだ。必ず濕地に攤開して置く。風に吹かせてはならぬ。乾いて汁が無くなるものだ。取ると直ちに搗くが妙である。その藥が完全に製造されたときは固く封じて久しく經過し、下に澄清して稠く砂糖のやうな狀態になつたものを挑げ取つて箭に著けるが最も鋭い力のあるもので、身に中ると走ること數歩にして死ぬ。これを曬藥と名け、熏藥に比して更に妙である。その藥は香油に遭ふことを

忌むもので、一點入つても無效になる。その性に見血飛、見油飛、見水飛なる三飛といふことがあつて、製造の場合、貯藏の場合には甚だその三者を忌むものだ。

【檀胡魚】

羊蹄菜の葉は能く胡夷魚、鮭魚、檀胡魚の毒を殺す。瀕湖の註に「胡夷、鮭魚はいづれも河豚の名である。檀胡は未詳」としてあるが、予（學修）が按ずるに、檀胡は彈塗の二字の訛であつて、彈塗といふは跳魚のことだ。餘姚、寧波にいづれもある。沿海の渉塗上に甚だ多く、形は土附のやうで、刺があつてよく人を螫す。閩中、及び寧地方ではいづれも彈塗と呼ぶ。その毒に中つた場合には羊蹄菜で解し得るものだ。

【四葉蓮】

杭州西湖の岳飛の墓の後の山に生える一種の草は、高さ三四寸、一莖直上に伸び、頂に四葉が生え、その葉の隙に白花を着け、細辛と全然同樣のものだ。その地の者は四葉蓮と呼んでゐる。按ずるに、この草は卽ち綱目所載の獐耳細辛、乃ち及已である。瀕湖は及已の條下にその形狀を記載して「先づ白花を開き、その後にただ三

片の葉が生える』といつたが、いづれも誤だ。」

瀕湖の綱目に菟葵を黄蜀葵の前、蜀葵の後に列してあるは、必ずその形狀が蜀葵と甚だ相遠からぬといふところからしたものらしいが、秋葵の葉が雞爪のやうになつてゐるに比較されるにしても、花は單黄であつて大きく、到底蜀葵の狀態のやうなものとして比較すべきものではない。しかし仔細に集解の文を讀んで見ても、蘇公所說の石龍芮の如くにして花白しといへるが如き、郭璞の註說では又、葵に似て小さく、葉の狀は藜の如くにして毛ありとしてあるが如き、寇宗奭所說に又、菟葵を錦葵となしたるが如き、種種なる解說が紛紛として結局一定した確見がなく、瀕湖は釋名下に、圖經の「菟葵、卽ち天葵」とあるを引き、集解中にはまた圖經にいつてある形狀をば記載せずして、獨り鄭氏の通志に『菟葵は天葵なり、狀葵葉の如く、葉は大いさ錢ほどにして厚く、面青く背紫にして崖石に生ず』とあるを採用してあるが、按ずるに、これは紫背天葵のことだ。その葉は三岐に分れ、三葉酸草のやうで大きく、根があつて根下に子があり、年深きものはその子が指ほどの大い

【菟葵】

【陸英】

さになる　俗に千年老鼠屎と呼ぶ　それはその形と黒皮が粗ぼ鼠屎のやうな狀態だからである。故に外丹本草に雷丸草といつたので、それはその根下にある子が雷丸のやうだからだ　かうして見るとこれは全然葵類ではなく、葵なる名があるに過ぎないのである　瀨湖は何の據るところがあつて卽ち莬葵として諸說を引證したのか判らない　又、折衷して見るところもないものだ。蓋し瀨湖は元來莬葵を識らず、且つまた天葵をも識らなかつたのだ　故に釋名に外丹本草の雷丸なる名稱を引いたが、釋名下に如何にしてこの名稱が生じたかに就いては註解し得なかつたのである。これはいづれも疎略に失したものではあるまいか。紫背天葵に就いて考察するに、その功用は全く根に在るものだが、瀨湖は主治の條に於て僅にその苗について言つただけで、その根の功用をば記載しなかつた。故に予は拾遺中にこれを補述し、その次第を此に記して置く。

陸英、卽ち蒴藋であつて、甄權の藥性論に「田野、村墟に甚だ多く、人家に植ゑて高大にして色赤きものは陸英、田野に生ずる葉上に粉あるものは蒴藋であつて、

二味の主效は大體に於て相類する」とあり、その分類も明白にして據るべきものだ。瀕湖の綱目では陸英、蒴藋を分けて二と爲してゐるが、陸英の集解中に於ける陶、蘇の本草、甄權の藥性論に、いづれも陸英、卽ち蒴藋としてあるは必ず據がある。またこれを引入しなかつたのは何故であつたらうか。

【食茱萸】

食茱萸は、本草遺に『大熱にして毒なし。能く積陰、寒濕を去る』とある。瀕湖は茱萸の集解中に「欓子は形が茱萸に似たもの」で、ただ食用になるだけだ。故に食茱萸と名ける。小毒あり」といつてゐるが、この條目は「食」の字のために誤つたものだ。張石頑の本經逢源に「食茱萸と吳茱萸とは性味相類し、功用も彷彿たるものだが、本經の文は從來錯簡して山茱萸の條中に在つたものだ。その主治を詳細に考察するに、心下寒熱とある、卽ち虛寒は心腹冷痛を治すといひ、中を溫め、寒濕痺、卽ち中惡を逐ひ、臟腑の冷を去るといひ、三蟲を去る、卽ち蠱毒の惡氣、飛尸を殺すといつた。常食の品ではあるが、辛香にして胃を助け、能く濁陰の滯を開ける。故に身を輕くするの驗があるのだ。以上の主治は山茱萸の能くするわけに行くものでない。

その帶下、冷病を治し、胃を暖め、濕を燥し、水氣、浮腫に用ゐての功は呉茱萸と同じだが、力がやや及ばない。かやうにその主治の詳しい點を詳察するに、これは專ら食品に入れるだけのものではないのである。劉禹錫は「予は年七十七で、秋、冬の時期になると小腹が痛み、綿綿と不斷に痛んで止ることが出來なかつた。蓋し小腹は肝に屬する。辛丑の歳は濕土が司天、寒水が在泉であり、且つ丙辛は以て寒水と化して風木を致し、下に鬱して暢ぶることを得ず、その上老人は眞陽がまた虛するのでこの病が生じたのだ。食茱萸二錢、烏藥一錢、香附一錢を合煎した湯に再び倍の清酒を加へて一時の間煮て、朝食後に空腹になつたとき服して見ると前記の症が頓に癒えた」といつた。蓋し食茱萸は厥陰の寒濕を去るもので、烏藥は氣が溫であつて肝氣を利し、醋で炒つた香附はまた能く肝氣を行らすものだからかやうに奏效が捷だつたのである。又、ある婦人は秋深くなると腹中氣痛を病んで甚しかつたが、ただ食茱萸を多く服しただけで癒えた。時珍はただ食用になるのだといつたが、『食』の一字のために死句下に抗泥して了つたものではないかと思ふ（食茱萸の一條は、連氏所藏の原本にはない。[illegible]昌注）

【半天河水】

偏鵲が飲んだ上池の水、即ち半天河水で、雨のことである。綱目では必ず樹穴上の水を當つべきものとしたが、誤だ。

【蔊菜】

蔊菜は好く高山、泉源の石上に生じ、石菖と一類のもので、その味が辛辣である。山谷は、孫愕は沙臥するを以てその苗を蔊食するといつた。李東壁が田園の小草だといつたことは誤だ。

【蘘荷】

蘘荷を、李東壁は「即ち上林の猼且だ」といつたが、事實は猼且とは芭蕉の發音の轉訛なのだ。方以智の物理小識に「蘘荷は蕉に似て小さく、又、蘆稷に似て、三月紅花を開き、夏緑刺房を結び、内に黒子がある。その根は薑に似たもので、菹になる。蛇が喜ばない」とある。この故にまた蠱を治するのだ

【鶡鴠】

鶡鴠は十月毛が落つるもので、寒して號き、凍を忍び、冬來つて柏實を食ふ。ま

た白らその遺屎を食ひ、遺してはまた食ふ　故にその屎を五靈脂といふのだ　これは東壁がまだ詳知して居らなかつたことだ。

【三白草】

三白草は俗に水木通と呼ぶ　綱目の釋名に一條の別名もないのは調査が博く及ばなかつたものであらうか　又、瀕湖は、この草は八月苗が生え、四月にその頂部の三葉の表面の白いのが三たび青く變じ、三たび白く變ずるが、他の葉は相變らず青色だ　故に葉の初めて白くなつた時は小麥が食へ、再び白くなつた時は梅、杏が食へ、三たび白くなつた時は黍子が食へるとしてあるが、これで見るとまだ親しく三白の形色を實見してゐなかつたやうである。按ずるに、盧之頤の乘雅に「わが家でこの草を庭前に植ゑてあつたので、二十餘年間、いつも見て居るに、三月苗が生え、葉は薯蕷のやうで對生し、小暑の後に莖端に發する葉が純白で粉のやう、背面も同様だが、初は小さくして漸次に大きくなり、大きくなると葉根が先づ青くなり、それが葉尖まで及んで盡く青くなる。かやうに發葉することが三たびで、再葉せずして三たび秀で、花穗も白く、根鬚も白いから三白といふのである　もし草がまだ秀

ぬうちに摘み取つても、或は六七月、或は八九月になると、重ねて苗葉が生え、やはり必ず一定時には葉が白くなつてゐる。月令の小暑後に三囘ある庚の日が三伏であつて、それは火形を避けて以て容平の金德を全ふするといふ意味である　三白草は三伏ならずして三たび白を顯し、轉じて火、金相襲ぐの際を以て化して炎敲して淸肅となるものだ　これは即ち點火成金であつて、別に種子を覓めることを煩はさぬその狀態である　故に夏は暑に傷んで出の機の未だ盡きぬもの、秋は濕に傷んで降の令の過だ急なるものに主效があつて「雨ら安きを得るのだ」とある。この言に據ればこの草は時節に應じて白葉の三瓣を生ずるのであつて、ある時期になつて靑葉が白に轉ずるのではなく、李氏の說とは逈に異つてゐる。又、「常中丞筆記」に「鏡湖に産する三葉白草は、苗が秀んとするときその葉が漸次に白くなり、農人はこれを俟て田に蒔く、三葉盡く白くなるときは苗が秀て畢つたときだ。(一四)餘姚にもこの草が多く、水濱に生え、毎春、夏水の十分ある歲は葉が齊く白くなるが、水の十分ない歲にはただ一葉か二葉白くなるだけであつて、これで占ふに甚だ驗がある　現にその草の實物に就いて見るに、長さは二三尺、葉は白楊に似て下が圓く上が尖り、

(一四)餘姚ハ縣名、秦ニ置ク、今ハ浙江省會稽道ニ屬ス。

[illegible]曹娥江、又、東水江トイフ。浙江省境ヲ流レ、紹興縣曹娥廟前ヲ流ルルニ因ツテ名ク。

一本にして數節あり、節毎にいづれも葉が生え、その數は三葉だけに止まらず、やはり全部が白く變じて了ふのでもなく、ただ最上の數葉だけが生えた當時蒂に近い部分から白くなり、次には葉の中部が再び白くなり、最後に葉の尖まで通じて白くなる。蓋し一葉が三たび白くなるので、白葉が三枚出るのではない。予は曹娥江を渡つたとき親しく摘み取つて視てその詳細を知り得たのであるが、かやうにその地方で呼ぶ三白草は大抵諸書に記載されたものと事實の類せぬものだ」とある。これはその說明が盧氏の說とも異つてゐる。因つていづれもこれを存して置く。

瀕湖は草部十六卷の隰草中に三白草を掲載し、二十七卷の菜部にまた翻白草を列記して二種のものとしてあるが、實は一種のものなのであつて、陳綬の眼科要覽を按ずるに「三白草の根を地藕と名け、翻白草の根を天藕と名ける」とある。斷じてこれは一物なることに疑ない。これはいづれも強ひて區別すべきものでないのであつて、翻白草の條下に釋名があつて三白草の條下に釋名のなかつたことは無理のないことだ。且つその根は小兒の痘後の眼閉で開き得ぬもの、幷に星を起したものに最も效があり、酒、漿と共に搗いて木綿の中に鋪き、それを用心に托して一晝夜た

てば開くものだ。重きものも二服にして奏效せぬものはない。然るに瀕湖は主白、翻白二草の條下の附方いづれにも記載しなかつたのは粗漏であつたと思ふ。

【敗席、燈燼】

綱目には、石龍芻下に敗席を附し、燈心草下に燈燼を附し、一には主治があつて一には主治がない。これは敗席は服器部の一部門中にも列し難いとすれば、燼は火部に入るべきものとなるではあるまいか、體裁上の不統一を免れなかつた

【鼠姑】

綱目には、丹皮の後に鼠姑を附錄し、別錄を引いて主治を別にして一條を列してあるが、實は牡丹、卽ち鼠姑である。按ずるに、宋の陸游の詩に「行歌で每に鴉舅の影に依り、挑類にして時に鼠姑の心を見る」とあつて、蓋し宋時代には一般俗間に鼠姑と呼ぶは牡丹のことにきまつてゐたのだ。故に註に「鼠姑は牡丹なり」とある。瀕湖にもまた陶弘景の說に「鼠姑は今は一般に識られないが、牡丹を一名鼠姑といふ。鼠姑はまた鼠婦とも名づけるがいづれが正しいのか判らない」とあるを引用したが、陶貞白の頃は或はその名稱がまだ一般に傳はらなかつたであらうが、瀕湖

がやはりそれに就いて更に考究が至らなかつたといふは何事であらうか。神農本經に『牡丹、一名鼠姑』とあるので、瀕湖はその文句に拘泥して、牡丹のやうな一種の物で鼠姑と名けるものが別にあるのかと思ひ。又、鼠婦のことをいふのかと疑つたのであるが、それはいふまでもあるまい、鼠姑がもし果して草木であるかといふことに就いて、神農以下一人もその考訂をなすもののなかつた筈はなく、もしその物が鼠婦を指したものならば、當然蟲部に編入されてある筈で、また牡丹の後に列記されてあるべき道理はないことだ。

【茵陳】

茵陳は蒿屬の植物であつて、昔は一般に多く種ゑて蔬菜にしたものである。本經所載の主治に『風濕寒熱、熱結黃疸』とあるは濕が陽明に伏して生ずる所の病であつて、いづれも綿茵陳を指して言つたのである。その葉が青蒿よりも細いものがそれであつて、乾せば色が淡靑白色になる。今一般に羊毛茵陳と呼ぶものがそれである。その性は水を利するに專らなものだ。故に黃疸、濕熱の要藥となるのである。鈴のやうな子を生ずる一種をば山茵陳と名ける　卽ち角蒿であつて、その味は辛く

苦く、小毒あり、蟲を殺し、口齒瘡を治するに就中妙であつて、今一般に鈴兒茵陳と呼ぶ。藥種商店にはこの兩者共にあるからその區別に注意せねばならぬものであるが、概して誤用されてゐる。瀕湖が茵陳の條下の集解の項に記載したものはやはり羊毛茵陳そのものであつて、角蒿をば別條に列したところは卓識らしいけれども、發明の項下に却つて俗に角蒿を茵陳として並用してゐることをば指摘してなかつた。もしその頃にはまだ山茵陳なる一種がなくて相混ぜられてゐたものだといふかも知れぬが、それならば何故に直指方の眼熱赤腫を治するに山茵陳を用うとあるを特にまた茵陳の條に入れて引用したのであるか。角蒿の條を見ると、集解中に瀕湖はまた一語もその苗葉の形狀を言つてない。これは或はまだこの物が卽ち山茵陳なることを知らなかつたものであらう。

【南瓜】

張石頑は『南瓜は至賤の品であつて、時珍の綱目には「多食すれば脚氣、黃疸を發する。羊肉と共に食つてはならぬ　人をして氣壅せしめるものだ」といつてあるのだから、その性の氣を滯らし、濕を助けることは判つてゐることだが、又、「中を

補し、氣を益す」といつたのは如何なることであらうか。前後にかやうな矛盾がある」といつた。呉遵程は『南瓜は本來氣を益するものだが、ただ羊肉と共に食つてはならぬので、共に食へば壅滯するのだ』といつた。これで見ると呉氏は兩方に都合のよい說をなしたものだが、實は南瓜は本來氣を補するものなので、羊肉と共に食つても脾の健全な人ならば何の障礙も起らない。脾の虚した人だけには宜くないのだ。現に一般に人參を服する場合でもやはり虚して補を受けぬものがあるので、大體に於て味の能く人を補するものはただ甘だけであり、色の能く人を補するものは多くは黃であつて、南瓜は色は黃、味は甘、中央土の氣を得ることが厚く、能く元氣を峻補する。賤しい物ではあるが忽にすることは出來ない。曾て閩中に居たとき、素火腿といふものがあつて、食へば土を補し、金を生じ、津を滋くし、血を益すものだといふ。初は浙江、處州の筍片をいふのであらうと思つてゐた。蓋し處州の筍片にもやはり素火腿なる名稱がある。ところがその實物を取寄せてよく調べて見ると、それは大南瓜一箇を蒸して食ふのであつて、切開して片にするとさながら金華の豬腿と同じやうなもので、味は尤も鮮美である。壅氣しても困ると思つたの

で多くは食はなかつたが、しかし食後には反つて腹中が餒き易かつたので、少頃してまた全部を食つて了つた。かやうにこの物は胃を開き脾を健にするものだつたので、早速その製造法を訊ねて見ると、これは九月、十月頃に最も巨大な南瓜の極めて老熟して霜を經たものを摘み取り、蔕の部分に一孔を開けて瓤、及び子を去り、幾年かの陳い好き醬油をその中に灌ぎ滿て、先に取つた蔕でその上を蓋ひ封じて本の姿のやうにし、それを繩で戸外の簷に懸け、翌年四五月にそれを取つて蒸して食ふのであつて、これを素火腿といふのであつた。この狀態から見ても補益の效力が判るであらう。壅するやうなことのありさうなことはない。

【大腹子】

大腹子といふは大腹檳榔のことで、檳榔と形は似てゐるが性は異ふものだ。逢原に『大腹子は偏に氣分に入るもので、體豐に濕盛なるものに宜し。檳榔は血分を主とし、腹滿して火多きものに宜し』とある。綱目の大腹子の主治に『檳榔と同功だ』といつたのは何たるその區別に無理解なことであつたらうか。今日藥種店では檳榔を用ゐるところに大半は多く大腹子を以て代用するやうになつてゐるが、これは瀬

湖の一言の誤に由つて來たものだ。

【透骨草】

鳳仙花を一名透骨草といふ。これはその性が利くして能く堅きを軟にするところからこの名があるのだ。綱目には有名未用に透骨草を收めてあつて、瀕湖は集效、經驗の諸方を引いてその主治を記載したが、その形狀を遺した。

【鴨脚青】

又、鴨脚青といふは藍澱中の一種だが、瀕湖は普濟方を引いてまた正確な考究をしてない。如何にも調査が博く及ばなかつたではあるまいか。

【東風菜】

綱目では蔓草中に含水藤を記載して、劉欣期の交州記に『狀態は葛のやう、葉は枸杞に似て、多く路傍にある。旅行者が水の乏しい場所を通るときこの藤を喫ふ。故にかく名けた』とあるを引き、菜部にまた東風菜を記載してあるが、按ずるに、廣志に『廣州に涼口藤といふがある。狀態は葛のやう、葉は枸杞のやうで、地を去る一丈餘のところでこれを絕つと更に生える。中に淸水を含んでゐて、渴する者が斷ち取つて飮む、甚だ美味だ。髮を沐すれば長くなる。この藤はまた東風菜と名け、

春に先じて生え、東風が來る頃に農夫はこの藤の生えるを見て土膏の動する驗とする。一名綠耳といひ、蔬となる』とある。廣志の所載に據れば、形狀、及び治病の功は含水藤と同じく、その蔬にもなり、東風と名けるといふ點も東風菜と同じところを見ればこれは同一物である。瀨湖は誤つてこれを二種のものと考へ、一をば蔓草に編入し、一をば菜部に編入したのであるが、調査の失當を免れない。これは確に裴淵の廣州記に誤られたものであらう

【海月】

瀨湖は海月を江瑤の柱として、また海鏡を附錄してあるが、實は海月、即ち海鏡なのであつて、江瑤は海月ではないのである　これは嶺表錄の誤をそのまま採用したものだ。屠本畯の海物疏に『海月は形圓くして月の如し、またこれを蠣鏡ともいふ。土人はその殼を磨いて明瓦にする』とあるがそのものだ。嶺南ではこれを海鏡といひ、また膏藥盤と呼ぶ。江瑤は殼の色が淡菜のやう、上が銳くして下が平だ。大なるものは長さ一尺ばかりあり、肉は白くして韌く、柱は圓くして脆い。海月とは甚しく相類せぬものだ。こと更に一物だといひ得るものでない。

【桑根白皮】

神農本經の桑根白皮の條に『傷中、五勞、六極の羸瘦、崩中、絕脈、補虛、益氣を主る』とあるが、これは桑椹を指していつたものだ。それを後人が誤つて根皮の下に列したものを世人は多く察しないのであつて、繆氏の經疏に、根皮は元氣を補し、性寒にして能く內熱を除き、以上の諸症が自ら消するとしたのは、眞に癡人夢を說くに同じきものだ。寇宗奭はやはりこれを疑つて、本經に獨りその椹だけを遺してあるが、桑皮がいかで能く傷中等の症を治するわけがあらうかといつてゐる。ただ張石頑だけが獨り能くその蘊を發明した。瀨湖ほどの博識な人が本經に對してやはりかやうに討究を缺いたのは何たることであらう。

【璅蛣】

瀨湖は海鏡を海月の條下に附錄して、註に郭璞の江賦の璅蛣腹蟹とあるを引用し、即ちこの物だと考へたのはまた大なる誤で、實は璅蛣はまた海鏡でもないのである。海南志に『璅蛣は狀珠蚌の如く、殼は靑黑色、長さ一寸ばかり、大なるは二三寸になる。白沙中に生じて泥淖に汚れず、(六)互物の中での最も潔きものである。二箇の

(六)互物、周禮ニ鼈人掌取互物トアリ、龜鼈等ノ有甲物ヲイフ。此ニハ蚌蛤ノ屬ヲ指ス。

肉柱があつてそれが長短伸縮するやうになり、又、數箇の白蟹子が腹中にゐて、楡莢のやうな形狀をなし、合體して共同生活をなし、その蟹が常にその口から出て食物を取る活動に從事する。かやうに瑣蛣は清潔なもので食物を取らず、ただ腹中に蟹を寄生させ、蟹が瑣蛣のために物を食ふのであつて、物を食ふのは蟹だが、それで榮養は瑣蛣が十分取るのである。故に一名を共命贏といひ、また月蛄といふ。毎冬大雪の頃には肥えて玉のやうに瑩になり、日光に映ずると雲母のやうである。味は甘くして柔かだ。蓋し海錯の種類の最も珍なるものである。又、海鏡に二殼相合したものがあつて、それは甚だ圓く、肉はやはり瑩潔で、紅い蟹子がその腹中にゐて食物を取る。一名を石鏡といふ。その腹の小蟹をば蚌奴といひ、任防はこれを筯といつた』とある。この說に據れば明に二物なのであつて、瑣蛣の腹に在るものは白蟹子であり、海鏡の腹に在るものは紅蟹子である點もまた各同じくない。予は曾て明州の奉化に寓居したことがあるが、そこの鮚埼亭では瑣蛣が出るので親しくその形狀を實見したが、迥に海月と別なものであつた。いかで强ひて牽合し得るわけがあらうか。

【蟛蜞】

蟹の條下の集解に、瀕湖は諸種を引合に出して說述し『蟛蜞は蟛螖より大きく、陂池、田港中に生ずる。有毒で人をして吐下せしめるから食はれない。故に蟛蜞の主治はただその膏を濕癬、疽瘡に塗り、外治に採用するだけのものだ』といひ、又『蟛蜞に似て沙穴中に生じ、人を見ると走るものは沙狗であつて、食はれない』といつたが、實は二種いづれも食へるもので、按ずるに、介語に毛の生えたものを毛蟛蜞といふ。有毒で、多食すれば吐痢を發する』とあるが、しかし潮州人はこれを食はぬ日がなく、普通の副食物としてゐる。故に諺に『水潮蜞は鹹解を食ふ』といふのであつて、解といつたのは、毛蟛蜞を鹽水中に入れて二个月經つてから水で熬ると液になる。それに柑橘の皮を投じるとその味が甚だ佳い。蓋し渣滓を用ゐずしてその精華を用ゐるところから解といつたのだ。して見ると、蟛蜞の食へることは明である。又、海錯疏には『松江、上海に出る沙狗は卽ち沙中の小蟹であつて、その地方ではこれを取つて酒糟で釀して食ふ。殼が軟かで內に脂膏を含むものだ。凡そこれを食ふには、盞中に入れて置いて沸かした酒を沃ぐ。少頃すると殼內の脂漿が盡

く外に浮出して空殼だけ殘るものだ。酒を更に甘美にし、これを食へば人を益する。吳淞地方では珍品とし、沙裏狗と呼んでゐる』とある。して見ると沙狗は食へるどころか珍饌となるものだ。瀕湖は僅に呂亢圖の所説に據つて食はれぬものと思つたのだが、古人に愚弄された傾を免れない。

【粉錫】

粉錫、即ち鉛粉であつて、これは鉛を打つて作つた薄片を甑に入れ、醋を用ゐて一瓶に入れて共に蒸し、變化させて粉にして用ゐるものをいふのだ。現に(七)杭城にはこの製造を業とするものがあつて、その名稱を粉坊といふ。從業者にして三年間勤續するものがない。それは鉛醋の氣が有毒で、能く人の肌骨を蝕し、且つその性が燥烈だからであつて、その工場に就業するものは毎月必ず一回鵞を食つてその毒を解することにしてゐるに見ても毒なしとはいはれぬことが判る。瀕湖は粉錫の集解下に何孟春の餘冬錄を引いて、また『粉製造の從業員は必ず肥猪、犬肉を食ひ、酒、及び鐵漿を飲んでそれを壓する。空腹にしてその毒に中れば病んで死に至る。壯者、幼者は毒に薫蒸されて多くは痿黄し、攤攣して斃れる』ともいつた。蓋しやはり毒

(七)杭城、即ち杭州府治。

なきものではないのである。或は『その物は製造中にはその氣が有毒だが、製造された粉そのものは毒にならぬ。果して有毒のものならば既往に於て方中にいかでこれを食劑に入れてあるわけがあらう。又、これを制し解する方法を書き遺さぬわけがあらうか』といふものもあるが、それは甚ださうでない、この物の性は能く硫黄を制し、酒の酸を除き、雌黄がこれを見れば黑くなり、糟蟹はこれを得れば沙せず、藥に入れば胎を墮し、面に傅ければ多く粉痣を生ずるもので、その剝蝕猛悍の性は砒、硇と等しいが、ただ少し服するだけならば差閊ないのであつて、服して後には糞が多く黑色になる、それはその本體に還元されるのだ。律例に、ある婦人が鉛粉を服して死に至り、手足みな靑黯色になつたといふ記載があるに見てもその毒なることが首肯される。而るに瀕湖は粉錫の氣味下に『辛し、寒にして毒なし』といひ、諸家の本草にみなその誤に仍り、いづれも毒なしといふに至つては世を誤ること甚しいものだ。故に特に明にして揭載して置く。

【婆娑石】

【無名異】

婆娑石、卽ち磨娑石である。綱目の本條の集解下に、瀕湖は獨り庚辛玉冊の『こ

れを燒くと硫黃の氣がある。形は黃龍齒のやうで堅く重いものが眞物だ』といつた說と、馬志の『その石は綠色で斑點なくして金星がある。磨れば乳汁になるものを上とする』といふ說だけを採用し、無名異の集解下に、時珍は『川、廣に生じ、蛇黃に似て色黑く、蟹を煮れば腥氣を殺し、桐油を煎じれば水氣を收め、鬚に塗つて燭を翦れば燈が自から斷つ』といひ、この數種の事實を實驗して眞物とし、その他の實驗方法に就いてはいつてないが、按ずるに、筆談補に『熙甯年間、(八)闍婆國が國使をして貢納せしめた方物の中にあつた摩娑石一塊は、大いさ棗ほど、色は微黃で花蕊石に似たもの、無名異一塊は蓮菂のやうなもので、いづれも金函に貯へてあつた。その使者中のある者に如何なる方法でその眞僞を試驗するかを問ふて見ると、使者は「摩娑石には五色の石があつて色は同じくないが、いづれも薑黃汁で磨ると汁が丹砂のやうに赤くなるものが眞物だ。無名異は色は漆のやうに黑く、水に磨ると色が乳のやうになるものが眞物だ」といつた。廣州の市舶司がその言に依つて試驗したところが、その結果はいづれもその通だつたので、その趣を朝廷に奏聞した。世間には摩娑石、無名異を蓄へるものが頗る多いけれども、常に眞僞の辨別不能な

(八)闍婆國ハ馬來半島チイフモノノ如シ。

るために困つてゐる。小説、及び古方書、炮炙論にもやはり説はあるが、ただその言が多くは怪誕で、常識では信ぜられぬやうなことだ。醫師潘璟の家にあつた白磨娑石は、色は石糯のやうなもので、糍磨して中毒の治療に用ゐるに、汁を粟殼ばかり口に入れると直ちに瘥えた』とある。予（學徽）が按ずるに、存中（補筆談の著者）の言ふところが的實にして據るべきもののやうに思はれるのだが、瀨湖は反つて采錄しなかつたのは何事であらうか。

【莽草】

莽草は、按ずるに沈括の筆談補に『世人の用ゐる莽草には種類が最も多く、大葉にして手掌ほどの大さのものがあり、細葉のものがあり、葉が光つて厚く、堅く脆くして拉けるものがあり、柔く靭くして薄きものがあり、蔓生のものがあるが、多くは謬談であつて、本草の蘇頌の所說に、石南のやうで葉が稀に、花實がないといふも誤だ。現に莽草は蜀道、襄漢、浙江、湖地方の山中にあつて、枝葉は稠密で、團欒として愛すべく、葉は光り、厚くして香氣が烈しく、花は紅色で大いさは杏花ほど、六出で卷き返つて上に向ひ、中心にある新紅の蕊は倒垂して下に向ひ、滿樹

搖搖然として極めて翫ぶべきものだ。襄漢地方の漁人は競ふてこれを採り、飯に搗きまぜてそれを餌にし、魚に投じ魚がみな翻上するところを撈取する。南方の地ではこれを石桂といふ。白樂天に廬山桂の詩があつて、その序に「廬山桂樹多し」といひ、又「手に青桂の枝を攀づ」といつてある。蓋しこの植物は木類なのである。唐時代の人はこれを紅桂といつた。それは花が紅だからであつて、李德裕の詩の序に「龍門の敬善寺に紅桂樹あつて獨り秀づ、伊川郊園に移植して衆芳が色沮んだが、これは蜀道の莽草であつて、徒に佳き名稱を呼ばれただけのことである」とある。衞公のこの說でも甚だ明白だ。古代にはこの一類を用ゐて魚を毒するに實效を示したものであつて、本草に木部に收載してある。一體何に緣つてこれを草といつたものか、この點だけは判らない』とある。瀕湖は綱目の毒草部に莽草を收載したが、集解、正誤下にはいづれも何種に屬するものを莽草とするかに就て區別を指定し得ず、僅に范子計然の說を採錄して青色のものを善しとしたが、花、葉、根、苗にはまた考證がない。存中は宋代の人である。この補筆談を瀕湖がまだ見なかつた筈はないであらう。

【天竹黃】

天竹黃は、綱目では本條下にただ釋名だけを載せて集解がなく、瀕湖は釋名下の附註に贊寧の草譜の所説を取つて『鏞竹、一名天竹、內にある黃は疾病の治療に用ゐ得る。䈽竹にも黃がある』といつてあるが、その產地、採取法、すべての形狀に就ては蓋しまだ研究が及んでゐなかつた。按ずるに、沈存中の筆談補に『嶺南の深山中に大竹があつて、甚だ淸澈な水がある。溪澗中の水はみな有毒だが、ただこの水だけは無毒なので、土人は陸行に多くこれを飮む。深冬になると凝結して玉のやうになる、それが天竹黃だ。王彥祖が雷州の長官に任ぜられたとき、盛夏の際に赴任したのであつたが、溪澗の水はみな飮むわけに行かず、ただ竹を剖いて取つた水で物を烹飪し、飮料にもそれを飮み、水はすべて竹の水を用ゐたのであつた。翌年召集されて帝都へ上るとき、折柄冬であつたので竹水を求めたが得られなかつた。そこで土地の者に問ふて見ると、冬になると凝結して水にはならぬのだといふことが判つた。たまたま野火が林を燒いてゐたが、木は煨燼になるが竹黃だけは灰にならず、火で燒いた獸骨のやうで輕いものになつた。土地の者は火で燒かれた後に拾

ひ取つて藥品に供するが、生で取つたもののやうに善くはない」とある」この說は正に瀕湖の說の完備に至らなかつた點を補ふべきものである。

【續隨子】

續隨子は、綱目の集解下に形狀を記載して蘇頌の圖經を引いてあるが、やはり甚だ明晰でないので、竊にこれは葉の中から幹の抽き出る草だらうかとの疑念もあり、正確に辨別し考察することが甚だ困難だつたが、辛亥の年に盧之頤の乘雅を閱して始めてその狀態が判明した。それには、南方地方に尤も多く、藥に入れるには南方產のものを勝れたものとする。苗は大戟のやうで、初生には一莖を生じて葉が莖端に在り、葉からまた莖を生じ、莖からまた葉を生じ、轉輾して幾層でも疊加し、さながら十字のやうになる。花もやはり大戟に類してゐるが、ただ葉の中から幹を抽き、並に結實するだけのものだといふのである。盧不遠は「嘗て半枝蓮といふを見たが、葉の上に葉が生え、さながら十字のやうになり、春分に葉の中から莖が抽き出で、莖は必ず三莖で、葉は蓮瓣のやうになつて莖を裹んで上り、夏に入つて花を開き實を結ぶのだが、實は必ず三稜、子は必ず三粒であつて、外肉は靑く軟く、

子殼は堅くして上半が黑褐、下半が黃白、內部の仁は玉のやうで、濕潤にして脂のやうだ。土地の者はこれを半枝蓮と稱し、蛇虺、蠍螫の毒を治療するに用ゐるが、立ろに奇驗があるものだ。宋の開寶本草を讀んで始めてそれが續隨子なることが判つた』といふのである。かやうにその形狀を寫出すれば如何にも明瞭にして切實なものだから、特に補錄して置く次第である。

【粟、秫】

龍柏の食物考では、稷と粱とは相似たものだが、ただ粱は穗に芒があつて稷には穗に芒がなく、大麥には芒があつて小麥には芒がない位の區別である。その米をば通稱して粟といひ、黏るものをば秫といふとのことであるが、綱目では別に粟、秫の二條を立てて混亂されてある。如何にも定見がなかつたではあるまいか

本草綱目拾遺水部

第一卷

錢唐 趙學敏 恕軒氏輯

本草綱目拾遺水部目錄

水　部

春　水

南詔志——春水に三あり、倶に(一)鶴慶府にあつて、一は城の東南二十里の石碑坪に在り、一は城の南三十里の龍珠山麓に在り、一は城の東北三十里の五老山下に在る。春水の盈る時には硫黄の臭氣がある。郡民は二三月の頃に鹽梅、椒末を和して飮む。能く疾を祛る。

職方考——雲南の鶴慶府に春水が出る。觀音山蓮花寨の北に在つて、立夏の三日前に出て、後七日に止む。その水の出るには一定の場所はなく、出る時毎に地中に漉漉たる聲があるので、土地の者がその聲に循つて掘るとその水が始めて出るのである。能く百病を除くので、遠近の村民が競つてこれを飮むが、走彝方の者が飮めば瘴病が傳染せず、癘の者が飮めば立ろに除く　外境人に尤も效があるが、數日中に鸚鵡、綠鳩の數百の羣が飛來し、その水を飮み涸らして飛去つて了ふ

(一)鶴慶府ハ今ハ雲南省騰越道ニ屬ス。

味甘し。目を明にし、水膨氣脹を下し、胸膈を利し、中を寛にし、著を解する大力丸にこれを用ゐる。――蓮葉は震の卦に象る。荷上露は、或はまた肝に入つて肝臓を滋益するものかと思ふ――

按ずるに、露は本來陰の液であつて、夜になると地氣の上升したものが降つて露となるのである　その性はその露を宿す物それぞれに隨つて變ずる　居易錄にある碧玉露漿方では、中秋の前後に五棓子を用ゐずして染めた新靑布一二疋を裂いて毎段四五尺の十餘段にし、五更時にそれを多くの草の生えた場所へ持ち出し、或は荷葉、稻苗の上が就中佳し　先づ一本の細い竹竿で草上の蛛網を掠め去つてから、右の靑布を長い長竿に繫けて上を旗の樣に展げてそれに草露を取り、その水を桶中に絞り入れ、幾回も濕してはまた絞り、露に靑布の色が淡く落ちるやうになつたときは別の新布に換へ、陽光がさすやうになつたときは止め、その露水を瓷罐を洗淨して盛り貯へ、數日間澄ますと淸かになる　かくて日沒後に男兒を產んだ母の乳を一酒杯――約一兩半　白蜂蜜一酒杯、人參湯一酒杯、乳と同量を用ゐる　人參は上等のもの四五分を用ゐる　その全量の多少に拘らず全部を一箇の宮碗に入れ、先の露水

一飯碗をその宮碗に攙入し、全部で七八分目になるを適當とし、和勻して棉紙で口を封じ、碟で適當に蓋ひ、翌日の五更に燒いて開き、水二大碗で宮碗内の露を湯を隔てて頓に熱し、睡の醒めたとき緩緩に溫服する。藍は蟲を殺す所以であつて、露は諸經の火を去り、參は氣を補し、乳は血を補し、蜜は肺を潤ほし、一切の虚損、勞症を治するに奇效がある。露はもと陰を養ひ、陽を扶けるものであり、又、荷葉の清氣を得るところから能く此の如き功を奏するのだといふことが肯かれる

糯稻露

兪佳士の妙應方――痞塊を治す。八月白露の節後に糯稻頭上の露水を取收め、日没後に二服にして飲下せば立ろに消す。按ずるに、諸草木はみな天の露を需めて始めて潤ふのであるが、稻だけは酉の時にその根に津が上つて潤ほし、氣が漸次に升つて夜に入ると葉尖に達し、曉にまた上から根に降るものだ。故に露のない夜でも稻の葉だけは潤ふてゐる。陳翠虚の詞に『一些珠露、阿誰運上稻花頭』とあるはそれをいつたのだ。

白雲

雲はもと山澤の氣が蒸して雲となるのであつて、水の屬である。故に水部に入れた。雲には五色あるが、ただ白雲だけが病を治するもので、唐守時は、凡そ高山、大川には悉く雲氣がある。五嶽、名山には多く雲が出るので、山僧はそれを取つて客に馳走する。その雲を取る方法は、金漆盆を用ゐ、上に一孔を鑿つて木で塞ぎ、天氣晴朗なる黎明に山巖石畔へ往つて雲を探す。地上を見ると線のやうな白雲が筍が土から茁え出るやうに出てゐるものだ。それが雲苗である。その時急に盆の蓋の孔をその苗に向けて盡く盆内に入らしめ、木で塞いで取收める。必ず雪のやうな色の白雲を取るべきもので、梅、蘭のやうな香氣があるものだ。それを調合に用ゐるのである。その他の雜色の雲は多く草、土の氣を帶び、黑雲は尤も腥くして多く怪物を帶びてゐるものだから採用するに適しない。その取收めた雲を放つ方法は、清淨な室を擇び、四面に窗のある室に限る。その上下を通じ紙で裱糊して氣の洩れぬやうにし、然る後にその雲盆を室中に置いて塞いだ口を開けるのである。すると雲

は自ら出て悠揚渙散し、芬芳四方に繞り、それで脾、胃を醒し、肝の鬱を舒べて經絡を和し、人をして脩然として出塵の想あらしめるものだ』といつた。

【啞瘴を治す】 余濟菴云く、滇廣の山瘴のある一種は、人がその病に感染すると一生涯言語不能になる。これを啞瘴といふ。ただ白雲の氣を閒げば久しくして自ら毒を外に引き出し、それで全癒するものだ。

【血膨水腫】 雲氣を閒げば漸次に消する。

鹵水

苦鹽、毒なし。大熱、消渴を治し、煩を去り、邪を除き、蠱毒を下し、肌膚を柔にし、濕熱を去り、痰を消し、積塊を磨し、垢膩を洗ふ。多く服すれば人を損ずる。(食纂)

綱目に鹽膽水といふがあるが、それは已に燒いて成つた鹽からまた瀝下した苦鹵であつて、一名鹵水といふが、此にいふものは鹵地から取る。瀝して鹽に燒くに用ゐるもので、鹽膽水とは異ふ。

祖先から傳來した一箇の錫瓶があつた。その細工は極めて精緻なもので、表面に「古剌水」の三字を楷書で刻んであつて、口は極めて固く密封されてゐるが、搖つて見ると水のやうな聲がある。何代か傳はつてゐるのだが、何に用ゐるものか判らないといふことであつた。薛澱山洪は「嚴嵩の家財目錄中にこの物の記載がある。これは骨に沁みて涼なるもので、蓋し暑期に體を涼ならすに用ゐたものだ」といつた。

李觀王の日記に云く、予は河東の裴氏に寄寓してゐたことがあるが、その家に一罐の古剌水があつた。罐は銅製のもので、高さ四寸、闊り一拱、身は圓く面が平で、その狀態は花鼓のやう、銅の質は青黄で、四圍に「永樂二十一年十月鑄古剌水一罐罐重三觔水重八兩」とすべて二十二字が牢く鑄りつけてあり、その文字はみな陰文であつた。代代高官の鄭氏の舊物で、銅を鑽りあけて水を取り、それで痼疾を療するものだといふことであつた

朱退谷は會て陝西の陳渭野の處で古剌水一瓶を見たさうで、その話には「これは(一)海壇鎭の張傑の家のもので、その體裁は、上が大きくして下が小さく、圓くして瓶のやうな形式になつて居り、四圍には痕跡がなく、搖つて見ると水の聲が聞える。

(一)海壇鎭ハ福建省福淸縣東南海上興化灣口外ニ在リ。

表面に小さい鑚りあけた孔があつた。曾てある富裕な醫者が、所持の千金でそれを買ひ取り、それで目の治療を企て、方に鑚で孔を鑚けやうとすると、天大いに霹靂したので、懼れて止めて了つたさうだ」といふ。さうして見るとこの物はやはり不思議な力のあるもののやうである。

孫雍建云く、古刺とは地名である。古刺水なるものは（三）三寶太監が求めて得た所のもので、天下にただ十八瓶あるだけだ。その瓶は五金で重重に包裹し、その水に接觸する一層は眞金になつてゐる。水の色は醬油のやうで鑑るほどの清光がある。火で燃すと燒酒のやうで燄の出るものが眞物である。その性は大熱なものだ。乃ち房中の藥であつて、婦人がこれを飲めば香が骨肉に沁る。

性は涼であつて、肌膚を澤にし、口を明くし、青盲を療じ、瞽を開く。功は空青と同じ。熱症を治するに有效である。茶匙で汁を滴して湯に入れて浴すれば、能く香氣をして骨を透つて散ぜざらしめる

按ずるに、古刺水は、薛氏の言に據れば性涼で、熱疾を治すべきものであり、孫氏の言では性大熱なものであり、ただ湯に入れて沐するだけで、服すべきものでは

（三）三寶太監、未詳。

ないものである。現にこの物は世間にあるけれども、ただ商人は充貢の品としてあつて、買ふとすれば價千金に値し、服し試みたものがあるといふことを聞かない。故に並に孫氏の説を附記して參考に供する。

又、藥東表云く、古刺水は、手に少量を蘸けて鼻中に嗒入すると、能く驟に精神を長じ、骨力を强くする。その香氣が蓋し能く血を和し、竅を通ずるのだ。昔、まだ鴉片烟がなかつた以前にはただこの物を用ゐたものだが、後に呂宋に鴉片が出てから一般に遂に古刺水を用ゐることを知らなくなつたもので、水は高價であるが鴉片は安價なところから、一般に爭つて安價なものを用ゐるやうになつたのだが、その實は功效の相似たものだ。房中術にある嗒入の方法は更に服するに勝るものだ。

强水

西洋人の造つたもので、性最も猛烈で能く五金を蝕する。王怡堂先生云く、その水は至つて强いもので、五金、八石みな能く穿ち漏るが、ただ玻璃だけが盛つて置ける。西洋人の强水を製造する方法は、藥七味だけを罐中に入れて熬煉し、今の露

を取る方法のやうに旁から玻璃瓶を合せてその隙を封じ、下から文武火で幾回も交々煉ると、黑氣が玻璃瓶の中に入り、水がその氣に隨つて滴入するので、黑氣が盡きれば藥が成るのである。この水は性猛烈なもので、服食するわけに行かぬ。西洋人は、凡そ洋畫を畫くと必ず銅版に鏤刻するのだが、それには先づ筆で、或は山水、人物を銅に畫いてこの水に漬ける、その間一晝夜にしてその漬けた處は銅が自ら爛れ、彫刻したよりも見事に出來上り、高低隱顯それぞれその妙を肖さざるはない。その銅の表面に爛れる部分を殘さうとするには、先づ黃蠟でその部分を防護し、然る後に再び漬け、一晝夜を經て、銅を看て爛痕が生じてゐるときは水で强水を洗ひ去り、蠟の迹を拭淨する。それでその銅板上に畫が完全に現れる。鐫鏤するよりも遙に勝つたもので、且つ容易にして速だ。藥に入れるはその氣を取つて用ゐるのださうだ。

癧疽を治し、疔を拔く。謝天士云く、凡そ癧疽の已に潰れ、或は未だ潰れぬには、强水を用ゐて惡肉を蝕するがよし（硇砂に勝る）。ただ强水を玻璃瓶内に置き、瓶の口を癧疽上に對して少時掩ふ。その藥氣が自ら患處に升入し、疽肉が白く變じて腐

毒も拔出する。然る後に再び他の藥を塗敷して治するのである。疔に根のあるものもやはりこの治法を用ゐれば根が自ら爛出する。

物理小識に礶水といふがある。銀を剪つた塊を投ずると、旋て水になり、それを器物中に傾け入れると、その器物の形に隨つて凝定する。復た硇水を取つて瓶に歸す。その硇水を取るの法は、瑠璃窖で一長管を燒き、それの氣を取るのだといふ。道未公は余に一崇禎庚辰の年に坤輿格致なる一書を進獻し、礦を采り五金を分つ事業に工費が省けて利益の多いことを建言し、壬午の年に倪公鴻寶が大司農となつたときもこれを建議したが、政府ではそれに從はなかつた。今日では番硇は甚だ少いが、ただ氣のある硇が眞の番硇であつて、それは能く汞を乾すものだ」といふ話をした。按ずるに、この礶水といふは卽ち强水のことであつて、ただ古今名を異にするだけのことだ。

刀創水

西洋に產する。何物で合成するか判らないが、西洋人が商船で舶來して粵の澳門

で賣つてゐる。

【金創を治す】この水を傷口に塗れば斂合して故のやうになる。

鼻沖水

西洋に産し、商船で舶來する。その製法は判らない。或は樹脂だともいひ、或は草汁に地溲を合せて露曬して造つたものだともいふ。外國の船商は玻璃瓶に貯へる。その口を緊塞して氣の泄れぬやうにして置けば藥力が減じない。氣は甚だ辛烈なもので、人の腦に觸れる。病のある場合以外には嗅ぐべからざるものだ。(一)島夷は頭風、傷寒に遇つた等の病症には、藥を服せずしてただこの水を用ゐ、瓶の口を鼻に對けてその氣を吸ふ。それで全身が麻顫し、汗を出して癒える。虚弱の者はこれを忌む。これは外用すべきもので、服すべきものではない。外感の風寒等の症を治するにこれを嗅げば大いに能く發汗する。

丹砂水

(一)島夷トハ南洋諸島、臺灣、琉球、日本本土等ノ總稱ナレドモ、此ニハ南洋諸島ノミヲ指シタルガ如シ。

臞仙の仙隱に丹砂水を造る法がある　丹砂一觔、石膽二兩、硝石四兩を小口の磁礶に入れてその口を漆で固め、地中に四十九日間埋め、取出して視て水に成つて居れば藥が成つたのである　もしまだ化けぬときは再び埋める　又ある方法としては竹筒に盛るもよし

味苦し、これを服すれば天年を延べ、精魅を殺し、惡鬼を御け、精神を養ひ、魂魄を安ずる

曾青水

神隱に云く、製法は丹砂と同じく、石膽を用ゐずして易へるに汞二兩を以てする。

藥用としては洗眼に用ゐる　また服し得る

目痛を止め、風涙を收める　久しく服すれば身を輕くし、老いず。

白鳳漿

痘學眞傳に白鳳仙漿を造る法がある　單葉の白鳳仙花を採つて(一)閉罈中に滿たし

(一)閉罈トハ氣ノ泄

レヌヤウニ銓ヲ付シアル壜ナリ。

（二）聽用トハ必要ニ應ジテソノママ使用シ得ルノ意ナリ。

め、箬で口を封して再び泥で搪ぎ、土中に二三十年埋めて取出して用ゐる。罎中の花が悉く化して水と成るもので、滓脚を取り去つたその清水が卽ち鳳漿である。別の磁瓶に貯へて（二）聽用する。

性大寒なり。痘疹の焦陷して難治のものを治するに、藥の內に一茶匙を加へて服す。立ろに能く焦を回して更に痘を生ずる。多く用ゐてはならぬ。痰を疏し、一切の火毒を解するに大いに奇功がある。

天蘿水

救世苦海——霜が降りて後、粗大な絲瓜藤を擇つて根三四寸を掘起し、剪斷して瓶中に一夜挿んで置けば、その根の中の汁が瓶內に滴入する。それを天蘿水と名ける。封固して土中に埋め、年久しく經つたものがいよいよ佳し。

雙單蛾を治し、一杯で癒える　又、痰火を消し得るもので、痰を化して水と成す。毒を解すること神の如く、兼て內熱を淸し、肺癰、肺痿を治するに更に效がある。

蕭山のある一老嫗の家で肺癰の藥水を賣つてゐたが、三服で立ろに癒えるので、門市の如く、已に數世に及んだのであつた。王聖俞が曾てその方を得て述べてゐるが、卽ちこの水であつて、立秋の日に取つて瓮中に貯へて用ゐる。いよいよ陳くしていよいよ佳しといふのである。

黃茄水

梁侯瀛の集驗方――秋の日に黃老茄子を多少に拘らず取り、新瓶に盛つて土中に埋め、一年にして化して水となつたものを取出して聽用する。大風、熱痰を治し、能く痰を消して水と成す。茄水で苦參末を和して桐子大の丸にし、食後、及び就寢時に三十丸を黃酒で送下する。甚だ效がある。

梅子水

秋泉祕錄に梅子水を造る法がある。大梅子三五十箇を用ゐ、搗碎いて嘴のある瓶の中に入れ、鹽三兩を加へ、河水を二指本の深さに入れて浸し、日毎に蜒蚰を取つ

てそれに投入する。多く投入するほど善く、年を經れば更に佳し。あらゆる毒はその水を搽れば消する。

諸毒惡瘡を治す。

櫻桃水

梁侯瀛の集驗良方――春日に鮮しい櫻桃を數觔取收めて磁瓶中に盛り、口を封じて涼處に放在し、發過して水となつたものを滓を濾出して聽用する。

凍瘃瘡を治するに神驗があるもので、その水を瘡上に搽れば癒える。若し預め皮膚上搽つて置けば凍瘃を生じない。

【疹の發して出でざるもの】――悶疹と名ける――櫻桃水一杯を用ゐ、ほぼ溫めて灌ぎ下す。死に垂たるものもみな生きる。（不藥良方）

各種藥露

凡そ物にして質あるものはみな露が取れる。露なるものは物の質の精華である。

その法は大西洋に始まつて中國に傳入したもので、大は甑を用ゐ、小は壺を用ゐ、いづれも蒸取し得る。その露はそれぞれ蒸すところのものの氣水であつて、物には五色それぞれの相違があるが、その蒸取した露は一様に白色で、ただ氣を以て別つ以外に色で別けることは不可能だ。近頃醫界で多く藥露を用ゐるはその清冽の氣を取るのであつて、それで靈府を疏瀹すべく、湯劑のやうに腸腑に膩滯することがない。名稱、品類は甚だ多くあるが、此にはその常に日用のものとされて、その主治の知られてゐるものの數則を左に列記する。それ以外は續考を俟つてその全を補ふことにしたい

金銀露　乃ち忍冬藤花から蒸取するものである。鮮花から蒸取したものは香しく、乾花からのものは少し遜る。氣は芬郁にして味甘く、能く胃を開き、中を寛にし、毒を解し、火を消す。暑期にはこれを茶に代へる。小兒に與へ服ますれば痱毒をなくする。就中能く暑を散ずる。

金燦然藥帖に云く、金銀露は專ら胎毒を治し、及び諸瘡、痘毒、熱毒を治す。

廣和帖に云く、火を清し、毒を解し、又、能く痘を稀ならしめる。

薄荷露　鮮薄荷から蒸取するものである。氣が烈くして味辛く、能く膈を涼し、汗を發する。虚せる人は多く服しては宜くない。

金氏藥帖——清涼にして熱を解し、風寒を發散する。

玫瑰露　玫瑰花から蒸取するものである。氣は香くして味淡く、能く血を和し、肝を平にし、胃を養ひ、胸を寛にし、鬱を散ずる　酒に點てて服す。

金氏藥帖——專ら肝氣、胃氣を治するに立ろに效がある。

佛手露　佛手柑から蒸取するものである。氣は香く味淡く、能く膈氣を疎する。

金氏藥帖——專ら氣膈を治し、鬱を解し、大いに能く胸を寛にする。

香櫞露　香櫞から蒸取するものである。氣は香く味淡く、痰を消し、滯を逐ふ。金橘橙露と同功である。

桂花露　桂花から蒸取するものである。氣は香く味は微し苦し。目を明にし、肝を疎し、口臭を止める。

金氏藥帖——專ら齦脹牙痛、口燥咽乾を治す。

廣和帖——牙痛を止めて氣を淸する。

茉莉露　茉莉花から蒸取するものである。氣は香く味淡く、その氣は上には能く頂に透り、下には小腹に至り、胸中一切の陳腐の氣を解す。しかしただ茶に點ずるだけのものだ。久しく服しては宜くない、人をして腦漏とならしめるものだ。

薔薇露　大食、占城、瓜哇、囘囘等の國に產し、外國名を阿剌吉といふ。衣に灑げば歲を經てもその香が歇まない。能く心疾を療ずる。琉璃瓶に盛つて數囘翻搖すると上下悉く泡になるものが眞物である。功は酴醾露と同じく、いづれも肌を澤にし、體を潤はし、髮の膩膩を去り、胸膈の鬱氣を散ず。

又、一種の內地の薇薔露は中國產の薔薇花から蒸取したもので、專ら治效は中を溫めて表に達し、風邪を解散する。

蘭花露　これは建蘭花から蒸取するものである。氣は薄く味淡く、これを服食すれば目を明にし、鬱を舒べる。

雞露　道聽集に云く、雞露は能く大いに元氣を補し、人參と同功である。男には雌雞を用ゐ、女には雄雞を用ゐ、一年以內のもの――童子雞と名ける――を用うべきもので、二年のものになれば肉が老いて質が枯れ、露を蒸取し藥に入れられない。

童子雞を選び、繩で縊つて竹刀で腹を破り、醇酒で毛、及び腹中の穢物を洗ひ去り、水に當てぬやうにして露を蒸取して飲むのである。氣は淸く色白く、一見したところ油氣があるやうで、味は甘し。痰を消し、血を益し、脾を助け、力を生じ、津を生じ、目を明にし、五損、虛勞の神藥である。

米露　新鮮な白米を用ゐる。陳久なるものは用ゐられない。蒸取とたものは色白く、氣は淸くして蓮花のやうなものだ。大いに脾、胃の虧損を補し、肺金を生ずること神の如きものだ。あるひは米露は稻花を用ゐて蒸取したものが更に佳しといふことである。

廣和帖――鮮稻露は中を和し、食を納め、肺を淸し、胃を開く。

薑露　寒を辟け。霜露の毒に中りたるを解し、瘴を驅り、食を消し、痰を化す。

椒露　鮮椒から蒸取するものである。能く目を明にし、胃を開き、食を運し、脾を健にする。

丁香露　氣が烈しく、味は微し辛し。寒澼胃痛を治す。

梅露　鮮綠萼の初めて開いたばかりの花を採つて蒸取した露は、能く先天胎毒を

解す　六月のまだ痘の出ぬ小兒に金銀露を和して食はすが極めて佳し

周櫟園閩小記――海、澄地方では梅、及び薔薇から露を蒸取する　燒酒を取る方法のやうなものだ　酒一壺に少量を滴すと芳香なものである

骨皮露　地骨皮から蒸取するものである　肌熱、骨蒸を解す（金帖）一切の虚火（許帖）

藿香露　暑を消し、氣を正くする

白荷花露　喘嗽已まず、痰中に血あるを治す（金帖）血を止め、痰を消し、暑を清し、肺を安ずる（廣和帖）

桑葉露　目疾紅筋を治し、風を去り、熱を清す（金帖）

夏枯草露　瘰癧、鼠瘻、目痛、羞明を治す（金帖）

枇杷葉露　肺を清し、嗽を寧くし、燥を潤し、渇を解す（金帖）胃を和す。（許帖）

甘菊花露　心を清し、目を明にし、頭風眩暈を去る（廣和帖）

御溝金水

集效方に御溝金水の製法がある。高さ二尺の篾籮八箇を用ゐ、山上の清浄な土を取つて八箇の籮中に裝入し、それを八箇の磁鉢に盛り、童尿を八箇の桶に取つてその土を入れた篾籮の七箇の中に傾け入れて淋下し、上から井花水で推し、その七鉢の水を殘りの一箇の籮内の土に傾け入れる　もし淋下することが少い場合には、再び清んだものを前の七籮で淋下してそれを殘の一籮の上に加へ、人手を用ゐて一夜淋し、淋下した水三五碗を磁罐に收貯し、それを井水中に入れて養ふ　但しその症に遭遇したとき、患者が日中に茶を要求するを待つて、この水半杯を溫服せしむれば平安を得る　甚しく重體のものも三七回に過ぎずして立ろに癒える

性は平、味は微鹹にして甘を帶ぶ　男子、婦人の骨蒸、乾血勞、童子勞で、晝夜發熱し、甚だ劇くして肯て藥を服せぬものを治す　この水は尋常の藥の比すべきものでなく、大に功效あるものである

起蛟水

徽州の張宇南の話に、その地は山が多く、春、夏の交に久しく雨があると起蛟の

被害があるが、一般村民はそれを見習れてゐるので不思議とも思はない。蛟が起る初期には、一二日間地中から豫め聲が聞え、遙に雷鳴か牛の吼える聲を聞くやうで、いよいよ起奔する時期になると土中に豆ほどの一箇の小孔が陷出し、その穴から水を箭のやに直上一二尺噴き出し、それが漸次に長く升つて簷際に届くまで長くなり、溜つた水と噴出する水と合すると水勢がますます大きくなり、下の穴も漸次に大きくなり、碗ほどの大いさの孔になると、その穴から鰍鱔のやうな形の蛟が噴水に乘じて上つて出て、簷を過ぎると形が大きく變じて飛越奔騰して去る。家屋には一向に被害はないが、ただ一二里ばかり隔てた田畑の作物に被害がある。それは山水が沖刷するための現象である。

この水が噴出した初期の一二尺の時に、山間の住民は瓶や盋などの器に承け取つて服食するが、力の大なること無窮なるものだ。蓋し騰出する蛟は口中に含吮してゐる精力を貫注直逼して上るので、その全身の力が盡くこの水に在るからだ。故に普通人はやはり多量に服食することは出來ない。壯健のものも三盞まで飲めば腹脹して再び飲めなくなる。その地の者はこれで酒を釀すが、更に精力を壯ならしめ

るもので、虚勞を治し得るといふことである。

單杜可云く、蛟が初めて起つ時の水は箭のやうで、淸きこと泉脈の如くだが、湧くに隨つて高くなり、必ず天の雨水と合する。すると勢が大きくなつて能く飛騰するのである。蛟の出る穴口に始めて泛出する水を名けて發洪といふ。若し初めて噴出しかけたときに河水一杓をその穴に灌入すれば、蛟水は自ら回つて出なくなつて了ふ。或は婦人月經の穢布で塞いでも止まる。若し人が蛟水を服して脹したときは、千里長流河水を煎じて服すればやはり解し得るものである。

筋骨を壯にし、腰膝を健にし、虚勞を已し、驚悸を除き、蟲蠱、尸疰、鬼疰、遁尸の邪氣を殺す。瘡疥を浴する。虚弱者はこれを水に代へて滋補藥を煎するが良し。性升り、能く巓頂に直透する。

混堂水

混堂とは今の浴池で、燒水浴のことだ。入浴者が多いところから穢濁積垢が然らしめるので、人氣の薰潰で體の虚せるものが觸れると昏暈する　名けて混堂といふ。

を流して了ふことがある。故に血なきもよくなく、血の多きもよくない。傷處は水と口涎とを忌むものだから最もそれを防ぐべきものである。若し傷が已に含膿し、及び骨折したものにはこの油は無益だから必要がない。もし心腹、耳鼻、手足、及び各處の骨節疼痛で、果して風寒に屬し、燥熱に關せぬものならばこの油で治し得る。その痛の的確な部位を調べ、この油で揉擦し、極熱するを度とし、然る後に男子の穿けた舊布で包裹する。この藥を用ゐるに當つては密室を用ゐ、絕對に風に當らぬやうにし、并に寒冷等の物を食ふことを忌む。（本草補）

本草綱目拾遺卷一　終

本草綱目拾遺 火、土、金石部

卷二

錢唐　趙學敏　恕軒氏輯

本草綱目拾遺火部目錄

本草綱目拾遺土部目錄

本草綱目拾遺金部目錄

本草綱目拾遺石部目錄

火部

陽火陰火

火に陰、陽あるは乃ち太極の妙蘊である。一般人は盡く火を純陽として陰火のあることを知らないが、ただ聖人だけはそれを知つてゐた。故に離の卦が中の虚なるは陽中に陰を有するものであり、坎の卦が中の實なるは陰中に陽を有するものである。火は地の生物でもやはりその通りで、陽火は質なく、物を以て質となして然る後にその形をそれに依つて現し、それで物を燃す。陰火は質があつて、必しも形を物に依つて現はさないので、盡く諸物を焚くことが不能である。蓋し陽火なるものは火の魂であつて、陽に屬し、氣は熱である。陰火なるものは火の魄であつて、陰に屬し、氣は熱せない。瀕湖は十二火に統べて陰陽を分つた。そのいふところの天の陽火の二は、太陽の火、星精の飛火であり、地の陽火の三は、鑽木の火、擊石の火、戛金の火であり、人の陽火の一は、丙丁の君火である。太陽は背を炙れば暖く、

星精火は光があり聲があり、その地に墜ちた初には熇いた石のやうで手を近づけられない。鑽木の火は鑽と木といづれも焮熱して烟があり、撃石、戛金は、必ず兩物が摩盪して熱すると火が出るので、いづれも火氣がある。人身の君火は、呵出するところの氣であつて、天候が極寒の場合でも人の氣は熱ならざるはない。これみな陽火であつて火の魂である。氣は熱であつて、形を物に寄せることを條件として燃えるものだ。故に水晶で日中の火を取り、それを艾に承けると烟が起つて火殃となる。飛星の精なるものは、土に入ると家屋に火災を起す。鑽木、撃石、戛金は物を以てその火を受けなければ存在し得ない。人身の丙丁の火は能く犀角を解し、積陰の氣を散ずる。已に啻にその身に寄つて焚くのみではないのであつて、その氣のいづれも猛烈なることが肯かれる。そのいふところの天の陰火の二は、龍火、雷火であり、地の陰火の二は、石油火、水中火であり、人身の陰火の二は、命門の相火、三昧の眞火である。龍火は物を焚くことは不能で、ただ能く砂石を焚くだけである。蓋し龍はもと純陽であるが火の反つて陰なるは、陽を以て體となし陰を以て用となすのである。雷火は物を焚くことが不能で、能く金鐵を焚く　蓋し雷が物を撃つに

は必ず聲がある。その用は陽に屬するがその體は陰に屬するのである。砂石はもと土の餘氣であつて、先天の火の爲めに結したもので、陽の體を以て焚くのだ。金鐵は水の母である。もと陰の精であつて、卽ち陰の體を以て鎔すのだ。これは五行生尅の妙である。石油は能く水中に於て火を生ずる。凡そ水中の一切の物は石油でなければ焚くことが不能である。水中の火はもと鹹の精だ。故に海水は夜に入ると明るいのである。至陰の氣であつて、物を焚くことは不能である。命門の相火は卽ち人身の慾火であつて、三昧の眞火と共にいづれも能く自ら焚くが物を焚くことは不能である。これみな陰火であつて火の魄である。氣は熱せず、形を物に寄せることを條件とせぬもので、能く焚くと焚く能はぬとの別があり、陽火のやうに物に遇へば消溶せざるなきとは異ふのである。瀕湖は僅にその名を列しただけで、またその關係を明に說明せず、且つその主治功用もまたみな判然しない。故に特に詳述して補足する。

太陽火 濕を除き、寒澼を止め、經絡を舒べる。――痼冷が體となれるには、これを曝すれば血が和して病が去る。冬期には茵帛を曬して陽氣を受けて體を覆へばみな能く疾を御ける。脾を補し、

胃を養ふ。——醬を作つて日に曬せば日氣を多く受ける。人がこれを食へば多く脾、胃を補す。久しく服すれば長生する。——養生家には日光を服する法がある。

星精飛火　伏尸を辟ける。——陳子靜養生詳に云く、火燄は即ち流星の精が土中に入るので、その地にある伏尸はみな遠く去る。志慮を增し、聰明ならしめる。——談道錄に星精米を製する法がある。白米を星月下に露すこと一百日にして、星精を承受するのであつて、小兒がこれを食へば多く聰明ならしめ、神智を增し、且つ邪を辟け、瘡を除く。

鑽木火　瘟疫を除き、四時不正の氣を卻ける。周禮に、司爟は火政を掌り、四時火を變じて以て時疾を救ふとあるは卽ちこれである。精魅を殺す。凡そ一切の山魈、木怪、年老の精魅には千年の古柏を用ゐる。凡火を以て燃してはならぬ。必ず鑽木を用うべきもので、時を按じて火を取つて燃すのである。

沈雲將食纂——楡、柳の火は養生の氣を助け、肝膽を利し、筋脈を調へる。棗、杏の火は蕃茂の氣を消し、心血を養ひ、神明に通ずる。柞、楢の火は耗散を斂め、元滯を采り、肺を利して本源を滋くし、陽を制して髓を結する。槐、檀の火は腎臟

を補し、陰血を益し、遍體を調和し、周身を通暢せしめる。桑、柘の火は脾、胃を補し、眞元を壯にする。

撃石火　あらゆる病に針灸するに宜し。その陰氣を陽中に含み、太極の妙あるを取るのである。張石頑は、石を以て取つた火を陰火となして『これを以て艾を灼く宜からず。太陽を陽燧に取つたものを以て陽火となす、宜く病を灸すべし』といつたが、實は石は陰質であるけれども眞火ではないので、蘊結しても形を成さないのである。凡そ石中にはみな火があつて、火石が他石に比較して尤も火が多くして取り易いものだ。この石は獨り天陽の氣を受けることが厚いからである。石は陰だが火は陽だ。必ず撃を受けて出るのであつて、火が多ければ且つ灹炸の聲がある。陰火ならば聲が無い。故に瀕湖は列して地の陽火とした。石頑がこれを陰火としたのは未だ拘墟の見を免れなかつた。

戞金火　能く鬼燐を散ずる。野果は戞金で取つた火で照せば直ちに跡を滅する。

人身君火　卽ち人の元氣である。能く卒死、魘死を救ふもので、口で氣を全身に吹きかければ生きる。鬼氣を散ずるには呵氣で吹けば滅する。○痘を發する　凡そ

陰寒で痘が起らず漿をもたぬものには、壯健の人が氣呵すれば起發して紅活し、漿が行つて毒化する。(腹痛、腹瀉を止める。老年の人には多く氣弱に寒を受けてこれを患ふものがある。壯年の人が手を搓擦し極熱せしめて、交互に頻にその臍を掩ひ、手中の熱氣をして丹田に透入せしめれば自ら癒える。これは君火の力を借るのである。

龍火　龍が石中から起つと、石の内部に必ず焦裂した處がある。それは龍の口の火で燒かれるのだ。その石を刮つて末にし、湯に煎ずれば痞膈を治するに神の如くである。石に龍火の氣を受けてゐるので、堅きものとして破れざるはないからである。(海上格物論)

雷火　その震裂した木に硫黄の氣があるは雷火の氣を得るのである。能く驚癇、邪祟を治す。辟瘟丹に合せるにこれを加用するが最も妙である。

石油火　毒あり。物を煐くは宜くない。紙撚に油を蘸けて點じた火で瘡を照せば、毒を引いて外に出すによし。

水中火　體に著けば能く肉を潰けて腐爛する。風氣を摩するによし。

相火　三昧火　凡人はみな運用し得ないが、ただ有道の士だけは能くこれを運して病を療じ、起死囘生する。相火は能く舍利を結し、堅固子を成す。三昧火は能く精魅を殺す。

黃金火

金器を紅く燒いて肉上に烙すれば、能く血を止める。凡そ人の神の所在に誤つて針すると出血して止まぬものだ。金器を燒いて烙する。(選元方)

煤火

本經逢原に云く、北方では炊食に多く煤火を用ゐる。その地が坎に屬し、その氣を十分に受けてゐるので、且つ命門の眞火を助ける。煤火のものを食へば氣を陰に長ずるものだ。それで脊力が强壯なのである。南方人がこれを食へば多く癰毒を發する。その毒を受けたときは薺汁を以て解す。しかし煤火の處には大缸に水を入れて傍に置けば毒が水に從つて解するものだ。南方では炊食に多く薪火を用ゐる。人

は薪火のものを食へば氣を陽に長ずるもので氣が多くは輕浮であつて實しない　北方人のやうに稟氣が剛勁でない。然し近頃では、南方でも煤を產し、薪の價格が日に昂騰するので、市井には多く煤を用ゐるものがある　その煤は浙省に在ては衢、嚴、湖州に產するが、北地の煤に比較して堅く細く、薪の代用として煤氣がやはり減じて薄く、甚しきは薪炭のやうに無臭氣のものもある　それは香煤と名けて、太湖山中から出る。綱目の石部に收錄してある烏金石は即ち煤のことだ　その主治にその質の用を多く說明してあるが、火部にはまた煤火を收錄してない　故に此に補記する。用ゐるには香煤を佳しとする。

一切の食物を烹れば、能く脾、胃を和し、氣力を滋くし、腎氣を通じ、陽道を助ける。婦人の子宮を煖める　雜煤、臭煤は有毒である。

藤火匏火

藤は乃ち木本であつて、各種のうち山藤が性最も蔓延し、喜く物を束ねる　故に火にしてもその本性のやうである。匏の屬はみな瓠の類であつて草本である。蔓は

（花炮ハハナビ）

いづれも中が空で長養が最も速く、その性は行ることが甚だ捷だ。現に徽地方でこ花炮を作るものは、その藥線に必ず壺盧炭を用ゐる。それはその疾速なること杉、柳の梢に勝るからである。同一藤にして草本と本本とではその性にかやうな不同がある。

藤火 臌脹、水腫、四肢の諸病等の藥を煎ずるに宜し。

匏火 救急の諸藥を煎ずるに宜し。その頃刻にして能く經絡に達するを取る。

荷梗火

荷梗は、秋に入ると一般に多く採取し、積んで置いて乾し、薪にして鑊に入れる。肉を煮ると精なるものが反て浮き、肥えたものが反て沈むものだ。藥用に入れてはその火氣が能く肝、肺の二竅に通ずる

一切の轉脬、交腸の藥を煎ずるに宜し。能く陰陽の倒なる氣を正す。

稲麥穗火

稻穗火で烹煮した飲食物は、人の神魂を安じ、五臟、六腑を利す　糯稻穗が就中峻烈である。——盧鏡日記に、鳥銃は糯穀炭を用ゐる、その鑄鐵力の速にして、風錯子を見て凝らぬ點を取る。その能く久しく住る力がかやうなものだとある。

麥穗火で煮た飲食物は、消渇咽乾に主效があり、小便を利す

松柴火

これで煮た飯は、人を益し、筋骨を壯にする　茶を煎ずるには佳くない（食纂）松卯火で煎じた茶は美味である。能く茶力を聚めるので眞味を解散せしめぬのである

櫟柴火

櫟柴で猪肉を煮て食へば風を發せぬ。雞、鵝、鴨、魚腥等の物を煮れば、爛れ易くして且つ良し。

茅柴火

炊煮した飲は、目を明にし、毒を解する主效がある（食集）

燒酒火

酒は本來米麴の精華であつて陽に屬し、燒酒なるものはまた酒の精華であつて、乃ち陽中の陽である。これを燃すと色の綠なるは、陽極つて陰生ずるの象である。石硫と性が同じく、いづれも陽を以て體とし、陰を用に藏するものだ。故にその光で人の顏を照して見るとみな青灰色になり、魑魅を照せば形を遁れ得なくなる。陰を以て用となすものは多くは毒を含むもので、現に世間で、率ねこの酒を以て冬期に大碗で用ゐて物を燒き、炭火に代へてゐるが、久しく食すれば癰毒を發し、闇默のうちにその毒を受けて自覺せずにゐる。しかしただ藏寒者にはこれが宜し。氣は能く骨髓に透達し、堅きを軟にし、濕を燥する。衣を熏じて著ければ能く骨髓中の汗を發する。

魚膏火

海上の人は多く魚膏を取つて油とし、菜、荳油の代用にする。その油は海鰍の腹中にある脂を割き取り、或はその肉を取り、いづれも煉つて膏にし、それを燃して夜間の燈火とする。しかし烟が重く、氣が腥く、多くは目を昏くし、神を損ずる。秦の始皇葬中で鯢膏を以て燈としたといふは卽ちこの物である。後世の人が多くこれを人魚と解したのは誤である。

蚊蛾を辟ける。竹木を熏ずれば蠹を除く。

蛸油火

これは蛸の脂肉を剝し取つて熬つた油である。山左では蛸の大なるものは猫ほどあり、山間の住民はそれを捕獲してその脂肉を熬る。その油は斗ほど取れるものだそれを用ゐて夜間の燈火とすると、光明皎澈で白晝に同じく、蠟に比較してよほど明るい。この油は神燈に入れて照し用ゐるによし。按ずるに、蛸脂は鐵、骨を焠けるもので、能く人の筋骨を縮する。その性の峻利なることが察せられる。神燈に入れ、その氣で毒を照せば能く毒を痡して小ならしめる。

(一)劈砂ハ碎キタル朱砂ナイノ、

(二)粞ハ米碎、即チコゴメ。

丹藥火

錦囊祕授に救苦丹の製法がある　眞麝香一錢、(一)劈砂を水飛して二錢、好き硫黄三錢を各〻研つて極細にし、先づ硫黄を化開し、次で麝、砂の二味を入れて火を離して攪き勻ぜ、光石上に置いて攤し、米ほどと(二)粞ほどの二樣の小塊に切片し、瓶に貯へて氣の洩れぬやうにして置く　病を治するには、その藥を患處に置いて燈火で火を點け、火の滅えるを候つて灰共に肉上に罨在する。立ろに痊癒する。重きには米粒大を用ゐ、輕きには粞粒大を用ゐ、銅錢を當てて置いてその錢眼内で香火で燃すのであつて、ただ一炷だけに限り、また灸する必要がない。若し患處が闊大なる場合には、數炷を排べて置いて一時に灸する。且つ灸する時には甚だ熱からず、また甚だ疼まず、後にいづれも潰濃せず、茶一服ほどの間に痼疾が失つたやうになる。これは觀音佛所授の眞神方である。又、海上仙方に救苦丹といふがあつて、その法は、麝五分、硃砂を水飛して一錢半、硫黄五錢、樟腦一錢半を倶に細末にし、銅器に入れて文武火で烘烊し、取り上げて冷定し、敲いて米粒大ほどに碎いて用ゐる

る。能く各種の風痺、跌撲、癧疽の初起を治するに有效である。

敏按ずるに、この丹藥の諸火は人工で製造するもので、もと天生の藥料ではない。されば本草中にはまた造釀の一類を記載せねばならぬ。卽ち瀕湖が火部に神鍼を收載したと同じ意味だ。因て神燈火と共にいづれも記錄して李氏の記述しなかつたところを補ふて置く

蓬萊火

一切の風寒、濕氣の流注して痛むもの、手足の踡攣、小兒の偏搐、口眼喎斜、婦人心腹の痞塊攻疼を治す。病期の長短に拘はらずいづれも用ゐられる。

茅昆來家傳醫要に蓬萊火の法がある。西黃、雄黃、乳香、沒藥、丁香、麝香、火硝各等分を用ゐ、西黃を去つて硼砂、草烏を加へてもいづれもよし。紫棉紙を用ゐて藥末を裹み、撚つて官香ほどの條に作り、粗ぼ緊實するやうに注意する。病を治するには、二、三分長さに剪り、その一段を糉黏で肉上に黏して火を點ずる。三回に過ぎずして根を除く。若し點穴さへ差はなければ、灸が透ると藥が盡き、皮肉が發

爆して病が立ろに癒える。毎回三壯し、重きも三回に過ぎずして根を除き、また再發せぬ。灸後には豬肉を忌み、瘡が平になるを待つてからまた食ふ。これは茅氏の家に五代傳はつた試效神驗の方である。

風痺、跌撲、瘰癧を治す。——いづれも患處を按じて灸する。水脹、膈氣、胃氣。——穴を按じて灸する。

陽燧錠

趙氏集要——古代にあつた烙法は今は用ゐることが罕である。それはただ手あらな方法だからではなく、用法を知らないのと、その上にまた患者が一見して驚駭する方法だからである。故にこの物を以て代用する。その法は、乾蟾酥を剉つた薄片を焙じて碎り、硃砂を水飛し、川烏、草烏と各五分、殭蠶一條を各々研細し、硫黃一兩五錢を杓中に入れて微火で鎔化した中へその藥末を入れて攪勻ぜる。急に攪ぜることが必要で、遲ければ凝るものだ。それを盃內に傾け入れて速に片に摯成し、冷るを待つて取收めて用ゐる。使用する時には、甜瓜子大の一塊を取り、上を尖ら

し下を平にして、先づ裏肉で患部を擦つてその上に藥を黏し、香火で點ずると火焰が起る。五壯なり七壯なり九壯なりその症に隨つて施す。灸し畢つたならば米醋を酒杯に半ほどを飮み、小泡の起つを俟ち縫物針で穿破して黃水を擠し出し、膏藥を用ゐて蓋住する。その毒は直ちに消する。——この方は冰片、麝香の二味を寫し遺してあつて、原稿に眉注してある。

濕痰流注、附骨陰疽、寒濕瘡毒の久しきを經て消せず、內潰して痛まぬを治し、能く未だ成らぬをば消せしめ、已に成れるをば潰せしめ、已に潰せるをば斂めしめる。もし風痺の場合には竹箸を用ゐて點ずる。酸痛する處のあるには、筆に墨を蘸けて記し、その墨の上を照して灸する。腿膝の疼痛には鬼眼穴に灸する。諸瘡は初起に三五壯を灸すれば瘥える。

神燈火

外科にある神燈照法。——硃砂、雄黃を倶に碎つて水飛し、血竭、沒藥を箬で烘いて汗を去つて各二錢、麝香四分を用ゐて極細末とし、三分づつを紅棉紙で緊く捲い

て長さ約七寸の條に撚り、麻油を潤透し、火で燃して著ける　必ず患者を無風の場所に坐らせ、藥條を持つて瘡から半寸離して外から内に周圍を徐徐に照し入れ、火頭を上に向ける　藥氣がそれで入り、毒が火に隨つて解散し、自ら臟腑に内侵しない。甚しく過してはならぬ。好肉を傷める恐があるからだ。その瘡は微微として熱を覺え、心神が爽になる。毎日ただ一回燻じ、第一回には三條を用ゐ、毎日一條づつを加へて四五條まで加へれば、勢が次第に減ずる。然る後に毎日一條づつを減じ去り、直に燻じて紅腫の消するまでを度とする。燻じて後に用ゐる後藥は、稀薟草の新鮮なものを採つて搗爛らし、陳年の小粉等分を入れ、初起のものには再び白鹽を研細して少量を加へ、稠糊にし、厚さ半寸に敷いて頭だけを留める。必ず瘡暈の三分に敷かねばならぬ。それで能く毒根を箍定するのである。瘡口の上には大葱葉を滾水で泡熱し扯開して貼り、或は膏で蓋ふ。やはり風を避けるを妙とする。自ら能く膿毒を拔出するものだ。もし新鮮な草がないときは如意黄金散を代用する。集要には『神燈照法は甚だ早く用ゐてはならぬ。瘡が四五日間でまだ形が成らず、毒がまだ聚らぬうちにこれを用ゐると、毒が必ず内鬱して反つて外に出し難くなるものだ。

これを用うべき時期は八九日後といふところである。瘡勢が已に定り、毒氣が已に聚り、まだ膿腐とならぬ時にこれを用ゐて照すのであつて、まだ成らぬものは自ら消し、已に成つたものは自ら高くなり、起發せぬものは發し、腐潰せぬものは潰する。もし毒が已に潰して膿が已に泄れたものならば用ゐてはならぬ　毎日猪蹄湯で淋洗し、或は葱頭の煎湯で洗ふも佳し、發物を忌む」とある。

一切の腫毒、癰疽發背を消し、能く毒を解し、血を活し、腫を消し、痰を散する。

火礶氣

火礶は江右、及び閩中にいづれもあり、陶器を燒く家で燒いて賣つてゐる。小さい人の大指ほどのもので、腹が大く兩頭が微し狹くして口を促くしてある。それを當てて火氣を受けしめるものだ。凡そ一切の風寒を患ふ場合にはみなこの礶を用ゐ、小さい紙を燒いて焰が起つたときその礶に投入し、直ちにその礶を患部に合せるのである　或は頭痛ならば太陽の腦戶、或は頂上に合せる。腹痛には臍上に合せる。礶に火氣を得てゐるので、肉に合せると牢として脫ちなくなる。それが自ら落ちる

を待つのであつて、患者はたゞ一股の煖氣が毛孔から透入するを覺える。少頃して火力が盡きると自ら落ちて、肉上に紅暈が起り、罐中に氣水があつて出てゐる。それで風寒は盡く出るゝので、服藥の必要がない。

風寒頭痛、及び眩暈、風痺、腹痛等の症を治す。

烟草火

沈雲將食物會纂――烟は閩の產を佳しとし、燕の產はそれに次ぎ、石門の產は下等品である。春期に栽植し、夏期に花を開くものだ。その地では、一二本だけを取除いて置いて花を開かせ、その子を取收めて種ゑる外、その他のものは全部頂の穗を摘み去つて花を開かせぬやうにし、また葉間の旁枝をも取去り、その力を葉に集中せしめる。かくすると葉が厚くなつて味が美しいのである。秋日に葉を取り、竹簾を用ゐて夾縛して曝乾し、葉上の粗筋を去り、火酒を用ゐて噴いて加工し、その葉を髮のやうに細く切り、十六兩毎に一封として天下に貿易する。その名稱は一定してゐないが、眞建、假建の區別をつけてあり、蓋露、頭黃、二黃の別がある。近

頃では此方の製烟法は、切つて絲にせず、曬したままの烟草片の原料を採んで一塊にし、普兒茶、磚茶などと同樣にして置き、用ゐる時に揉み碎いて末にし、それを烟袋中に入れて貯へて用ゐてゐる。

頂上の數葉を蓋露と名け、味が最も美である。その後の葉は生えた位置の遞下するに隨つて味も遞減する。世間の言ひ傳ひには、海外に(一)鬼國といふがあり、彼の國の習俗として、人が病のために將に死亡せんとするや、舁いで深山中に捨て置く。昔、ある國王の女が病が重體となつたときやはり棄て去られた。ところが昏倒してゐるうちに芬馥たる香氣が聞えたので、見ると臥した傍に草がある。そこでそれに近いて嗅いで見ると忽ち全身に淸涼を覺え、霍然と起ち上つて宮中へ奔せ還つた。それが非常に不思議なこととなつて、遂にその草を采ることになつた。そこで一名を返魂烟と呼ぶのだといふことである。

○方氏物理小識――烟草は、明の萬曆の末年に(二)漳泉へ携へて來たものがあつて、馬氏がそれを造つて淡肉果といつた。それが次第に傳播して津津浦浦まで長い烟管で火を點けて呑むやうになつたのだ。ところが醉つて仆れるものもあつたので、祟

(一)鬼國トハボルネオ、ルソン等ヲ指スモノノ如シ。

(二)漳泉ハ漳州、泉州。吾ガ臺灣ノ對岸福建省福州ノ南境ニ接ス。

禎の時にこれを禁止したが止まなかつた。その草の實物は春不老に似たもので、葉は菜より大きい。暴乾し火酒で炒つて金絲烟と呼ぶ。祛濕、發散の功能があるが、久しく服すれば肺が焦して諸藥も多く效がなくなる。その症狀は、忽ち黄水を吐して死亡する。

○粤志――粤中に仁草がある。一に八角草といひ、一に金絲烟といふ。治病の效驗がやはり多い。その性は辛くして散じ、その氣を食すれば人をして醉はしめるので、一に烟酒といふ。その種は大西洋から得たもので、一名淡巴菰、相思草といふ。――物理小識には淡巴姑、或は擔不歸と呼ぶとある――閩に產するものが佳く、近頃では江西の射洪、永豐に產するものも佳し。製成烟には生、熟の二種あつて、熟は性烈しくして人を損ずること尤も甚しい。凡そ咳嗽、喉癰、一切の諸毒、肺病を患ふものはいづれもこれを忌む。近頃蘭州に一種の烟を產し、名稱を水烟といふ。これは水を筒に注ぎ、吸ふと烟が水を通つて出て來るやうになつてゐる。火毒はそれで絕えるといふことだが、しかし烟味はやはり減ずる。

○張良宇云く、水烟は蘭州に產する。五泉の地で栽培したものが佳し。その氣を

食すれば能く瘴を解し、臌を消し、中を寬にし、積を化し、寒癖を去る　但し多食しては宜くない。その製法は、砒夾香油で炒つて作るものだ。故に無毒なわけに行かないのである。近頃粤中の潮州に潮烟といふ一種を產する。その性は更に烈しい。

○姚旅露書に云く、呂宋國に淡巴菰と名ける草がある。一名を金絲醺といひ、烟氣を管を用ゐて喉に入れると能く人をして醉はしめ、また瘴氣を辟ける。搗汁は頭蝨を毒殺し得るものだ

○延綏鎭志——烟草は、その苗が挺生し、葵葉のやうで光澤があり、形は紅蓼のやうだが相對せず、高さ數尺になり、三伏中に黃色の花を開く　八月に採り、陰乾しで酒で洗ひ、切つて絲にする　各省中で有名なのは崇德烟、黃縣烟、曲沃烟、美原烟であるが、ただ日本の倭絲を佳しとする。

○百草鏡——菸、一名相思草。葉は菘菜のやうに厚く、狹くして尖り、秋期に莖が起つて高さは六尺になる。花は小瓶のやうで淡紅色である　福建に產するものが良く、葉を用ゐるには三伏の月に採つたものが佳し　頂上に生えたものは嫩くして

力があり色は嫩黄であつて、これを蓋露烟と名ける　烟は品種の多いこと非常なもので、今が盛なるの極である　内地に在つては福建の漳州に石馬烟があり、色が黒いのでまた黒老虎と名ける　油で炒つて製造するので性が最も猛烈である。多食すれば人をして黄水を吐かしめる。浙の常山にある面烟は性が疎にして利し、痰を消すること神の如くである。凡そ老人にして五更に咳嗽し、痰を吐くものは、これを食すれば嗽が次第に止んで痰も消する。江西にある射洪烟は性が清粛で氣を導く　湖廣にある衡烟は性平、和にして血を活し、蟲を殺し、虚勞を已し得る　山東にある濟寧烟は氣が蘭馨のやうで、性もやはり尅利である。甘粛の蘭州にある水烟は酒を醒まし得る　近頃粤東にある潮烟なるものは潮州に産し、毎服米粒大に過ぎなくとも、性最も烈しくして食を消し、氣を下すこと神の如くである。しかし體の弱きものは忌む。

張洲張璐玉の本草逢原に云く、烟草の火は方書には記録がない。ただ朝鮮志に記載があつて、始は閩人が吸つて瘴を袪つたものだが、その後には北方でそれを藉りて寒を辟けたとある。今では寰宇に遍行してゐるが、ところが實は毒草の氣が藏府

を熏約し、經絡に遊行するものである。壯火散氣の危險なしとはいはれまい。近頃では眼科の內障丸中に間まこれを用ゐて效を奏することがある。それはその辛、溫にして冷積の翳を散する點を取つたものである。冰片と共に吸つてはならぬ。火を以て火を濟ふこととなり、多くは烟毒を發する。藤を以て點じ吸つてはならぬ。それは蛇虺の毒がある恐があるからだ。烟を吸つて後には愼んで火酒を飲んではならぬ、能く火氣を引いて臟腑を燻灼するものだ。又、久しく烟毒を受けて肺、胃の淸からぬは砂糖湯を用ゐて解す。

蘭上徐沁梓の記述した烟誠に烟蟲を袪る方があつて、杜湘民の說に、凡そ人が烟を服すると腹中に蟲が生ずる。その狀態は蠅に類したもので、兩翅を鼓動する。それは烟で沐みたいのである。故に終日服してもそれで存分だといふことがない。久しくすれば蟲が日に盛になつて臟腑が敗れて痰疾が大いに作り、藥では救ふべからざる狀態に陷り、大抵は臨終の際に烟を吸はせて貰つて始めて瞑目するものである。哀れむべきことだといつてある。その方は、生豆腐四兩を用ゐ、數箇の孔を截しあけ、黑砂糖二兩をその上に加へ、飯甑中に入れて蒸し、豆腐と砂糖とを融化

せしめ、烟を欲する毎に數匙を進める。ただ三日の後にその蟲が盡く下り、烟氣を聞くと嘔氣を催して欲しなくなる』とある

『王東藩云く、近頃一種の熟烟なるものがあつて、閩地方で能くそれを製造する、その方法は、油で炒つて烟片を黒くしたもので、黒老虎と名け、また紫建といふ、これを服すれば香、辣、甘で、一體にして三味を備へてゐるといふことだ。この烟の中毒者は吐くことを欲するが吐き得ぬものだ。その場合は北棗一二箇を食へば解す』凡そ烟の種類には山、田の區別があつて、山種は味厚く、田種は味薄くして草氣が多い。

○張景岳云く、烟草は味辛く、氣は溫、性は微熱であつて、升であり陽である。烟に燒いて吸へば能く人を醉はしめる。これを用ゐる時には一二口を吸ふもので、若し多く吸へば醉ひ倒れて久しして後に甦る。甚しきときは冷水一口を飲めば解して直ちに醒める。若し煩悶するときは、ただ白糖を用ゐれば解して平安を得る 如何にも奇なる物である。これを吸ふには喉を開いて長く吸ひ、嚥下してその烟を直に下焦に達せしむべきものであつて、その氣が上行すれば能く心、肺を溫め、下行す

れば肝、脾、腎を温める。服して後に能く全身を温暖にして微汗せしめ、元陽をますます壯ならしめる。これを用ゐて表を治すれば、善く一切の陰邪、寒毒、山嵐瘴氣、風濕の邪が腠理を閉ぢて筋骨の疼痛するを逐ひ、誠に頃刻にして奏效する神劑である。これを用ゐて裏を治すれば、善く胃氣を壯にし、飲食を進め、寒滯、陰濁を袪り、臌脹、宿食を消し、嘔穢、霍亂を止め、積聚、諸蟲を除き、鬱結を解し、疼痛を止め、氣停、血瘀を行り、下陷、後墜を舉げ、三焦に通達して立刻に效を現はすものである。この物は古からあつた物ではなく、近頃我が明朝の萬曆の時に閩、廣地方から出て、その後吳、楚の地方でいづれもこれを種植するやうになつたのだが、總じて閩中産の色の微黃にして質の細なる金絲烟と名けるものの力强く氣の勝れたる優等なるに及ばない。これを服する習慣の起原を聞いて見るに、向に雲南を征討した際、軍隊が深く瘴地に入つたので盡く病に侵されたが、ただ一部隊だけが安然として恙なかつた。それは大部分の者がみな烟を服してゐたためであつた。それから一般に傳はるやうになつたもので、今では西南地方一帶に、老幼を問はず、朝夕間斷なく用ゐてゐる。予は初めこの物を手に入れたとき、やはり甚だ疑つた

が、數回それを習服するに及んで、その功用のかやうに捷なることを知悉した因てその性を此に記述して置くのである　かやうな次第で、この物は性は純陽に屬し、善く行らし、善く散ずるものである　ただ陰滯の者が用ゐれば神の如くであるが、若し陽盛、氣越にして多く燥し、火多きもの、及び氣虚、氣短にして汗多きものの場合はいづれも用ふべからざるものである。或はその能く頃刻にして人を醉はしむるところから、性必ず有毒ならんことに疑念を抱くもあるが、蓋しその陽氣が强猛なるため、普通人は能くそれに勝へないので、故に咽を下れば醉ふのである　熱を散ずるものだけに、やはり必ず耗氣するが、然し烟氣は散じ易くして人の氣が隨て復し、陽性が中に留つて旋てまた氣を生ずる　これは耗中に補あるものである一般に多く喜んで服し、一向にその害を見ない所以はそこに在るのである

○敏按ずるに、釋氏の書に、人なるものは山、川、火、土の氣の和合に因つて生れたものだといつてある　故に脾、胃はやはり火、土の氣を受けて生命を養つてゐるのだ　烟は元來火、土の精であつて、一般に烟の愛好者にして病の重いとき烟を吸はないのは、脾、胃に火、土の氣を受けぬのであつて、それ故に烟もやはり受け

入れぬのである　火、土の氣はただ陽を養ふばかりでなく、また兼ねて能く陽を生ずる　妖魅、鬼魅が能く烟を吃ふ所以であつて、乾鬼子が閉土中に多年在つてこれも烟を得て吸はんことを思ひ、それでその體を溫和するといふ事柄に至つては――礦を開くと、穴中に悶死してゐる人が久しく出ることを得ないでやはり死せずにゐるものがあつて、鑿礦者が山穴中でそれに遇ふことがある。それを乾鬼子と呼ぶ。常中丞安の宦游筆記に記載がある。――烟の力は能くあらゆる經絡に走つて隧道を通ずるものだといふことが考へられる。凡て烟の氣を吸ふと悠揚として外に出るは陰に鬼に吸はれるので、人には見えないだけである。故に烟を吸ふ人は多くは顏色が黄であつて、肺を盡く耗せずして皮、毛が焦する。やはり精氣を半ば鬼に吸はれるためだ。友人張壽莊は、己酉の年に予と共に臨安に滯在したが、毎朝起きると咳が出て、濃痰をその邊一面に吐き、一年餘に及んでなほ癒えなかつたが、痰火の老疾で藥石では治療し得ないものと考へてゐた　ところがある日突然烟を吸ふことを止め、一个月ほどそのまま繼續してゐると、朝になつても咳がなく、終日痰唾もなく、精神が頓に健になり、且つ飲食が倍増し、飯を喫つても尋に湯を沃ぐやうに消化し、十分飽食しても少頃にして空腹になつた　予は

その時、それまでの痰咳が悉く烟の害であつたことを悟つた。肺を耗し血を損ずる世人の多くは暗暗裡にその禍を受けながら、氣が付かないでゐるのである。因て此に記錄して醫に從事する者に警告する。景岳がいふところは特に一偏の見である。ただ瘴を辟けるだけには佳し。

○秋燈叢話――予の妹が疾のとき招いた一醫師は、食後に烟を貪り吸つたが、その烟管の烟房は大いさ升ほどあつて、それに烟草を觔ばかり容れ、盡く吸つて腹に入らせる。やがて瞑目して物を言はなくなり、寢臺に仰臥して氣息が絶えたやうな有樣になつた。家人が大いに驚くと、その醫師の從者が「心配ない」といふ。しばらくすると蘇つて、俄に脣を動かし口を翕めると見る間に、口中から烟を噴騰して出した。蓊然として雲霧の如きものだつた。それが數刻にして始めて息むと、やがて欠伸して起上り、口を張り四邊を顧みて「アァせいせいした」といふ。晩にもまた同樣にして烟を用ゐた。その從者に訊ねて見ると「先生は平常家にゐても朝夕の二回、一觔を定量として烟を吸はれる。吸はなければ病氣になるのだ」といつた。家人はその話を聞いて懼ろしくなつて斷つて了つた。かやうに恐るべき量を嗜み吸

ふものもある。

辛し、溫なり。本草從新に云く、風寒、溼痺、滯氣、停痰、山嵐瘴霧を治す。その氣は、口に入れば經絡に循はずして頃刻にして全身に遍り、人をして全身を俱に快然たらしめる。火氣が燻灼すれば、血を耗し、天年を損する

藥性考——菸草は、味辛く、惟溫にして鬱を開き、燒いて吸いば倦を解し、傷を罨へば血を止める。烟油には毒があつて、蟲を殺すに最も捷である。諸蟲咬傷にてれを塗れば病がなくなる

○烟は有毒である。その中毒には、胡黃連と茶とを合せて煎じて服す

○王東藩の醫與に云く、烟毒には、黑砂糖を井水で和して服す

○延綏鎭志に云く、性は熱、味は辛くして毒あり。寒溼の胸膈痞滿に主效があり、津を益し、饑を止める。多食すれば氣を傷める

○格致鏡原に云く、容貌を損ずる。

○王桂舟云く、烟渣が口に入つたとき、もし他の物で洗へば、洗へば洗ふほど疼み、結局失明する。これには必ず亂髮、或は鬉纓を用ゐ、緩やかに揉めば癒える

の文堂集驗に云く、凡そ至寶丹を服するには、烟、茶、酒、飯を一二時停めねばならぬ。按ずるに、至寶丹とは塘棲痧藥のことである

【脚氣】同壽錄――脚氣で忍び難く痛み、口眼喎斜し、手脚が搐するやうで人事不省となり、昏迷して死せるが如くなるには、黄建烟二觔を炒熱して坐桶中に盛り入れ、脚を丸裸にしてその桶中に放入し、汗を出す。少し冷めたときはまた炒熱する。隔日に一回燻じ、七回にして根を除く。

【金瘡の止血】良朋彙集――烟末を敷く。

烟梗

陳良翰云く、烟葉は、生のものは毒あり。人が食へば中毒し、病を發して難治である。その莖は更に烈しいもので、登萊地方ではこれを用ゐて魚を毒する。凡そ溪塘中の大魚は捕ひ難いものであるが、この法を用ゐて毒する。烟莖を用ゐ、乾、溼俱によし。剉碎して青胡桃皮と共に搗き爛し、水中に一食頃の間置く。大魚はそれで醉ふるが如くになつて水面に浮び、小魚はみな死ぬ。鰻鱺、龜、蝦、鼈、螺、

蛤蚧の屬も一齊に悉く斃れる。その毒の猛烈なること此の如きものだ。しかしこれで烟に造つて見ると、梗の味は淡くして葉の味の厚さには迥に及ばない。

烟葉

腦漏を治す　楊春涯驗方――菸葉半觔を曬乾して極細末に研り、花露四兩で調へて曬乾し、玫瑰餅を用ゐて再び研つて吹入る

〇蘭花烟を吃して腦漏となりたるには、白鯗の脊骨を烟に燒いて燻すれば數日にして癒える。蘭花とは江西の商人が持つて來る一種の蘭子のことだ。卽ち澤蘭の子であつて、氣の香烈なものである。その子を取つて烟に入れて研り拌ぜたものを蘭花烟と名ける。これを吸ふと蘭花の香があるのだが、しかしその氣は竄上して往往頂に入り、腦を傷めて腦漏と成り易い

〇葉天士種福堂方――風寒濕氣で骨節が疼痛し、痿痺し不仁のもの、鶴膝風、歷節風、偏頭漏肩等の症を治す　眼膏中に見ることがある。新鮮なる烟葉を用ゐ、その搗汁に松香を浸して曬乾して藥に入れる。やはりその氣味を利用して筋絡に透利

せしめるのである、

【毒蛇の咬傷】○慈航活人書――先づ風を避けて惡血を擠去してから、生の烟葉を搗き爛して敷く、鮮葉のないときは乾いたものを研末して敷く。即ち烟油、烟灰いづれもよし。

○不藥良方――毒蛇、及び毒蟲傷を治す。魚腥草、皺面草、烟葉草、決明等分を杵き爛して敷く。

【辟臭蟲】活人書――烟葉を寢臺に鋪いて蓆の代用とし、或は燒いて熏すれば臭蟲は盡く絶える。

烟桿

年久しくして色黒くなつたもので、男子の用ゐた毛竹のものが良し。

秋燈叢話――新昌の張といふ男は茹竹の烟管を四十餘年持つてゐた。色が漆やうで鑑のやうに光らせ、(一)拱璧のやうに大切にし、たとひ親戚のものでも容易に假して見せぬことにしてゐたが、母が病氣で藥代に困つたとき、それを錢二緡で質に置

(一)拱璧トハ一抱ヘモアル寶玉。即チ至寶ノ形容ナリ。

いたゞところがその質に取つた方の人の子が損病を患ひ、あらゆる藥も效がなかつたとき、或る人から、多年の竹烟管でなくては治癒しないといはれたので、遂に質に取つた張の烟管を取出し、數寸に截つて湯に煎じて服ませたので病が癒えた。後に張には巨萬の金を出して償つたさうだ

○陳毅齋云く、烟桿は烟火の熏漬の氣を受けてゐるものではあるが、しかし人間の氣を藉りて津液が次第に漬かるのでなければ必ず酥透しないものだ。その桿は男子が吸ひ用ゐたものは光澤にして鐵のやうになるが、一たび婦人の口で吸つたことのあるものは黯色になつて鮮明でなく、且つ直裂の紋が多い　又、最も糞を忌む。凡そ多年の好桿を持つたまま厠に入ると能く光を澀らしめる　象牙桿ならば裂開し油が走つて用ゐるに堪へなくなる　物の性はかやうに相忌むものである

【蠱毒傳屍勞を殺し、惡瘡に塗る】　中心の油が透つて酥なるものを劈き取り、擣いて糊のやうにして瘡に塗れば直ちに痂になる　或は油を紙上に攤して貼れば蟲膈を治す。

百草鏡――毒蛇傷には、先づ婦人の舊油頭繩を取つて腫處を紮住し、腫れ上らぬ

やうにして置いて、再び耳垢を取つて封ずれば痛が止む。その時、多年の油黒竹――烟筒桿の紫色なるもの――を用ゐる。また毛竹のものもよし。一段の長さ約三寸にし、咀嚼して汁を嚥み、渣滓を吐し去る。并に桿中の油を取つて患部に搽る。烟桿は味辣いが服すれば反つて甜い。蛇毒も隨つて解し、痛を止めて自ら癒える。これは多くの實驗を經てゐる。凡そ蛇咬で蛇歯が肉の内部に留つてゐるものには、烟油を塗る。自ら出るものである。

【婦人の血崩】劉怡軒云く、凡そ血崩で諸藥の效なきには、多年の舊烟桿を用ゐる。紫色にして油の透つたものが佳し。一寸に截つて灰に燒き、黄酒で調へて服す。喉を下れば止む。屢〻實驗して屢〻奏效した。

烟筒中水

俗に烟油と名ける。古今祕苑――烟油が衣に染みついたときは、瓜子水で洗へば去る。

○同壽錄に云く、烟油が目に入つた場合、小兒、及び愛烟家が誤つてこれを犯し

た場合には、別の湯で洗へば、洗へば洗ふほど疼んで必ず失明するに至る。これには亂頭髮、或は騌纓を用ゐて緩やかに揉めば癒える。

(一)蛇毒を解し、惡瘡、頑癬に塗り、蟲を殺す。

【毒蛇咬】劉羽儀驗方——吃烟桿内の脂膏を取つて咬傷の患部に塗り、手指で搓り入れる。肉中の痛が直ちに止んで最も效がある。

【蜈蚣咬】劉氏驗方——烟筒内の膏油を用ゐ、咬傷の處に塗り、或は烟灰を擦れば立ろに痛が止む。

按ずるに、烟油、一名烟膏は、味辛し、微毒あり。陳貞士敎齋云く、烟油なるものは五行の氣が相合して生ずるものだ。近頃外丹家ではこれで金に點藥する。また金の色を益し得るもので、術士はその名を隱して太極膏と呼び、また氣泥といひ、五行丹といふ。これを燃燈に用ゐて油に代へれば一切の毒蟲がみな近づかない。水に入れると蛟龍もこれを畏れる。藥に入れるには舊い竹桿を劈いて取つたものが良し。凡そ梅條、藤條、紫檀、烏木、老鸛草、及び純銅、純銀などの桿から取つた油は、いづれも竹から取つたものの性の良きに及ばない。ただ象牙桿中の烟油は蠱毒

を殺し得る。閩中には橄欖木の烟桿があつて、その中の油は魚を毒し得る。烟膏に至つてはやはり各〻その吸つた烟の質に随つて高下がある。烟草店で賣つてゐる烟はいづれも烟葉に油を噴いて塊に作り、鐵鏺で絲に披いて賣るのだが、これは純ら葉のみで雜物のないものを上品とする。更にまた塊に打つ際に素馨葉を夾み、檗紅を雜へて絲に鏺成し、再び薔黄末を加へてその色を調和したものがあり、それは氣が燥烈で人を損ずる。その烟膏もやはり淡くして薄く、上品のものの力の厚さには及ばない。海鹽の進士朱醒菴は「烟油が蛇毒を解することは、初は甚だ信じなかつたが、後にあるところで黑人が一條の赤練蛇を獲つたときのこと、その蛇の長さは八九尺あつて、ほぼ臂ほどの太さがあり、口から毒烟を吐くものであつた。一匹の犬がそれに近寄ると、蛇にその氣で噓せられて腹が裂けて死んだ。ある者が戲に舊い竹烟桿の頭と嘴を去り、竹絲を通して油を取り出し、それを蛇の口へ刺し入れると、蛇はそれを嚙んで直ちに瞑目して口を閉ぢ、身を捲縮して俄にまた長く伸び、數回同じやうに繰返してゐたが、眞直な繩のやうになつて斃死したのを見て、始めてその解毒、殺蟲の功の事實であつて虛謬ならぬことを知つた」といつた。諸城の

劉仲旭少府は「北口外に一種の毒蟲が出る　名を蠓蝶といひ、形狀は中國の蝱、蠅のやうなもので、人がそれに出遇ふと顏に觸れ、觸れた部分の何處なるを論ぜず、觸れられたものは甚だしく痛まないが、眠から覺めると眶の四圍から細蛆が出て睛膏を攢食し、忍び難く痛む　その地の者の間に行はれる治法は、ただ烟桿五六本を折つて烟油を取つて目の內側に塗り、痛を忍んでゐる　片時にしてその蛆はみな死ぬ　然る後に再び溫水で烟油を洗ひ去れば癒えるのだ」といつた

○椿園聞見錄――撻拉巴哈台、卽ち準噶爾の故地には、夏期に白蠅が多くゐて害をなし、人畜の眼角に觸れて蛆を遺して往く。膠で黏さねば出ない

○按ずるに、常中丞筆記に云く、西北蒙古、及び伊犁等の地方には一種の野蠅が出て人の顏を亂撲する　もしそれに觸れられると、眼角內から蛆蟲が出て非常に痛癢し、それがために盲者となるものがある　土人は多く烟油を眼角に塗つて治するが、しかし疾が癒えて後も目がやはり紅腫して數日間消えない。大體から見て、蒙古に於ける治法の魚膠一塊を眼角に當てて黏出する方法に及ばない　目を損じないことは烟油に比較してこの方が佳し

烟筒頭中煤

濟急良方――蜈蚣の咬傷を治す。烟筒頭内の硬煤を取つて擦る　立ろに痛を止める。

烟鼻

廣大新書に鼻烟の製造法がある　香白芷三分、北細辛八分、焙乾した猪牙皂角三分、焙乾して研つた薄荷二分、冰片三釐、乾烟絲を君として乾絲一錢、必ず福烟六七分ほどを配合したものに限る。右の藥を各〻細末にし、酌量して配合し、必しも分兩に拘泥せず、色の櫻色なるを佳しとする

○内府の製造に係るもの、西洋で製造したもの、廣地方で製造したもの、及び上烟など數種あるが、鴨綠のものが最も佳し　玫瑰色のものがそれに次ぐ。醬色のものが下級品である。陳久にして枯れたものは役に立たない　西洋から來たものは能く風を追ひ、汗を發する

「香祖筆記」—— 近頃京師に鼻烟を製造するものがある。目を明にするもので、就中疫を辟けるの功がある。玻璃で作つた瓶に貯へ、象牙で作つた匙で鼻に就けて嗅ぐのである。みな内府で製造するもので、民間のものは及ばない。張玉叔は、近頃廣東から來るもので内府のものに匹敵するものがある。尤も勝れたものに五色あつて、蘋果色のものを上級品とする」といつた

○澳門紀略 —— 西洋で出來る鼻烟の上級品を飛烟といふ。やや次ぐものは鴨頭綠色のもので、その味は微し酸い。これを豆烟といふ。紅いものは下級品である

○常中丞筆記 —— 鼻烟は、或は風寒を冒し、或は穢氣を受けたものには、少量を用ゐて引いて嚏をすれば邪穢が疏散し、積滯も解すが、若しその時刻を少間にせねば反つて疾を招くことがある。烟には多くの品級があるが洋烟を最とする。その滋潤にして烈からぬ點を取つて佳品とする所以である

關竅を通じ、驚風を治し、目を明にし、頭痛を定め、疫を辟けるに尤も效驗がある。

水烟 （前の烟草の條下を參看せよ）

沈君士云く、水烟は眞のものは蘭州の五泉山に出る。これを食へば性尤も峻削であつて、痰を豁し、食を消し、膈を開き、氣を降すが、ただ虛弱者は服することを忌む。また蛇虺の毒を解するもので、予が家で親戚から食品を贈られたとき、日暮だつたのでまだ手をつけずに筐中へ入れて置いたが、一夜經つうちに蛇涎がそれに漬かつてゐた。その翌日それを食つたところが、一家を擧げていづれも嘔吐し、腹痛を患つた。ただ一小僕だけがそれを免れてゐたので、詢ねて見ると、いつも食後には水烟を服してゐたといふのであつた。

○蔡雲白は『蘭州五泉で種ゑる水烟は、その葉が枇杷の葉に似たもので、烟の葉とは逈に別だ』といつた。

鴉片烟

(一)臺海使槎錄――鴉片烟は、麻葛と鴉土とを共に絲に切り、銅鐺中で煮て出來る鴉片を烟に拌ぜたものだ。別に竹筒に棕絲を多く聚めて實て入れたもので吸ふのであつて、値段は普通の烟の數倍のものである。これを專門に製造販賣する店を開鴉

(一)臺海トハ臺灣ヲ指ス。

（二）噶喇吧、即チ瓜哇島。

片館と名ける。一二回吸ふと後には一刻も離すことが出來なくなる。暖氣が丹田に直注して終夜寐られなくなるもので、土人はこれを服して導淫具とするが。肢體が萎縮し、臟腑が潰出し、身を殺さずには止まぬものだ。官憲はそれ故に嚴禁してあるので、逮捕を受けたものが絶えないのだが、それでも僅の隙を偸んで一筒だけ吸ひたいといふものがある。鴉土は(二)噶喇吧に産する。

海東札記――鴉片は外洋の咬𠺕吧、呂宋の諸國に産するもので、輸入禁止の物だが、莽地の物賴の者は多く烟に和して吸ひ、精神を助け、徹夜寐ずにゐられるものだと謂つてゐる。凡そこれを吸ふには、必ず多くの人を招ぎ集め、交代に吸食するのであつて、坑に蓆を設け、そこに衆くの者が著坐し、席上には中央に一燈を點じて、そこで百餘口から數百口まで吸ふのである。烟筒は竹で管を作り、太さ八九分で中に椶絲、頭髮を實て、兩端には銀の首を鑲め、その側に小指大ほどの一孔を開け、その孔へ黃泥で壺盧の形になつて中の空なものを作つて火で煅いて嵌め込み、その壺盧の首に鴉片烟を置く。烟は少量に止まるもので、一口で立ろに盡き、格格と音をたてる。それで飲食が頓に倍進するやうになる。肥甘にせねばならぬもの

で、さもなくば腸、胃が不安になる。服し初めてから數月のうちならば中止することも不可能ではないが、久しきに亙つて服する習慣になつたものは、偶ま輟めると困憊して死ぬやうになり、卒には家を破り身を喪ふに至るものだ。凡そこれを吸ふ者は、顏色黑く、肩聳え、兩眼に涙が流れ、腸脫し收まらずして死亡するものである。

主として胃脘痛を治するに神效がある。

藏香

西藏に產する。團にし餅にしたものが良く、香灶の如きものはそれに次ぐ。色は紫、黃で、氣の甚だ猛烈な、焚くと香が百步の外に聞えるものが佳し。僞物は京香と名ける。藥用には入れない。

（一）打箭爐に產するものがあるが、西藏產の第一等のものには及ばない。紅藏、黃藏、紫藏の別がある

（蕭騰麟の西藏見聞錄に云く、藏香には紫と黃との二色があり、粗、細の二種が

（一）打箭爐ハ四川省ノ大雪山ノ高處、大渡河ト鴉龍江ノ間ニ在リ。

（一）巴塘ハ四川省巴安縣ノ地ナリ。

あつて、各處にいづれもあるが、ただ（一）巴塘に産するものを最とする。

○朱大駿云く、親しく藏香を實見したが、墨のやうに黒いものがあり、それを燃すと分娩を促すに甚だ妙である

○宓元良云く、藏香には紫、黄の二色があつて、紫のものはその中に少量づつ茼蒿汁を入れて合成してあるところから色が紫なのであつて、性は關竅を開き、透發して上升し、能く痘瘡を發する　黄なるものは下降し分娩を促すものだ　亂用してはならない。

○聞人達遠云く、藏香には綠色のものがあつて、それが最も高價である。焚いてその烟を嗅げば目を淸し得るといふことだ　彼の地の如何なる草で合成したものか判らない。

○葉明齋云く、藏香中には白色の小丸子になつてゐる一種があつて、それを焚けば氣が頗る幽爽である。やはり番僧から貢進する物だが、名稱は何といふか判らない。その香氣を嗅げば老人の腸燥で氣虚し便祕するを治し得るもので、厠に入る時に一二丸を焚くが最も妙である。また痘をも治し得る。

○馬少雲衛藏圖識――藏香には紫、黄の二種あつて、眞のものは焚いた時に烟が霄漢を凌いで高く升る。蓋し珍寶の屑で作つたものだ。又、黑、白の香があり、白香をばまた吉吉香とも名け、黑香をばまた唵叭香とも名ける。

○敍按ずるに、藏香はただその紫、黄の二色のものを正品とするのであつて、いはゆる紅、綠、黑、白の諸色はいづれも他の香に屬する。近頃はやはり罕に見るものだ。姑くその說を存して參考に資する。

○王景略が嘗て(三)織造寅公であつたときに藏香を製した。その方は(四)拉藏から得たものだといふ。予はその法を求めて此に附載する。速香二片、沈香、黄熟香、黄檀香、廣木香各四兩、春花甘松、三奈、玫瑰瓣、丹丁香、細辛、檜皮、生軍排草、乳香、金顏香、唵叭欖油、蘇合油、伽倆水、安息各二兩、冰片一兩、右を各〻極細末とし、頂好の楡麪二觔、火硝十兩を水に化して老醇酒を加へたもので調和して香にする。

邪を殺し祟を治するの功は蒼朮と同じ。痘瘡の發せぬには、寢臺の角に點じて病兒をして聞かしめる。能く斑に透つて甚だ妙である。瘧を癒し、分娩を促し、目を

(三)織造寅公、織造トハ明ニ置キタル官名ニシテ、專ラ衣冠ノ材料、敕書ノ絹、ソノ他宮廷用ノ高貴ノ織物ヲ造ル官署ナリ。寅公トハ、長官ノ意ナリ。

(四)拉藏トハ西藏ノ前藏部ヲ指ス。

明にする。

按ずるに、痘なるものは先天胎毒である。火に非ざれば結せず、感に因つて發するものであつて、最も燥烈を忌むものだ。香氣で薰觸してはその枯裂を愈よ滋くするものではあるまいか。斑に透るの說は、予は何としても深く信ずるわけに行かない。蓋し凡ての香はみな燥藥を作すもので、やはり烈しいのである。そもそも痘膽をば苗といひ、痘發をば花といふのであつて、花と呼ばれるところを見ればその性潤を喜むものでない筈はない。いかで香を以て燥することを得ようか。その毒を助けるから能く斑に透るので、終には恐らく乾紅して結局黑陷することになるだけであらう。

土部

楊妃粉

馬嵬に產する。坡上から取るもので、先づ祭つて然る後に掘り、浮土三尺を去るとそこにある粉膩のやうに滑で光潔なものだ。婦人に最も宜く、肌を澤かにするに效がある。

○職方典——陝西西安府に出る。婦人の顏に黑黝のあるには、水でこの粉を和して泥れば除ける。

顏を拭へば黝皯、雀斑を去り、顏色を美くする。

丹竈泥

嶺南雜記——羅浮山に出る。粉の紅色なるものを佳しとする。

○粵志——羅浮の沖虛觀の後に(一)稚川の丹竈があつて、その竈中の土を取り、藥

(一)稚川ハ抱朴子葛

槽の水で洗ふて丸にする。小粒を水中に投ずると、數縷の白氣があつて四旁に沖射し、いつまでも泡を生じて哈哈として聲があり、少頃して一粒が二つに分れ、二つが四に分れ、四が八に分れて然る後に融化する。それを服すれば腹疾を療じ得る。道士はそれを丹滓と呼んで常に客に餉める。

【暈船不服、水土等の症を治す】豆ほどの大いさの丸にし、飲んで調へて服す。

洗手土

坤輿典――(一)雞足山に迦葉が手を洗つた土といふがある。彼の地方では、頭痛を發した場合にこれを少量取つて塗る。直ちに癒える。

觀音粉

處州府志――雲和山中にある白潽泥であつて、水で攪きまぜ summ澄ませて取り、糯米粉一半を和して蒸して食ふ。それで饑を凌げる。これを觀音粉と名ける。

○山土内に生ずる。粉のやうに白くして甚だ細膩なものだ。凶作の年には郷人が

洪ノ號ナリ。

(一)雞足山ハ雲南省賓川縣ノ西北一百支里ニ在リ。山頂ニアル石洞ハ釋迦ノ弟子摩訶葉ガソコニ入定シテ彌勒ノ出世ヲ俟ツ處トイヒ傳フ。

（一）弋陽ハ江西省豫章道ノ一縣ナリ。
（二）大士トハ梵語ノ菩薩ノ譯語、此ニハ觀世音菩薩ヲ指ス。

それを掘取り、麥麪を和して餅餌にして食ふ。但し多食してはならぬもので、多食すれば能く便閉し腹重せしめる。それはその土の性が腸、胃に滯澀するからだ。洞內に生じたものは服してはならぬ。恐らくその中には蛇虺の涎毒があるからだ。

○鄭仲夔冷賞載に云く、丙子の歲は凶作であつたが、（一）弋陽石窩村の菴僧の夢に（二）大士の告があつて、山下の土中に石粉があるから取つて饑に充てるがよいと示されたので、その告に從つて往つて掘つて見ると果してこの物があつた。さながら蕨粉のやうなもので、研細して餅にし、蒸熟して食ふと甘美なもので、甚だ珍しいことであつた。鄉人はそれを聞いて競つてそれを採つた。或は菫油で裹むものもあつたが、それは甚だ苦くして口に入れるに堪へなかつた。大士粉と名けるは卽ちこれである。

○綱目の石部に記載してある石麪は卽ちこれであつて、常に生ぜぬものだといつてあるが、實は現に山中にいづれもある。瀕湖は主治にただ氣を益し、中を調へ、これを食へば饑を止めるといつただけだが、實はこの物は濕を去るの功が蒼朮に十倍するものである。蓋しやはり土は能く水を制するの關係である。

味微し甘く苦し、性は平である。蟲毒を解し、水腫を逐ひ、目を明にし、溼黄を療ずる。

烏龍粉

丹術家では黒龍丹と名ける。馬糞を燃料に用ゐた釜の臍の煤である。肌を生じ口を收める藥にこれを用ゐる。瘡口に糝れば直ちに效驗がある。

白硃砂

一名を翠白といふ　古方にこれを用ゐたものがある。これは舊い定窯器の末であつて、窯に近くして火氣がまだ脱けぬものだ。毒があつて能く肉を腐らす。服すべきものではない。

○青磁末を翠青といふ。本經逢原に、白磁器を研細して水飛し、それを癰腫に傅ければ鍼砭の代りになる。又、目に點ければ翳を去るとある。

○百草鏡に云く、白硃砂とは古磁の白色なるものを研つた粉であつて、藥に入れ

るにはその年久しく經つたものならば火毒の害がない。已むを得ずして用ゐねばならぬ必要のあつた場合には、定窯の土に入つてゐる部分を破碎し、火で煆いて醋に淬し、研細し水飛して用ゐる。當今一般になほ日淺き窯器の白色のものを以て代用してゐるが、誤である。

○按ずるに、外科に九種、十三根の法があつて、凡そ種癰留根に白甕種といふがあり、能く患毒で口の收らぬものがあるときにこれを以て利を取る。此に逢原にこれを癰腫に傅けるとあるは、恐らく種毒留根であらう。誤用してはならない。或は膏中に加へ入れてそれを鍼に代へるにはよし。しかしやはり少いほどよいのである。

【斷骨を接ぐ神效方】○黄氏醫抄——極細末に研り、黄蠟と共に丸にし、酒で三錢を吞んで汗を取り出す。骨が接がつて聲があり、片時にして復する。

【翳障を去る】○得效方にある點眼翠白丹にこれを用ゐてあり、錄驗方に推雲散といふがあつて、翠青、翠白共に用ゐてある。○醫學指南の目疾門に撥雲能光散といふがあつて、その中には白硃砂を用ゐてあり、童尿に醋を合せたもので二十一回

煅き製してから用ゐることになつてゐる。

【遠近の星障】○眼科要覽——白硃砂、牛黄、熊膽、白丁香、珍珠、冰片各一分、石燕、石蟹、琥珀、珊瑚各三分、爐甘石を煅いて三錢、麝香半分を共に細末にし、蜜一兩で調へて點ける。

【鼻血の止まぬもの】○慈惠編——定窯磁器を極めて乳細の末にし、少量を鼻孔中に吹入れば立ろに止まる。

【膈を治す】○義復方——白磁片を七回紅く焼いて醋に淬し、極細末に研り、燒酒で三釐を服す。

【臁瘡の起沿】○白硃砂を七八回乾燒酒の中に入れて四兩を、(一)酥するを度として研細して水飛し、右の藥一錢毎に冰片三釐を加へて研細し、それを黒膏藥に糝つて蓋貼する。妊婦は服してはならぬ。能く墮落するものだから愼むべきである。

【鱔攅頭】○葉氏方——細かな磁器末を香油で調へて塗る。立ろに效がある。

【跌打閃踠を治する方】○白硃砂、卽ち回青磁器を、火礶で紅く焼き、童尿に淬すこと七回して研つて粉にし、淨きもの三錢、乳香、沒藥を倶に油を去つて各一

(一) 酥トハ鬆カニ爛スルヲイフ。

錢、右の三味を研つて細末にし、好黃酒で送下する。三日に一服、三服で全癒する。

【難產の催生】〇便易良方――白細碗を研り碎いて末にし、一錢を酒で呑下せば即刻に產する。

綱目四卷の主治中に、白磁器を水で磨つたものは瘢痕を滅し得るといつてある。

鑄銅罐

雲溪方――浙江の湖州地方の人は毎に爐具を擔つて他州を廻り、銅杓、鍋、鏟の鑄掛けの出稼をするが、その泥罐は藥に入れられるので輕輕しく棄てない、小兒の頭に生じた軟癤の膿水が出て乾かず、かくてまた癩腫するを治す。罐を石上で搥いて細末にし、醋で調へて敷く。膿が自ら溢れ乾き、やがて泥が落ちて疾が自ら癒える。

白蠟塵

これは白蠟の表面に年久しくして積る塵であつて、掃き下して貯へて用ゐる。

瘵蟲を治す。（萬邦孚家抄）

檀香泥

これは檀香の心中に含まれてゐる脂垢であつて、容易に得られないものだ。色が塵土のやうだから泥を以て名けられる。これを爇けばやはり檀香の香氣がする。胃氣が滯つて痛むもの、肝鬱の舒びぬものを治す。

席下塵

【水腫を治す】聖惠方――遍身の水腫を治す。鹿葱の根、葉を曬乾して末にし、每服二錢に席下塵半錢を入れ、食前に米飲で服す。

回燕膏

本草經疏――朝北の燕窠土を回燕膏と名ける。

【瘰癧を治す】○經疏――胡燕窩内の土を合せて研つて敷けば效がある。

鞋底泥

瀕湖の綱目に、藏器本草の水土を伏せざるを治するに用ゐることを引用してあるが、外治には何等記述がない。此にそれを補つて置く。

【停耳、頭瘡を治す】○良朋彙集――一般に耳底に生ずるものが即ち聤耳である。鞋底の陳土を耳中に吹入れば乾く。この土はまた頭上瘡の乾かぬを治す。瘡に擦れば好いのである。

【一切の無名腫毒】○獨郎蒜一箇と津唾で鞋底泥を磨つて箍する。三五回で消く。

鼠穴泥

【偏正頭風を治す】○救生苦海――老鼠洞内の泥を炒熱し、熱に乗じて絹帕で頭上を包めば癒える。

椅足泥

物理小識――この泥を炕き乾し、それを用ゐれば肌を生じ得る。

狗溺硝

この藥は處處にある。人家の石墈上に生ずるもので、鄉村に尤も多い。乃ち狗が石上に尿し、多年を經て硝のやうに結晶したものである。それを取つて水飛して用ゐる。或は甘草湯で穢氣を拔き去つて用ゐる。

性は涼、色は靑白である。咽喉腫痛等の症を治し、能く虛火を降す。

雞脚膠

雲南の雞足山附近の土中に出るもので、俗に雞脚膠と呼ぶ。土人は往往土中から掘り出すことがある。形は碎いた磚のやうなもので、火に入れると烊けて膠のやうになる。故にかく名けるのだが、何物が結したものか判らない。

風を治するに神の如くである。湯に煎じて服す

烏金磚

これは糞窖中に多年あつた磚である。一塊を取り上げて洗淨し、清水で煎熬して浮沫を撇め去り、その浮沫がなくなつて淨くなるを候つと、その時は汁もやはり濃くなる。一二盞を用ゐて痘の貫漿せぬもの、虚弱無力のものを治するに大いに效がある。

蛆鑽泥

これは糞坑中で蛆が鑽る泥であつて、その質が鬆い。凡そ蛆は泥中に在つて冬を過すもので、必ずこの土を鑽つて窠を作る。蛆は冬を過すと短縮して頭に二本の角が生え、白くして蛹のやうになり、清明の節後に黑蟲に化し去るものだ。蛆は必ず殼を退くもので、退く毎に大きくなる。その退く時には牆石に(一)扒越して高い處から下に墜ち、その際に一節を退く。再び扒して再び墜ち、かくして幾度も繰返して全體の殼を退くものだ。この泥には蛹があるところから(二)退管藥に入れて用ゐる。

(一) 扒越ハ攀ヂ登ルコト

(二) 退管藥ハ漏管ナ

退失セシムル藥。

必ず冬期に取らねばならぬものである

【多年の痔漏で起管せぬを治す】　蛆鑽泥一斗を用ゐ、曬乾して五升を炒熱して袋に盛り、患者をして褲を去つてその上に坐らせる　すると稠水、膿血を淋下するものだ。久しくして泥が冷えたときは、再び五升を炒熱して盛り接いで坐らせる。かく一袋に坐らせつつある間に一袋をば再び泥を炒つて炒熱してまた換へる。數回繰返せば稠膿が自ら盡き、三度の後には管が自ら退出し、また人體を傷はない。屢〻用ゐて屢〻奏效した方である。

金部

鐵線粉

色黑し、廣中に產する。香灶で點けると烟が蚊の飛ぶやうに起つものが眞物である。陳廷慶は「色の白いものが眞物である。これは鎔鐵鍋中に浮起する白沫で、枯礬のやうなものだ。色の黃黑のものならば假物だ」といつた。

【癬を治するに神效がある】多年の頑癬で久しく癒えぬには、先づ薑で患處を擦つて後にこの粉を傅ける。（百草鏡に云く、醋で調へて搽る。薑、椒、一切の發する物を忌む。（楊春涯驗方に「廣東の刷癬粉は癬を治するに神效がある。その色は沈香末のやうだ」といつてあるは鐵線のことで、刷癬と訛つたのである。

【兩腿、陰面の溼癬】毛世洪經驗集。　葶薺に鐵線粉を蘸けて擦れば立ろに癒える。——鐵線粉とは火炮中から括下した鏽粉である。——粤中の洋行では舶來の鐵綫を輸入して中國へ賣つてゐる。久しく鏽びついたものを刀で刮るとその鏽は新しい

もののやうに明亮になるもので、その刮り下した鏽末を鐵線粉と名ける。その色は黄で香灰のやうだ。白色を帶びたものなどは鐵を鎔すときに鍋中に浮出する白沫を細に搗いて造つたもので、やはり鐵線粉と名ける。廣中にはこの二種があるといふ。

開元錢　萬歷龍鳳錢を附す。

無顏錄——唐の開元錢を燒くと水銀が出るものがある。それは藥に入れ得るものだ。楊妃が手で掐んだ痕のあるものが佳し。火で紅く煆いて醋に淬すこと六七回繰返して用ゐる。目に入れるには磨つて用ゐ、散に入れるには胡桃と共に研つて粉にして用ゐる。目を明にするもので、醋で煆いて眼科の藥に入れる。小兒の急慢驚風を治す。

○楊仁齋直指に孔方兄飮といふがあつて、慢脾驚風を治し、痰を利するに奇效がある。開元錢の背後の上下に兩箇の月痕があり、その色が淡黑で頗る小さいものを用ゐ、一個を鐵匙上に置いて四圍上下から炭火で燒き、各〻珠子が出たとき取出し、冷えるを待つて盞中に傾け入れ、それを一服として南木香湯で送下する。或は人參

湯もよし　錢は痰をば利するけれども胃家には好ましからねところなので、必ず木香を以て佐とせねばならぬのである

【禁口痢】　張氏必效方――開元古錢一個を火で煆いて醋に淬し、錢が化けるを度として細末に研り、粥の中に拌ぜて食ふ　患者の容體が十分に沈重で、粥をも食し得ぬ場合には、温開水で調べて服す　一二時の間で飲食を欲するやうになるものだ　然る後に薄粥を用ゐて漸漸に開導し、再び用ゐて脾の氣を調理すれば自ら癒える

【折傷接骨】　槐西雜志――（二）交河の黄俊生の話に『折傷接骨は開通元寶錢を燒いて醋に淬し、研つて末にして酒で服す　下ればその銅末が自ら結し、折れた處を圈周して束ねる。曾て足を折つた雞にこれを試みたところ、果して故のやうに接續した。そこでその雞を料理するときに驗べて見ると、その骨は銅でそつくり束ねられてゐた　その錢は唐の初に鑄たもので、字は歐陽詢が書いたものだ　その旁に微かに一の偃月形のあるのは、それは鑄型が出來上つて上覽に供したとき、文德皇后が誤つて掐んで一の痕をつけて了つた　そのまま改めずに鑄造したのである。その字は廻環して讀むやうに書いてある　俗にこれを開元錢といふのは誤だ』といふこと

（二）交河ハ縣名、河北省津海道ニ屬スル。

である

〔周氏方〕――跌打損傷を治す。開元錢一個を醋で煆き、酒を和して服す。非常に重體のものも二個用ゐれば立ろに癒える

〔古方選註〕に云く、唐の時の開元錢はやはり藥に入れられる。功は專ら壞肉を腐蝕するものだ

〔陳藏器〕曰く、能く損處に直入して人の斷骨を銲ぐ。

〔廣志〕――河頭から高麗に至る二部はいづれも唐、宋の錢を用ゐる。開元錢は(二)平頭元を上とし、(三)尖頭元はそれに次ぐ。萬歷錢といふもあつて、それは(四)跂歷を上とし、歷字の左撇は値が下である

〔〕古錢はいづれも治病に用ゐられるが、漢の五銖、秦の半兩はその質が薄く、多くは青綠である。蝕痕を剝いで醋で煆いて眼科の藥に入れる。それ等に就いては綱目に已に記載があり、世間でも多く知つてゐるものがあるが、秋燈叢話の記載には、(五)順治の初年に、湖南の孝感縣の縣民に瘧を病むものが多かつたが、ある者が古錢中から周元通寶錢を撿り出して一文を持たせると直ちに癒えた。それが遠近に喧傳

(二)平頭元ハ元字ノ第一劃ヲ横ニ引キタルモノ。
(三)尖頭元ハ元字ノ第一劃ヲ點ニシタルモノ。
(四)跂歷ハ歷字ヲ書セルモノ、左撇ハ歷ヲ書セルモノナリ。
(五)順治ハ清ノ世祖ノ年號。

され、その錢一文の價が政府所制の錢一緡に相當するやうになつたとある　この話の通りだとすると、また開元錢だけが用ゐられるに限らないことになる。しかし古に準じ令を酌量して、藥に入るにはただ開元錢を正當とする。故に特にここに提示してその採用範圍を廣くして置く

○王楙野客叢書――唐の錢で現に存在するものに二種あつて、それは開元通寶とかの乾元重寶とであるが、食貨志を按ずるに、開元通寶は高祖の時に鑄造したもので、徑八分、輕重、大小が中を得てゐる　その文は八分、篆、隷の三體である。洛、并、幽、益、桂等の州にいづれも監を置き、秦王、齊王には三爐を、右僕射裴寂には一爐を賜はつた。高宗は復た開元通寶錢を通行させて全國でみな鑄造させた。玄宗もこの錢を鑄造し、京師に藏してみな全國に通行せしめられたのであつた。しかして乾元重寶錢は肅宗が第五琦に命じて鑄造せしめたもので、錢の徑一寸、每一緡の重量十觔とし、開元通寶と同時に通用し、一箇を開元錢十箇に當てた。琦が大臣になつて後に命じて絳州でこの錢を鑄造させたが、その錢は徑一寸二分、每一緡の重量二十觔とし、開元通寶と竝行させて、一箇を開元錢十箇に當てた。乾元錢はた

だ肅宗の朝に鑄造しただけだが、開元錢は累代の朝廷で鑄造したので、それで今に及んでも多くあるのである

○按ずるに、開元通寶錢には二種あつて、一種は手で搯んだ痕がさながら月眉のやうにあり、輪廓が微し欠け、銅色が頗る古い　即ち世に稱する楊妃の手の痕といふものであるが、譚賓錄の記載を閲するに、錢文に甲のやうな跡のあるのは文德皇后がつけたものだ　武德中に五銖錢を廢して開元通寶錢を發行したのだが、その四字は歐陽詢が書いたもので、初めて鑄型が出來上つて上覽に供したとき、皇后が一甲痕を搯りつけたまま鑄造したのだとある　これで始めて今傳はつてゐるものが開通錢なることが判る　その說を存して後の參考に備へる

萬歷龍鳳錢　婦人の臨產に錢一文を手掌の内に置けば催生する（宋文藻附記）

菜花銅　風磨銅を附す

藥性考——これは天然に生ずるものである　今の黃銅は赤銅に爐甘石を合せて煉つて作つたものだ

味甘し　これで作つた刀で藥を切るが宜く、性味が變じない　箭に打つたものを用ゐて損傷劑に入れれば、能く金瘡傷口を斂め、脾を强くし、肺を益し、一切の風痺を除く

風磨銅　西番に生ずる　風露中に置いて色が金の色く燦たるものである　これを佩れば一切の風疾を除く

白銅鑛　白銅を附す。

これは礦中の白銅であつて質が脆い　當今用ゐてゐる白銅は赤銅と砒石とで煉成したもので、毒があつて用ゐるに堪へない。

辛し、温なり　風を治し、毒を散ずる　牛、馬の瘡に敷く　また筋骨を續ぐ

白銅　辛し、涼なり。氣不足を鎭め、肺を益し、痰を下し、肝を伐ち、目を明にする。（藥性考）

紫銅鉚　金花鉚　錫鉚を附す。

藥性考　雲南に產する。藥に入れば心を鎭め、肺を利し、氣を降し、痰を墜す。火で煆いて末にし、それで罨へば筋骨の折傷を續ぎ得る。

金花鉚　藥性考――紫銅鉚と相類するもので、主治も同じ。

錫鉚　藥性考――毒あり。磨つて疔腫に塗る。

錢　花

藥性考――これは錢を鑄造する爐の中に飛んで起つ黃沫で、輕く鬆なるものが佳し

主として騾馬の迎鞍瘡に敷く。

馬　口　鐵

一名を馬銜鐵といふ　乃ち馬の口中で嚼む鐶のことをいふのである。その性は久しく用ゐたものほど軟なものだ　市人はこれで打つた簪、鐲、戒指を僞つて銀器に充てるが、さながら眞物のやうに見える　或は包金地子にも作る　いづれも好し。

年久しきものは質が軟く、より多く馬の精液を得てゐるので藥に入れて良し

味辛し　湯に煎じて小兒の驚風を治す。

金頂

品級考――頂の作製は、銅で作つて外部を金で鍍するもので、七品以下のものはいづれも純ら鍍金しただけのものだが、七品以上になると寶石を嵌めて差別してある。藥に入れるには純銅鍍金のものを取り、色が舊りて用ゐ難くなつたものが良し先づ甘草湯で熱に乘じて洗つて用ゐる

【頭風、及び目眼喎斜を治す】　傳信方――袁良臣云く、煎じた湯で藥を煮るが有效である。舊い雀頂が更に妙である。

【邪瘧を絶つ】　余機云く、年久くして色の舊りた純金頂一箇を取り、紅絹囊に盛つて、病人に知らせぬやうに病床の下に入れて置けば自ら癒える。按ずるに、頂なるものの製式は冠の首に加へるものである　日日に陽氣の熏浹を受け、また風日の氣を得てゐるので、年久しきものは氣を得ることがいよいよ厚い　凡そ金の屬はいづ

れも能く木に尅つものだ　風は巽に屬し、巽は木である　故に能く風、斜を治し、邪痱を絶つのであつて、やはり正しい氣を取り用ゐて直し定めるのである。

烏　銀

綱目には銀の條下に烏銀を附錄してあつて、硫黃で銀を熏ずると色が黑くなる　烏銀は、養生家では器に作製し、それに露を盛つて飲む　天年を長くし、惡を辟けると說明し、ただその服食の功を記載しただけで治病に用途のあることを說いてない。故に行篋檢祕からその法を得て補記して置く。

【翻胃を治するに神の如し】　紋銀錢二分、硫黃一觔を用ゐ、硫黃を一百二十包に分け、大傾銀罐一個を用意してその中に銀を放入し、炭火の上で煅きながら硫黃を一包づつその罐內に投入し、硫黃全部を投入し盡すを度として銀を取出して末にし、第一回には三分を服し、第二回には二分を服し、第三回には一分を服し、再び丁香、茴香、藿香、沈香各三分、麝香一分を三服に分け、その一服每に銀粉二分、水一鍾を煎じて藥が半鍾になつたとき、それを以て空心に銀粉を送下する。三回にして一

日に全部を服すれば癒える

子母懸

翟笏川掌記——子母懸は貴州の鉛鑛中から出る。これは鉛の精氣の結晶したものだ、大なるもので數十觔の塊になつたものを得ることがある。生で鑿つて洗面器に作り、それで頭、面を沐すれば髮が老年になつても白くならず、目を明にし、瘰癧を去り、容貌を澤にし、肌を潤ほす。凡そ顔に紫黒の痣記のあるものは、久しく沐すれば盡くなくなる。

毒を解し、疣贅、息肉を去り、髮を烏くし、目を明にする。

銪　一には釉とも書く。

これは（一）傾銀舗で鎔す銀の渣脚である。凡そ銀を鎔すには、罐に必ず多く硝、及び硼砂、黄砂を入れて鉛、銅、雜脚を去り、それで十分なものとなるので、成つたものは色に紋をなす銀である。その際罐の底に殘る黒色の滓渣を名けて銪といふ

（一）傾銀舗ツブシノ古銀ヲ溶カス營業者。

有毒物だから悞つて食つてはならぬ　食へば能く人の腸を墜す。この物は藥に入れては用ゐないものだ　故に綱目には、銀の條下に烏銀を附錄して、主治はないけれどもやはりその名稱だけは列してあるが、錨は結局記載しなかつた　或は毒なるがゆゑにこれを棄てたのかも知れぬ　誤つて食つたもののあつた場合には、急に黃泥水を茶盞で二杯服すれば解し得る。或は飴糖四兩を小さい丸にして、時に拘らず芝麻油で呑下す　いづれもその毒を瀉出するものだ　これは百日まで服すべきもので、その後には患がない。〇經驗廣集――銀錨水を服した場合には、烏梅湯を灌げば直ちに解す　〇楊春涯驗方　―誤つて銀黝を食つたときは、皮のままの綠柿を續けざまに數十箇吃ふ　冬期には柿餅、茨菰汁を吃へば解すること神妙である

【癬を治す】　救世青囊　―凡そ頑癬には、銀錨を多少に拘らず磁盤內に盛つて屋外の外氣に放露し、盤を微し側めて置き、錨が露に沾ふて水が流れるとき、抓破して搽る。

【內府萬應膏】　慈谿の陳水東が得來つたものである。銀錨一觔、黑芝麻油二觔を用ゐ、先づ錨を油に入れて十日間浸し、敲き碎いて油と共に煎じ、四五分になつて

熟したとき、絹袋で鉛を濾し去り、炒つて飛淨した東丹一觔を入れて熬つて膏にする　一切の無名腫毒、癬瘡、痔漏、發背疔瘡を治し、一貼で癒える

【五寶膏】不藥良方——馬刀、瘰癧、又は鼠瘡の已に潰れたるものを治す　銀黝子四兩を槌き碎き、黄丹八兩を飛淨し、香油二十兩を用ゐ、砂鍋一個を用ゐて香油を盛つて火で温め、油が熱するを候て黝子をその油の中に投入し、桃、柳、桑、槐、棗の五枝で攪きまぜ、珍珠花の起つを候て渣を撈去し、布で濾し淨め、復た油を鍋に入れて慢やかに黄丹を篩ひ入れ、そこで右の五枝で手を住めずに攪き廻し、水に滴して珠になるを度とし、取出して貯へる　使用するときには火氣に當ててはならぬ　重湯で炖化し、紅緞に攤して貼る。

石部

吸毒石

袁棟書影叢説に云く、吳江の某といふ男は吸毒石を所持してゐた。形は雲南の黒圍棋のやうなもので、また白色のものもあつた。甚しく腫毒あるものは、この石を觸れると膠結して脫ちない。重いものは一晝夜で落ち、輕きは時を逾えて落ちる。その石の自ら脫ちるを候つべきもので、强ひて離してはならない。强ひて離せば毒がまだ盡きないものだ。石が落ちたときは、預め人乳一大碗を準備して置いて、小碗に分け入れて石をその乳中に投ずる。すると百沸し跳躍するものだ。再び乳を易へてまた前のやうに沸かし、沸かなくなるまで繰返せばその石は恙ない。それは吸つた毒が乳に洗ひ盡されるからである。かくせねば石は必ず粉裂して了ふ。これは大西洋から得たものだといふことだ。

○嶺南雜記――西洋の島中に産する。毒蛇の腦中の石であつて、大いさは扁豆ほ

どあり、能く一切の腫毒を吸ひ、發背も治癒する　現に賣つてゐるものは、土人がこの蛇を捕り、土にその肉を和して舂いて圍棋石子ほどに作つたもので、普通の腫毒、及び蜈蚣毒、蝎等の傷を吸ふ。患處に置くと黏吸して動かないが、毒が盡きると自ら落ちる　落ちたとき人乳に浸すと乳が綠色に變ずる。その乳は遠くへ棄てる。浸さねば裂けて了ひ、次回には效驗がなくなる　眞の腦中の石を試驗するには蛇の頭に置いて見る。動かぬものならば眞物だ。

○張菉猗は『吸毒石なるものは、蛇が蟄する時に口中に含む泥であつて、驚蟄後にそれを穴の畔に吐き棄てあるものを人が取つて賣るのだ』といつた　按ずるに、庚辛玉冊にも『蛇は蟄に入るとき土を含み、蟄を起つときそれが化して黄石になる』とあるが、いづれもさやうなことはない　菉猗の話のやうなものは、たとひ有つたにしてもやはり蛇銜土だ。毒を吸ふ能力があらう道理はない

○泰西石振鐸本草補に云く、吸毒石はまた蛇石と名け、兩種ある。小西洋にゐる毒蛇の頭の中に一箇生ずる石で、扁豆仁ほどの大いさで、能く各種の毒氣を拔除するものは自然生のものである。土人が蛇石、幷にその蛇の肉とその地の土を末にし

たものとで闌棋子ほどの大いさに造つたものは人造のものである。小西洋では蛇石を使用し、大西洋ではただ藥製の人造物を用ゐる。凡そ蛇、蝎、蜈蚣等の傷、及び癰疽大毒、一切の惡瘡の發つたときは、この石を患處に置けば緊く黏つて脫ちず、その毒が吸ひ盡きると解脫する。脫ちるとき損するのを防ぐために、綿毯等に盛るやうに準備して置く必要がある。吸はせるときは一二時位を可とするので、脫ちないときは摘下すべきものである。摘み取らねば石が碎けるものだ。脫離したときには急に乳汁に浸す。或は人乳が不便ならば牛、羊乳でもよし。乳汁が略ぼ變じて綠色、或は黃、或は黑色になるまで浸す。それは毒が盡きたのだ。或は石の諸乳がいづれもないときは溫水に浸すもよし。浸すことがやや遲れると石が毒のために傷を受けて再び使用し得なくなるものである。一旦浸した後は清水で洗淨して抹き乾して貯へる。但し浸した乳汁にはその中に毒があるから、必ず地坑を掘つて埋むべきものだ。それで人畜が傷を免れる。或は患處に血がないときは小刀で刮損して微し血の出たところへ當てると能く黏する。或は預め解毒藥を服してそれが内攻した場合に、再びこの石を用ゐて吸はすが更に妙である。この石を試驗するには、石を毒

蛇の頭上に置いて見る。蛇が敢て動かないものだ しかしその際にもやはり必ず乳汁で前の方法のやうに浸すべきもので、それで石に傷みがない。蓋し一たびこの石を蛇の頭に試みると、その短時間に蛇の毒がやはり石の中に入るのである

○紀曉嵐先生灤陽消夏錄に云く、小奴の玉保は烏魯木齊の流浪人の子だつた。初め特納格爾の軍屯に隷屬してゐた頃、嘗て谷に入つて見失つた羊を尋ねに出て、柱のやうな、盤ほどの太さのある大蛇が高い岡の上で日光に鱗を曬してゐるのを見た。全身が爛然たる五色で錦繡を堆くしたやうに見え、頭に長さ一尺ばかりの一本の角があつた 雉が羣り飛んで來るのを口を張つて吸ふと、四五丈の間隔があるところからみな翻然として落ち、さながら矢を壺に投ずるやうな有樣であつた 見失つた羊もこの大蛇に呑まれて了つたものと判つたので、蛇に見つけられぬ隙を狙つて谷間傳ひに逃歸つたが、恐怖のあまり殆ど魂魄を失つたもののやうになつて了つた。そのとき軍吏の鄔圖麟がそれを聞いて「その蛇は甚だ毒なものだが、その角は能く毒を解するもので、卽ち所謂吸毒石といふものだ この蛇を見つけたときは、雄黃數觔を携へて往つて風上でそれを燒く すると蛇は委頓して動けなくなるので、そ

の角を取つて鋸いて塊にするのである。癰疽の初起にその一塊を以て瘡頂に著けると、磁石が鐵を吸ふやうに黏著して脱ちなくなり、毒氣を吸ひ出して了ふと自ら落ちる。それを乳の中に入れて浸すと、その毒が出て了ひ、再び使用し得るやうになる。その際毒の輕いものは乳が綠色に變じ、やや重いものは青黯色に變じ、極めて重いものは黒紫色に變ずる。四五回吸はせれば毒が盡きるもので、その餘は一二回で癒える」といつたさうだ。予の從兄懋園の家に吸毒石といふ癰疽を治するに頗る效驗があるものがあつたが、その質は木でもなく石でもないものだつたが、この話を聞いてそれは蛇の角なることが判つた

敏按するに、吸毒石は、曉嵐先生は大蛇の角だといひ、菜濟は蛇が含んだ土だといつたが、恐らくいづれも正確でない。瀕湖の綱目には、蛇角、一名骨咄犀とあつて、輟耕錄、及び松漠紀聞、曹昭格古論の諸書を引用し、能く癰毒を治すといつただけで、吸毒の說は一向示してなかつた。書影叢說、及び嶺南雜記は、いづれも石なりと斷定してあつて、その說が詳核であり、從ふべきものである。故に石部に列し、兼て諸說を採錄して考證に備へる。蛇含土に至つては蛇黃のことであつて、こ

の物とは遙に別なることが尤も辨ぜずして自ら明である。

一切の無名種毒、及び毒蟲傷を治す。石を以つて吸はすれば立ろに癒える。

天生磺

毘陵劉霽軒生生、諱を煥章といひ、(一)浪窮の令に任じ、天生磺紀畧なる記錄がある。それには(二)浪窮の東、城外五里に溫泉がある。乃ち昆明海であつて、(三)洱水の源である。周圍四五里ばかりあつて、その泉の底には硫磺を産し、水は湯のやうに熱してゐて、雞蛋をその中に投ずれば熟する。中流に峙つ一平巖は九氣臺と名けられ、中が空で旁に穴があり、穴は凡て九あつて、溫泉がその中に注ぎ、その氣が熏蒸して石に上浮し、沾濡したのが全面に流浹して乳が垂れたやうに見える。それが積つて長い間には質が次第に堅くなり、色は甚だ瑩白になつて、數百餘年を歷るとその色が灰蒼になり、巖下に堆聚して磈磚玲瓏たるものとなり、巧石と似たものになる。土人はそれを鑿り取つて藥にする。その性は大溫なるもので、命門の眞火、虛寒等の症を補し、服すれば其の效神の如くである。蓋し硫黃泉の熱氣が結したも

(一)浪窮ハ一ニ浪穹ニ作ル。雲南省洱源縣即チソノ地ナリ。
(二)洱ハ水名、雲南省大理縣城ノ東ニ在リ。

（二）羗、即チ羗化。酸化ノルノ塩デア。

ので、質が最も精滴である。又、久しくして後に成るものだから、功效は遠く石硫黄に勝るのである。今では上人がその丸剤等の上に文星閣といふを徒て、浪竊地方での名勝となつてゐるといふことだ」とある。

腦症を治し、命門の火の衰へたるを補す。その他の功は倭黄に同じ。

按するに、两儀高一点宋際格致に「硫黄には人造のものがあり、天然生のものがあつて、天然生のものは、外部は灰色、内部は黄泥のやうなもので潤く、その質は濃肥であつて、その味は苦く鹹く、その氣は臭くして毒あり。その性は燥熱なるものだ。故に火に近ければ、発し易い」とある。

倭硫黄

東洋の琉球、日本、呂宋等の國に産する。日本産のものを佳品とし、その色は白くして蜜のやう、氣は臭烈ならず、光潤にして嫩い。高濂の四時修合方に「舶上の硫黄は倭夷の商船で輸入される灰で布縫したものが佳し」。爰には多く見ないので、いづれも商店で賣つてゐる油のある硫を用ゐてゐるが、舶硫は色が蜜のやうなもの

て、黃中に金紅で七月の石榴のやうな部分があり、皮を打開するとさながら水晶のやうに光があり、全く鬆脆なものでなく、性が石のやうに硬いものが眞物だ」とある。按ずるに、硫の內地に產するものは、土と油とを取つて煎熬して造るので、氣が腥くして鼻に觸れ、老黃色をなしてゐるが、倭產のものは嫩白である。瀕湖の集解にはただ庚辛玉冊所載の石、土の二種を引用して、倭硫に關しては却て考據したところがなく、僅に「倭舶のものが佳し」といつただけだつたが、實は倭硫黃と內地產とは適に別であつて、綱目の附方の中に記載してある本事方の陰證傷寒、博濟方の陰陽二毒、瑞竹堂方の酒皶赤鼻、宣明方の鼻、面の紫風には、いづれも舶上の硫黃を用うとしてあり、斷じて內地產や臺黃を代用すべきではないのである。故にその功を左に補著して置く

○百草鏡――白硫黃は琉球國に產し、倭硫黃と名ける。洋舶が帶來するもので、堅きこと石の如く、臭からず、光潤滑澤なもので、形が滴乳の如きものが眞物である。

○物理小識――舶硫は蜜のやうで、黃中に金紅の部分があり、擊ち開いて見ると

水晶のやうに光がある。今の青硫は佳くない。蓋し陽の氣が地に入つて水に遇ふと死して硫となり、雲に升れば爆して雷となる。乃ち萬物を生養するの源である。故に銀紅のものを以て第一とするのであるが、但し善く製したものに限るのである。硫の毒に遇つたときは、釜底煤を研つて湯に泡けて飲む。煤は火の宅なるものであつて、硫の本來は陽である。火がそれを見て服するのだ。

○岳嵯使秀峯先生は曾て予に話された―京師にゐたとき倭黄を見たが、梅花式のやうで餅色を成し、やはり甚しく白くはなく、手に握つて耳の畔に當てて聽いて見ると索索といふ蟲の鳴くやうな聲があつた。といふのである。この種類は倭船で來るものだといふから特に此に筆記して後の參考に俟つ

性は大熱である。味は微し酸し、小毒あり。下元を補し、陽道を助け、命門の火の衰へたるを益す。老人に對して尤も宜し。斑を滅し、蟲を殺し、痔を治し、血を通じ、瀉痢を止める。

【煖肚封臍膏】周氏家寶に云く、夏期にこれを貼れば秋後に痢疾を生じない。茱萸、蛇床子、大附子各一兩、肉桂一兩、川椒三兩、倭硫黄一兩、麝香三分、獨蒜一

筒を用ゐ、麻油三斤に粗藥を入れて半月浸し、枯色になるまで熬つて渣を去り、水に滴して珠になるまで熬り、再び黄丹十二兩を加へて再び熬り、冷えるを俟つて細藥を加へて聽用する。——妊婦は貼ることを忌む——

〔養仙膏〕 萬氏家抄に云く、この藥は、精を存して漏さざらしめ、體を固くし、陽を壯にし、形を强くし、力を健にし、凡そ交接に泄せずして十女の精を採るべく、兼て腰疼、下元の虛損、五勞、七傷、半身不遂、膀胱疝氣、下焦の冷氣、小腸偏墜を治し、又、二三十年の脚腿の疼痛、陽事不擧、婦人の白帶、血淋、陰痛、血崩を治す いづれもこれを貼るが宜し 麻油一觔四兩に甘草二兩を入れて熬り、六分になつたとき諸藥を下す。

第一に芝麻四兩を下し、

第二に甘草二錢を下し、

第三に天門冬を酒に浸して心を去り、麥冬、遠志を倶に酒に浸して心を去り、生地を酒で洗ひ、熟地を酒で蒸し、牛膝を蘆を去つて酒で浸し、蛇床子を酒で洗ひ、虎骨を酥で炙き、兎絲子を酒で浸し、鹿茸を酥で炙き、肉蓯蓉を酒で洗つて甲膜を

去り、川續斷、紫稍花、木鼈子を殼を去り、杏仁を皮、尖を去り、穀精草、官桂を皮を去り、各三錢を下して文武火で煎り、枯れて黑色になつたとき渣を去り、飛過した黃丹半觔を下し、

第四に松香八兩を下して槐、柳枝で手を住めずに攪き廻して水に滴しても散ぜぬやうにし、

第五に倭硫黃、雄黃、龍骨、赤石脂を各〻末にして二錢を下し、再び火にかけて半時の間煎り、

第六に乳香、末藥、木香、母丁香を各〻末にして五錢を下し、再び煎つて火を離して放置して温ましめ、

第七に蟾酥、麝香、陽起石各二錢を下して水に滴して散らぬやうにし、

第八に黃占一兩を下し、磁罐に盛つて蠟で口を封じ、井中に入れて三日浸して火毒を去り、紅絹に攤して臍上に貼る　もし房事を行つて泄さんと欲するときは、婦人の唾津で潤ほして膏藥を去る　それで泄して妊娠する　——瀕湖按ずるに、女を御するの説は適ま以て生を戕ふに足り、子を種むの説は亦た以て淫を導くに足る　謬を喩すことを多くして成功することと

は少い。これを觀るものはそれ等の點に注意されたい――

【寶珠膏】 行篋檢祕――この藥は、能く筋骨を助け、血を補し、肌を長じ、元を固くする。まだこの藥を貼らぬ前に、先づ擦久易丹で腰眼を擦り、三日の後に再びこの膏を貼る 赤石脂、天冬、麥冬、生地、熟地、紫稍花、蛇床子、鹿茸、穀精草、防風、玄參、厚撲、虎骨、兎絲子、木香各一兩、母丁香、肉桂、川斷、赤芍、黄芪、肉蓯蓉、白龍骨、杜仲各一錢五分、附子一箇を生で用ゐ、蓖麻子一百粒を油を去り、穿山甲一錢五分、地龍を土を去つて二錢、木鼈を殼を去り油を去らずして切片し、倭硫黄、沒藥各一錢、血竭一錢、乳香二錢、松香、黄蠟各四錢、麝香少量、麻油二觔を用ゐ、藥を油に入れて三日間浸し、後に鍋に入れて熬り、黒色になつたとき渣を去り、槐、柳枝で攪き廻しながら黄蠟、松香を下し、再び細藥を下し、油が水に滴しても珠になつて散らぬを度として磁器に取收め、絹緞に布攤して腰眼に貼る。その效神の如きものである。

【擦久易丹】 肉蓯蓉、良薑、蛇床子、丁香、馬藺花、詔腦各一兩、木鼈、蟾酥少量を末にし、煉蜜で彈子ほどの大いさの丸にし、一丸づつを用ゐて腰眼に千百遍擦

り、絹綢で押へて一日解かずに置き、三日後に前揭の寶珠膏を貼る

【七寶丹】　高濂修合方――久患の瀉痢で手當を加へても癒えぬものを治するに、これを服すれば效がある　老人、及び脾泄で滑するものはこれを服するが宜し。附子を童尿で黃泥を和したもので炮いて五錢、當歸一兩、乾薑五錢、吳茱萸、厚樸、茴製の花椒各三錢、舶硫黃八錢の七味を用ゐ、末にして米醋で和して二箇の團にし、白麪を和して外衣にして藥をその中に裹み、燒餅に糖を包んであると同じやうにして、文武火で煨き、麪が熟したとき麪を去つて搗いて末にし、蜜で桐子大の丸にし、諸痢には米湯で二十丸を空心にして正午に服す　宿食氣痛で不消化なるには薑鹽湯で服す、

【神效乾丹】　演撰兒集――この藥は陽を堅くし、腎を益し、筋力を强くし、血脈を和し、子を孕ましめること神の如きものである。天雄三錢を皮、尖を去り、雄精三錢、鴉片三錢　蟾酥三錢、母丁香の大なるもの四粒、人參三錢、樟腦を瓦上で昇した淨霜三錢、乳香、末藥を油を去つて各五分、倭硫黃三錢を共に研つて細末にし、絹羅で外を裹み、麝香二錢を極細に研つて別に包み、白皮を多少に拘らず敷き用ゐる

るたけを度として碗内に置き、滾水で泡開し、白芨を絹袋に裝入し、汁を擠んで渣を去り、再び蘇合油三錢と白芨汁とで藥を和して調勻し、麝香末を上に灑いで錠にし、磁盒に放入して陰乾し、或は口を封固して曬し、乾くを俟つて研つて擦る。

【剪根丸】經驗廣集——胃氣を治し、一服にして根を除く。冷痛に就中效がある

玄胡索、胡椒、五靈脂、白荳蔻各五錢、倭黃——もしないときは石硫黃を用ゐる——を水に浸して朝夕水を換へ、取出して磁器で鎔かし、數沸してから土地上に置いて冷えるを候ち、再び水で泡過して洗淨して一兩、木香を切片し曬乾して三錢五分を研つて細末にし、拌勻して收貯する。體の壯なるものは一分、弱きものは八釐、老人、幼童は五釐を溫燒酒半小鍾で調へて服し、密室に入つて一切の食物を吃はずに翌日を待ち、稀米湯を吃ふ。五日經つてから後には乾飯を吃つてよし。永く再發せぬ。姙婦は服することを忌む。

石腦油

陝西の延、安、楡州等の地に產する。乃ち石中の流液であつて、土人がそれを取

る　格物須知に「石腦油は、眞のものは金、銀を透すが、ただ眞琉璃だけは貯へ得る。水に消滴を入れると烈焰が遽に發し、餘力が水に入ると魚鼈がみな死ぬ。灰を撲てば滅えるものだ」とある。常中丞宦遊筆記――西域の赤金衞の東南一百五十里の地點に石油泉があつて、油は水面に生じて肥脂のやうで色黑く、氣は臭い。土人は多く取つて點燈用に供するが、極めて明かで松膏に匹敵する。或は瘡癬を治し得るといふことだ。

○筆談――延脂といふは延安の石油のことで、水際に生じ、沙石と泉水と相雜つて惘惘として出る。土人は雉尾でそれを裛んで缶中に入れるが、頗る漆に似たもので、燃せば極めて明だ。元和志には、石油泉は玉門縣の東一百八十里に在り、泉中には肥肉のやうな苔があつて、それを燃せば燭の代用になる。この油は能く水中で火を發するもので、もしこの油を燃したとき水を沃ぐならば、その光はいよいよ熾になるが、灰で撲てば滅えるとある。按ずるにこれは古にいつた石漆そのものだ。漢書註には、延壽縣の南のある山の石から泉が漾漾として出る。不凝脂のやうなもので、燃せば極めて明だ。食つてはならない。縣民は一般にこれを石漆といふとあ

る。張華は、延壽縣の南の山に溝脂がある。始は黄だが後には黒くなる。これを石漆といふとある。方鎭編年錄には、これを地脂といつてある。時珍は、石腦油、一に硫黄油といふとしてある。現に雲南、緬甸、廣の南雄にいづれもある。

○聞見雜志——蜀の富順縣では、火井から先づ木の火で下から引いて上せ、大竹を半に破つて節を去つたものを用ゐて、その中から火を行らして竈下に引き入れるやうにし、鹽を煎じてゐるが、その火の色は青緑で紅くない。井中の油を紙、布の撚につけて燃し、それを水に入れると底に沈んでも滅えない。瘡癤に搽れば立ろに癒える。これもやはり石腦油の類である。

○北史——屈茨川は龜茲國の西北の大山中に在り、水は膏の如く、流出して川に成り、數里を流れて地に入る。その狀態は鵜鶘のやうで甚だ臭い。これを服すれば齒髮が再び生える。癘人がこれを服すればやはり癒える。これもやはり石腦、地溲の類である。

○通志の畧に、龜溺、また石腦とも名けるとあるはこの物とは別物である。

白禿、堆灰、——俗に狗屎と名ける。——蠟梨瘡には、頭を剃つてこの油を塗れば

立ろに瘥える。又、頑癬、風癩、惡瘡を治す。

【無名惡毒】救生苦海——緬甸に產する石油、卽ち石腦油である。石縫から流れるもので、氣は聞くべからざる臭惡なもので、色が黑い。それを惡毒に塗るが良し。又、癰毒を治す。

東西洋考——三佛齊は東南海中に在る。本は南蠻の別種であるが、後に瓜哇に破られてから名を更へたものである。舊港に產する猛火油といふは樹の津であつて、一名を泥油といふ。大いに樟腦に類するものだが、ただ能く人の肌肉を腐し、燃して水中に入れると光焔がいよいよ熾になる。蠻夷はこれで爆藥を製造するが、その爆發狀態は更に烈しいもので、魚鼈がこれに遇へば燋爍せぬはない。

敏按ずるに、これは石油のことだ。その一名を泥油といふとあるを觀ても判ることで、樹脂ではない。洋考では悞つて樹津としてあるから、この部分を石腦の條下に附記して置く。

神火

救生苦海に神火を取る法がある。劈砂一觔を水を帶びて研細し、滾水に沖すると面上に細な浮沫が起る。その時に荊川紙をその水面に拖くとその沫が紙上に黏著する。その紙を曬乾して掃き下したもの、卽ち神火である。その砂を澄淸して水を去り、再び研り再び沖して浮沫が起つたとき同樣の方法で拖いて曬し取る。かく六七回繰返して浮沫が出なくなつて止める。砂一觔當り約八九分の神火を取り得るものである。烏金紙に包んで收貯する。

性能く毒を拔き、口を收める。凡て癰疽、毒瘡の容易に口の收まらぬものには、神火少量を鵝翎に蘸けて膏藥上に掃いて貼れば、毒水が乾き易く、瘡口が斂り易い。外科の聖藥である。

天龍膏

これは千年の塔の頂の石灰である。瀕湖は石灰の條下に古塚中の石灰を附記して地龍骨と名け、艌舡油石灰を水龍骨と名けたが、獨りこの物だけを遺したから特に補記して置く。盛再華は『塔上の石灰は、天の陽、風露の氣を受け、悍烈の性を變

じて溫和と成してあるものだ　故に能く痛を定め、肌を生じ、血を止め、溼を去る。金刃の要藥であつて、內服するも良し」といつた

外治には血を止め、肌を生じ、惡瘡腫毒、寒溼臁瘡に塗る　內治では心腹痛、烏痧脹、婦人の血崩、漏帶、男子の久痢、便血、及び一切の打撲損傷、惡血凝聚で腹痛して死せんとするもの。いづれも服するがよし。

【白虎丸】一切の青筋腹痛を治す　萬氏家抄――天龍骨を多少に拘はらず泥土を去つて水で飛過し、桐子大ほどの丸にし、每服五十丸――輕、重を看て加減する――を燒酒で服す　初めに頭痛を覺え、惡心し、腹脹するとき一服を進むればその場に血が散ずる　もし三五日を經過して青筋が已に老いたものならば多く服して效を取る。

玉田沙

本經逢原に云く、夏期に發する痲疹にはこれを用ゐるが良し　やはり河沙中の一種であるが、綱目には記載を缺いてゐる。

瑤池沙

朱排山柑園雜識――喇嘛から嘗て瑤池水を進獻した。その水は蓮のやうに香しく、色は白くして重く、玻璃にこれを貯へて置けば數百年經つても涸れず變ぜぬ。人がこれを飮めば能くあらゆる病を療する。康熙五十三年に理藩院員外盛柱を遣はしてこれを取寄せた。その時の行程は京師から西寧口を出て西北を望んで行くこと凡そ七千里にして星宿海に達する。ここは世に所謂火敦腦兒の地である。更に西北に行くこと三千里にして崑崙山に達する。その山は形が桃のやうで、全體に雪が積り、何人もその頂上に登ることは出來ないが、その影を測つて見るに高さ三百餘丈ある。山の前方をば孔雀門と名け、後方をば馬門と名け、左をば獅門と名け、右をば象門と名ける。山の四隅に各〻一山があつて、いづれも崑崙よりは低く、孔雀門内に麻蓬達喇と名ける池がある。これは支那語の天河の意味だ。右の四箇の山の水はその天河に合流し、その河水は地下に伏流して星宿海に達し、また流れて中國に入るのである。その崑崙を去ること西北四五里にあるのが卽ち瑤池である。池の周圍は百八

十里あり、岸傍はみな雪で、水中に五色の細砂があり、それは滑膩にして食へるものだつた。瑤池の水一瓶を取り、并に山川、風土を圖して持ち歸つた、その間凡そ二年零六箇月を費したのであつた

【稀痘】沙を取つて小兒に與へて常に食はすれば永く痘が出ない

木心石

樟腦を附す

古木中に生ずるもので、雀卵のやうに圓く、中は正白色、木に著いた部分は燦として黄金のやうである。書影叢說に、孝子某なるものがあつて、その母が嘗て心痛を患ひ、日久しくして瘥えなかつたので、その孝子が每日神に禱つて治癒を求めた。するとある夜の夢に神が現はれて「爾の母の疾は必ず木心石があれば癒える」と告げた。夢が醒めてから遍く名醫に訪ねて見たが、いづれもその藥を知らなかつた。ある日山に入つて、ふと二人の匠人が木を挽くのを見てゐると、木の下で鋸の齒に何物か當たる音がする。それを見た孝子は、考へつくことがあつて急に挽くことを

（二）疎達トハ理ガアツテ全體ニ通リ到ルノ意ナリ。

止め、石の木心石なるものの話をして、鋸の下を視ると果して石があつた　それを持ち歸り、酒に磨つて母に與へて服ませると、痼疾が頓に除けたとある

心痛を治す

按ずるに、造化の用は風なければ物を生ずこと能はず、火なければ物を結することと能はぬものだ。故に萬物の動くはみな風に生じ、萬物の靜なるはみな火に凝るのであつて、火死して質の朽ちぬを觀れば、木の性は（二）疎達なもので、風を得れば以て生ずるものなることが判る　生ずれば自ら萠え芽生え、芽生えて苞を生じ、苞が拆けて花が咲き、花が咲いて實を結び、いづれも風を得て以て散ずるのだ。故に春は榮え秋落ちることが意識的に行はれるやうに見えるのである。その實と脂とは質の靜なるものであつて、均しく火に屬し、火は木の子なるがゆゑに樹は老いれば自ら焚くのであつて、火が鬱して必ず泄するのである。木の心に石のあるわけは、風が散ずる能はず火が内に鬱して泄するを得ぬところから、脂液が凝聚して生ずる至精なるものだ。久しく經てば變じて石となり、その他のものはみな朽ちるのであつて、松脂が琥珀となり、柏脂が瑪瑙となるやうなものである。所謂物には箇箇それ

自體に一の太極を有するのである。心は人身の太極であつて、中宮を主つて至靈なるものだ。至變の物を以てそれを治療すれば合同して化する。故に能くこの疾を癒すのであつて、現はれた事實を論ずれば變化の姿であるが、理論の點から見れば常に變化に關せぬ一貫したものである。

樟巖　沈氏祕檢――樟樹の内部にある石を樟巖と名ける。心痛を治し、能く五經を通ずる　煆き研つて酒で煎じて服す。

仙人骨

輿地志――雲南鎭南州の山中に樸硝のやうな碎石が出る。土人は掘り取つて粉にして賣つてゐる。傳說に據ると、仙人が曾てこの地で仙化したので、それでかく名けたのだといふ。

○南詔備考――鎭南州城の東二十里の山中は、世の傳說では仙去した仙人張明亨の遺屍をここに瘞めた處だといふ。

一切の瘡を治するに神效があり、粉を取つて敷く。

杜昌丁藏行紀程――楚雄府から七十里にして呂合に至る。ここには呂祖廟があつて、村を去る數里の山脚に仙人骨といふが出る。水晶のやうなものだ。能く瘡癤を療ずる。傳說では、それは仙人が呂祖に仙去させられたものだといふ。又、三五十里往つたところが鎭南州である

滇略――南詔の時、張、王の二人が呂合驛で呂仙人に遇ひ、王はその道を得て天上界に上昇したが、張はそれが出來なかつたので憤死した。その骨を山中に埋めたのが化して石となつた。瑩澈にして水晶のやうなもので、一切の瘡瘍に傅ければ立ろに癒える。

禹穴石

四川龍安府石泉縣石紐鄉に產する。血を濆いたやうに紅いものを佳しとする。四川通志には、石泉の禹穴下に出る石で、皮は血で染めたやう、氣が腥い。滾水を沃いで飲めば能く催生するとある。

難產を治す。

桃花鹽

柑園小識――桃花鹽は澤旺に產する。毎春桃花のやうに深紅だが、夏になると紅色が次第に減じ、秋、冬には色が白くなり、春に入ると紅くなる。胃痛の人はこの鹽を炙いて熨すれば立ろに止む。

【胃痛を治す】 鹽を以て熨すれば立ろに止む。

瘤卵石

池北偶談――高陽の民家で、十餘歲ばかりの子が忽ち臂上に宿瘤を生じ、忍び難く痛痒し、醫師はいづれも何症なるかを判斷し兼ねてゐたが、ある日突然巾が潰れて圓い卵を墜出し、墜で化して石になつた。工部劉繖が一金でそれを買ひ取つたが、膈症の治療にこれを用ゐて神の如くであつた。

痞結膈症を治す。

松化石

唐書――僕骨の東境の康干河に松を斷つて投入すると化して石になる。その色の佳きものを康干石といふ。

○錄異記――婺州永康縣の山亭中にあつた枯松を斷るときに、誤つて水中に墮すと化して石になつた。まだ化石せぬものを取つて試みに水に入れて見るとやはり直ぐに化石した。その化したものは枝、幹、及び皮は松と異はないが、ただ堅勁になつて了ふ。博物志に『松はもと石の氣であつて、石が裂けて沙を受けると松が産する。松は三千年に至つて更に化して石となる』とある。

○輿地紀――宋の建炎の頃、遂寧府の轉運使衙門の後の畑に松石といふがあつた。外觀は松樹のやうだが、中は化して石になつてゐた。又、重慶府永川縣に岩松坪といふ處があつて、そこに松の化石がある。質は石だが理は松で、或は二三尺ばかりあり、大なるものは抱ひ合せるほどもあつた。しかし望み見るほど以上の高さのものはなかつた。その邊の數山にそれがあつて、俗に雷燒松と呼んでゐる。神仙

傳に、三千年にして當に化して石となるべしとある。

◯張蓑滸塗說——松の化石には黃、紫の二色あつて、質理は甚だ細かく、皮上に水紋、或は松皮紋があり、また節暈紋のものもある。天台山に間まこれがあり、西北にも產する。これは年久しくして折れた松が澗水に入り、地氣を得て變じて石となつたものだ。且つ變化が完全でなくてなほ松の質を帶びるものがある。藥に入れるには全く化したものを用うるが宜し。これを服すれば人をして情を忘じ想を絕せしめる。

【相思症を治す】凡そ男、女の所思不遂のものは、これを服すれば絕意し、復た再び念はなくなる。

敏按ずるに、松化石なるものは有情が無情に變化したもので、陽極つて陰に反るの象である。男、女の愛慕が結想して發る病は、君、相の二火が虛磨し、妄動して眞陰を鑠耗し、魂狂し、魄越し、神その舍を守らざるに至るものであつて、この反折の使藥を和平の藥に入れるに非ざれば正し得ぬものである。それは貞凝の氣を取つて妄緣を釋くのである。瀕湖は石部の不灰木の後に松石を附錄して、松が久しく

經つて變化したもので、藥に入れては用ゐないといつたが、殆ど未だその奧妙を深悉してゐないといはねばならぬ。

雲核

羅浮志――雲核(うんかく)は羅浮に出る。やはり雲母の類であつて、黄なるものは黄雲峰に產し、白きものは白雲峰に產する。これを屑にして調へ、漿にして服し、久しくすれば能く五色の雲を呑吐する。

性は平である。服食にこれを用ゐれば、天年を延べ、疾を却(しりぞ)ける。功は雲母と同じ。

瀚海石竅沙

朱排山柑園小識――瀚海石(かんかいせき)は瀚海に產する。その地は澤旺に近き方三百里の地で、水、草のない土地である。その石は大なるは瓜ほど、拳ほどあり、小なるは芋、栗ほどあり、また珠のやう、豆のやうなものもあり、いづれも五色を具へた瑪瑙(めなう)のや

うで、竅があつて中が空だ。その竅中にある沙が薬に入れられる。石は質が堅く、その外部は碾れるが内部は碾れない。故に毎にその形のままで器とする。

主治は目を明にする。

巖香

深山にいづれもある。凡そ山巖の洞壁上にある泉から滴下して、年久しくその水の流れるところに生ずる水の結晶で、乃ち至陰の精華である。石乳の滋液に憑り、風力に乗じて結するものだ。土人は巖香と名け、俗に水碱と呼ぶ。石を鑿つて取るものだ。色は白くして窯灰のやうである。手に載せると冷が骨に入るものが眞物である。

百草鏡に云く、性寒なり。湯火傷に敷く。金瘡出血には水碱を火で煅き醋に淬して研末し、白果肉を水に浸して擣いた汁と共に和して七分を服す。白濁をも治し得る。また眼科にも使用する。

龍窩石

名勝志――廬山の溪中に產し、及び龍の居るところにある。この石は夜中に涼冷を覺えるものが眞物である。王伯厚は、深山にある龍の蟄(ちつ)した場所にいづれもこれがある。土人は龍の升り去るを俟つてその跡を尋ねてこれを獲る。五色あつて、透明なるものを煆いて用ゐる。生で用ゐては毒のあるものだ。敲(たた)き碎いて醋中に投ずると、片片が能く動いて相合するものが良し。

性は大寒なり。顔面に磨れば能く瘢痕を滅す、熱瘡の毒を解す。煆いた粉を著痱に撲てば立ろに消する

按ずるに、龍の體は純陽であつて、凡そ陽の體は陰を以て用と爲すものだ。故にその蟄する場所の石はいづれも性が冷である。夜に入つて更に涼なるは眞陰の作用である。醋中に投ずると能く相合するのは、龍は東方の神であつて木に應ずる。木は味が酸いもので、石が精氣を感ずるから、それで醋に遇へば能く合するのである。その功の能く熱を解し、瘢を滅するは、やはりその寒斂(かんれん)の性を取つて效を奏するの

である。

石髓

福建續志――石髓は泉州安溪の長潭の石罅の間に出る。接骨に神の如きものだ。內傷折骨を療ずるには、二三分を酒に研つて服す。能く斷骨を接ぐ。多く服してはならぬ。多ければ骨が太くなる。

紅毛石皮

粤に產する。紅毛國から澳門に來るものを中國で火石にする。外皮は白くして粉の如く、甚だ鬆脆だ。外國人はその皮を去り、その中の石質を火石として賣つてゐるが、皮は甚だ粗末に取扱はれ、人の持ち去るに任せてある。

金刃傷を治するに石皮を擣いた粉を用ゐる。功は千年石灰に勝るといふことだ。皮膚の裂痞を黏合する。

金精石

福建續志――春州の雙髻山等の地に産する。その石は鐵礦に似て鬆く、色は黄金のやうである。

○本草綱目金星石の集解の後に、劉河間宜明方の點眼藥中に金精石を用うとあるを引用して、時珍は、これは金星石ではあるまいかと疑つてゐるが、蓋しまだ續志を見なかつたのだ。

翳を去り、目を明にする。眼科の用に入れる。

雄膽

雄窠黄を附す。

六研齋筆記――王存思太僕は貴陽の人だつた。その話に「その地方には山が多く、雄黄を産し、大は數百觔に至るもある。その中に浮沙があつて鵝卵のやうな團になつてゐる。それを雄膽といふ。破つて見ると一盞ほどの清水があつて、それを急に

飲めば沈痾が倶に消し、壽命が二百歲まで生きる。ただ山間の土民が頑獷でそれがあつても甚しく粗末にし、散漫として了ふので飲むことが出來ないのだ　ある男はこれを飲んで、今でもなほ三十歲位の人のやうに健在だが、その男の自らいふところでは百五十餘歲なさうだ」とある

三蟲の毒を殺し、痼疾を除き、容貌の移ろいを駐め、天年を延べる。

雉窠黃　簪雲樓雜記――雉の窠の底には雉黃といふものがあつて、黃の氣が遠く射て能く毒物を辟ける。鄕人は三四月中に徧くそれを搜し取つて賣つてゐる。その黃を取る方法は、先づ窩の周圍に三回放尿し繞らしてからそこを掘るので、約二三兩收獲すれば價は地の產物に倍する。

海外三珠に轉胎法がある、五月五日の正午に金針花を取り――葉の複なるものを鵝脚花と名け、單葉を金針花と名ける――陰乾して聽用する　婦人が妊娠して滿月から四十日前に雉窠黃の明透で重量一兩のもの一塊を揀り取り、葉で三四重に包裹し、再び布で縫ひくるみ、妊婦の腹前の身衣の上に貼り、四十日にして分娩するを俟つ　男を生み、女をば生まない

一　呴伏トハ吹キ込マレテアルコトナリ。

一切の毒蛇の咬傷を解し、邪魅山精を辟ける。

按ずるに、雉の窠に黄のあるのは、やはり鶴の窠に礜があるやうなもので、陽氣を助けて能く子をして輟せぬやうにするためである。千金方にある轉女成男法は、雄黄を用ゐて胎を養ふのであつて、その陽精の全き地產に取るとしてあるところを見ると、雉は蓋し獨り解毒の功力のみを目的とするのではない。竊に謂ふに、雉の精氣が長い間に亙つて（一）呴伏されてあるので、人がそれを取つて佩びれば一切の產厄を解するのである。妊婦に尤も宜し。

石螺螄

百草鏡——廣東に產する。修治は石燕と同じ。

瞽目、眼疾を治す。

按ずるに、石螺螄は形は螺に似てゐるが體質は石であつて、やはり石蟹、石蛇の類である。故に主治もまた大體相似たものだ

猫睛石

墨莊漫錄――宣和の頃、外夷から貢進した方物に龍眼實のやうな圓い石があつた。色は綠葡萄のやうなもので、猫兒眼睛と呼ぶのであつた。能く火を息めるもので、炭を熾に燃した中へ投ずるとその火が滅えた。按ずるに、この物は寶石中の一種で猫兒眼といふものだ。現に雲南、緬甸地方の寶石採取場にある。

蠱毒を解す。

辟驚石

一名避驚風石といふ。本草補に云く、「西巴尼亞國(一)の一地方の土中に產する石で、色は黑くして嫩に光る。取つて琢き、或は大、或は小にして小兒の胸前に佩びれば、邪風に遇つて慢驚、急驚を犯したとき、この石が代つてその惡邪の氣を受け、盡く石の內部へ吸收して自然に裂破し、小兒には恙ない。必ず常に佩用すべきもので、永遠に虞がなくなる。眞に寶とすべきものである。

(一)西巴尼亞國ハ西班牙國。

急、慢の驚風、一切の天釣、尸痓を治す。

奇功石

大西洋に産する。形狀は考ふべき資料がない。本草補に云く、この石は能く婦人の産難を治するもので、凡そ産難の婦人があつたときは、芝麻油一鍾を用ゐ、この石をその油の中に入れて一夜浸して後、この油を用ゐて婦人の肚、面に擦る。それで難産の患がなくなる。或はこの石を婦人の大腿上に綁つて置けば産する。産後に隨時に除き去る。凡そ擺子――中華では瘧と名ける――が發して身熱し、或は心中脹悶し、或は胃氣疼痛し、或は痰滯、及び錯つて毒物を食つた等の患の場合には、石を酒一碗、水一碗に泡けて一夜浸し、その酒と石を手で擠し、石の氣汁を酒水中に下らしめて空心にその酒水を飲めば癒える

一血熱瘡疥には、この酒水を飲み、幷に患部に塗抹すれば癒える。眼を患つた場合には、この酒水を或は飲み、或はそれで洗ふ。いづれも妙である。

保心石

本草補――鹿の腹中に生ずる。鹿は各種の解毒の草を食ふもので、その精液が久しく積結して石となつたものだ また寶石とも名ける、二種あつて、一はこの鹿獸に生成するものをいひ、一は泰西の名醫が小西洋へ往つて珍藥を採つて製成するものであつて、服すれば毒氣をして心を攻めざらしめる、故に保心石といふのである。用法は、刀で刮つて麥ほどの大いさのもの六粒を粉にして調へて服す。多く用ゐてもやはり害がなく、更に精神を増加する。この藥を常服すれば酒、水が隨順し、人をして能く腹中に多く蛔蟲を生ぜざらしめ、體健にして神を旺ならしめる。

大熱燥渇、小便不通、泄瀉を治す いづれも水で調へて服す 胸傷で憂悶し無熱のものには、或は酒、或は水で調へて服す。熱あるものには、酒、水各半で調へて服す。病後の輭弱には、酒、水各半で調へて服す。胸肉傷の心痛、風寒氣痛、吐蛔、咯血、吐血には、いづれも水で調へて服す 毒蛇、毒蟲傷には、酒、水に拘らず服す 刀箭、瘋犬、毒物傷には、粉を瘡口に敷いて外部を布で包めば癒える。(いづれ

本草綱目拾遺草部

第三卷

錢唐　趙學敏　恕軒氏輯

本草綱目拾遺草部上目錄

草部 上

參條

（和名） おたれにんじん、てうせんにんじん。
（學名） Panax Ginseng, C. A. Mey.
（科名） うこぎ科（五加科）
木村（康）曰ク、人參ノ條參照。

從新に云く、遼參の蘆頭上に横生したのものであつて、その力が甚だ薄い。ただこれを用ゐて普通の病を調理し、津を生じ、渇を止めるだけのものだ。その性は手臂に横に行る。凡そ指臂の無力のものはこれを服すれば甚だ效がある。

○千金方に云く、凡そ煮參湯は必ず流水を用ゐて煎ずるが佳し。もし止水を用ゐれば效驗がない。

參鬚

（和名） おたれにんじん。
（學名） Panax Ginseng, C. A. Mey.
（科名） うこぎ科（五加科）
木村（康）曰ク、人參ノ條參照。細根ナ用

百草鏡――參鬚は、寧古塔から來るものは色が黄で粗壯だ。船廠で賣つてゐるものがそれに次ぎ、鳳凰城で賣つてゐるものは色が白を帶びて劣つてゐる。煎じてもやはり厚味がない。

從新に云く、參鬚もやはり遼參の蘆頭上に横生したもので甚だ細いものだ。性は參條と同じものだが、力が尤も薄い

本草逢原に云く、參鬚は價が廉いので貧乏者が往往に用ゐる。その胃虛嘔逆、欬咳失血等の症を治してやはり能く奏效するは、その性が專ら下行するものだからである。若し久痢滑精、崩中下血等の症を治するならば、每に增劇するに至る。それはその味が苦くして降、泄するものだからである

【脚痔濕爛】百草鏡に云く、芽茶、參鬚各等分を末にして摻る

【牙を固くし、腎を補ふの方】祝氏效方――生、熟石膏各五錢、甘松、山柰各三錢、細辛二錢、寒水石二錢、升麻一錢五分、青鹽、參鬚各三錢、北五味五十粒、蓽澄茄四十五粒を共に末にし、每早朝每に擦つて口を嗽ぐ。嚥下してもよし。

參葉

遼參の葉である。大抵は多く人參行商人が携帶して來る。その氣味が清香で微し甘く、津を生ずるに善く、又、耗氣せぬところから、行商人はこれを乾して携帶し、

フ。今日市場ニ鬚人參ト稱スルモノ略之ニ類ス。一般日本市場ノモノハ邦產ナレドモ支那市場ノモノハ支那產ノ他米國產品モ輸入セリトイフ。

（和名）おたねにんじん。
（學名）Panax Ginseng, C. A. Mey.
（科名）うこぎ科（五加科）

木村(康)曰ク、人參ノ條參照。朝鮮ニ於テハ採集シタルおたれにんじんノ葉ヲ浴湯料トナストイフ。

それを得意への土産にするが、茶葉に代へて湯に入れて用ゐるので、藥用に入れることを目的とはしない 一般にもまたこれを用ゐるものはないが、近頃は遼參が日に騰貴するところから、醫師はこれを參の代用にし、凡そ人參を必要とする無力の症に用ゐ、葉を買つて代用する。それがために今では大いに一般的になつて來て、蘇州の人參市場では參葉の價格が三五割高くなつた。色が黄瘁せず、生のやうに綠翠で、手で挼むと清甜なる香氣のあるものが眞物である

氣は清香、味は苦くして微し甘し。その性は中を補し長を帶し、大いに能く胃津を生じ、暑氣を祛り、虚火を降し、四肢、頭目を利す。浸した汁で髮を沐すれば能く光黑にして落ちざらしめる 酔後にこれを食すれば解醒すること第一である。

按ずるに、人參は三椏、五葉であつて、三才、五行の精氣を稟けて形を草質に寄せ、百草の王たるものである。その根が乾けば色が黄になるは坤土の正色を得たもの、その子の秋則に血のやうに紅くなるは土の餘が火を生ずるものだ 故に能く元氣を峻補し、人の魂魄を返すのであつて、その功は就中能く脾を健にする 蓋し脾は中宮を主り、萬物の母である 人は土なければ生きぬもので、參は土德の精を得て

以て人を生かすこと芪、朮などの膩滞なると比較になるものでなく、それが重視される所以である。然しあらゆる草の本性は、概して補するものは多く根に在るので、葉では枝節の餘氣だから補するものと明言するほどには行かない。參葉は參の餘氣を稟けてはゐるものの、結局その力は能く皮毛、四肢に行るに止まり、性が表に帯するから、散の點には參の力と大いに距離がある。ただ津を生じ、燥を潤し、肺を益し、肝を和するの用に施すべきもので、今一概にこれは元氣を培補し、虧を起し、危を救ふものとして用ゐるは甚しき無理解といはねばならぬ

肺を清し、津を生じ、渇を止める（藥性考）

人參子

（和名）おたねにんじん。
（學名）Panax Ginseng. C. A. Mey.
（科名）うこぎ科
（五加科、木村、康）日ク、おたねにんじんノ果實ナリ。

人參子は腰子式のやうなもので、生では青く、熟すれば紅い。近日人參行商人が遼東から携帯し來るものは、みな青綠色の小黄豆ほどの大いさで、參葉上に多くあるが、寧古塔一帯の地は七八月には霜が甚しくして山に入ることが困難なところから、その子の熟するを待つわけに行かず、生で取つて歸るのだ。そのために行商人

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

のものは大抵綠色のものが多いのである。痘を發し、漿を行らすもので、凡そ痘が起發し能はぬものに標を分ち漿を行らすには、藥の中に參子を加へる。後日癢塌の患がない

珠參

金沙江志――東川に產するものは味が參に似てやや苦い。

○本草從新に云く、閩中に產する。大きくして明透なるものを佳しとする。多く皮を去つて滾水で泡過し、然る後に用うべきものである。それはその苦劣の味はみな外の部分に在つて、中心に近い部分は苦が減じてやや甘いものだからである。

○書影叢說――雲南姚安府にも人參を產する。その形は匾くして圓い。これを珠兒參といふ。

○藥性考――珠兒參は根が薺苨と同じである。苦、寒にして微し甘し味は厚く體は重し。

○救生苦海に云く、肺を補し、火を降し、氣を下す。肺熱に火あるものに宜し。

臟寒のものがこれを服すれば腹痛をなし、鬱火のものが服すれば火が透發せずして反つて寒熱を生ずる。血症にはこれを三七の代用にする。

○藥性考――性は辛温であり、味は甘し。能く裏に托するもので、外症には用ゐられない

按ずるに、珠參は本來參の種類ではないので、從前には未だこのものがあることを聞かなかつた。近年始めて行はれるやうになつたものである。然し南方の地でこれを用ゐることは甚だ稀だ　或は、これは粤西から來たもので、三七の子だともいひ、又、草の根だともいふ　大體參なる名稱のあるものはその性が必ず補するものだけれども、醫家はこれを用ゐるにその苦、寒なる點に困つてゐる。しかし友人朱秋亭が山左へ往つてゐた時、珠參を商ふ者から聞いたところでは、その製法がある　それを服すれば遼參に代へ得るので、五錢に付いて五十金づつを要求されたが、秋亭は千金を罄してその方を買つて來た、その方は祕して輕々しく人に授けなかつたが、予はその弟の退谷に懇望して始めてその術の傳授を受けてゐるから、一般貧者を濟ふ意味で此に記錄する　珠參を切片して五錢毎に附子三分を研末して拌勻し、雞蛋

一個を黄、白を去つた殼にその參片五錢を納れて口を封じ、雞に抱かせて他の卵から雛の生れたときそれを取出し、その卵に圓を一箇書いて標記とし、更に七回同樣に繰返し、卵に標記の圓が七箇になればその藥が完成するのである。危篤の重患、竝に産蓐無力で人參を用うる必要の場合に臨み、五錢を煎じ服すればその力は人參に勝り、竝に能く起死回生の力は臟狐心に匹敵し、功力が尤も捷である。服用が少くてはならぬので、大抵一人に對し五錢を標準とする。每回多きは數兩を作つて置いて救人に資すべきものだ。

【濟陰保元湯】醫鈴――この方は、脾を理し、邪を化し、氣を生じ、氣を引き、血を生し、調經の聖藥である。滇珠參三錢に米仁四錢を拌ぜ、水で蒸し透して片に咀き、再び薑に米仁を加へた汁を入れて蒸して曬乾して用ゐ、懷生地一兩に砂仁、酒、薑三味を拌ぜて蒸して九回曬して取收め、再び瓦で焙じて炭にし、當歸四錢、白芍、三錢を酒で炒り、川芎二錢を淨油を去つて米泔水に浸し洗つて取收め、乾して再び酒に入れて浸し、丹參四錢を酒で洗ひ透し、充蔚子四錢を酒で蒸し透し、香附三錢を薑、土、醋、鹽、童尿、甘草水、乳汁で逐次に製過して用ゐ。雲白朮五錢を陳

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。
木村（康）曰ク、おたねにんじんナランカ。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

土で炒り、女貞子三錢を白芥、車前水で浸し乾して用ゐ、氣血熱には丹皮、生地を加へ、氣血寒には肉桂數分を加へ、眞確ならざる寒熱にして先後に至るものはそれぞれの本方に照して用ゐる。經閉無分の婦人には本方に牛膝を加へる。

太子參

從新に云く、甚だ細少ではあるけれども却つて緊つてゐて堅く實し、力は大參に下らない

百草鏡に云く、太子參といふは遼參の小さいもののことで別の種類ではない。これは蘇州の人參問屋で人參の包の中から揀り出した小さいものをかく名けて賣出すのだ。

味甘く苦し、功は遼參に同じ。

羅浮參

羅浮山志：羅浮に產する人參は甚しく本草の人參と類似しない。狀態は山茅の

（和名） せいやうにんじん。
（學名） Panax quinquefolia, L.
（科名） うこぎ科
木村（康）曰ク、L. Diels ハ洋參ニ Satyrium setchuenicum, Krzl. ヲ充ツ。

やうで、葉は細く、莖は圓く、紫花があり、三葉一花のものを仙茅といひ、一葉一花のものを人參といふ。根は『人』の字のやう、色は珂玉のやうだ。煮汁を食すれば味は參と差別はないが、ただ微に膠漿があるだけである。

味甘くして苦を帶び、津を生じ、胃を養ひ、虛羸を補し、肺を潤ほす。

西洋參

藥性考――洋藥は遼參に似た白皮泡丁のもので、味は人參に類するものだが、ただ性が寒だから糯米飯上で蒸して用ゐるが宜し。甘、苦であつて陰を補し、熱を退ける。薑製すれば元を益し、正氣を扶ける。

從新に云く、大西洋の佛蘭西に產する。形は遼東の糙米參に似たもので、煎じても香しくなく、その氣が甚だ薄い。眞半分に擗開したものは片參と名けて佳くない。藜蘆と反す。藥に入れるには皮の細潔なるものを選び、切り開いて見て中が黑くなく、緊實してゐて太いものが良し。近頃ではその性の寒なるを嫌つて、飯鍋上で數十回蒸して用ゐるものもある。或は桂圓肉を拌ぜて蒸して用ゐるものもある。

（和名）　おたねにんじん。
（學名）　Panax Ginseng, C. A. Mey.
（科名）　うこぎ科（五加科）
木村（康）曰ク、日本ヨリ出ダス人參ヲ特ニ支那市場ニテカクイフ。

鐵刀と火で炒ることを忌む。
苦、寒にして微し甘し　味厚く、氣薄く、肺を補し、火を降し、津液を生じ、煩倦を除く。虚して火あるものに相宜し

【腸紅】類聚要方――西洋參を桂圓で蒸して服するが神效がある

東洋參

汪玉于の話に「東洋參は日本、東倭の地に產する　その參は外皮は糙く、中が油熟してゐて、蒸せばやはり清香があり、遼參と味は同じだが微に羊羶の氣があり、口に入れて後も微し辣いだけの相異がある　然し性は溫、平であつて、西洋佛蘭參の性の寒、平なるとまた別である　この參は近頃頗る行はれて、無力の患者にこれを遼參の代用にするが、やはり效がある　毎枝いづれも重量一錢ばかりだが、やはり二三錢のものもあり、總て枝根に「日本」と二字の名の印のあるものが價八換、無字のものは價五換となつてゐる　蓋し印字のあるものは彼の地の官製の參で優良地の產であり、印字のないものは彼の地の私製參である。やはり全體の皮が糙く、內

肉の白者なるものがあつて、それは佳くない。桂圓肉を拌ぜて蒸し曬して用ゐる』といつてある。

○癸丑の年の三月、予は李焚堂先生の許で東洋參に二種あることを實見した。一種は大なるもので、ほぼ拇指ほどあり、さながら西洋參に似て、最も堅く實して肉が多く、一種は小さいもので毎枝二三分に過ぎず、また一分ばかりのものもあり、肉は薄く、甚しく堅く實せるものでなかつた。その時の話では、二種はいづれも日本の商人が携帶して來たもので、新しい時は倶に色白く、皮はいづれも縐紋があり、大なるものは切片して口に含み、一夜過すとみな化けて滓がなくなり、小なるものは口中に含んで三夜經てもみな化けない。大なるものは湯に煎ずると色が淡くして味が少く、小なるものが反つて濃厚だ。二種倶に日本、倭地に產するのであつて、小なるものが何故に色、味が特に厚いのであらうか、やはりそれぞれ生產地の不同に因るものではないかと思ふといふことであつた。又、一種は、やはり東洋の奉天、旅順等に近い地方に產する。皮上に紅紋のあるもので、彼の倭國中でもやはり珍重し、その力は右のものに更に十倍するといつてゐるさうである。貿易商は多く高價

に輸入し、それが中國各地に販賣されてゐるが、現に蘇州には東洋參商店でこの參だけを専門に賣つてゐる、蓋し先年壬子の冬に、江浙地方に疫痘が流行して小兒の殆ど全部が感染し、死者千百を以て計へるほどであつたが、東洋參の能く漿を助け毒を解することを教ふるものがあつて、それを服して果して效驗があつたところから、遂に大いに當時に行はれたことに因るのである。藥の中に入れるには、飯鍋上で蒸透して曬乾して用ゐる。磁餅に收めて保存すれば蛀壞を免れる。

○又一種の東洋參は高麗、新羅一帶の山島と關東接壤の地方とに產する。その參は遼參と眞に相似たもので、氣もやはり同じであるが、但だ微し薄いだけであつて、皮は黃に紋があつて粗く、中の肉は油紫である。居舜夫が携へて來たのを予が曾て見たことがあるが、その話では、性は溫、平、價格は十換、産婦にこれを服するが最も效があり、その力は遼の產に讓らないといふことであつた。

○五雜俎――人參は遼東に產し、上黨のものが最も佳くして頭面、手足みな具はり、清河のものがそれに次ぎ、高麗、新羅のものが又それに次ぐ。今は生のものは見られない。中國に入るものはみな繩で縛つて蒸して夾んであるものだ。故に上に

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

夾つた痕や麻絲の痕がある。新羅參は大きいけれども、いづれも數片を合せて作つてあるので、功力は反つて小さいものに及ばない。參を擇ぶには、透明にして肉の如くなるもの、及び蘆に近く横紋のあるものを取れば僞物を與へられる患はない。

昭參

金沙江志――卽ち人參三七であつて、昭通府に產する。肉は厚くして明に潤ひ、頗る粤の產に勝る。形は人參のやうで中が油熟してゐる。一種は、王子元が滇に在官中に曾て外舅の稼村先生に贈つたものを予は親しく實見した。狀態は參に比較して紅く潤ひ、大小も等しくなく、味は微し苦く甜く、皮上に間ゝ竹節紋を帶びたものがあつた。劉仲旭小府は「昭通に產する一種は蘇家三七と名け、さながら人參のやうで、明に潤ひ紅く熟したものだ。壯少のものが服すれば脹するが、ただ六十以上の人が服すれば腹脹せぬ。その功は大いに血を補するが、やはり血をば行らさぬ。彼の地では一般に虛弱の患者がこれで雞を蒸して服する　大母雞を蘇三七の煎湯で少時煮て、また三七の渣を搗き爛して雞の腹に入れ、線で適當に縫ひ合せ、湯を隔

てて蒸して雞が爛れたとき、三七を去つて雞を食ふのである　これで勞弱、諸虛、百損の病を醫する」といつた。この話に據ると、これは昭參のことである。

○宦遊筆記――三七は廣西の南丹諸州の番峒中に生ずる　莖毎に上に七葉を生じ、下に三根を生ずるところから三七と名けたのだ　土人が山に入り根を採つて暴乾するので、色は微黃、形は白芨に似て、長くして節のあるものだ。その味は微し甘くして苦く、頗る人參に類し、人參は補氣第一、三七は補血第一で、味が同じくして功もやはり等しいところから、世間では並稱して人參三七といふ　藥品中での最も珍貴なものとなつてゐる。これは常中丞筆記にいつてある人參三七だ　形が圓くして味の人參のやうに甘いものが眞物であつて、その長形のものが乃ち昭參である。水三七の屬はなほ明確を缺く。

○識藥辨微に云く、人參三七は外皮が青黃で、内肉が青黑色だ　銅色鐵骨と名ける。この種は堅く重く、味は甘中に苦を帶びてゐる。右江土司に產するものを最も上品とし、大なるは拳ほどのものである　打傷を治して起死回生の功があり、價は黃金と等しい。

○沈學士云く、竹節三七、卽ち昭參であつて、解酲第一である。酒に中つたものがあつた場合、少量を嚼めば立ろに解す。又、近頃は人參三七中に佛手山漆と名けるものがある。形は長く、さながら佛手上に指のあるやうな形のもので、廣西に產する。藥種商が行商して持つて來るが、その價は圓山漆の上に在る。――これは荸薺山漆と名けるもので、卽ち所謂銅皮鐵骨參の三七がこのものである――壬戌の年に、ある商人が打箭爐から携帶して來た藏三七に、佛手參と名けるものがあつた。さながら乾麥冬のやうで堅く實し、形は小さくして太くなく、三本指の形をなし、玲瓏として手のやうなところから名けたものだ。王聖兪が嘗て嘗め試みたところでは、その味淡くして微し辛く、能く肺血勞損を治すといふ。これもやはり白芨、三七の屬である。

○浙產――臺、溫の山中に一種の竹節三七を產する。色は白く、僵蠶のやうで每條に臼のやうな凹痕がある。この種は血症の良藥なさうである。庚申の年に予は晉齋の許で瓊州の山漆を見たが、芋のやうに圓く、皮が光つて色は黃白、肉は金のやうに黃なものだつた。瓊州地方ではこれを珍重し、野山漆と名ける。右江から出る

ものに勝るさうである。又、田州土司に佛手のやうな形で佛手三七と名ける一種を産する。この種は野生に係るもので、藥に入れて更に勝るといふことだ。

○百草鏡に云く、人參三七は味微し甘く、頗る人參に似たもので、口に入れると津を生ずる。切り開くと内部は瀝青色で、外皮は細くして綠である。一種の廣西の山峒から來るものは、形が白芨に似て長いもので、老乾地黄のやうで節がある。味は人參のやうに甘い。やはり人參三七と名け、また竹節三七と名ける。この外にまた旱三七に、蘿蔔三七と名ける色白く、味の苦いものがあり、小三七といふ色の黑いものがあつて、湖南寶慶府に産し、また紅三七とも名ける。羊腸三七といふもあるが、これは水三七の類で、形が羊腸のやうに細く曲つてゐる。又、雲南昭通に産する一種のものは、能く人參と見紛ひ、色、味に差異がなく、且つ油熟して明透だが、ただ蘆が少い。然し囘味は甚だ甜い。金御乘は『近頃の商品には、三七の外に水三七があり、白芷三七があり、竹節三七があるが、その形狀、功效に就てはいづれ正確な考究の結果を示されてゐない』といつてゐる。

味甘く苦く、人參と同じ。瘀損を去り、吐衄を止め、補して峻ならず、末を諸血

中に糝れば血が化して水となるものが佳し。大いに能く瘀を消し、跌撲の損傷、積血の行らぬものを治す。酒で煎じて服すれば神の如き效がある。

按ずるに、人參三七は右江土司の邊境に產し、形は荸薺のやうで尖、圓等からず、色は靑黃で皮があり、味は甘く苦く、甚だ人參に類するところからかく名けたものだ。彼の地の土人から中國へ移入されるものは、顆の大小に因つて價格を定め、每顆重量一兩のものが最も高價に賣られ、百年の物の價格は遼參と同等だ。しかしその他の每顆を分や兩で計るものの價格は一二換に過ぎないといふことだ。昭參は皮がなく、形は手の指のやうで甚だ圓くなく、小なるものには間〻短扁形のものがあり、また頗る白芨の狀態に類してゐる。金沙江志の所載に、卽ち人參三七であるとしたのは恐らく正確でない。故に劉氏の說を存して附錄し、參考に備へる。

【吐血を治す】種福堂方――雞蛋一個を打開して人參三七末一錢、藕汁一小杯、陳酒半小杯を和し、隔湯で燉熟して食ふ。二三箇に過ぎずして自ら癒える。

【七寶散】仇氏傳方――刀傷の口の收まらぬには、好龍骨、象皮、血竭、人參三七、乳香、沒藥、降香末等分を末にして溫酒で服す。或は上に糝る

陳氏回生集に記載してある軍門止血方——人參三七、白蠟、乳香、降香、血竭、五棓、牡蠣各等分を火を經ずして末にして敷く。

菊花參

雲南東川府巧家汛江（かうかじんかう）の邊に產する、葉は菊花に似たものだ。

功用は人參と同じく、力がやや下位にある。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

木村（康）日ク、滿洲醫科大學所藏和漢藥標本目錄（昭六）ニ（八五頁）根ハ最大部ニテ二|三ミメ長サ三セメ内外、黄白色ニシテ分岐セズ、斷面ハ肉質中空ニシテ直徑一ミメ内外ノ黄色ノ髓ヲ有ス。根頂ヨリ直チニ平行脈ヲ有スル笹樣ノ葉ヲ簇生ス、葉ハ長サ一|一・五セメ、幅二ミメ内外ニシテ、邊緣部ハ白色ヲ呈シ、他ハ綠色、葉ノ簇生セル狀ハ稍菊花ニ類スト。

紅毛參

百草鏡——漳（しやう）、泉（せん）の舶商が紅毛の地から齎して來るもので、絕（はなは）だ參には類似せぬ。形は長くして粗く、長いものは三四尺、色は紫黑、粗（あら）さは拇指ほどあり、折つて見ると中に白點痕があり、花紋が起つてゐて建參と似てゐる。瀉痢を止めるに神の如くである。

—紅毛參—
（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

煤參

—煤參—
（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

陝西の西安等の地方に產する。形は參のやうで、皮、心倶に青黑だから名けたものだ。施柳南太守は『この參は陝西の華山に產する。これを食へば多くは人をして吐せしめる。その性はやはり劣なるものだ』といつた。

味微し苦く甘く、人參の功と同じくして力が薄いだけだ。

建參

法落梅を附す。

藥性考――福參は閩、浙に產する。頗る人參に似たものだが、性、味は辛、熱であつて、虛寒の病に適する。歌に云く『又福參あり、辛苦甘齊。性溫にして氣を益す、虛冷の人宜し』【註】――福參は多食すれば喉痛する。故に性の熱なることが判る。

乙未の年、予は剡川に寓居してゐた時――剡川は故の鄞の管轄に屬する――葉肆に建參があると聞いて、往つてそれを買求めたが、さながら臺參のやうで、中が油熟した一種の大なるものであつた。ただ純透してはゐなかつたが、やはり蘆があ

つて竹節紋がなく、味はやはり苦く甘く、竹刀で剖いて見ると心が空であつて、遼參のやうに堅く實してゐなかつただけであつた。劉贊之が閩から回つて言ふには、閩中では近頃大いに行はれてゐるもので、やはり清補するものだ。兒が風火牙疼を患つたとき、湯に煎じて口漱ぐと立ろに癒えた。これで見ると性はまた寒、散を帶びるもので、或はその性は熱だともいふが、やはり明確ではないとのことだつた。

○金御乘云く、建人參は性熱であつて、ただ産婦にだけは宜くない。遼參と形色、氣味は眞に似てゐるが、但し遼參は口に入れると回味が津を生ずるが、この物は回味がやや濇る。故に功用がやはり殊ふのだ。河南に産する光山參、嵩山參はさながら遼の産と區別はないが、ただ嚼んで見ると渣があつて糯でなく、味もやはり淡い。

法落梅　金沙江志――雲南東川府法戛地に産する。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

○己酉の年、友人王鼎條が心腹痛を患つたとき、ある商人が滇からこの物を携帶して來て、その名を法落梅と呼び、その根を用ゐたのであつたが、さながら上黨參のやうなもので、色はやはり黄白、味は甘く苦く、それを服して疾が癒えた。その話に據ると、彼の地では一般にみな法落梅と名けてゐるさうだが、諸書に何ゆゑに

(和名) 未詳。
(學名) 未詳。
(科名) 未詳。
木村(康)曰ク、Aug. Henry ハ土人參ニきく科ノ Cirsium pratense, DC. ヲ充ツ。

梅の字を書いたものか判らない。蔡雲白は『建參を閩地方では法落梅と呼ぶ』といつた。

心痛を治するに神の如くである。

土人參

各地いづれも產するが、錢塘の西湖の南山に就中多く、春二三月に蒿、艾のやうな苗を發し、葉は細く小さく、本は長さ二三寸、石綠色を作し、日光に映じて光がある。その地の者は夏期を俟つてその根を採つて藥に入れ、俗に粉沙參と名ける。紅黨といふは卽ちこの參を皮を去つて淨煮し、極熟し陰乾して製するもので、味が淡くて役に立たぬ。準繩の劫瘴消毒散にこれを用ゐ、百丈光と呼んでである。

甘し、微寒である。蒸して極透すれば寒が去る。氣は香しく、味は淡く、性は善く下降し、能く肺の經を伸べ、節を治して淸肅ならしめ、下行して氣を補し、津を生じ、咳嗽喘逆で痰湧き火升るもの、久瘧、淋瀝、難產、經閉、瀉痢の肺熱に由るもの、反胃、噎膈の燥濇に由るものを治す。凡そ升あつて降なきの症には每に奇效

を現はす。その根が一直線に下行して土に入ること最も深いものだからである
脾虚、下陷、滑精、夢遺には倶に用ゐることを禁ずる。それはその物が下行して
竅を滑するからであつて、妊婦も忌む。
【白帶の初起】百草鏡——土人參を切片して三兩を陳紹酒を用ゐて飯上で蒸熟
し、三回に分服する。服し盡せば癒える
王安采藥方に云く、土人參は陰虚を補す。茯苓を對配して熬つた膏は楊梅結毒を
治す　酒で煎じて服す。

上黨參

防黨を附す

本經逢原に云く、山西の太行山に產するものを上黨人參と名ける　甘、溫、峻補
の功はないけれども、郤て甘、平、淸肺の力があつて、沙參の性の寒にして專ら肺
氣を泄するとは似ないものだ。
百草鏡に云く、黨參、一名黃參は黃に潤ふたものが良し。山西の潞安、太原等の

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。
木村(康)曰ク、黨參ニ Notes on economic botany of China ニハききやう科ノ Codonopsis Tangshen, Oliv. ヲ、Bretschneider ハ Campanumaea pilosula, Franch. ヲ充ツ。

地に産するものに白色のものがあるが、總て淨く軟に壯實にして味の甜きものを佳しとする。嫩くして小枝のものをば上黨參と名け、老いて太きものをば防黨參と名ける。

味甘し、性は平である。肺虛を治し、能く肺氣を益す。

防風黨參 從新に云く、古本草には『參は上黨のものを用ゐるが佳し』とあるが、今では眞の黨參は久しく已に得難くなつてゐるので、藥種商の所持する黨參は種類は甚だ多いが、いづれも用ゐるに堪へない。ただ防黨だけは性味が和平であつて重要視するに足る。根に獅子盤頭のあるものが眞物で、硬い紋のものは僞物である。白黨といふは、卽ちこの參を煮て曬して製したもので、原汁が已に出て了つてあるから用ゐるに堪へない。

翁有良辨誤に云く、黨參の功用は人參に代用し得るものだ。皮の色が黃で橫紋があり、防風に類した點があるところから防黨と名けるのだ。江南、徽州等の地方では獅頭參と呼んでゐる。それは蘆頭が大きくして圓く凸つてゐるがためである。古名の上黨人參は山西の太行山、潞安州等の地方に產したものを勝れたものとした。

(和名) 未詳。
(學名) 未詳。
(科名) 未詳。

陝西のものがそれに次ぎ、味は甚だ甜美な點が勝り、棗肉のやうである。近頃ある川黨なるものは、蓋し陝西毗連の移種栽植品で、皮が白く、味が淡く、桔梗に類して獅頭がなく、山西のものに比較して逈に別である。藥に入れてもやはり甚だ劣つて用ゐられない

味甘し、平である。中を補し、氣を益し、脾、胃を和し、煩惱を除き、渴を解す。中氣微虛にこれを用ゐて調補するが甚だ平妥なるものだ。

南沙參

藥性考――南沙參は、形は粗ぼ黨參に似てゐるが硬く、味は苦く、性は涼であつて、胃を淸し、火を瀉し、毒を解し、嗽を止め、肺を寧かにする。

○從新に云く、南沙參は、色はやや黃、形はやや瘦せ、小さくして短い　近頃ある味に辣を帶びた一種のものは用ゐられない

○張璐本經逢原に云く、沙參には南、北の二種あつて、北のものは質が堅くして性が寒であり、南のものは體が虛して力が微である。

(和名) 未詳。
(學名) Adenophora sp.
(科名) ききやう科(桔梗科)
木村(康)曰ク、つりがねにんじんノ類ナレドモ原植物ヲ決定スルニ至ラズ。

功は北沙參と同じだが力がやや遜る

按ずるに、參の類は一定したものでなく、參なる名稱だけを竊むだものもあつて、苦參、沙參の如きがそれである。參の形を竊むだものもあつて、薺苨、三七の如きがそれである。凡そ參なるものはいづれも地運に隨つて升降するもので、故に各地いづれも參を產するが、性はやはり各〻異なり、功用も總べて遼參には及ばないのである。此に藥に入れ得るものにして綱目に記載されなかつたものを擇んで附識し、大方の考究に資する。

○張覲齋云く、珠兒參なるものは、その形は獨蒜に似てゐる。皮を去つて煮熟すると色が紅熟人參のやうになり、圓く大きくして珠のやうなところからかく名けたのものだ。その味は苦くして微に辛を帶びてゐる。何物の根子で製したものなるや判然せぬ。價は每觔五錢。牙痛を治するに效驗がある。概して苦なるものは性寒であつて、辛なるものは必ず散ずる。これは火鬱發散の意味であつて、必ずしも全く補の功はない。紅黨參といふものは卽ち紅蘿蔔草で造つたものだ。白黨參は判らない。これはいづれも藥の本場蘇州の地で物好きの者が製出したもので、それを物好

きな醫師が用ゐるのである。方格だけで走ると目ざす郷里の所在が判らなくなるやうなものだ。太子參と稱するものは參中の枝の完全に著いて小さいもののことで、人參商人が巧に命名しただけのものだ。洋參は淸氣は參と同じだが、味が苦い。必ず寒である。陰山に產したものではないかと思はれる。補の功力は人參には及ばないけれども、珠兒、紅、白黨等とは遙に比較にならぬ。土人參は俗に觀音山貨と名ける。形は人參と同樣なもので、やはり糙、熟の區別があり、出處も一でないが、中に白絲心があり、味の淡いものがあつて、台、溫、處州、及び新昌嵊縣地方でこの參を賣つてゐるのを親しく見た。價は毎兩に對し一兩ばかりであつた。その性も明でなく、また用ゐたこともない。南沙參では誤用するものが甚だ多いが、南沙參の浙地方に產するものは、新鮮なときは蘿蔔のやうなものだ。土人は皮を去つて煮熟し、山藥を熟するやうにして曬乾するのだが、天花粉のやうで粉性がない。もとは粉沙參と名けたものだ。功は專ら毒を散じ、腫を消し、膿を排する。これは南沙參ではないのである。南沙參そのものは、形は桔梗のやうで中が空で鬆く、味は淡くして微し甘く、桔梗は辛を帶びてゐるが南沙參は辛くないものだ。亳門に產す

るものが最も佳し。俗に雄桔梗と名ける。藥肆では桔梗の包の中からそれを擇り出し、水で潤して扁たく打ち、切片して銀柴胡片に雜ぜ擬へて取引する。これは肺に入つて嗽を理する功は北沙參のやうだが、兼ねて氣を理するものだ。蓋し中が空なる關係である。台州にも桔梗を產するが、條幹が硬を帶び、やはり南沙參のやうな雄桔梗がある。但し色が毫の產の白いもののやうなわけに行かない。蓋し參の類はもと一定せず、近頃では價格が日に騰貴するので各種の作品が雜出し、世間でもまた日に日に奇を窮巖荒壑中に搜し、似寄つた草根を覓めてそれを代用し混用してゐるのであるが、もし誤用したならばその禍たるや淺からぬものである。

王繹堂云く、當今盛に行はれてゐる一種の福建の長樂參、廣西の南陔參の二物は、臺參の油熟なるにさながら似たもので、區別がつかず、味もやはり苦中に甜を帶び、蒸湯もやはり濃厚だが、しかしいづれも性は熱であつて、人參のやうに平和にして滋益するもののやうなわけに行かない。臺參中に就いて見ても、近頃は一般に白糖、及び滷水を入れて透製し、その重量を加へるやうな方法を取るものが頗るあつて、參八分に對し、この方法で二分を增加して一錢として暴利を貪るものがあ

（和名）未詳。
（學名）Atractylis sp.?
（科名）きく科（菊科）?
木村（康）曰ク、生藥ハ恐ラクおけらノ類ノ根莖ヲ用フルモノナラン、おけらノ根莖トハソノ形態ヲ異ニスレドモ組織及ビ氣味ニ於テ相通ズル所アリ。

る。藥店中にこの參を持つ店では、毎日必ず蒸焙してゐる　否ざれば潮潤して賣り惜くなるからである。人參を購買するには十分なる注意を缺いてはならない。

於朮

即ち野朮にして於潛に產したものである。縣治の後の鶴山に產したものが第一とされてゐるが、今は得難いので、取引價格は八換となつてゐる。その形は鶴頸、鶴頭、羽翼、足の完全に具つたものがあり、皮は細くして黄を帶び、切開すると硃砂點がある。それに次ぐものは北鄉に產し、皮の色は黑を帶びて黄でない。

茅翼云く、徽州に產するものはみな種朮であつて、俗に糞朮と稱する。乃ち糞肥の力で澆灌して大きくするもので、肥えてはゐるが鶴頸がない。野生のものは天生朮と名ける。形は小さくして鶴頸が甚だ長く、內に硃砂點がある。朮は上に鬚あるものが尤も佳く。それは土氣を得てゐることが厚いからである。於朮はやはり野生で、於潛に產し、縣治の龍脈土上に產したものは、その內の點が眞に硃砂、猩紅に似て血を灑いだやう、鶴頸肉蘆があり、乾すと淸香がある。他の地方に產したもの

は、内に或は黚がなくて純白であり、或は黄黚があり、總て龍脈上の產の上品なるに及ばない。冬期に採收して形、味の完全なものを取る。一種の江西朮はその形が甚だ小さく、野朮と似たもので、鶴頸はあるけれども甚だ短く、その體は堅く實し、その味は苦劣であつて用ゐられない。

○萬曆杭州府志——白朮は於潛に產したものを佳しとし、於朮と稱する。淸異錄——潛山に產した善き朮は、その醜怪に盤結して獸の形のあるものを、その姿態に因んで獅子朮といふ。

○西吳里語——孝豐天目山に仙丈峯といふがあり、吳朮を產する。雞腿朮と名け、藥に入れて最も佳し。

○百草鏡に曰く、白朮は一莖直上して高さ一尺に過ぎず、その葉は長く尖つて傍に針刺紋があり、花は小薊のやうだ。冬採つたものを冬朮と名ける。汁が本根に歸してゐるので、滋潤して枯燥せず、却つて油し易く、止瀉の效能がない。春採つたもの、夏採つたものは、久しく貯藏しても容易に油せず、却つて枯燥して潤はず、肉もやはり飽滿せぬ。凡そ朮を收貯するには、必ず陰乾する。曬してはならない。曬

せば爛れるものだ。野朮は形が小さく、蘆梗が細く硬く、皮が細いものだ。もし蘆が軟くして粗いものならばそれは種朮である。又、象朮といつて臺朮中から揀り出したものがある。野朮のやうなものだが、ただ切開すると暈紋があるものだ。臺朮は種栽するものではあるが、糞を用ゐないところから肥大でなく、服しても脹しない。もし野朮が得難かつたならばこれを求める方が穩である。安徽の宣城、歙縣にも狗頭朮と名ける野生朮があつて、やはり佳し。又、一種のものに、野朮を取つて肥料を用ゐて栽培するものもあつて、形は大きいが皮は卻つて細く緊つてゐる。樟村に産する。徽省の種朮に比較してやや好し。今は一般に野朮を論じて、黑土のものが眞なるものだといふが、實は土色は各處不同なものだから一を執して論ずるわけに行かない。又、小なるものが眞なるものだともいふが、老生産家の商品にして年久しく經つたものにやはり大なるものもある。又、硃砂斑のあるものが眞なるものだともいふが、實は於朮にもやはり硃砂斑のないものがある。その地の人のいふところに據れば、縣後の山脈、及び黃塘から遼東橋一帶の西の流域四十里の地に産した朮ならば硃砂點があるのだが、他の地方のものではそれがない。但し野朮は口に入

れば甜味が重いけれども、氣は極めて淸香で、自ら同じくないといふ。總じて白きものを佳とし、潤へるを以て妙とする。

○藥天士本草に云く、浸し刮つて飯鍋上で蒸し曬して棗のやうに黑くし、黃土で炒る。中宮和氣、補脾の藥である。

○本經逢原に云く、雲朮は肥大にして氣が壅し、臺朮は條が細くして力が薄く、寗國の狗頭朮は色が赤くしてやや太い。しかしいづれも栽灌して作つたものだから、その氣が濁であつて、於潛の野生のものの氣が淸にして壅滯の患なきには及ばない。風痺、痰濕、利水、破血の藥に入れるにはいづれも生で用ゐるのだが、しかし於潛の產以外のものは生で用ゐられない。

○張覲齋云く、今ある一種の野朮は深山の處には必ずある。形は於朮のやうで、その苗を切開すると硃砂斑があり、香しくして甜くないが、子細にその味を考へ、その親しく見ると、それは自然生の蒼朮であつて、久しく人が採らないところから大きくなつて宛も於朮のやうになつたものだ。大凡朮は火で焙じ乾したものは味が必ず苦く、生で曬したものは味が必ず甜いのである。臺朮その他各地の種朮はみな於朮

を移種して變じたものなので、功は於朮に及ばないけれども、服してはやはり效驗がある。今は於朮は絶えて少く、藥種商のものはみな幽邃な地に産した野朮を以て於朮としてあるので、功はやはり同じやうなものである。

○辛亥の年の五月、靑田縣から來た行商人が天生朮を携帶して來た。大小殆ど一定して、重量約一兩ばかりのもので、いづれも生のままでまだ日曬や焙乾を經ず、乾せば三錢ばかりになるものだつた。その朮は形はさながら仙鶴の如く、翅、足みな具はつて、やはり長頸があり、いづれもその頸は左顧であり、一一相似たもので、磊塊の形をしたものはなかつた。詢ねて見ると、この朮は土に生じたものではなく、この朮の生じたところは靑田邊境のある山で、その山に石壁があり、その壁上に毎年この朮が生えるのだが、二三十觔生えるだけで、多く得るわけに行かないといふことだつた。

○吾が杭の西北の山、留下、小和山に近い一帶の地方、及び南高峯、翁家山等の地にいづれも野朮を産する。氣味は香しく甜く、生で一二箇を喫へば終日饑ゑず、津を生じて齒に溢れ、渴を解し、脾を醒す功力が最も捷だ。切開しても硃砂點がな

く膚理は膩細で雪のやうに白い。名けて玉朮といひ、また雪朮と呼ぶ。やはり容易に得られぬものだ。薬に入れての功效は於朮と等しく、他の地に產する野朮に比較して尤も力が倍する。

甘くして脾を補し、溫にして中を和し、氣を補し、血を生じ、汗なきをば能く發し、汗あるをば能く止め、胃を開き、脾を補するので能く飲食を進め、勞倦を去り、肌熱を止め、癥癖を化し、中を和して能く嘔吐を已し、痛を定め、胎を安じ、濕を燥し、小便を利し、津液を生じ、泄瀉を止め、胃經の痰水を化し、心下の急滿を理し、腰臍の血結を利し、周身の濕痺を去る。凡そ下焦の陰氣が脫せず、上焦の陽氣が驟に脫するものにして無力なるには參を用ゐ、重ねて野朮を用ゐれば大いに能く起死回生する　糯米泔で浸し、陳壁土で炒り、或は蜜水で炒り、人乳を拌ぜて用ゐる。炒るには黃になる程度にし焦しては宜くない。焦せば力が無くなる　熬膏したものが更に良し。禁忌は白朮と同じ。

【代參膏】楊春涯驗方――於朮十觔を白米泔水で三晝夜浸して浮皮を洗淨し、十回蒸し曬して脂が手に沾るを度とし、切片して熬膏する。一回の火で取收めると紙

に滴しても化けぬやうになる。白茯苓十觔を末に舂き、水飛して浮ぶものを去つて沈むものだけを取り、十回蒸し曬して膠のやうに手に沾るやうにしたものと、その朮膏とを攪勻し、毎服一兩ばかりを米湯で送下する

【虛弱枯瘦して食物の不消化なるを治す】 於朮を酒に浸して九蒸九曬して一觔、兎絲子を酒で煮て絲を吐かして曬乾して一觔と共に末にし、蜜で梧子大の丸にして二三錢づつを服す

【四製仙朮散】 盜汗の止まぬものを治するに、この藥は神の如くである　於朮四兩を四分して製するので、一兩をば黃芪の煎汁で炒り、一兩をば牡蠣粉で炒り、一兩をば麩皮湯で炒り、一兩をば石斛湯で炒り、朮だけを取つて末にし、三錢づつを粟米湯で服す

【各色の痢疾】 傳信方――於朮一兩、老薑一兩、當歸五錢、水二碗を程よく煎じ、一夜露して服すれば自ら癒える。

【保胎丸】 良方集要――茯苓二兩、條芩一兩、於朮を土で炒つて一兩、紅花一兩、沒藥三錢、製香附一兩、玄胡索を醋で炒つて一兩、益母草を根を去つて一兩を共に研

末し、蜜で桐子大の丸にし、朝、夕白滾水で七粒を服す。増減しては宜くない。惱み、怒り、勞傷し、生、冷のもの、氣を發するもの等を戒む。凡て腹痛し、腰酸し、脹するものの場合には、これを服するが宜し。妊娠三月から服し始めて臨月まで繼續すれば、ただ胎を保つだけではなく、臨產にも安全にして分娩を容易にし、恙なからしめる。——方の內の紅花、玄胡索の二味は、いづれも血を行らし、胎を滑するの品である。分量が甚だ重くなつてゐるが、二味いづれも二錢ほどでよし。方は本方の君臣に合せて詳にすべきものである——

【三日瘧】古今良方——九製於朮一觔、廣皮八兩を熬膏し、飴糖四兩を用ゐて取收める。

また一方。專ら四日兩頭の或は一二年乃至三四年癒えぬもの、或は癒えても再發して繼續するものを治す。於朮一兩、老薑一兩を水で煎じ、發作の日の五更に溫服すれば癒える。重きものも二服で永く發らない。

北雲朮

邊塞志——遼東口外の五國城等の地に產する。この朮は初め土中に生えてゐるも

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

ので、枝も葉もなく、暗暗裡に地中に生えてゐるものが多い。城北に最も盛にあつて、天氣清和の時に地を掘つて見るとこれが取れる。色は枯楊柳のやう、大小は筯ほどで、數十歩に蔓延し、屈曲して生えてゐる。この地は一般に藥物がないので甚しい不便を感じてゐるが、病人があるとこの朮を煎じた湯を服し、それで自ら癒える。又、病人の吉凶を占へるもので、數回煎沸するうちに藥が浮く、ときは病が癒え、半浮き半沈むときは病が久しくして癒えない。土人はこれを以て驗としてゐる。

風寒、傷食の一切の病を治す。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

南連

仙姑連、天姥連を附す。

一名土連といふ。浙の溫、台、金華山中にいづれもある。處州に產するものは處連と名ける。形が大きくして毛の輕きものを好しとする。性は川連に比較して尤も寒である。北方人はこれを買つて行つて馬の藥にする。

○百草鏡——土黃連は二月に發苗し、根、葉は羊蹄大黃と異はないが、ただ短小

なだけである。三月に莖が抽き出て高さ一尺ばかりあり、花は細くして穗を成し、結實は初は青くして後に紅くなり、子は稜の中に藏されてゐる。夏至の後には枯れる。浙江に産するものをば慈連と名け、安徽の甯國府、宣城に産するものの粗く肥えたものをば宣黄連と名ける。

性は寒にして滯せぬ。膏、丹に入れて用ゐるに最も良し。

吉氏家傳――血痢には、宣連を末にして雞子で搜して餅にし、炭火で全體を赤く煆き通らせ、氣の泄れぬやうに蓋をし、冷えるを候つて研細し、空心に五分、大人は一錢を米飲で服し、病状に隨つて加減する。

按ずるに、宣連とは卽ち今の江浙東西の一路に産する黄連である。いづれも曾て宣州路に屬した土地だ。

仙姑連　台州仙居縣に産する。その土地の傳説に、吳、魏の時代に蔡經が此處に住んだところからその邑の地名となつたので、王方平が曾て麻姑と偕つてその宅に降つたといふ。その遺址は今でもある。その地に産する黄連で、ほぼ雞距のやうでみな連珠形となり、皮は色が青黄、光潔で毛がない。味は大いに苦寒である。折る

と烟があつて赤金のやうな色のものが佳し。火症を療するには更に四川の産よりも捷だ。馬の藥にはこれ以外にない

天姥連　天台に産する。皮の色は鼠褐でほぼ毛刺があり、味は苦く、口に入れて久しく含むと淸甘の氣がある。

大いに心火を瀉す。性は寒にして散を帶ぶるところから、目症を治するに尤も效がある。

水黄連

四川省の一種の黄連に、澤旁に生ずるもので全身に狗脊の毛のやうな狀態の黄毛があるものがある　水黄連と名けるもので、頗る細小なものだ。醫家は用ゐることを知らないが、商人はこれを眞川連の僞物に充てて賣出す。ただ祝氏效方にこれを用ゐてある。

○百草鏡――水黄連は、打箭爐に産したものは形が細長くして少し硬刺があり、他の地の連に比較して重い。皮、肉が青色を帶びたものを佳しとする。小西天に産

したもので色が黒く、毛のあるものも佳く、毛なくして光つて黄なるものはそれに次ぐ

【鼻痔を治す】 百部三錢を切片して曬乾(しやかん)し、炒つて淨末二錢を取り、地骨を淨炒して二錢、五棓子を炒り、黄柏(わうはく)を炒り、甘草を炒つて各二錢、水黄連を切片して炒つて一錢を共に末にし、鼻痔で孔全體の爛れたものの場合には、これを香油で調へて搽る。立ろに痂を結して癒える。

馬尾連

雲南省に產するもので、藥肆にはいづれもある。乾したものは形が絲のやうで上に小根頭がある。土人はそれを盤曲して賣つてゐる。

性は寒にして峻ならず、味は苦いが、やや減じて川連(せんれん)のやうに厚くない。性能く皮裏、膜外、及び筋絡の邪熱を去る。小兒の傷風、及び痘科に用ゐる。

浙烏頭 即ち僧鞋菊である。

（和名） 未詳。
（學名） 未詳。
（科名） 未詳。

（和名） 未詳。
（學名） Aconitum sp.

これは烏頭にして浙地方に產したものだ。錢塘、筧橋地方では、これを栽培して風癜の藥として賣つてゐる。近頃では人家の園圃にもあつて、鸚鴚菊と名け、また僧鞋菊ともいふ。風を追ひ、血を活す。根を取つて藥酒に入れるに良し。

霍石斛

瓦石斛を附す。

江南の霍山に產する。形は釵斛に比較して細く小さく、色は黃で曲つて直くなく、毬を成すものもある。彼の地方ではこれを茶茗の代用にして、極めて暑を解し、脾を醒し、渴を止め、水を利し、人の氣力を益するものだといひ、或は熬膏を取つて客に餉める。初は一般に行はれなかつたものであるが、近年では江の南北に盛に行はれて需要に應じきれないことがあり、商人間では率ね風蘭根をこの物の僞物に使ふ。但し風蘭は形が直くして縮まず、色は青黯なもので、嚙んで見ると齒に黏らず、味は微し辛いものだ。霍石斛は嚙めば微し漿があつて齒に黏り、味は甘くして微し鹹い。形の縮んだものが眞物である

(科名)　うまのあしがた科(毛茛科)
木村(康)曰ク、烏頭ノ條參照。

(和名)　未詳。
(學名)　Dendrobium sp.
(科名)　らん科(蘭科)
木村(康)曰ク、石斛ノ條參照。

○百草鏡——石斛には、近頃は一種の形が短くしてただ一寸許り、金釵心のやうに細く、色が黄で、咀んで見ると味が甘くして微に滑涎のあるものがある。これは六安州、及び潁州府霍山縣に産するもので、霍山石斛と名け、最も佳いものである。咀んで涎のないものは木の上に生えたものだ。用ゐられない。その功の特長は胃熱を淸するにあるが、ただ胃、腎に虚熱あるものに宜く、虚して火なきものには用ゐることを忌む。

○年希堯集驗方——長生丹、甜石斛、即ち霍石斛を用ゐる。范瑤初云く、霍山は六安州に屬する。その地に産する石斛は米心石斛と名ける。それはその形が米を累ねたやうだからであつて、竹鞭のやうに節が多く、乾せば團になる。他の地の産では米心にならず、また團にも成らないものだ。

甘く平にして味鹹し、陳延慶云く、本草には多く石斛は甘、淡にして脾に入り、鹹、平にして胃に入ると言つてあるが、現に市中の金釵、及び諸斛は、いづれも苦くして甘くなく、性もやはり寒であつて、且つ形も金釵に似てゐない。霍斛を以て眞の金釵斛となすべきものである。

──五色石斛──

（和名）未詳。
（學名）Dendrobium sp.
（科名）らん科
（蘭科）
木村（康）曰ク、石斛ノ條參照。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。
白井曰ク、佛人Em. Perrot及Paul Hurries合著ノ支那及安南藥材篇ニBupleurum octoradiatum, Bunge ノ漢名ヲ銀柴胡トセリ。
木村（康）曰ク、今日漢藥市場ニ銀柴胡ト

○胃を清し、虛熱を除き、津を生じ、勞損を已す　これを茶に代用すれば、胃を開き、脾を健にする　功は參、耆に同じ
○驚を定め、風を療じ、能く涎痰を鎭める
○暑を解し、甘く芳しくして氣を降す。

五色石斛　雲南志──滕勸州普渡河の江に瀕した石壁の間に產する　色は紺、紅のものが佳し、

胃熱を療じ、虛羸を益す。

銀柴胡

經疏に云く、俗に用うる柴胡に二種あつて、一種の色白黃にして大なるものを銀柴胡と名け、專ら勞熱骨蒸を治するに用ゐ、色の微黑にして細いものは解表、發散に用ゐる　本經には竝に二種の說はなく、功用も區別をしてないが、但だ銀州のものを最とするとあるところを見ると、その物は發散には優れてゐるが、虛熱を治する藥でないことが明だ　本草滙に、柴胡は銀、夏に產するもので、色が微白にして

稱スルモノハ繖形科ノ Bupleurum ニ屬セズ、且繖形科植物ニアラズ（藤田、木村―藥誌、五五三（昭三）二六四）、石戸谷氏ニヨレバ（同仁會發行、北支那ノ藥草、七七）なでしこ科ノ Gipsophila 植物ノ根ナラント。第四册二七四頁茈胡ノ條銀柴胡ノ項參照。

軟いものが銀柴胡である。勞弱、骨蒸を治するに用ゐ、黃牯牛（わっこぎう）の尿に一夜浸して曬し乾すとあり、勞熱の治療に試みて效驗があつた。

○本經逢原に云く、銀柴胡は銀州のものが良し。今延安府五原城に產するものは、長さ一尺餘あり、肥白にして軟く、北地に產するものは前胡のやうで軟い。今一般にこれを北柴胡といふ。火を犯してはならぬもので、火を犯せば效がなくなる。

○百草鏡に云く、陝西（せんせい）の甯夏鎭（ねいかちん）に產する。二月に葉を採つて芸蒿（うんかう）と名ける。長さは一尺餘で微し白く、力は柴胡より弱い。

○藥辨に云く、銀柴胡は甯夏鎭に產する。形は黃芪（わうぎ）のやうだ。內にある甘草串を混用してはならぬ。

○翁有良云く、銀柴胡は銀州に產するものが佳し。二種あるが、ただ形で辨別すると、鼠尾と前胡と相等しいやうに、前胡と柴胡とを會べ（しら）て見ると相類してゐるが、いづれも西北に產出したものを勝れたものとする。形が既に相同じき以上、湖廣の古城の柴胡を標準とすべきであらう。此にいふ銀柴胡は粗細一定せず、太さは拇指ほど、長さは數尺、形は鼠尾に類せず、また前胡にも似てゐない。本草と對照して

見ると治病の點が合致しない。兩者の用途は判然し難く、結局的確でないものだから、使用するには注意を要する。

〔金御乘云く、銀州柴胡は軟くして白い。北地產のものにもやはり白色のものがあつて、今一般にそれを白頭翁に充てるが、この種もやはり銀柴胡といふべきものだ。蓋し銀とは色を指して言つたもので、地名を指して言つたものではない。金銀花の白色のものを銀花といふやうなものである。銀柴胡には元來西方產と北方產との區別があるのだ。必ずしも銀、夏の產を銀柴胡といふわけではない。しかし藥に入れては西方產のものが勝れてゐる。

〔按ずるに、綱目の註に、銀柴胡は銀、夏に產したものを勝れたものとするとあるが、實は今一般に用ゐられてゐる柴胡には北柴胡、南柴胡の區別があつて、北地の產は前胡のやうで軟く、南地の產は强硬で用ゐるに堪へない。又、銀柴胡は表を發するけれども柴胡のやうな峻烈さがない。綱目では倶に混じて明確になつてゐない。

甘し、微寒にして毒なし。足の陽明、少陰に行る。その性は石斛と甚しく相違の

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。
木村（康）曰ク、芎藭ノ條參照。

ないもので、ただ熱を清するだけでなく、兼て能く血を涼する　和劑局方の上下諸血を治する龍腦雞蘇丸中にこれを用ゐてあつて、凡そ虚勞の方中に入れるには銀州のものだけを宜しとする。北柴胡は虚陽を升動し、發熱し、喘嗽し、いよいよ惡化せしめるものだから、その區別なしに混用すべきものではない。按ずるに、柴胡の條下に、本經に『陳きを推し、新しきを致し、目を明にし、精を益す』とあるは、いづれも銀、夏の産を指して言つたもので、北柴胡ではさやうな功能のあるものでない

周一士云く、凡そ熱の骨髓に在るものは、銀柴胡以外では治療し得ない。

虚勞、肌熱、骨蒸、勞瘧、熱が髓から出るもの、小兒の五疳、羸熱を治す。

撫芎

江西の撫州に產する。中心に孔のあるものがそれである。

辛し、溫にして毒なし。逢原に云く、性最も升、散するもので、鬱を開き、胸を寬にし、經絡を通じ行らすに專らなるものである。鬱が中焦に在るときは胸膈が痞

滿して痛む。その場合には撫芎を用ゐてその氣を開提して升すべきものであつて、氣が升すれば鬱が自ら降る　故に撫芎は總じて諸鬱を解して直ちに三焦に達し、陰陽の氣血を通ずるの使藥である。しかし久服すれば耗氣して人をして暴に亡せしめる。

○按ずるに、芎藭には數種あつて、蜀の產を川芎といひ、秦の產を西芎といひ、江西のものが撫芎である。綱目には川芎を取つて名を列ねたが、西芎、撫芎は僅に註中に揭げただけで、やはりその功用を分ち說明してなかつた　蓋し芎藭は蜀の產を上となし、味は辛くして甘く、他の地の產は味が辛烈で遠く逮ばないものである　殊に西芎と川芎とでは性が甚だ遠くなくして、俱に血中の理氣の藥であるが、ただ西產は川產の力厚くして功の大なるに及ばず、撫芎に至つては性專ら開鬱上升にあつて、迥に同じからぬことに氣が付かなかつた　故に石頑は川芎の條下に撫芎の一條を立てて混同すべからざることを明にしたのであつた　此ではそれに從つた。

【芎歸飲】不藥良方——失血が湧吐するもの、飽食して劇く力を出し、或は重きものを無理に持つたために脈絡を傷めたるを治す　當歸三兩、或は三兩を酒に浸して

洗ひ、撫芎一兩を微し炒り、水三碗、酒一碗半で煎じ、八分になつたとき二回に分服する。それは血を引いて經に歸する點を取るのであつて、並に跌撲、墮打して脈絡を傷め、人をして大いに吐せしめるものを治す。二症中もし瘀血あるときは、或は大黄を加へて下し、或は桃仁、紅花を加へて破り、或は鬱金、黄酒を加へて行らす、その症狀を審にして酌量すればその效更に速である。

普濟方——一切の熱癧、時毒腫痛には、撫芎を煆いて研り、輕粉を入れて麻油で調へて塗る。

土黎蘆

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

汪連仕云く、即ち千葉の水仙花であつて、黄、白のものを藥に入れる。紅きものは服されない。根を取つて毒を罨する。曬燥して研末し、通關散と合せて鼻に嗃ひば、人をして痰を吐かしめる。一切の風症に多くこれを用ゐるがよし。

綠升麻

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

木村(康)曰ク、升麻ノ條參照。

(和名) 未詳。
(學名) 未詳。
(科名) 未詳。

(和名) 未詳。
(學名) 未詳。
(科名) 未詳。
木村(康)曰ク、夏枯草ノ條參照。

従新に云く、乃ち升麻の別の一種である。繆仲醇の廣筆記には、下痢を治するに用ゐて毎に效驗があつたとある。性最も竄捷なるもので、痢疾、下傷を治す。

按ずるに、升麻は色の綠なるものを佳しとするので、別の一種ではない。

金鐘薄荷

汪連仕草藥方に云く、即ち細葉薄荷の山に産するもので、根が堅硬だ。米醋で磨つて蜂刺、蟲叮、蜈蚣咬に敷く。

葉　跌打の損傷、腹蟲を治す。牙痛には煎湯で咽する。

王安采藥方――金鐘荷葉、即ち薄荷。吐血を止める。黄疸、跌打、諸般の風氣には、濟陰丸に合せる。

白毛夏枯草

丹陽縣に産するものが佳し。葉梗は夏枯草と同じだが、ただ葉上に白毛がある。

現に杭城西湖の鳳凰山に甚だ多い。

性は寒、味は苦し。專ら肝火を清す。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

山牛膝

一名蘇木紅といふ。今は一般に茘支紅と呼び、また透血紅と名ける。富陽の竹園内に產する。善く瘡、幷に刀箭の肉に入りたるを理す

血を活し、瘀を化し、筋を寛にし、跌打損傷を理し、破傷風、七十二般の惡疾を治するにはこの物以外では除けぬ。功は四川の產に勝る（汪氏方）

土連翹

巴山虎を附す。

乃ち鬧楊花子であつて、鬧楊花、卽ち黃杜鵑、一名石棠花である。牛がこれを食ふと直ちに瘋顚する。富陽北泥山の白洋溪一帶の山中に甚だ多い。彼の地方では石棠花と呼ぶ。卽ち黃色の映山紅である

（和名）たうれんげつつぢ。
（學名）Rododendron sinense, Sw.
（科名）しやくなげ科（石南科）
木村（康）曰ク、鬧楊花ニ Giles (A Chinese-English Dictionary, 1892) ハし

〇百草鏡に云く、殼は連翹に似て子は芝麻に類する。故に一名山芝麻といふ。藥に入れるには毎服三分で、多く服してはならないものだ。方術家の麻藥中にこれが入れてある。その根は巴山虎と名けるもので、藥には骨を去つて用ゐる。——汪連仕草藥方に、土連翹、即ち鬧楊子花。今は南天竺草と呼ぶとある。——

苦し、溫なり。風寒濕痺、癧瘍腫脹、撲損疼痛、疽毒、疔瘡を治するにこれを用ゐるが神效がある。——汪連仕草藥方に、跌打損傷を治し、能く血を活し、風を疎し、七十二般の風氣を理す。外科の聖藥だとある——

【透骨丹】藥鑑——跌撲損傷で深く骨髓に入り、或は隱隱として疼痛し、或は曇天、雨天の際に痛み、或は長年月に亙り四肢の無力のものを治するにこの藥を主とする。眞に神方である。鬧楊花子一兩を三回火酒で浸して炒り、二回童尿で浸して焙じ乾し、乳香、沒藥を油を去らず、血竭と各三錢を末にして研り勻ぜ、再び麝香一分を加へて共に研り、磁瓶に收貯して固く封じ、毎服三分、壯者は五六分を、必ず夕飯を喫せずに睡り、好きほどに酒の量を盡して服す。服して後は風を避け、微汗を出すことが肝要である。房事、酸、寒のもの、茶醋等の物を忌む。弱きものは

やくなげ科ノたうれんげつつぢ Rhododendron sinense, Sw.（中部支那）及びなす科ノてうせんあさがほ Datura alba, Nees.（北部支那）ヲ充ツ。又黄杜鵑ニハたうれんげつつぢヲ充ツ。而シテ今市場ノ生藥ヲ見ルニ鬧楊花ハたうれんげつつぢニ該當スルモノノ如シ。

五日に一回間服し、壯なるものは三日に一服する。

○按ずるに、吉雲旅抄にある無名腫毒、疔瘡、發背を治する一醉消の奇方には、山芝麻三分を極細末に研り、好き酒で煎じて數沸し、渣と共に服し、寢具を被て汗を出し、風に當らぬやうにする。一服で全く消する。但し燒酒を用ゐてはならぬとある。これで見ると、また藥鑑の製法と異つてゐるが、いづれも此に附記して置く。善く藥を用ゐる人はいづれかを擇ぶがよし

［將軍復戰丹］　張雲野瑣記　　跌打損傷を治す。山芝麻二十兩を四回童尿で浸し三回燒酒に浸して略ぼ炒り、乳香、沒藥を各炙いて油を去つて三兩、血竭を煨いて二兩を用ゐ、極細末にして火酒で四分を送下し、隨つて白煮した猪肉を食つて壓する。持齋中で肉類を食はぬ人は白腐乾を食ふ。服藥後は絕對に風を避けることを記憶する。

［七釐散］　吳興楊氏便易良方——金刃傷を治し、痛を止めること神の如くである。龍骨、硼砂、血竭、酒洗兒茶、天芝麻、卽ち土連翹各五分を細末にし、七釐づつを服す。

【十全丸】　蔡竹堂驗方——風痺、跌撲、癱瘓の初起を治し、一服で能く消散する。ただ虚弱の人は、必ず先づ補して後にこの藥を用ゐて攻める。麝香三錢、穿山甲を土で脆く炒り、廣木香を生で研り、血竭を別に研り、雄黃を水飛し、山芝麻を酒で炒り、番木鼈を黃土で炒つて黃に焦げるを度とし、甚だ枯してはならぬ。篩つて淨末を取り、自然銅を九回火で煆き醋に淬して研細し水飛し、僵蠶を炒つて絲を去り、頭、足を去り、以上を各一兩、川蜈蚣を足、尾を去つて二十一條を酒で炙き、末にして蜜で桐子大の丸にし、硃砂を衣にかけて金箔で裹み、蠟丸で封固し、一丸づつを用ゐ、至つて重きには再び一丸を進める。羌活、紫蘇を酒で煎じたものに化して服し、汗を取つて風を避ける。さなくば戰慄を發して人を傷める。

ある方では、木鼈子を去つて風茄花五錢を加へ、山芝麻はやはり五錢を用ゐる。比較的穩だ。

【馬前散】　救生苦海——癱瘓の初起、跌撲內傷、風痺疼痛を治し、その效神の如くである。番木鼈を鐵器に觸れるを忌んで砂鍋に入れ、黃土を拌ぜて炒つて黃に焦げるを度とし、石臼中で搗磨し、細篩で皮、毛を篩ひ去つて淨末を揀り取り、山芝麻

を殻を去つて酒で炒り、各五錢、乳香末を蒻葉で烘いて汗を出して五錢、穿山甲を黃土で脆く炒つて一兩を用ゐ、一錢づつを酒で服す　多く服してはならぬ。服して後は風を避ける　さなくば人をして戰慄を發して止まざらしめる。患者が虛弱なるときは五錢づつ服す

【五虎丹】風痺、跌撲、腫毒の初起を治す　草烏を皮を去つて薑汁を拌ぜて曬し、隔紙で炒り、山芝麻を燒酒を拌ぜて曬して炒り、雄黃を水飛し、血竭を蒻葉の上で焫き焠し、穿山甲を砂で炒つて各一兩を末にし、芥子ほどの大いさの丸にし、酒で二三分を服す　多くしてはならぬ　この方は草寶眞劫劑に見えてある。

巴山虎　即ち鬧楊花の根であつて、案妙方には巴山虎と名けてある。風を追ひ、痛を定める。

【神妙草頭痧藥】行篋檢祕――鵝不食草、幷に子一兩、南星、半夏、藜蘆、瀰蘆、牙皂、鬧楊花子、鬧楊花根各一錢を倶に曬し燥して極細末に磨る　この藥は專ら中暑、中寒、中風不語、牙關緊閉、急、慢驚風、小兒の筋抽を治するもので、藥を鼻中に吸入すれば噴嚏が出て立ろに甦醒する　また陰陽水にて調へて服するもよく、二三分で立ろに癒える。

【痔漏を薫する仙方】刀、針、掛綫し、及び丸、散を服藥してはならぬ。鬧楊花根、俗に老虎花と名け、杜鵑に似て色の黄なるもので、その根は鐵のやうなものだ。その根を搗き碎いて湯に煎じ、礶に入れて桶の中に置き、蓋に一箇の孔を控け、その孔に痔を對して坐定して燻ずる。湯が冷えたときはまた熱して再び燻ずる。その管は藥氣に觸れて自ら次第に潰爛し、燻ずるに堪へなくなり、半月にして自ら癒える。重きものは一个月で功を收め、永く再發せぬ。絶對に洗つてはならぬ

【兩腮の紅腫を治す】梁氏集驗――百合一個、山芝麻を皮を去り、貝母、玄明粉と各一錢、銀硃七分に白麪を加へて調へて敷く

土茜草

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

一名地蘇木、過山龍、風車草といふ。これは南方に産する蒨草であつて、葉は四五瓣が一叢と成つて莖節に攢つて生え、梗は方で蔓が柔く、皮が糙澀で人の指を棘す。獨莖が直上に一二尺伸びたところに分岐があり、そこに箭鏃のやうな葉があつて、風が吹くと能く車輪のやうに環轉するところから名けたものだ。又、八仙草と名

ける。それはその葉が相對して攅簇し、枝が葉の間に生えるからだ。その根は黄赤色だが染まらない。又、活血丹と名ける。

○百草鏡に云く、この草は秋期に小さい梧桐子ほどの實を結び、實つて後に枯れて立夏の後に發苗する。

百草鏡――性は平であつて、肝、脾、心の經に入り、打傷、跌壓を治して血を活し、性善く血を行す。瘀なきものには用ゐるを禁ずる。

○葛祖方――治效は、瘋氣痛、通經、下胎、黄疸、鬼箭打、瘕痞、蛇傷。

○藥鑑に云く、功は專ら血を活し、跌撲、癰毒、癥瘕、經閉、便血、崩中帶下、痔漏、風痺、鬼箭風、臌脹、黄疸、蛇傷を治す。

【疔瘡】 朱羅峯方――過山龍、仙橋草、蒼耳草、希薟草、紫花地丁、野苧麻根の六味等分を酒で煎じて服し、汗を取り、蟾酥丸を多く服する必要がある。出る汗が鹹いものは治癒するが、味の淡いものならば治し得ない。

また一方。地蘇木を陰乾して末にし、重きものは八錢を、輕きものは五錢を好酒で煎じて服す。もし放黄するときは酒に沖して服し、渣で疔上を罨する。

野苧麻

採藥志――天青地白草、又、川綿葱と名ける。即ち野苧麻である。

一名銀苧、又、天名精と名ける。山土、河塹の旁に生ずる。立春後に苗が生えて長さ一二尺になり、葉は圓くして尖り、表面は青く裏面は白くして麻紋がある。結子は細碎なものである。根は擣けば滑涎がある。藥に入れるには根を用ゐる。鬆土のものを取るが良し、肥白にして筋がない。按ずるにこれは地菘とは別である

性は涼なり。諸毒を治して血を活し、血を止め、功は能く發散し、渇を止め、胎を安じ、小兒の丹毒、蠱脹を通じ、崩淋、哮喘、白濁、滑精、牙痛、喉閉、骨哽、疝氣、火丹、癧毒、胡蜂、毒蛇咬、發背、疔瘡、跌撲損傷に塗る。

○救生苦海――午の日に野苧葉を取つて陰乾し、曬燥し熟し搓んで白絨を取つて收藏し、夏期に金刃傷者のあつた場合、それを敷けば血を止め、且つ化膿しない

○百草鏡――跌撲には、野苧根一兩を搗き碎き、好酒で煎じて服し、飲めるだけ飲んで醉ふ。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。
木村（康）曰ク、天青地白草トシテ現今市場ニ出ヅル生藥ヲミルニいばら科ノうらじろいちご Rubus phoenicolasius, Maxim. ナレドモ是ハ野苧麻ニ當ラズ。

○漆瘡紅腫には、紫霞膏に合せる。又、女料の聖藥である。痘毒には野苧麻を皮を去つて搗いて敷く。

○癰疽發背、對口、一切の無名腫毒には、野苧麻の搗汁に無灰酒を沖下し、渣を患部に敷き、頭だけを露出して寢具を被て汁を出す。膿水を出して全く癒える。

【跌打閃挫方】教師白宇亮傳――大鯽魚一尾、獨核肥皂一個、胡椒七粒、黄梔子九個、老薑一片、葱頭三個、野苧麻根一段、乾麪一撮、香糟一團、紹酒をそれぞれの數に隨ひ適當に前の藥と共に合せ搗いて泥のやうにし、炒熱して患部に敷く、立ろに癒える。外部を布で包紮して置けば、次の日には青が出て癒える。

○救生苦海――神鬼箭を治す。野苧麻、川南星を共に搗いて敷く。

徐若寗云く、蛇虺咬は。傷處を看て竅があれば雄蛇咬であり、竅がなければ雌蛇咬である。針で挑破して傷處に竅を作り、然る後に野苧麻の嫩頭を取つて搗いた汁に酒を和して三盞を服し、絞り殘りの渣を傷口に敷く。能く毒をして竅中から出さしめ、傷は立ろに癒える。その渣をば水中に棄てる　永くまた發らない。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

雞鴨脚艾

百草鏡——葉は細くして岐が多く。間々闊いものもあつて、それに黄、蒿を雜へると雞鴨脚のやうだから名けたものだ。搓んで艾香に作る。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。
木村（康一）日ク、A. Henry ハきく科ノ Senecio scandens, Ham. (S. chinensis, DC.) ニ千里光、九里明等ノ名ヲ充ツ。現今千里光ノ名ニテ市場ニ出ヅル生藥ヲ見ルニげんのしようこ科ノせりばふうろ Erodium Stephanianum. Willd. ノ類ナリ。然レドモせりばふうろハ本文記載ノ植物ニハ當ラズ。

千里光

一名九里明、一名黄花草といふ。綱目には千里及の條下に附記してあるが、按ずるに、千里光は外科の聖藥であつて、俗間の諺に、もし千里光を識つてゐる人があれば、その一家族一代の間瘡が生じないといふ。綱目には外科の藥に入れて用ゐることをば記載してなかつた

○百草鏡に云く、この草は山土に生じ、立夏の後に苗が生え、一莖直上して數尺の高さになり、葉は菊に類して對生しない

○圖經に云く、千里光は淺山、及び路旁に生ずる　葉は菊に似て長く、背に毛があり、枝幹は圓くして青く、春苗が生えて秋黄花があり、實をば結ばない　莖、葉

或ハ生藥ノ誤レルニヤ。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

を採つて眼藥に入れる、黃花演と名ける。

目の淸からざるを治し、紅絲、白障、風を迎へて涙の流れるを去る（百花鏡）

○目を明にし、星障を去る。湯に煎じて瘡瘍を浴し、膏に合せて赤眼に點け、楊梅瘡に貼る 狗咬には千里膏に粉霜を摻つて貼る。

蛇傷を治す。

【四塊鵝掌風を治す】 王三才醫便――千里光草一握、蒼耳草一中握、朝東墻頭草一小握を共に瓶に入れて水で煎じて百沸し、手に少し麝香を擦つて瓶に向けて燻じ、かくて絹帛を用ゐて臂上に繫ける。走風せしめてはならぬ。三回で癒える。千里光とは卽ち金釵草のことである。

時疫、赤鼻、聤耳、火眼、諸瘡癧、腫毒の破爛せるもの、及び鵝掌風を治す。千里光を合せた膏は、赤眼に點け、楊梅瘡に貼る 狗油を熬つた粉霜を加へるが尤も妙である。（王安采藥方）

小靑草

木村(康)曰ク、A. Henry ハまめ科ノきあゐ Indigofera tinctoria, L. ナ充ツ。

五月苗を生じ、葉は短小で莖が多く、甚だ高くなく、花を開いて簇(ぞく)をなし、紅色の兩瓣で大青と同じだが、ただ細小なだけである　一名蜻蜓草(せいていさう)、一名蒼蠅翅(さうようし)といふ。綱目で小青の條の集解下に引いてある圖經の、福川に生ずる、三月花を生ずとあるものは、やはりその形狀を記載してない、考證の失たるを免れなかつた。且、それとは主治もやはり別である

○調事須知――小青、一名淡竹花　これは別の一種である。味苦し、大寒なり。小腸の火を理し、小兒の疳積(かんしやく)、赤目腫痛を治し、傷寒熱症、時行咽痛を療ず　疳積を治するには、これで牛肉、田雞、雞肝を煮て食ふ。○疳瞎(かんくわつ)には猪肝を煮て食ふ。○黃疸、勞瘵の發熱。○翳障の初起　○百草鏡――小青草五錢で豆腐を煮て食ふ

【雀目】　百草鏡――一名雞盲といふ　白晝は物が見えるが、日暮になると昏(くら)くなるものである　雞肝、或は羊肝を一具を取つて水に落さぬやうにし、小青草五錢と碗內に置いて酒、漿を加へて蒸熱し、草を去つて肝を吃ふ　三服にして癒える　明雄黃五分を加へるが尤も妙である。

澤半支

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

百草鏡——葉は鼠牙のやうな半支で、山澗の處に生える。葉はみな節に對し、夏瓦松のやうな黄花を開く。

蛇咬、疔腫を治す。

狐尾草

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

汪連仕采藥書——狐尾草は、花が狐尾のやうな九節のもので、長水の澤旁に生じ、狐媚花と名ける。

主治は吐血、金瘡——根を取つて敷く——一切の腫毒——根て罨する——瘡を洗ふ——葉を用ゐる——

金錢草

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。
木村（康）曰ク、佛耳

一名遍地香、佛耳草といひ、俗に訛つて白耳草といひ、乳香藤、九里香、半池蓮、

草ニハきく科ノはくこぐさGnaphalium multiceps, Wall. ヲ九里香ニハへんるうだ科(芸香科)ノげつきつ Muraya exotica, L. ヲ充ツレドモイヅレモ金錢草ニハ當ラズ。

千年冷といふ　遍地金錢といふは、その葉が對生して錢のやうに圓いから、鈸兒草といふは葉の形が圓く、二瓣對生した有樣が鐃鈸に象てゐるからである。郊野の濕地に生じ、十月、二月に發苗し、滿地に蔓生して淡紫色の花を開き、一二寸の間隔で二節を生じ、節が地に布いて根を生ずる。葉は四圍に小缺痕があり、面が皺んでゐる。葉の大なるものが力が勝り、乾して清香のものが眞物である。三月に採る。火を見せてはならぬ。綱目にある積雪草は即ちこの物だが、但し引用した諸書の主治にはやはり小異があるから補足して置く。綱目の所載の、女子の少腹痛を治するに殊效のあることに至つては、その方が已に綱目に記載されてあるのだから此には贅述せぬ。

味微し甘し、性は微寒である。風を祛り、濕熱を治す。百草鏡——跌打損傷、瘧疾、産後、驚風、肚癰、便毒、痔漏、鵝掌風に擦り、汁で牙疼を漱ぐ。葛祖方——風を去り、毒を散ずる。煎湯で一切の瘡疥を洗へば神效がある。採藥志に云く、頭風、風邪を發散し、腦漏、白濁、熱淋、玉莖腫痛を治するに、搗汁を生酒に沖して吃すれば神效がある。

按ずるに、蔣儀の藥鏡に云く、佛耳草は痰を下し、喘を定め、能く肺脹を去り、哮を止め、嗽を寧くし、大いに金寒を救ふ。それゆゑに熱部に列入してあるのだが、それはその氣が辛いからではあるまいか。

【白虎丹】 祝氏效力——鮮なる野甜菜、卽ち車前草を洗淨し、遍地香を加へて搗き爛らし、白酒を和して汁を絞出し、鵝毛に蘸けて患部に搽れば消する。

【疥瘡】 救生苦海 鈸兒草に鹽少量を加へて搓み熟し、頻りにそれで搽れば全く化けて了ふ。然る後に三回洗浴すれば必ず癒える。若し煎じたもので洗つては反つて效がなくなる。

【疔瘡が走黃して毒の心に歸したるもの】 ○慈航活人書——銅錢草、卽ち遍地香の葉を採つて搗爛し、童尿で煎じて服し、服して後に再び好き菜油二三碗を飲んで吐かしめる。もし吐くときは服する必要なし。再び生猪腦一個と白糖子を加へて搗いて敷く。

張介賓本草正——佛耳草は、味微し酸し、性は溫である。大いに肺氣を溫め、寒嗽を止め、痰氣を散じ、風寒寒熱を散ずる。また泄瀉をも止める。艾を鋪いて捲い

て筒に作り、それで久嗽を熏ずるが尤も妙である。

望江青

一名還精草、玉星草、銀脚鷺鷥、血見愁といふ。穀雨の節後に發苗する。澤旁、湖岸に生え、莖は四角で中が空である。葉は狹く長くして尖つて鋸齒があり、節に對生する。小滿の節後に莖が抽き出て花を開き、花は穗に成つた細い紫色のもので、層層として上に重り、寒露の時に枯れる。根には鬚が多く、節間は方であつて白く、極めて長く、やはり空明である。根が尤も妙である。

王聖兪云く、銀脚鷺鷥は葉が胡麻に似て小さく、直莖で一尺ばかりの長さのものだ。その葉は對生し、根は甚だ水芹に類してゐる。味は甘くして津液が多い。採つて蜜を拌ぜて蒸して食へば肺虛失音を治す。及び久服すれば最も人を益する。西湖の諸山にいづれもある。これに據ると別の一種らしいが、蓋し望江青は根が白くして長くなく、長いものならば銀脚鷺鷥だといふことになる。並に存して考證を俟つ。

李氏草祕——望江青は俗に天芝麻と呼ぶ。それはその葉が芝麻の葉に似てゐるか

(和名)　未詳。
(學名)　未詳。
(科名)　未詳。
木村(康)曰ク、血見愁ニ A. Henry ハ唇形科ノにがくさ Teucrium stoloniferum, Roxb. ヲ充テ植物名實圖考ニハなす科ノめぢろほほづきSolanum biflorum, Lour. (Solanum decendentum, Roxb.) ヲ記ス。望江青ハ前者ノ類カ。

らである。方梗で節に對して葉が生え、春になると節の間に紅紫の花を開き、水溝、澤邊に生え、形が微に諸關草に似てゐる。

涼にして苦し。百草鏡——性は寒にして味微し苦し　肺の經に入る。吐血にこれを服すれば精を生じ、力を還す　濕熱を除き、星障を去り、肺癰、勞力傷、脫力黃を療するには、同じく金器で煎じて服す。驚風を癒す。

打傷、撲傷を治し、最も血を活す。搗汁に酒を冲して服し、渣で傷處を罨する。ある人が閃足痛で擧らなかつたとき、苗がなかつたのでその根を尋ね採り、搗汁を煎劑に入れて三服して癒えた。牛膝、芍藥、當歸、獨活、玉叉草、活血丹、七葉草、五爪龍、放棒行、金雀腦、覆絲藤、搬草と等分を共に和勻して搗いた汁に酒を加へて服するのである。損傷で垂死のものも、ただ咽にさへ入れば生きる。並に諸爛痛、瘡癬、吐血を治するにも效がある。

【目中の星、翳障を去る】　百草鏡——望江青一兩、羊肝一具を豆腐と共に煮て食ふ。

【吐血】　白蜜二兩を隔湯で頓に熱し、望江青一兩を煎じた汁をその蜜に冲して服す。發病後數年を經たものと新に發病したものとを論ぜず、一切の血症は二服で根

治する。嘉慶三年に、予の僕孫成が血症を患ひ、甚だ劇しかつたとき、この方を得て癒えた。但しこの藥を服したときは、毎服後に必ず桂圓二觔を吃ふべきもので、十觔吃へば後患がない。この藥は服して後に醉ふるが如く、惺惺然として睡を欲し、一晝夜にして自ら癒える。再び燕窩粥を喫つて元を培へば更に妙である

〔乳癰、乳核〕　秋泉の家で祕した祖傳の天下第一の奇方であつて、專ら乳癰、乳核の腫硬して大なるものを治し、これを服すれば内消する。九龍川、即ち龍見怕一兩、細葉冬青、即ち山黃楊五錢、龍爪紫金鞭、即ち馬鞭草、また龍爪草と名くるもの一兩、金剪刀三錢、九節金絲草、即ち望江青五錢、遍地金龍草、即ち地五爪三錢を用ゐ、無灰酒二碗に香圓葉、或は橘葉十餘片を加へて煎じたもの一鍾半で、饑時に量に隨つて二三回服し、滓を再煎して服す

〔瘧を絶つ〕　望江青の乾いたもの五錢を酒で煎じて服す

予の從弟張石港は平生望江青を常服し、毎日乾いたもの三錢、北棗六箇を共に煎じて食してゐたが、三年間それを繼續して身が輕く、脚が健になり、天年を終るまで疾がなかつた。その功は參に下らない。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

無骨苧麻

接骨草、麻衣接骨、紫接骨を附す。

卽ち玉接骨、一名血見愁、玉錢草、麒麟草、玉連環といふ。葉は小さく圓く、根は水芹のやうで、溼陰の處に生じ、立夏の時に發苗し、節に逢ふと葉が粗くなつて尖長になり、根は蔓延して色が白く、粗節が多く、竹根に類したもので、搗くと汁が粘る。高いものは一尺ばかりになり、鬆土に種ゑると極めて繁衍し易い。藥に入れるには根を用ゐる。百草鏡には『玉盤龍、一名無骨苧麻といふ。葉は苧麻に類してゐるが、薄く小さくして背が白くなく、莖は筯ほどで色が明透だ。九月に至つて莖が白く明にして水晶のやうになり、上に細い紅點子があり、十月に萎える。採るに適當なのは九月である。一名玉梗半枝蓮といふ。搗けば稠滑な白漿がある」といつてある。綱目の蒴藋の條に、釋名には、卽ち接骨草といつてあり、蘇恭は、葉は芹に似てゐるといひ、寇宗奭は、花は白く、子は青く、十月には子が紅熟し、一二百子あるといひ、時珍は、枝毎に五葉だといつてあるが、按ずるに、羣芳譜では、

花は白くして葉が類してなく、その根は水芹に似てゐる　現に一般に搗汁を用ゐて筋骨損折を續ぐに頗る效驗あるもので、玉接骨と名けるがこの種でなければならぬ。然るに綱目には一語も折傷を治する記載がなく、且つ引證した形狀も率ね合混したところが多いから、特に詳晰にして補つて置く

性は涼、味は甘くして淡し　肺の經の血分に入り、吐血、腸紅下血、跌打損傷を治す。采藥志に云く、接骨草、一名、玉梗金不換と名ける。性は溫なり。能く血を止め、肌を生じ、肺の經の惡血を行り、血を引いて經に歸し、氣を理し、胃を開くに大いに功效がある。

接骨草　苗は竹節のやうなもので、廣西に産する。粤語——この草は叢生して高さ二三尺、葉は大いさ柳ほどで厚く、莖は節があり、色は綠で圓く、花は白くして午の刻に開き、三月から九月まで絶えない。羣芳譜——四季花、一名接骨草は、葉は細く、花は小さくして色白く、三月から開いて九月まであり、午の刻に開いて子の刻に落ちる。枝葉の搗汁は跌打損傷を治し得る。九月の内に根を割いて分種する。肇慶志——接骨草は封川陽江に産し、一名四季花といふ。園林中に生え、莖は綠で

圓く、葉は指ほどの長さで尖り、花はない。骨節を跌傷したるには搗き爛して敷く
それで骨が接げるものだ。しかるに本草には記載がない ――李氏草秘に、羊耳草、また接骨草と名ける。墻崖上に生え、葉は羊耳のやうだ。專治は接骨であるとある――

性は平である。折傷を治し、斷骨を續ぎ、擣いて罨すれば癒える。

麻衣接骨　背陰の山麓、或は澗旁に生ずる。穀雨の後に發苗し、葉は苧麻に類して背が白くなく、節に對して生え、節の下は粗くして鶴膝のやうで紫色になつてゐる。敏按ずると、接骨草の數種はいづれも深山の澗の濕に旁近した土地に産し、罕に人家の間に種ゑてあるものを得ることもあるが、しかし麻衣接骨は容易に得られない。

玉節骨は、性は涼、味は甘くして補し、能く中を和し、血を調へ、髓を生し、津を益す。その功は僅でないもので、專ら折損を治す。麻衣接骨は、性は溫にして血を行らし、ただ專ら折損を治すのものだ。故に一般にその種が傳はらない。辛亥の年、予が臨安に寓居して西徑山の寶珠寺に遊んだとき、山門外を見ると、その邊の地一面にみな麻衣接骨であつた。形狀はさながら土牛膝のやうだが、粗い處が紫黯

色をなして甚だ脆く、折ると粗い節の處から斷れる。そこを視ると紫は中心に透つてゐた。誠に佳草であつて容易に得られないものであるが、山僧も土地の人も悉くみな何等の智識を有たないので、そのために滋育して畦に盈つることを得てゐるのであつた。

跌打接傷を治す。

紫接骨　山土に生じ、麻衣接骨と相似てゐるが葉、莖が倶に紫だ。

跌撲、勞傷、損瘀を治す。

汪連仕云く、金寶相、一名金鉢盂は、金瘡を罨する聖藥であつて、又、能く風を散じ、膿に透り、一夜にして透る。その葉は蝴蝶花のやう、根は商陸、卽ち雞皮葱のやうだ。今は麻藥接骨と呼ぶ。敏按ずると、汪氏所論のものは、またこれ一種で、やはり荔支草ではないが、また牛膝にも似てゐない一種の接骨らしい。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

鳳眼草

花上の細粉を附す。

この草は、苗は薄荷のやうで葉が微し圓く、長さは五六寸　穀雨の後に苗が生え、立夏の後に枝椏の間にまた二枚の小葉が生え、節節にみなそれがあり、秋後になると二枚の小葉の中心が白色になり、さながら鳳眼のやうだ　故にかく名けたのである　八九月に眼中に花を開き、その花は鬚のやうで長さ一二寸になり、紫黄色である。やはり藥に入れられる。

百草鏡――鳳眼草は、芒種の後にその枝椏の間の二枚の小葉の中心から各々一粒の蕋が也つて人の兩眼のやうだ　石胡荽子のやうな狀態の細碎なものである　小暑後になると色が轉じて紅黄になり、次第に鬚のやうに長く抽き出る。この草は苗から老いるに至るまで葉にみな淡紅暈がある

斂按ずるに、經驗廣集にある小便不通を治する皂角湯熏法の方中に、鳳眼草を用ゐてある　これは臭椿葉の別名とこの草の名と同じであるが實物は異ふ　又、荔支草も鳳眼草と名けるがこの草とは異ふ

一切の風痺を治し、血を活し、風を去る　酒で煎じて服すれば立ろに效がある

【處女の乾血勞】鳳眼草を根、葉を連ねて鮮なるもの一兩を用ゐ、紅花三錢を加

へて酒で煎じて服す。通經して自ら癒える

【四日兩頭瘧】鳳眼草を用ゐて紅棗を煮、その汁を飲めば自ら癒える（俱に傳信方）

【婦人の經閉不通で發した熱勞症】鳳眼草を末にして一兩、紅花を炒つて二錢、水三鍾を一鍾に煎じ、黒糖五錢を入れて空心に服す。三五劑で血を見たならば止める（醫學指南）

【遺精白濁】鳳眼草を炒り乾して研末し、五錢を熱した黄酒に沖して服す（醫學指南）

花上の細粉　癬の藥に入れ、蟲を殺し、癢を定める。

風膏藥

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

桂海草木志——葉は冬青のやうだ。

粤志——肇慶の七星岩に風藥を産する　石の罅隙に叢生するもので、その葉は圓くして厚い。酒に和して嚼めば風疾を治す　一には風草といひ、一には風菜といふ　諺に、風病には風菜を用ゐよといふは卽ちこの草である

按ずるに、福寧府志に、風藤草、一名山膏藥　風を治し、瘡を癒すとあるが、或

はこの草をいふのかも知れぬ

太陽頭疼、目昏眩を治す。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

竹葉細辛

卽ち獐耳草であつて、香は細辛に勝る。

脫力虛黃を治す。（汪氏方）

木村（康）曰ク、A. Henry 及ビ Giels ハ竹葉細辛ニすずめのたごけ科ノすずさいこ Pycnostelma chinense, Bge. P. paniculatum, K. Schum. ヲ充ツ。
（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

離情草

雲南に產し、夷中に多くこれを賣つてゐるものがある。凡そ人は情慾錮閉の爲めに往往死を致すことがあるが、この草一莖を得て煎じて服すれば、口に入ると豁如として夢の覺めたやうに緣を斷じ愛を絕し、どうしてかやうなことを思つてゐたらうかといふやうになる。按ずるに、段成式の雜俎の記載に、左行草は人をして無情ならしめる。范陽ではこれを以て入貢するとあるは、或はこの類のものかも知れぬ。造物者が物を生ずるには、必ずかやく、合情草といふこれと相反するものがある。

うに相對的に造つてあるのだといふことが首肯かれる。
已に相思せるものの情愛を絕つこと神の如くである。

和合草

これは合情草のことである。柳崖外編——永昌府の瀾滄江外に和合草といふがある。根は潔白で男女交媾の狀のやうに結ばれてゐる。土人はこれを見つけると稻米で周圍を圍んで置いて掘る。かくすれば採れるが、さなくば遁去るといふ。夫婦不和合のものがこれを服すれば非常に和合する。これを航江の船に載せて置けば沈溺しないので、航行の熟練者は長絲で岸側に繫いでその線を持つて船に乘り、渡り畢つて後に引き棄る。故に滇省近邊の一帶には時時にこれがある。これを服したものの話を聞くに、男が服すれば、女を視て嫫母のやうなものでも西子、王嬙さへ及ばぬやうに見え、女がこれを服すれば、男を視て醜い者でも潘安のやうな美男子に見え、老いたるものでも健兒のやうに感ずるといふことだ。
夫婦相憎疾するを治するに、酒で煎じて服す。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

鹽蓬鹼蓬

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

藥性考　二種あつて、いづれも北直の鹹地に產する。土人はこれを割き取つて灰に燒き、淋湯を煎熬して鹽を取る。その葉は蒿に似て圓く長く、秋期になると莖、葉俱に紅くなる。燒灰を煎じた鹽は海水を煮たものに勝る。味鹹し、性は涼である。熱を淸し、積を消す。

知風草

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。
木村、康一日ク大明一統志ニ禾本科ノかぜくさ Eragrostis ferruginea, Beauv. ヲ記ス。

藥性考　雷州、瓊州に生ずる。蔓生のもので、毒はない。土人は春期にその苗を視て、一節があるときは一回風があるとしてある。藥に入れるには節なきものを酒に浸して用ゐ、一切の風痺を治す。骨に入つて能く外に拔き出す

鳳頭蓮

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

臺灣の内山に產する。形は黃連のやうで色は紫、茸茸然として細鬚が多く、分

岐があつて鳳の頭のやうだからかく名けたのである
性は平であつて、咽喉一切の諸症を治す。

梨鬆果

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

肥皂(ひさう)のやうなものだ。臺灣に產する。
疔瘡を治するに磨つて塗る。

蒲包草

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

活人書――又、鬼蠟燭と名ける　新語に、水蠟燭は草本であつて、野塘の間に生ずる。秋、杪に實を結び、さながら蠟燭と相似てゐる。これを詠じて『風搖(ふうえう)して影を弄することなく、煤具烟を燃さず』といふがあり、その花の開き實を結ぶさまがさながら蠟燭に似てゐるからかく名けたのだとある。蘆、葦の叢中に頗る多く、土人はその實を取つて金刃傷を治し、血を止めるに用ゐる。
瘰癧を治す。蒲包草(ほはうさう)を根を連ねて採つて泥を洗ひ去り、寸段に切つて砂鍋で湯に

煎じ、茶に代へて飲む　男、女を論ぜずみな癒える。但し婦人がこれを服すれば、癒えて後に終に妊娠しなくなるから、必ず北京眞益母丸を四五兩服すべきものだそれで解し得る。

汪連仕采藥書――蒲萼、即ち蒲草である。南方の地では莎草と呼び、北方の地では板枝花と呼び、結實をば鬼蠟燭といふ。その粉は即ち蒲黄である。

鬼扇草

采藥錄――鬼扇草は石壁上に生ずる　葉は表面が青くして直紋があり、白果の葉のやうな狀態で、枝毎に生えて扇の骨のやうだ。人が若し打死して打ち倒れたときは、この草を搗いて汁を灌ぐ。口に入れば直ちに甦醒する

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

鮎魚鬚

采藥錄――鮎魚鬚草は、梗、葉は青色で面に直紋が起ち、葉葉に二條の鬚があり、その根は竹鞭のやうな狀態だ

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

疔瘡、一切の諸瘡を治す

汪連仕云く、鮎黄鬚は沿藤で、豆葉のやうで二丫(あ)の內から二鬚が生え、根は白くして粗い、專ら外科一切、疔瘡、腫毒を治し、罨(あん)すれば立ろに消(ひ)く

紫背稀奇

采藥錄——紫背は陰山に生じ、地に著いて苗を布(し)くもので、葉には二枚の大なるものと二枚の小なるものとがあり、表面は灰色で直紋があり、裏面は微紫色で、心から起つ藤があつて一二尺長さのものになり、葉は尖つて對生する

【痘毒を治す】活草一觔を二服に分け、酒で煎じて服す　已に成つたものは速に癒え、まだ成らぬものは立ろに消く。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

雀麥

汪氏采藥書——即ち雀角花であつて、この花は人をして觸忿(しよくふん)せしめる。花は雀の脚に象(に)たものだ。獵夫はこれを採つて煮つて藥箭を作り、破關草と呼んでゐる　一

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。
木村(康)曰ク、救荒本草ニハ禾本科ノすずめむぎ（からすむ

般にはこの草が能く痔瘺を爛すので破管草と呼ぶ。

性は熱にして氣が烈しく、人の肌膚を傷める　立ろに能く腫を潰するもので、米醋で炒つて用ゐる　腸を腐らす品物だから湯劑には入れないが、ただ外治として痔漏に點けるに用ゐる。（汪氏方）

ぎ）Avena fatua, L. ヲ又植物名實圖考ニハ同科ノすずめのちやひきBromus japonicus, Thunb. ヲ充ツ。

本草綱目拾遺第三卷　終

本草綱目拾遺草部

第四卷

錢唐　趙學敏　恕軒氏輯

本草綱目拾遺草部中目錄

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

金豆子

夜關門を附す

百草鏡——一名金花豹子といふ。三月苗が生え、十月に枯れる。豆類ではあるが却て蔓本が起たず、高さ一二寸で枝が分れて叢を成し、葉は槐に似てやや大きく、處暑の時に五出で磬口の黄花を開き、蠟梅がこれに似てゐる。莢は上に向つて結び、𨂿蹳に類して短く、長さはただ二三寸のもので。實は綠豆に似て扁く、皮に紫斑があり、綠豆に比較してやや大きく、味は淡い。

子 疔、癰を治するに神の如くである。

葉 腫毒を治す。茅氏傳方——葉を曬し研つて醋で和して敷き、頭だけを留めて置けば直ちに消す。或は酒で二三錢を服す。

按ずるに、傅滑菴の草花訣に、金豆子は黄花を開き、子は綠豆のやうなもので、

(和名)　未詳。
(學名)　未詳。
(科名)　未詳。
木村(康)曰ク、A. Henry ハまめ科ノめどはぎLespedeza juncea, Pers. ニ夜關門ヲ充ツ。

滾茶に入れると味が清香だとあるは卽ち草決明である。寧憲王の救荒本草にある山扁豆は卽ち茳芒決明であつて、味は甘く滑し、酒麯に作れるもので、俗に獨占缸といひ、苗、葉、花、子いづれも瀹でて茹とし、また茶に點てて食し得るといひ、所載の形狀はやはり金豆子と同じである。しかるに瀕湖の綱目では、決明の後に茳芒を附錄して、性は平にして毒なし、火で炙つて飲にすれば極めて香しく、痰を除き、渴を止め、人をして睡らざらしめ、中を調へる。隋の稠禪師が採つて五色飲に作つて煬帝に進めたものはこの草だといつてあるが、疔腫を治するの說が記されてない。故に並に存して參考に備へる。

夜關門　葉は槐のやうだ。卽ち合開黃花であつて、仁和、筧橋地方で多くこれを栽培する。兪曉園云く、草、木の二種あつて、草本のものが良し。木本のものは乃ち合歡である。能く風を追ふ。皮を取つて肺癰の斂らぬを治す。膏に熬つて毒に貼れば、肌を生じ、口を收める。

按ずるに、綱目の馬蹄決明は、葉はやはり槐のやうで晝開いて夜合する。その葉は本が小さくして末が參く、秋黃色の花を開くとあつて、或は決明に係るやうであ

(和名) 未詳。
(學名) 未詳。
(科名) 未詳。

るが、但だ綱目では、決明子の條下でやはり疝氣に就いて言つてないから、今は竝に存して置く

藥　疝氣を治す。

接骨仙桃

一名奪命丹　活血丹、蟠桃草といふ。鱧腸草に似たもので、結子は桃のやうで熟すれば微紅になり、菉豆の大いさほどの小さいものだ。內に蟲のあるものが佳し。

百草鏡――仙桃草は水に近い場所の田塍に多くある。穀雨の節後に苗が生え、葉は光つて長く、旱蓮に類し、高さは一尺ばかり、莖は空である。摘み斷つても黑くなく、また香しくもない。立夏の後に細い白花を開く、やはり旱蓮に類して穗に成り、結實は豆の大いさほどで、桃子のやうで中が空になり、內部に小さい蟲がゐて、翅が生えて孔を穴けて出る。採收の時期は、實が將に紅くならんとし、蟲はまだ出ないが翅の生えてゐる時に限る。この時に採れば藥力が方に完全なときである。蓋しこの藥の效用は全く蟲に在るのだ。必ず曬し焙じて內の蟲を死なしめる。懸けて

置いて風乾しては、恐らく內部の蟲に翅が生えて出て了ふもので、藥としてやはり效用がない。

按ずるに、この草は必ず芒種後に採るべきもので、もし夏至を過ぎるならば蟲は孔を穴けて出て了ひ、化して小蚊となり、苞が空になつて效用がなくなる。

性は溫、味は甘く淡し。癰腫、跌打を消す。或は搗汁にし、或は屑にして服す。いづれも效がある。

肝氣を治し、胃を和す。集聽に云く、一名八卦仙桃といふ。この草は田野に生ずるもので、葉は柘榴の葉のやう、實は桃子のやうで甚だ小さく、內部に小蟲の生じてゐるものが眞物である。實を取つて蟲のゐるまゝ用ゐる。

○ある方では、專ら肝氣、胃氣、小腸疝症を治す。仙桃草の蟲あるものを用ゐ、金橘核、福橘核、華澄茄と各等分を末にし、砂糖で調へて菉豆大の丸にし、每晚一錢ばかりを服す。甚だ重きものも二服すれば根を斷つ

【勞損虛怯を治す】 百草鏡に云く、蟲のある仙桃草を取り、童尿で製透して補藥に入れて用ゐる。

【吐血を治す】 百草鏡に云く、新鮮なる接骨仙桃草を用ゐ、搗汁に人乳を加へ和して服す 按ずるに、吐血の諸方はいづれも涼血の劑を用ゐるのだが、ただこの藥は性が熱であつて、人乳を加へて能く血を引いて經に歸するから妙なのである

【跌撲損傷】 救生苦海――地蘇木五錢、八角金盤根一錢、接骨仙桃草五錢、臭梧桐花三錢を用ゐ、酒で煎じて服す。

七葉黄荊

（和名） 未詳。
（學名） 未詳。
（科名） 未詳。

一名豬臥草、地五爪、珠子草、烏食草、烏蛇草、七絃琴といひ、また七葉黄荊藤とも名ける 土牆脚下の陰地に生え、葉は尖長で相對し、三四行が一瓣を成し、莖上に稜が起つて一凹の間が紫色である。白露の節後に心が抽き出て高さ三五尺になり、細かな簇を成した花を開き、結子もやはり細碎であつて、霜後には珊瑚の細珠のやうに紅くなる。根は長くして白い それを藥に入れる

○百草鏡に云く、この種には木本のものがあつて、芊芊活と名け、跌撲、癰腫を治す

味甘し　生で服すれば能く人をして吐せしめる。
勞力傷、跌打、魚口、漆瘡を治す　煎湯で洗ふ

【便毒を治す】擣汁と肥皂一個を搗いて性を存したものとを酒で調へて服し、渣を患部に敷いて罨する

【跌撲損傷、閃腰、挫氣痛を治す】集聽に云く、これは祕方である。烏蛇草を曬し乾して末にし、砂糖、酒で調へて服す　最も容體の悪きには童尿を加へる　必ず端午の日の午の刻に取つたものを用ゐれば更に效がある　若し急に用ゐる必要のあつた場合には、時日を拘らず鮮なるものを取り、搗き爛して服す　汗を發して癒える

この草には五種の名稱があつて、一には烏蛇草といひ、一には烏龍草といひ、一には豬臥草といひ、一には七葉黄金といふ。この葉が一枝に七片あるからで、或は五片、大なるは九片あるものもある　その根は千秋藤と名ける。九十月の間に頂上に結ぶ紅子を曬し乾して呑めば痧氣を治し得る。

汪連仕草藥方――七葉黄荊は俗に扦扦活と呼び、また放棍行と名け、また珊瑚配と名ける　烏蛇草とは別である。

（和名） 未詳。
（學名） 未詳。
（科名） 未詳。
木村（康）曰ク、A. Henry 及ビ E. H. Parker ハ黄荊ニくまつづら科ノにんじんぼく、Vitex Negundo, L. ヲ充ツ。山黄荊モ此ノ類ナランカ。

血を行らし、毒を敗る。一切の瘡疥、鬼箭風を洗ふ。

山黄荊

玉環志——葉は楓に似てゐるが杈があり、胡椒のやうで尖つた黒子を結ぶ。骨、粉にして煮て食ふがよし。又、水荊といふ藜に似て黒子を結ぶものがあるが、食つてはならぬ。その枝を剪つて梨を接げるものだ。藥に入れるには山荊を用ゐる食物を消化し、氣を下す。

【退管の方】 黄荊の條に結んだ子を炙り燥して末にし、五錢を一服とし、黒糖を拌ぜて空心に陳酒で送服する。專ら痔漏の管を治す。管が自ら退出するまで服す。

【九竅の出血】 救生苦海——黄荊に二種あつて、赤きをば楛といふ、青きをば荊といひ、その木は心が方で、その枝には一枝に五葉、或は七葉が對出してゐる。葉は楡の葉のやうで長くして尖り、鋸齒を作す。五月の頃に紅紫色の花を開いて穂を成し、子は胡荽子ほどの大いさで、白膜皮があつて包裹されてゐる。その葉の搗汁を用ゐて酒で和し、二合を服すれば立ろに止まる。

【骨蒸勞熱】養素園驗方――六月雪、黄荊子、稀薟草、何首烏、當歸、川芎、熟地、白茯苓、水二鍾、薑三片を八分に煎じて服す　痰あるには半夏を加へる

【漆瘡】姚希周經驗方――烏蛇草を鮮なると乾きたるとを論ぜず、一握を湯に煎じ、一回洗へば直ちに癒える

【傷寒發熱で呃逆するもの】回春――黄荊子を多少に拘らず炒り、水で煎じて服すれば立ろに止む

【杖瘡で疔甲を起したるもの】黄荊子を焙じ乾して末にし、疔の上に搽れば直ちに開く。刀で刮る必要がない。

【肝、胃痛】周山人方――黄荊子を研末し、粉を和して團に作り、一二回食へば根を斷つ。

【脚蛀】周氏方――黄荊の嫩腦葉を用ゐ、搗き爛して罨すれば癒える。

救命王

金不換を附す。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

（和名）未詳。
（漢名）未詳。
（科名）未詳。
木村（康）曰ク、A. Henry ハたで科ノまだいわう Rumex aquaticus, L. ヲ充ツ。

一名死裏逃生といふ。

小兒の感冒、風寒咳嗽、大人の傷力、損傷吐血、諸風疼痛、無名腫毒を治す。

金不換　また救命王とも名ける　羊蹄根に似たものだが、葉は圓くして短く、本は甚だ高くない。この草は西極に産したものを中國の地に傳へ入つたもので、人家で種ゑて治病に用ゐるところから山澤中には産しない　立春後に生えて夏至後に枯れる　根を用ゐるものだ　綱目に七三もまた金不換と名けるとあるが、これとは別物である　また木本のものにも金不換がある

汪連仕草藥方——金不換は、大葉のものは金鉢盂、大接骨草であり、細葉のものは小接骨草であつて、吐血に頗る效があるために吐血草と呼ばれ、戰場で箭に中つて負傷したとき、これで罨すると效があるので箭頭草と呼ばれる

性は平であつて、瘀を破つて新を生じ、跌打を治し、癰腫を消し、血を止める　疥癬を癒すには糖、醋で和して搗いて擦る　蠱蟲傷には葉を用ゐ、搗いて塗る　肺癰を治す

葉は能く臂力を伸べる。硬弓を開いたための臂痛、或は力が弱くして弓を引けぬ

には、その葉を取つて軟に揉み、膊上を覆ふて帛で束ねる。一夜經つと痛むものは疼が定まり、且つ全力が膊上に攝入して、弓を開くに更に力を費さなくなる。軍隊でこれを要藥として需要する。

【腫毒の初起】百草鏡——金不換草の根、葉に拘らず搗き碎き、五錢を陳酒で煎じて服す

【肺癰】百草鏡——金不換草の根を取つて一兩、或は葉七瓣を搗き、その汁と酒を煎じて服すれば三回で癒える。口臭きもの、穢物を吐くものを論ぜず、いづれも效がある。

【風痛】楊氏驗方——金不換一錢半、小活血、枳殼、蘇葉、當歸各三錢、烏藥、川芎各一錢、花粉五錢、老酒一觔を煎じて熱服する

【跌打疼痛、風氣】慈航活人書。救命王、卽ち金不換。葉が冬菜の葉のやうなものだ。春、夏は葉を用ゐ、冬は根を用ゐ、搗汁に酒を冲して服し、渣に毛脚蟹を加へて搗き爛して敷く。風氣の如きはただ渣を敷く。

汪連仕方——血を行し、血を破るに、地蘇木、落得打と合せて共に酒で服す。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

黃麻葉

醫方集聽に云く、これは諸血を治するの聖藥であつて、一名牛泥茨、一名三珠草、一名天紫蘇といふ。三月に苗が生え、麻葉のやうで微に毛がある 葉を取つて嚼むと味が苦蘿のやうで、久しく嚼むと微し辛い。大葉の旁に二枚の小葉があつて杏葉のやうだ。八九月に至つて毎葉に三粒の子が生る。形狀は粟米子のやうで、內の一粒は茱子のやうだ。嫩い時は青色だが老いると黑色になる。その子を取つて藥に入れ、咳で肺を傷めたものを治す。紫紅色の細い花を開き、五月から初つて十月までで止む。處處にあるものだ。

【血症を治す】 集驗――葉を取つて虎杖、龍牙と共に用ゐる。

【血崩】 集驗――黃麻葉を根を連ねて用ゐ、擣き爛して酒で煎じ、一夜露して翌早朝に服す

氣症心疼、肚痛痢疾、痞結。

子 咳で肺を傷めたるを治す。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳

汪連仕云く、大麻子、卽ち黄麻子は、性熱であつて血を行す。醫師は麻藥を合せるに風茄と共に用ゐる。

六月霜

丁未の年、余は奉化に寓居したが、その土地の人は暑期にいづれもこれを茶の代りにしてゐた。食物を消化し、脾を運らし、性寒であつて暑を解するに神の如くだといふことであつた。五月の内に山村人が率ね刈つて乾し、縛り挑げて城下へ賣りに出るのである。予は百錢で一束を買求めて見たが、乾した薄荷のやうな狀態で長大なることはそれに倍し、莖上に白珠が穗に成つて綴られてゐた。土人は、子は能く氣を下し、食物を消化すること枝、葉よりも甚しきものだといつた。偶ま痞悶不快だつたので、一枝を取つて湯を沖し、茶に代へて飲んで見ると、翌日は非常に健啖になつた。土人のいふ所は成程虚妄でなかつた。

〇三才藻異——一名六月冷、卽ち曲節草である。性が寒なるところからかく名けたのである。花は薄荷に、葉は劉寄奴に似たもので、蛇藍と名ける。

暑を解し、積帶を消す。小兒は暑期に茶に泡けて食ふが佳し。性は苦、寒であつて、やはり腸、胃を厚くし、痢を止め、膈を開く、これを食すれば人をして善く唳はしめる。凡そ傷寒時疫には、子を帶びたもの一莖を取り、煎じて服すれば能く起死回生する。屢々實驗していづれも效果があつた。又、善く毒を解するもので、瘡疥を洗へばみな癒える。

山海螺

山溪の澗濱の隰地上に生ずる。葉は五瓣で莖に附いて生え、根は狼毒のやうで皮に縐旋紋がある。その紋が海螺と似てゐて山に生えるからかく名けたのだ。溪畔に生えるものではあるが、性は却て燥を喜むものだ。枝、葉が弱く繋つてゐて盆栽として翫べる。

○百草鏡に云く、山土に生えるもので、二月に採る。甚だ狼毒に似てゐるが、ただ皮の疙瘩を掐み破つて見ると白漿のあるだけが異ふ。その葉は四瓣で枝梗が蔓延し、秋後に算盤珠のやうな子を結び、旁に四葉があつて承けてゐる。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。
木村(康)曰ク、山海螺ニききやう科ノばあそぶ(Codonopsis, ussuriensis, Hemsl. ヲ充ツ、本文ノ記載ニハ一致ス。

腫毒を治す　瘰癧には、汁を取つて酒を和して服し、渣を患部に敷く。
汪連仕云く、苗は蔓生で根は蘿蔔のやう、味は多臭なものだ　楊梅悪瘡を治するに神效がある。
○王安采藥方——山海螺、一名白河車といふ。紫河車、紅、白石膏を加へたものを四聖散といひ、腸癰、便毒、臟毒、乳癰疽を治するにいづれも效がある。

水楊柳

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

張琰種痘新書に云く、水楊柳といふは草本で、溪澗の水旁に生え、葉が柳のやうなものだ　その莖は春期には青く、夏末、秋初になると赤くなる　條毎に直上に伸びて枝椏が分れず、秋になつて略ぼ赤を含むだ花がある　凡そ痘の焦紫して乾枯したるには、これを用ゐて洗へば立ろに光亮を現し、漿水が直ちに行つてその效神の如くである　已に洗つて後に往つて容體を視ると、已に洗つた處とまだ洗はぬ處とは、その明潤なると焦暗なるの形色が判然と現れてゐるものである。水を取り漿を行すの效は、この物より速なるものは外にあるまいと思はれる。但し巾を用ゐてそ

の藥水を燻け、頻頻それで拭ひ、必ずその水を存分にし用うべきもので、かくして後に已む。秋、冬で葉の落ちた時には根を取つて用ゐる。

（瀕湖綱目には木部に水楊があつて、やはり痘毒に主效ありとし、魏直の博愛心鑑の浴痘法を引いてあるが、但し所載の形狀がこれとは全く別である。ただ集解下の記述に赤楊があつて、張琰の所說と甚だ遠からぬことを述べてあるが、これにはまた主治がない。故に此に補つて置く。）

性は微寒である。味（缺）。血を涼じ、毒を解す。痘瘡焦黑はこれで浴すれば立ろに起つ。

跌打損傷、癮瘟瘴疫を治し、著鬱、惡毒を解す。

【痘を治する水楊柳湯】張琰の痘の紅紫に乾燥して漿の起らぬを治するものに水楊柳湯といふがあり『古方に記載してあるものは木であつて、葉が細く、梗が紅く、枝上に圓果があり、果上に白鬚があつて散出してゐる。此等を俗に水楊梅と呼ぶは、その葉が楊梅に似てゐるからであつて、これは余は未だ試み用ゐたことがない。余が常に用ゐてゐるものは草であつて、水邊に生じ、葉は柳葉のやう、その梗は秋

になると紅赤になり、菓は結ばないものだ。この草は冬は枝梗、及び根を用ゐ、春、夏、秋は枝、葉を用ゐる。凡そ痘が紅紫に乾枯して水の起たぬものには、活血、解毒の劑を內服し、外用としてこの草を水で煎じて頭面を拭ふ。連りに數回試みれば立ろに光潤が現はれ、直ちに漿を行らすの勢が具はるものである。未だ洗はぬ部分はその色が變らない

【手、足の拘攣】　費建中救偏瑣言――草本の水楊柳を用ゐ、酒で煎じて服す。甚だ效驗がある。

【痔漏洗方】　傳信方――水楊柳根を湯に煎じて洗ふ。やがて蟲が出て癒える。

【膀胱落下】　劉羽儀驗方――この病は茄病と名けるもので、その色が或は紫なるものならば治するが、白いものならば治癒しない。黃連一錢、狗脊、水楊柳根、五棓子、魚腥草の四味を多寡に拘らず、枯礬一錢ばかりと共に末にして湯に煎じ、先づ熏じて後に洗ひ。熱せる時に乘じて輕く托進し、一二日間睡臥し、癒えたならば調理の藥を服する。

毛世洪經驗集――扦扦活、即ち水楊柳である　その根は楊梅結毒を治し得る。

(和名) 未詳。
(學名) 未詳。
(科名) 未詳。

小將軍

一名研星草、散血丹といふ。陰濕の地に生じ、立春後に苗があり、葉は狗卵草に類して略ぼ大きく、莖は微し紅く、穀雨の後に細小な花を開き、荷包草の子のやうな二粒の子を結ぶ。

○百草鏡――二月に發苗し、葉は鏤珠草のやうで、節間に鵝不食草の子のやうで略ぼ大きい子を生ずる。三月に採る。五月には枯れる。

葛祖方――黄疸、脚氣、丹毒、遊風、吐血、咳血を治す。

百草鏡――跌撲、刀傷、癰腫、痰中に血を帶びるものを治す。疥瘡を洗ふ。

採藥志――性溫にして毒を敗る。杖傷、跌打損傷を治するには、擣汁を酒に和して服し、渣で患部を罨する。立刻に腫が消いて癒える。

金居士選要方――跌撲を治するには、五靈脂三錢、麝香一錢半、小將軍草三兩の鮮なるものから汁を取つて用ゐ、先づ酒で上の二味を煎じて適當になつたとき渣を去り、再び藥汁を入れて一二沸滾らして取つて服す。僧鑑平の言に、この草は疔腫

を治するに神の如きもので、疔の發生部位の如何と何種の疔なるとを論ぜず、いづれもこれを用ゐるがよし　搗いて極端に爛して瘡口に敷いて頭だけを留めて置く。翌は乾いて緊る、その肉上を洗ひ去つて再び敷く　甚だ重きものも二回にして癒える。輕きものは一回塗れば好し。眞に救疔垂死の聖藥であつて、親しく試みて神驗があつたといふ。

九鼎連環草

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

一名九葉雲頭艾といふ　三月苗が生える　子から出るのである。高さは二三尺、葉は艾、菊に似て、香もやはり近い。霜後に枯れる。口外、五臺山の二處に産する。近頃ある人が種を携帶したが、各處に植ゑられるものだ　八九月の間に穗が起つて蕋を結び、野菊の蕋に類してゐるが、但だ花を開かずして實を結ぶ　その實は野菊の花心のやうなものだ

○百草鏡――春期に發苗し、葉は艾、菊に類し、香もやはり近い。八月に時に花なくして實る。實は先づ疙瘩が起つてゐて、次第に長大となり、内に十餘子を包ん

である。子は細く長いものだ。小葉を乾すと甚だ香しい。黄梅の時に不時に焙じ曬さねばならぬもので、かくせねば黴び易く、黴れば役に立たなくなるものだ。

性は温にして氣、血を通じ行らし、風痺を治するに有效である。

【風痺】百草鏡――九鼎連環草の乾いたもの二兩、核桃肉三兩を擣き爛らし、當歸一兩五錢を黃酒に浸して用ゐ、水を隔てて煮て用ゐる。

牛筋草

一名千金草といふ。夏初に發苗し、階砌や道旁に多く生える。葉は韭に似て柔く、六七月に莖が起つて高さ一尺ばかりになり三叉になつた花を開く。その莖は弱靭で抜いても容易に斷れず、最も芟除し難いところから牛筋なる名稱があるのだ。

根を藥に入れて脫力黃、勞力傷を治す　瘵を治す。この草を根を連ねて取つて泥を淨去し、烏骨雌雞の腹中に入れて蒸熟し、草を去つて雞を食ふが良し。

〇百草鏡――血を行らし、力を長じ、肝の經に入る。

按ずるに、湖州府志に、南天燭も牛筋草と名け、又、烏飯草と名けるとあるが、

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。
木村（康）曰ク、A. Henry ハ禾本科ノちからぐさEleusine indica, Gaertn. ヲ充ツ。本文ノ記載トハ一致セズ。

この草とは同名異物である

翠羽草

一名翠雲草、孔雀花、神錦花、鶴翎草、鳳尾草といふ。この草は獨莖に瓣を成して細葉が攢簇し、葉上に翠斑がある

○花鏡——翠雲草は直梗のないもので、倒に懸けるがよく、また地上に平鋪してあるものだ。その葉が青綠色で蒼翠重重し、碎蹙してゐる有樣が翠鈿の雲翹のやうなところからかく名けたものだ。但し色はあるが花香がないから芸ではない。その根は土に遇へさへすれば生えるもので、日を見れば萎える。性最も陰濕を喜むものである。粤志に、孔雀花は箸を辟けるによしとある。

汪連仕采藥書——翠雲草、一名翠翎草、即ち矮脚鳳毛である。痔漏を治するに、胡桃藥と共に煎じて洗ふ。（汪連仕方）

【吐血を治するに神效あり】　百草鏡——女子の吐血には、翠雲草三錢を水で煎じて服す。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。
木村（康）曰ク、鳳尾草ニハ古來羊齒類ノきじのをしだ Plagiogyria adnata, Bedd. ひめかなわらび Polysticum tsusimense, Diels. ゐのもとさう Pteris serrulata, L. ほこしだ Pteris ensiformis, Burm. 等ヲ充ツ。確カナラズ。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

嘉慶癸亥の年、予は西溪の吳氏の家に寄寓したが、翌子の年、突然腹背を患ひ、紅瘰が起つて腰一面に帶のやうに蔓延した。ある者は、これは蛇纏瘡だといひ、ある者は、これは丹毒で、風火のために結した血が凝滯して起つたものだといつた。しかし予は、山へ入つて樵採したとき蟲の毒に染みたものだらうと疑つたので、蟾酥雄黃錠を塗つたが效がなく、二三日經つと瘰がいよいよ大きくなつて膿を作した。そこでまたその上に如意金黃散を敷いて見たがやはり效がない。翌日は瘡の旁にまた紅暈が起つて更に濶大するのであつた。その時ある老嫗が開屛鳳毛を用ゐるが善いと教へてくれた。卽ち翠雲草である。そこで搗汁を塗ると一夜にして立ろに消いた。この草はかやうに火毒を解するもので、また特に血を治するに神效があるだけのものではない

半嬌紅

一名老鶴紅、水雞冠といふ。立夏の後に苗が生え、一莖直上して莖は紅く、葉は尖長にして狹い。八月に六角の實を結ぶ。五月に採る。

風痺、跌撲を治す。羊肝を煮て食へば目中の紅障を退ける。

普賢線

山川典——峨眉山に産する。乃ち樹上の苔であつて、鬚蔓が引いて成長し、長さは數尺になる。或は、深谷には幾尋、幾丈のものがあるともいふ。湖湘故事の記載に羅漢條とあるものは卽ちこの物で、唐鶴湖は「普賢線は峨眉山に産する。乃ち普賢石上の青苔であつて、山僧はそれを採取し、曬し乾して上藥と爲す」といつた。

○益部方物記——仙人縚は大山中に生えるもので、苔と同種であるが、ただ巖陰の石隈に多く、鮮な翠色で、長さは二三尺、叢り垂れて縚のやうなものだ。

○敏按ずるに、西陽雜記に、仙人條は衡岳に出る。根蔕なくして石上に生え、狀態は同心帶のやうな三股で、色は綠である。やはり普通にあるものではない。條、卽ち縚であるとある。これは石上に生えるもので、藥に入れられることは疑ないものだ。

胃脘の心氣疼痛を治す。煎じて服すれば瀕死の者もみな效がある。

（和名）未詳
（學名）未詳。
（科名）未詳。
木村、康、曰ク、地衣類さるをがせノ類（Usnea）カ。

藏紅花

土紅花を附す。

西藏に産する。形は菊のやうなもので、乾して諸痞を治すのによし　試驗する方法は、一朶を滾水中に入れて見る。色が血のやうで、また入れてもやはりその通りになり、四回まで沖してその通りのものが眞物である。綱目に番紅花があり、又、大薊をも野紅花といふが、いづれもこれとは別物である。

各種の痞結を治す。每服一朶を湯に沖して服す。油、葷、鹽を食ふことを忌む。淡粥を食ふが宜し。

吐血を治す。王士瑤云く、虛、實と何經から吐く血なるとを論ぜず、ただ藏紅花を用うべきである。無灰酒一盞、花一朶で、花を酒に入れて隔湯で頓に汁を出して服す。口に入れば血が止まる。屢〻試みてみな效があつた。

土紅花　福建續志――土紅花は、大なるは高さ七八尺あり、葉は枇杷のやうで小さく、毛がない。秋に栗粒米ほどの白花を生ずる。福州、及び南恩州の山野中に生

(和名)　さふらん。
(學名)　Crocus sativus, L.
(科名)　いちはつ科(鳶尾科)
木村(康)曰ク、さふらんハ歐洲ノ原産ニシテ各地ニ栽培セラルル多年草ナリ。秋日淡紫色漏斗狀ノ芳香アル花ヲ開ク。生藥サフラン(局方)ハソノ雌蕊頭ヲ採集シ乾燥セルモノニシテ、暗橙赤色或ハ褐赤色ノ小管ヲナシ長サ三糎ニ至リ上部ニ向ヒテ擴大シ端ハ鈍鋸齒ヲ有ス。特異芳香性アリ、味ハ苦シ。さふらんニ酷似スルモノニはるさふらん Crocus vernus, All.アリ、四月頃開花シ、雌蕊ノ柱頭ハさふらんノ如ク扁平ナラズ。さふらんノ雌蕊ハ「アルフアクロチン、ベクロクロチン、「ガマクロチン」トイノ三種ノ色素ヲ含有ス。其他ピクロクロチン(結晶性苦味質)、脂肪油六%、精

じ、福州に生ずるものは芙蓉に似て細藤を作し、上が青く下が白く、根は葛頭のやうだ。藥には薄く切つて米泔に一夜浸し、更に清水に一夜浸して搗いて服す。

油〇・六%等ヲ含有ス。根莖ハ多量ノ澱粉ヲ含有ス。生藥サフランハ現時殆ド醫用ニ供セラレズ、僅カニ芳香藥トシテ用ヒラル。民間藥及賣藥原料トシテ鎮痙及通經ノ目的（・五瓦ヲ温湯ニ浸シテ服用ス。歐洲民間ニテハサフラン八—一〇本ヲ一椀ノ温湯ニ浸シ喘息、百日咳等ニ鎮靜藥トシテ用フ。P. Karrer u. H. Salomon: Helv. Chim. Acta 10 (1927) 397; 11 (1928) 513, 771; 藥誌、五五七（昭、三）七一六 E. Decher: Arch. Pharm. 252 (1914) 139; E. Winterstein u. J. Teleczky: Helv. Chim. Acta. 5 (1922) 376; Kayser: Ber. 17 (1887) 2228; G. Pierot: Chim et Ind. 14 (1925) 839; 藥誌、五三〇（大、五）三四四。〔土紅花〕（和名）未詳。（學名）未詳。（科名）未詳。

阿勃參

程賦統會に云く、拂林國に產する。

華夷花木考——阿勃參は佛林國に產する。長さは一丈餘あり、皮の色は青白く、葉は細くして兩兩相對し、花は蔓菁に似て正黃色である。子は胡椒に似て色が赤い。その枝を斫れば油のやうな汁があり、その油が極めて貴く、千金の高價である。油を疥癬に塗れば直ちに癒える。

（和名）未詳。（學名）未詳。（科名）未詳。

茄連

延綏鎮志——葉は藍草のやうで肥えて厚い。これを畦塍に種ゑてある。根は圓く

（和名）未詳。（學名）未詳。（科名）未詳。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

大きくして葵に類し、土の外に露出する。黄花を開くものだ。京師ではこれを撇藍といふ。

能く煤毒を解す

靈通草

梵庭稗珠——僧建公の徒參悟が聾を患つたとき、達公が、羅浮の靈通草を得れば瘳えると謂つたので、參悟は來博して滯留し、山に入つて玉女峯でこの草を得た。莖は長さ三尺、箸ほどだが莖の中が虛で兩頭がみな實し、頂に七葉を開いてゐるものだつた。葉を取つて水で煎じて服し、その虛なる莖を截つて兩耳を貫いてゐると、夜中に雷のやうな一聲があつて聾が遂に開いた

聾を治す

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

羅裙帶

職方典——廣西の南寗府に産する　葉は滑で嫩く、長さ二寸ばかり、帶に似たも

のだ。

折傷を治す。手、足を損じたるには、葉を取つて火で煨き、微し熱して貼れば直ちに癒える。

（和名）たかわらび
（學名）Cibotium Barometz, Sm.
（科名）へご科（桫欏科）
木村、康日ク、狗脊ノ條、金毛狗脊參照。

金狗脊

職方典——粤の南雄府に産する。卽ち蕨の根であつて、形は狗脊のやう、毛は狗の毛のやうなものだ。黄と黑との別がある。

諸瘡の血出を止め、頑痺を治す。黑きものは蟲を殺すに更に效がある。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

雪裏開

雪裏花を附す

雁山志——性は大寒である。深谷中にあるものだ。能く砒毒を解す。冬期に花を開くから、かく名けたのである。

【喉瘡、熱毒を治す】萬氏家抄——根の搗汁を取つて服す

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

雪裏花　朱楚良——鎮海にゐた時、その地の者が雪裏花といふものを採つてゐた。冬期嚴寒の際にこの花が始めて生ずる。招寶山の龍潭の旁の環渚に發苗してゐるので、甚だ短小で六月雪のやうな狀である。高さは二寸ばかりに過ぎない。毎雪時に豆ほどの大いさの白色の花を開く。その地の者はそれを採つて乾して藥に入れる。

【痔に敷く】雪裏花を末にし、痔の濕れるものには乾いたまま糝り、乾けるものには麻油で調へて搽る。一二回でその痔は消し縮むものである。

苦草

綱目の水草類に苦草を記載して『湖澤中に生じ、長さ二三尺、形狀は茅、蒲の類のやうだ』といひ、主治は、白帶、又、乾茶を嗜んで顏色の黄なるを治すと二種の病を擧げたが、その氣味、藥性はまた記載を缺いてゐる。此に張璐玉の本經逢原に依つて補つて置く。

苦し、溫にして毒なし。香は竄して足の厥陰、肝の經に入り、氣中の血を理す。産後に煎じて服すれば、能く惡露を逐ふ。ただ味の苦が胃氣を伐ひ、竄して腦を傷

めるので、膏粱の美食に慣れた者や、柔脆な食物に慣れたものがこれを服すると、減食し、瀉を作すものである。過服すれば晩年に多く頭風を患ふ。昔の人は產兒制限の目的で、苗子三錢を月經後に麴淋酒で服したといふから、受胎せしめず、血を傷めるの性が想像される。

山馬蘭

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

甌江志――別名を一枝香といふ。按ずるに綱目の馬蘭の條下の集解の註に「又、山蘭といふがあり、山側に生ずる。劉寄奴葉に似て椏がなく對生せぬ。花心は微に黃赤である。大いに血を補す」といつてあるが、その痰を治し塞を開くの功をば言つてない。

○百草鏡――山馬蘭は疔を治するに極めて效あるところから、また疔見怕とも名ける。その蔓が到る處に延びて節上に根があるところから、また鬼仙橋と名ける。いづれも俗見で、隨義の呼稱である。

風痰、喉閉、驚風を治し、疔に敷き、痛を定める。擣汁を小兒の蛇瘰に塗り、煎

湯で痔腫、疥痒を洗ふ。(百草鏡)

【風痰喉閉】 永嘉縣志――山馬蘭の根を取つて搗き碎き、人乳に浸し、男の病には女兒に哺する婦人の乳を用ゐ、女の病には男兒に哺する婦人の乳を用ゐて少頃の間浸し、病人を倚子の上に仰臥させて頭を倒に垂れさせ、その乳汁を男には左、女には右に鼻中に滴入する。喉中に痰涎があつて壅塞するを候ち、直ちに轉身し頭を垂れ口を開いて痰の自ら流れるに任せる。痰が完く出て病が癒える。但しこの藥を鼻に入れて後は、病人に一聲も出すことを許さない。痰は卽ち止む。

【小兒の驚風で牙關緊閉するもの】 煎汁を喉中に灌入すれば癒える。

【鎖喉風で頭面、頸項倶に腫れ、飮食の下らぬもの】 傳信方――白馬蘭を搗き爛し、井華水で濃汁を取り、白酒漿を均調して服す。喉を下れば立ろに效がある。

【小兒の頸項、腿、肋縫中の潰爛】 養生經驗方――馬蘭汁で六一散を調へて搽れば癒える。

○馬蘭を搗いて膏にしたものは、能く大人の兩腿赤腫を治す。流火、或は濕熱が經絡に伏し、皮面上が紅くなく、腫れず、その疼み異常にして、病人はただ腿が熱

いと絶叫するが、他人が按じて見ると極めて冷えてゐる。かかる病を伏氣の病といふ　右の膏を搽れば立ろに癒える

【流注】顧錦州傳方――山蘭を採つて煮熟し、麻油、醬酒で蔬にし、副食物として食ふ。半月にして自ら消する。

野馬蘭

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

百草鏡に云く、馬蘭は氣が香しくして蔬となるものだが、この種は野生に係るもので、その氣は臭くして食はれない。三月に發苗し、莖は赤くして粗く、秋簇を成して細碎な白花を開く。三月に採る。その功の能く血を涼することが馬蘭と同じなところからこの名がある。莖、葉、根倶に藥に入れる。

性は寒である。血を涼し、濕熱、蛇吸、小兒の瘰瘡を治す。

獨脚馬蘭

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

李氏草秘――この草は河澤の邊に生じ、葉は柳のやうで葉が對し、梗が圓い。

【發背、諸腫毒、熱癤を治す】搗汁一杯に酒二杯を入れて服す。未だ膿とならぬものは消し、膿あるものは出す。極めて重きものは半碗、或は一碗を服し、再び劑を用ゐ、渣で罨する。

玉淨瓶

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

俗に猪屎草、氣殺郎中、白山桃と名ける。春期に發苗し、葉は尖長で排生し、莖には白い紋斑點があり、高さは數尺、葉は節に對して生え、夏細かな白花を開き、その花は簇を成して華蓋のやうだ。結實は萊菔子ほどの大いさで靑くして開く、霜が降りて後に紅くなる。その根の肥えて白いものを十月に採つて藥に入れる。

味甘し、性は平、和である。血を行すに效があり、勞傷、跌撲を治す。

汪連仕草藥方——氣殺郎中草、一名靑背仙禽、又、疔見怕と名け、山間の住民は疔頭草と呼ぶ。その性は淸涼にして火を降し、癰毒を消し、腫を散じ、疔根を拔く。

紗帽翅

（和名）未詳。
（學名）未詳。

（科名）未詳。

臺海采風圖――この草は一莖に數十の花があり、その花の色は黄である。藥に入れるには葉を用ゐる。癬を治す。

石風丹

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

石上に生ずる。能く瘡毒を療する。雲南の蒙化府に産する。

象鼻草

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

職方考――雲南府に産する。丹毒、跌撲損傷を治す。

透骨草

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。
木村（康）曰ク、A. Henry ハ毛茛科ノ Clematis aethusa-

珍異藥品に、形は牛膝のやうだといつてある。綱目では、有名未用下に透骨草を附してあるが、やはりその形狀を詳にしてない。その引用してある治病の諸用に據

efolia, Turcz. ナ充ツ。

つて見ると鳳仙草をいつてゐるのだ。蓋し鳳仙にも透骨草なる名稱はあるが、これとは迥に別物である。

熱毒を療するに良し。（珍異藥品）

【瘋氣疼痛を治し、遠年と近日とに拘らぬ】家寶方——透骨草二兩、穿山甲二兩、防風二兩、當歸三兩、白蒺藜四兩、白芍三兩、稀薟四兩を莖を去つて葉を用ゐ、九蒸九曬する。海風藤二兩、生地四兩、廣皮一兩、甘草一兩、已上を末にし、猪板油一觔を用ゐ、煉蜜で梧子大の丸にし、朝、夕各五錢を酒で服す。

【腿疼の忍び難きもの】醫學指南——核桃肉四個、酸葡萄七個、斑蝥一個、鐵線透骨草三錢を水で煎じて熱服する。汗を出して癒える。風なると濕なるとを問はず、いづれも效がある。

【痞を治す】醫學指南——透骨草一味を患部に貼り、一炷香、或は半炷香の時間を置いて揭げ去る。皮上に起泡して癒える。

【癱瘓を洗ふ祕方】醫學指南——蛤蚧一個、麻黃、川椒、透骨草、防風、大鹽各四兩、白花蛇二錢、艾一把、槐枝一條、川烏、草烏各二兩、紫花地丁一觔を水二桶で

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

煎じ、大紅を半ば地に埋めてそれにその煎水を入れ、溫なる間にその上に坐して洗ひ、再び水二桶で渣を煎じ、冷えた時を候つて再びその水を熱して入れる。或は一日、或は一夜試み、出る時に臨んで水を數回頂心に澆ぎ、再び芥末を患部に稀貼して絹で裹み、熱坑上に睡り、汗の出盡きるを度とする。早起、飲食して臥內に就くを忌めば妙である。

汪連仕采藥書――透骨草は馬鞭の形に彷彿たるもので、大いに能く堅きを軟にし、汁を取る。龜板を浸すと能く化して水とする。金瘡を合し、骨に入つて髓を補し、兼ねて難產を治す。專ら膏、丹を煉るに主とする。按ずるに、鳳仙の白花のものをもやはり透骨白と名けて風を追ひ、氣を散じ、紅花のものを透骨紅と名けて血を破り、胎を墮す。やはり透骨なる名稱はあるが、これと同物ではない。

不死草

珍異藥品――柳州に產する。高さは一二尺、狀態は茅のやうなものだ。これを食へば天命を延べる。暑時に盤中に置けば食物が腐らない。幷に蠅を辟け

得る。

拳黃雞子

珍異藥品――一名水蘿蔔(すゐらふ)といふ。

霍亂吐瀉、瘧疾を治す 一錢づつを嚼み碎いて水で飲下す。

(和名) 未詳。
(學名) 未詳。
(科名) 未詳。

雞脚草

汪連仕采藥書――卽ち雞爪花(けいさうくわ)である。その子を勝光子と名ける。

星翳(せいえい)を去り、目を明にし、肝を淸す。

根 血を行らし、風を治し、大痲瘋、鶴膝瘋、雞爪風を治す。

(和名) 未詳。
(學名) 未詳。
(科名) 未詳。

刀鎗草

粤西叢載――この草は葉が細くして花は黄である。

金瘡血を止める。

(和名) 未詳。
(學名) 未詳。
(科名) 未詳。

苦地膽

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

粤西(えつせい)に産する。
葉は熱毒瘡に貼るによし。

箭頭風

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

粤西叢載――花が箭頭に似てゐる。
職方典――廣西の南寧府の山中に生ずる。花は箭鏃(せんぞく)のやうだ。
【風を治す】四肢骨節の痛むには、水で煎じて薫洗すれば癒える。
【痰を消し、氣急を治し、喘(ぜん)を定むる妙方】王癸南方――箭風草を取つて鮮肉内に置いて煨熟(わいじゆく)し、――淡きを要し、鹽、醬を用ゐることを忌む――取出して草を去つて肉を食ふ。

紅果草

（和名）未詳。
（學名）未詳。

（科名） 未詳。

叢栽に云く、二種あつて、果が大きいもので葉の略ぼ尖つたものは藥に入れられない。又、果が小指の頭頂ほどで、葉は邊が圓く、花梗に軟刺のあるものがある。これを藥に入れて用ゐる

牙痛、酒刺を治す。

龍柏藥性考――紅果草は廣西に産する。葉は圓くして刺が弱く、味は辛い。煎湯で牙疼を漱ぐ。

勾金皮

（和名） 未詳。
（學名） 未詳。
（科名） 未詳。

珍異藥品に、形未詳といつとある。

無名腫毒を治す。惡毒には醋で磨つて塗れば消する。牙疼には、皮で牙縫中を塞げば定まる。咽喉蛾には、三五釐づつを細く嚼んで嚥下する。

琉璃草

（和名） 未詳。
（學名） 未詳。
（科名） 未詳。

始興の玲瓏巖に産する。莖は芹のやうで、梗は肇慶風藥に相類する。これを食へ

ば風を治す

仙人凍

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

一名涼粉草といふ。廣中に産する。莖、葉は秀麗で、香は藿、檀のやうだ。汁で米粉を和して食へば饑を止める。山間の住民はこれを連畝に種ゑて、暑中になると售つてゐる

○職方典――仙人草は、莖、葉は秀麗で、香が檀、藿に似てゐる。その汁を取つて羹に和す。その堅きは冰と成るものだ。惠州府に産する。

饑を療じ、顏を澤（つややか）にする。

金絲草

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。
木村（康）曰ク、A. Henry ハ金絲草ニおとぎりさう科ノびやうやなぎ Hypericum chinense, L. (H. aureum, Lour.) ヲ充ツ。

陝西の慶陽に産する。

性は涼、味は苦であつて、能く瘴を去り、諸藥の毒を解す。

紅珠大鋸草

臟脹、黃疸を治す。王安卿採藥志——大鋸草は、毒を敗り、腫を消し、火を清する。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

金剛草

肺癰、痔漏、疔腫を治す。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

臺七里

臺灣志——即ち七里香であつて、臺地に產するものは能く烟瘴を辟ける、種ゑてある土地には蚊蚋が生じない。

瘴を辟ける　焚けばその烟は蚊蚋を化して水にする。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

番薏茹

（和名）未詳。
（學名）未詳。

（科名）未詳。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

采風圖――一名番苦苓、一名心痛草といふ。種は荷蘭に出たものだ。葉は秀て嫩く、雲板に似てゐる。曬し乾せば香しい。結子は青紅色である。

一切の心氣痛を治す。

馬尾絲

臺志略――この草は、葉は細くして長く、花は紅くして小さく、根は茘子核のやう、色は黄にして髮のやうな細絲が多い。鮮なると乾けるとに拘らず、いづれも用ゐられる。

蛇、蜂の諸毒を治す。

方正草

福建續志――永春州に產する。葉は狹くして長く、藍色で、四方に平分して莖に攢つて上り、その實は六瓣である。

金蠶蠱を治す。

七仙草

三才藻異――葉は尖つて細く長い。杖瘡を治す。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

大母藥

四川通志――雪山の石塊上に出る。雌、雄の二種あつて、出れば必ず竝(なら)んで出る。元氣を補し、髓、脈を益し、功は人蔘(にんじん)と同じ

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

藍布裙

四川通志――草本のもので、松潘衛(しようはんえい)に產する。脚氣を治し、筋骨を壯にする。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

露筋草

（和名）未詳。
（學名）未詳。

藻異――施州に生ずる。高さは三尺、春苗が生えて直ちに花が咲く。子は碧色で彫(しぼ)まないものだ。
蜘蛛傷瘡を治す。

（科名）未詳。

百里奚草

藻異――羖羊齒(こやうし)と名ける。陰地に産するもので、秋海棠のやうだ。味酸し。牙疼を治す。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

黄德祖

藻異――德祖とは石公の號である。この草は圯上(いじやう)に生ずるところからかく名けたものだ。葉は尖刀のやう、獨梗の莖で、花は紅白、頭は何首烏(かしゅう)のやうだ。
瘡癬を治す。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

斑節相思

（和名）未詳。
（學名）未詳。

諸羅志――枝、葉は薄荷に類して大きく、味は艾に似てゐる。
性能く毒を解す。

（科名）未詳。

野丈人

藻異――葉は芍藥に似て花は木槿に類し、一寸餘の白毛が披下して白頭翁のやうだ

腸垢を去り、積滯を消す。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

戴文玉

藻異――戴文玉とは草の名で、金釵草のやうで黄色なものだ。
血疾を療ずる

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

金果欖

廣中に産する。百草鏡に云く、廣西に産する。性は寒であつて皮に疙瘩があり、

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

味は苦く、色は黄である　陳廷慶云く、内肉の白きものが良し。但し二種あつて、一種は味が甚だ苦く、一種は味が微し苦い。藥に入れるには味の苦いものが良し。

性は涼であつて、毒を解す。百草鏡に云く、凡そ腫毒の初起には、好醋で磨つて敷き、患部の頭邊を露出して置く。初起のものは消し、已に成つたものは潰れる。咽喉一切の症には、煎じて一二錢を服すれば效がある。喉中が疼爛するものの場合には、三錢を末にし、冰片一分を加へて吹く。

藥性考——金楛欖は廣西に產し、藤に生ずる。根の堅く實してゐて重く大きいものが良し。藤もやはり用ゐられるもので、味は苦く、性は大寒であつて、毒を解す。咽喉急痺、口爛、目痛、耳脹、熱嗽、嵐瘴、吐衄には、いづれも磨つて服するがよし。疽癰發背、焮赤疔瘯、蛇蠍蟲傷には、いづれも磨つて塗るがよし

柑園小識——金苦欖の種は交趾から出たもので、近頃は廣西蒼梧縣の藤邑に產する。蔓生で、土中に結實し、橄欖のやうで皮は白朮に似てゐる。剖いて見ると色が微黄だ　味は苦し、土人は每に山を鑿り、石を穿つこと或は一丈ばかりも深く掘つてこれを取る。余の父は嘗て二十箇を購入して、疔、喉等の症のもの數百人を癒し、

起死回生の功があつた。これは廣く傳へて置くべきものだから、此に記して本草の缺を補つて置く

性は寒、味は苦し。能く内外の結熱、遍身の惡毒を祛り、瘴癘を消する。雙、單鵝、及び齒痛には、薄片に切つて含めば極めて神效がある。磨つて疔瘡腫毒に塗れば立ろに消する。（椿園小識）

（和名）はげいとう
（學名）Amaranthus gangeticus, L.
（科名）ひゆ科（莧科）
木村（康）日ク、從來本草家ハ雁來紅ニはげいとうヲ充ツ。上海等ニ於テハ野菜市場ニ夏季嫩苗ヲ鬻ギ食糧トナリ比較的美味ナリトス。

雁來紅

一名老少年といふ。用ゐやうのないものだが、藥に入れたのはただ急救方にある腦漏を治する法だけであつて、老少年の煎湯で鼻中を熱薰し、然る後に湯を二三日服するが大に妙である。冬則間は根を用ゐるとある。瀕湖の綱目には、青葙の條下に雁來紅を附錄してあるが、やはり主治がなく、土宿眞君の本草に曰く、雁來紅は汞を制すとある。

膏子眼藥として遠年の星障を去る。（眼科要覽）　老少年、銀杏、部殼を君とし、官濟根——大葉のものが佳し——千里光、雄楊梅樹根皮を臣とし、煎じて濃膏に

し、量を計つて廿行、氷片を加へて製する。又ある方では茶樹根皮を加へる。

花鏡——老少年は、その苗の初めて出たときは莧の莖、葉に似て、穗子は雞冠と異はない。深秋に至つて本が六七尺に高くなると、脚葉が深紫になつて頂の葉が大いに紅くして鮮麗になり、美しいものである。久しければ久しいほど姸麗で花のやうだ。秋色中での最も佳なるものである。又、一種の老少年は、頂が黃紅、脚葉が綠であるだけの別である。一種に、枝頭に亂葉が叢生し、紅、紫、黃、綠相兼ねて雜出するものがあつて、これは十樣錦と名ける。根下の葉が綠で頂上の葉の純黃なる一種は雁來黃と名ける。

天燈籠草

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

一名山瑚柳といふ。形は辣茄に似て葉が大きく、本の高さは一尺ばかり、花の色は白く、結子は荔枝のやうで、外が空で內に綠子があり、霜を經ると紅くなる。京師では紅姑娘と呼んでゐる。○按ずるに、この草は主治が夥しく多いけれども、ただ咽喉だけがその專治であつて、これを用ゐれば功果最も捷である。綱目には主治

下に記載を缺いてゐるから此に補つて置く。

性は寒である。咽喉腫を治するに神の如きものである。

汪連仕采藥書――金燈籠は、園藝家は天燈籠と稱して盆に植ゑて景を作り、更に珊瑚架と稱する。

性能く火を淸し、鬱結を消し、疝を治するに神效がある。一切の瘡腫に敷く。專ら鎖纏喉風を治し、金瘡腫毒を治す。血崩を止めるには酒で煎じて服す。

又、反手で根を取つて七株を、梗、葉を去つて洗淨し、鬚を連ねて切り碎き、酒二碗で鴨卵二箇と煮て酒と共に食へば、痄を治すること神の如くである。

子 藥に入れば毒を保つて大ならざりしある（王安采藥方）

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

見腫消

一名土三七、乳香草といひ、越地方では奶草といふ。初め苗が生えたときの葉は面が青く背が紫で、葉は羊角菜に似て岐が多く、秋小さい菊のやうな黃花を開き、垂絲が美しいものだ。根は芋魁に似てゐる。人家で多く栽培する。

○按ずるに、綱目に見腫消があつて『その葉は桑に似てゐる。癰腫、狗咬を治す』とあるが、これは別の一種のやうである。

○採藥錄――見腫消は溪澗中に生じ、葉には三角があり、枝梗はいづれも青く、根もやはり青色で、形は菖蒲根のやうだ。性は涼であつて、諸瘡毒を治し、全身に行つて血を活し、風を追ひ、氣を散ずる。これもまた一種で同名異物のものだ。

草寶に云く、跌打損傷を治し、腫を消し、瘀を散ずるの要藥である

百草鏡に云く、乳癰、腫毒を治し、金瘡に血を止め、杖丹、棒瘡、喉癬、雙蛾、咳嗽を治す。

【急、慢驚風】延綠堂方――土三七を、春、夏は葉を用ゐ、秋、冬は根を生ゐ、搗汁一鍾に水、酒、漿を和勻して灌入すれば自ら效がある。

【楊瘌毛の肉に入つて痛むもの】祕方集驗――土三七、また金不換とも名ける。その葉を用ゐ、擣き爛して立ろに塗れば止む。

千年老鼠屎

（和名）未詳。
（學名）未詳。

（科名） 未詳。

紫背天葵の根である。百草鏡に云く、二月に發苗し、葉は三角酸のやうで陰に向ふものだ。紫背を佳しとする。その根は鼠屎のやうで、外が黒く内が白い。三月細くして白い花を開き、結ぶ角も細い。四月に枯れる。按ずるに、東壁の綱目には、莵葵下の註に『卽ち紫背天葵である』といひ、主治としてただその苗を說明してあるが、その根の功用には及んでゐなかつた。此に補つて置く。――金華、諸曁の深山の石罅の間に產するものは根が大きくして佳し。春生じて夏枯れるので、秋、冬はあることが罕だ性は涼であつて、熱を淸す。癰疽、腫毒、疔瘡、瘰癧、跌撲、風犬傷、七種の疝氣、痔瘡、勞傷を治す（百花鏡）

【瘰癧の敷藥】 醫宗彙編――紫背天葵子を、一歲に對して一粒の割合で用ゐ、鯽魚と共に搗爛して敷けば立ろに消する。

【瘰癧】 救生苦海――千年老鼠屎を搗き碎き、好き酒と共に瓶に入れて一炷香の間煮て、三日隔て隨意に飮み、醉ふて被を蓋ふて汗を取る。數回にして自ら效がある。

○黃賓江傳の天葵丸――專ら瘰癧を治す。紫背天葵一兩五錢、海藻、海帶、昆布、貝母、桔梗各一兩、海螵蛸五錢を共に細末にし、酒糊で梧桐子ほどの大いさの丸に

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

し、毎服七十丸を食後に溫酒で服す。この方は桔梗を用ゐて諸氣を開提し、貝母で毒を消し、痰を化し、海藻、昆布で堅核を軟にするのであつて、瘰癧を治するの聖藥である。

【諸疝の初起】經驗集――凡そ疝の初起には、必ず寒熱を發して疼痛し、囊癰と成らんとするものである。荔枝核十四箇、小茴香二錢、紫背天葵四兩を白酒二壜で蒸して頻りに服すれば癒える。

辟瘟草

魚鼈金星、鳳尾金星を附す。

一名鵝脚金雞といひ、又、鴨脚金星と名ける。これを佩帶すれば疫氣を辟け得る。近頃藥種店で見るものには、小葉にして短く狹いものと、大葉にして長く狹いものとある、いづれも辟瘟草ではないのであつて、小なるものは七星草と名け、俗に骨牌草、惟無五六と呼ぶ。蓋し五六とは天地の中に結し易からずとの意味である。石樹の間に寄生する。大なるものは劍脊金星と名け、長さは一二尺、山溪の澗旁に

（和名）未詳。

生じ、老いると葉の背にみな星が起るものだ。この二種は東壁の綱目に已に收載してある　辟瘟草は、葉は鴨脚のやうで三岐があり、一莖に一葉のもので、氣味が淸香であるが、老いると星が出て香氣もやはり減ずる

○百草鏡に云く、鴨脚金星、卽ち辟瘟草である。葉は鴨脚のやうで大きくして薄く、背に星點を生じてゐて、八九月の間に至ると星が老いて黃になる。乾してもその氣の香洌なることは若葉と變らない。甚だ老い過ぎたもの、及び水に過つたものは香しくない。端午に嫩いものを採つて陰乾して用ゐる　火を見せてはならぬ。

性は平、味は苦であつて、氣は香しい　傷寒瘧痢、風氣腫毒、時氣惡氣を治し、邪風を散じ、乳癰、熱瘡、小兒の痘、眼翳を治す。喉閉で蛾を生じたるには、金鎖匙汁、醋と共に漱ぐ　痧脹を治す。香が竄して經絡を疎し、翳を治す

百草鏡――痧脹を治す　鴨脚金星草を曬し乾して末にし、少量を取つて鼻中に嗜ふ。或は煎じて服するもよし。

小泉驗方――疔腫には、鴨脚金星草を酒で煎じて一服すれば消する。

魚鼈金星　背陰の山石上に生ずる　立夏の後に發苗し、根は纖線のやうに細くし

（學名）未詳。
（科名）未詳。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

て石上に蔓延し、葉は節に對せず、一は長く一は圓い。長いものが魚であり、圓いものは鼈であつて、魚葉は霜を經ると老いて背に金星が起るが、ただ鼈葉はさうならない。また西湖の飛來峯の絶頂にも生える。

臌脹、瘰癧、火毒症を治す。採藥志に云く、性は涼である。痰、火毒を治し、上部に行る。（采藥方——痞塊、痰核、痄腮を消す）

永師方——烟筒で戳て喉を傷めたるを治す。魚鼈金星草を煎じた濃湯で喉中の傷を嚥へば立ろに疼が止んで癒える。（永師方、一には永寧傳方と書いてある）

鳳尾金星　根は竹根に類して黄色で鬚があり、葉は建蕙に類して長短一尺に滿たず、春期に發苗し、背に兩行の點子があり、相對して數十粒が極めて密になつてゐる。秋霜の後には黄になる。石山下に生じ、その根は蔓生する。

○百草鏡——金星鳳尾は、その葉は細碎で形が鳳尾に似てゐる。三月に發苗し、葉の背に星があつて細い白點子を作し、秋後には黄になる。古墻、石塹中の日に背いた場所に生えたものが佳し。ただ實熱症だけに用ゐてよし。

性は涼である。吐血、咽喉火毒、諸丹毒、發背癰疽を治す。百草鏡——癰疽の陽

毒に非ざるもの、及び金石藥の毒に非ざるものは用ゐることを戒める。謝雲溪云く、性は太だ涼である 男、女は服することを忌む。效を一時に取るけれども、但し精血に寒を受け、生殖不能になる虞のあるものだ。○寧德縣志――白脚のものは痢を治す。○家寶方――喉癬を治す。金星鳳尾草の搗汁に米醋數匙を加へて和勻し、竹筎を新綿花で裹んだものに汁を蘸けて患部に點ける。稠い痰が筋に隨つて出るものだ。また喉風を治す。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

水葺角

華陀中藏經――狀態は鬼腰帶のやうな竹の小窠子であつて、三四月に生じ、黃花を開き、葉は百合のやうだ。六七月に採る。兩浙では合蒴と呼ぶ。

吹奶を治す。水葺角を多少に拘らず新瓦上で焫き乾して末にし、就寢時に二錢を酒で調へて服す。翌日は癒える 已に破れたものも略ぼ黃水を出してやはり效がある。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

老鴉蒜

一名銀鎖匙、一名石蒜、一枝箭といふ。百草鏡に云く、石蒜は春初に發苗し、葉は蒜に似、山茨菰の葉と相似て背に劍脊があり、四散して地に布く。七月に苗が枯れて中心から箭幹のやうな高さ一尺ばかりの莖が抽き出て、莖の端に花を開き、四五簇を成し、六出で山丹のやうに紅い。根は蒜のやうで、色は紫赤、肉は白い。小毒あり、喉科を治す。綱目には主治の記載を缺いてゐる

○金士彩云く、これは吐藥であつて、且つ人をして瀉せしめる。喉風、痰核、白火丹、肺癰を治す。酒で煎じて服す。

【對口の初起】家寶方——老鴉蒜を搗き爛し、紙を隔てて貼り、乾くときは頻りに換へる。その毒は自ら消する

【雙單蛾】神醫十全鏡——老鴉蒜の搗汁を生白酒で調へて服す。嘔吐して癒える。

【痔漏を洗ふ】沈惠如傳方——老鴉蒜、鬼蓮蓬を搗き碎き、多少に拘らず好酒で煎じ、瓶内に置いて先づ熏じ、半日を待つて湯が溫んだとき傾け出して洗ふ。三囘

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。
木村（康一）曰ク、剪刀草ニおもだか科ノおもだか Sagittaria sagittifolia, L. ヲ充ツルモノアリ。（名彙、三二一）

にして全く癒える。

【痰火氣急】王都官方――蟑螂花根、卽ち老鴉蒜を洗つて焙じ乾して末にし、糖で調へて一錢を酒で服す。

玉如意

四方如意草を附す。

一名箭頭草、剪刀草、大風草といふ。百草鏡に云く、山間、或は田塍に生ずる。紫、白の二種あつて、紫花のものをば金剪刀と名け、白花のものをば銀剪刀と名ける。藥に入れるには白花のものが良し。葉は人家で盆栽にしてあるものと異らないが、但だ花が小さく、葉が狹く長くして尖があるだけ微しの別がある。

○敏按ずるに、山野の間の如意草は、葉が上が尖つて下が圓く、深青色であつて、人家で種ゑるものと異はないが、ただ葉の色がやや深綠なだけである　その花もやはり紫、白の二種あつて、至つて狹く長い葉のものは乃ち地丁草、所謂銀剪刀で、白花のものがそれである。金剪刀とは紫花のものがそれであつて、如意草とは一類

の二種である　その性情、功效はやはり甚だ遠くない

葛祖方——痞塊、瘡毒を治し、風を追ひ、氣を理し、疫を逐ふ　肺癰

〔乳癰の初起〕　百草鏡——玉如意草一兩を用ゐ、白酒で煎じ、飽肚の時に服す　初起のものは二服で消する　膿と成つたものは兩劑で必ず潰し、已に潰したものは三服で容易に斂り、疼痛するものはこれを服すれば能く止む

〔乳癰、疔瘡〕　救生苦海——白花如意草、一名銀剪刀、田野、山間に生えたもので、人家で種ゑたものに比較して葉が狹く、花の小さいものである。その搗汁を服し、渣を患部に敷く

〔小兒の背に泡を生じたるもの〕　集驗——小兒の背上に白泡が起き、纍纍として珠を綴るが如く、一二日にして破れて膿血が外に流れ、甚しく癢く、一个處好いと思ふと一个處にまた起るには、如意草を搗き爛して敷き、長い布で縛定して置く。一夜にして癒える

〔脚上に瘡を生じたるもの〕　集驗——脚上に瘡を生じ、亂孔が蜂窠のやうになりたるを治す。如意草を用ゐ、搗き爛して敷く　或は乾いた如意草を末にし、雞子清

（和名） 未詳
（學名） 未詳
（科名） 未詳

で調へて敷くもよし。

按ずるに、この種はまた地丁草と同じくなく、地丁は小さいがこの種は大きく、地丁は葉が深綠だが、これは葉が淺綠である　あるひは、家種の如意草にもやはり白花のものがあり、それが眞の玉如意草なのであつて、野生のものは、あれは銀剪刀なのである。性は劣るもので、家種のもののやうに良いわけに行かぬといふものもある。

【痘兒の氣急】　劉氏驗方　白花地丁を多少に拘らず湯に煎じて服すれば立ろに止む

【炎天火痘】　劉氏驗方――暑期に出る痘に火痘といふ一種がある　全身みな紅くなるものがそれである。白花地丁を用ゐ、搗汁を白酒に沖して服すれば立ろに解す

四方如意草　汪連仕草藥方――その葉は四處に分開するもので、一名を地靈芝といふ。乃ち瑞草である。四方に花を開き、莖多く、葉繁り、如意のやうだ

神、鬼の二箭を治し、血を活し、風を追ふ

水楊梅

一名金勾葉、家母利、籐勾子といふ。この草は楊梅のやうな紅子を結ぶもので、小兒がそれを採つて食ふ　綱目に水楊梅があつて、その實は椒に類するといつてあるが、それは地椒のことで、これとは別の一種である。

葉を牙疼に點ける　葉の搗汁を取つて眼角に點け、香茶一鍾を飮んで少頃の間目を閉ぢれば、牙疼が止む。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。
木村（康）曰ク、從來本草家ハいばら科ノだいこんさう Geum japonicum, Th. ヲ充ツ。

野靛青

一名鴨青といふ。處處にある。莧菜のやうで、葉が尖つて中心に青暈がある。

結熱黃疸を治し、瘡毒疼痛を定め、肌を生じ、肉を長ずる。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

困來草

劉羽儀經驗方――この草は又、水灌頭と名ける。子は桑子のやうだが、但し桑子

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

は長くしてこの子は圓い。又、茶紙子のやうでもあるが、但し茶紙子は紅くしてこの子は綠である。この區別を明にすることが必要だ。

【黄疸を治す】 困來草、石芫荽——即ち鵝兒不食草である——この二味を洗淨して搗いた汁を陳酒一大鍾に冲して服す。四五回で自ら癒える。

走馬胎

粤東の龍門縣の南困山中に產する、廟子角巡司の所轄に屬する山で、大いさ數百里、多くは低槽深峻で、巖穴にはいづれも虎豹が藏れてゐる。藥はその虎穴に產するのだ。形は柴根の乾いたもののやうで內が白く、嗅げば淸香があり、研ると膩細にして粉のやうになり、座ろに幽香を噴き、頗る甜淨な氣が人を襲ふものだ。

粉に研つて癰疽に敷く。肌を長じ、毒を化し、口を收めること神の如くである。

(和名) 未詳。
(學名) 未詳。
(科名) 未詳。

蒼耳子油

物理小識——山東に出る。

(和名) をなもみ。
(學名) Xanthium Strumarium, L.
(科名) きく科(菊科)
木村(康)曰ク、をなもみノ果實ナ蒼耳

子トス。即チソノ果實ヨリ搾取シタル油ナリ。若茸子ノ條參照。
（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

瘋を治す。

飛鸞草

秋景盦雜記――飛鸞草は、錢塘葛嶺の後山の金鼓洞に生ずる。洞には道士が庖湢をなしてゐる。右にその泉を渉つて洞の暗い處へ入り、仰ぐと一線の天光が見えて、その光中にこの草が見える。形は飛鸞のやうで頭があり、翅があり、三尾があり、雪中に五色の花を開き、中から一莖が抽き出て直上に伸びて花を著ける。葉の形狀は金絲荷葉草のやうで、表面は綠、裏面は銀紅色である。光りあるものは治病に用ゐ得るものだが、黑毛があり、花を開かぬものは斷腸草であつて、能く人を殺すものだ。誤つて採つてはならない。故に必ず雪中に花を見るものを眞なるものとなすべきである。根は老薑のやうなものだ。藥に入れるには葉を用ゐる。

性は上升し、味は苦、寒である。咽喉、及び口内の諸病を治し、葉七片を取つて滾水に冲して服すれば立ろに癒える。――この草は味は苦、寒であるけれども、性は反つて下降せずして獨り上升する。物に遇ふと直ちに沾ふところを見ると、竄烈なることが首肯かれる。この草を水中に

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

冲し、指にそれを蘸けると苦寒は全く指上だけに在る。その水は淡であつて、唇を沾せば唆は唇上だけに在り、水は咽下しても味は喉に入らない。故に咽喉を治するには、必ず小管で喉中に灌ぎ、或は病人をして口を大いに張らしめて匙で灌入し、直ちに喉に達せしめるやうにすれば味がその患部に觸れるものだ。金鼓洞近邊の背陰の地にやはりある――

青烟白鶴草

汪連仕云く、この草は海島に生ずる。その性は最も氣を行すもので、味は甚だ猛烈である。色は翠のやうに綠だ。能く氣分、血分に入り、積氣を消し、鬱血を散じ、筋骨を接ぐ。土人は膏に煎じたもので病を療じ、內外一切の症を治す。その汁は即ち阿魏である。近頃方士は後營打枝巷の葉家園で樹脂を取り、この物の僞物を造つて射利行爲をやつてゐる。又、秦皮を以てこれに代へ充てるものもあつて、眞なるものはやはり稀に見るものだ。

本草綱目拾遺第四卷　終

本草綱目拾遺草部

第五卷

錢唐　趙學敏　恕軒氏輯

本草綱目拾遺草部下目錄

草部 下

(和名) 無シ。
(學名) Fritillaria sp.
(科名) ゆり科（百合科）
木村(康)曰ク、浙貝ハ四川ノ貝母即チ川貝ニ對シテ浙江ニ產スル貝母ヲイフモノトス。而シテ浙貝ハ川貝ニ比シ大形ニシテ且ツ前者ノ圓錐形ニ近キ形ナルニ反シ上下ニ扁壓サレ、著シク形ヲ異ニス。勿論 Fritillaria ノ屬或ハ F. verticillata, Willd. ノ一變種位ノモノナランモ兎ニ角あみがさゆりニ起因スルモノニハアラザルモノト考フ。貝母

浙貝

土貝を附す。

今は象貝と名け、心を去つて炒る。百草鏡に云く、浙貝は象山に產し、俗に象貝母と呼ぶ 皮は糙く、味が苦く、獨顆で瓣がなく、頂が圓く、心が斜である。藥に入れるには圓きものを選び。白くして小なるものを佳しとする。

○藥闇齋云く、寧波、象山に產する貝母はやはり兩瓣に分れてゐる。味は苦くして甜くない。その頂は平にして尖らない。川貝の荷花蕊に象たもののやうには行かぬものだ。土人は象貝中から川貝の形に似たもの一二を揀り出し、水で浸して苦味を去り、曬し乾して川貝として賣つてゐるが、但し川貝と象貝とは性がそれぞれ同じくない。象貝は苦く、寒であり、毒を解し、痰を利し、肺氣を開宣するもので、凡そ肺の病にして風火を挾み、痰あるものにはこの物が宜し。川貝は味が甘くして

ノ條參照（上海自然科學研究所彙報第一卷第二號三〇頁）

肺を補す　象貝を用ゐて風火痰嗽を治するの佳きに如かぬものだ。虚寒咳嗽の場合ならば川貝を宜しとする。

張景岳云く、味は大いに苦し、性は寒にして陰であり、降である。乃ち手の太陰、少陽、足の陽明、厥陰の薬であつて、大いに肺癰、肺痿、欬喘、吐血、衄血を治し、最も痰氣を降し、善く鬱結を開き、疼痛を止め、脹滿を消し、肝火を淸し、耳、目を明にし、時氣煩熱、黃疸、淋閉、便血、溺血を除き、熱毒を解し、諸蟲を殺し、及び喉痺、瘰癧、乳癰、發背、一切の癰、瘍、腫毒、濕熱惡瘡、痔漏、金瘡出血、火瘡疼痛を療ず。末にして敷くもよし、湯に煎じて服するもよし。性、味倶に厚く、川貝母に比較して淸し降すの功は啻に數倍するのみでない。烏頭と反す。又、上焦、肺、胃の火を解す。

張石頑本經逢原に云く、貝母は、浙の產は疝瘕、喉痺、乳癰、金瘡、風痙、一切の癰、瘍を治す。苦參、當歸と共にして妊娠小便難を治し、靑黛と共にして人面の惡瘡を治し、連翹と共にして項上の結核を治す。いづれもその鬱を開き、結を散じ、痰を化し、毒を解するの功を取るのである。

（和名） 無シ。
（學名） Fritillaria sp.
（科名） ゆり科（百合科）
木村（康）曰ク、貝母ノ條參照。恐ラク原植物ハ浙貝ト同一ナルベシ。

【吹喉散】 經驗廣集——咽喉の十八の症を治していづれも效がある 大黑棗を一箇毎に核を去つて、五棓子一箇を蟲を去つて裝入して研り、象貝一箇を心を去つて研り、泥で裹んで煨いて性を存し、共に研つて極細末にし、薄荷葉末少量、冰片少量を加へて磁瓶中に貯へ、使用するに臨みそれを患部に吹き、痰涎を嘔出するに任せる。數回にして癒える。

【對口】 楊春涯驗方——象貝母を研末して敷くが神效がある。

土貝母 一名大貝母といふ。百草鏡に云く、土貝は形が大きくして錢ほどあり、獨瓣で分れてゐない。川の産とは逈に別である。各處いづれにも産し、安徽の六安の安山に産するものがあり、江南の宜興の章注に産するものがあり、寧國府の孫家埠に産するものがある。浙江ではただ寧波、鄞縣の樟村、及び象山だけにある。藥に入れるには白く大きくして燥いたものを選ぶ。皮の細なものが良し

百草鏡に云く、味苦し、性は平、微寒にして毒なし、能く癰毒を散じ、膿を化し、滯を行り、廣瘡結毒を解し、風濕を除き、痰を利し、惡瘡に傅けて瘡口を斂める。

茅昆來筆記——味大いに苦し。專ら癰疽、毒痰を消す。楊梅結毒はこれ以外では除

けない

【乳癰の初起】　白芷、土貝母各等分を細末にし、三錢づつを陳酒で熱服し、暖に護つて汗を取れば消する　重きものは再び一服する　壯實するものの場合は五錢づつ服す。

○楊春涯驗方――天花粉、乳香を油を去り、沒藥、白芷、歸尾、土貝母、赤芍、獨活、川芎各一錢、甘草節、陳皮各八分、穿山甲三片、皂角刺一錢五分、金銀花二錢五分、防風一錢二分を好酒で煎じて服す

○又ある方では、白芷、土貝母、天花粉各三錢、乳香を油を去つて一錢五分を共に炒つて研末し、白酒漿で調へて搽り、再び酒漿で調へて三錢を服す

【乳癰】　外科全生――紫河車草、浙貝各三錢を黄糖を用ゐて拌勻し、好酒を和して服し、服し盡して醉ひ、寢具を蓋ふて汗を取る　趙貢栽云く、浙貝とは寧波の土貝母のことである。

【乳岩を治す】　葉氏驗方――陽和湯に土貝母五錢を加へて煎じて服す。數日にして消するものだ。

○姚希周濟世經驗方——乳岩の已に破れたものを治す。大貝母、核桃楄、金銀花、連翹各三錢を酒、水で煎じて服す。

【瘰癧】已に破れたると未だ破れぬとを論ぜず、いづれも治す。瑞安生驗方——土貝母半觔、牛皮膠四兩を敲き碎き、牡蠣粉で炒つて珠にし、粉を去つて細末にし、水發して菉豆大の丸にし、毎日朝、夕、紫背天葵根三錢、或は海藻、昆布各一錢半の煎湯を用ゐて丸三錢を呑む。

○又、瘰癧膏藥。牛皮膠を水で熬り化して一兩に土貝母末五錢を入れ、油紙上に攤して貼る。

○吉雲旅抄——紫背天葵一兩五錢、土貝母、昆布、海藻各一兩、西牛黃三分、海螵蛸五錢、陳膽星三錢、桔梗一兩を共に細末にし、酒發して菉豆ほどの大いさの丸にし、毎日六七十丸を服して好酒で送下する。

○千金不易方——男子、婦人、小兒の瘰癧を治して内消する。土貝母を研末し、陳米醋で調へて搽る。數日にして消する。

○仙姑玉環散。痰核瘰癧のまだ潰れぬものを治するにこの方を用ゐる。生南星、

生半夏、土貝各等分を研末し、醋、蜜で調勻して敷く。

【瘰癧の初起】　土貝を研細し、陳米醋で和して搽る。數日にして暗に消する。

○又ある方。土貝母、大力子の全蟲を洗つて各五錢、紫背天葵根、昆布を洗ひ、海藻を洗つて各一兩、青皮、蟬退各三錢、甲片を炒つて四錢、蜈蚣を酒で炙いて七條、當歸二兩を末にし、蜜で丸にし、砂仁湯で三錢を服す　虛せるには人參を加へる。

○種福堂の痰核瘰癧に敷く方――生南星、生半夏、生大黃各一兩、大貝母、昆布、海藻、海浮石、銅綠、明礬各五錢を用ゐ、商陸根汁、葱汁、薑汁、蜜の四味で調へて敷く

○又、痰核瘰癧膏中に大貝母を用ゐてある。

【痰核方】　人參、甘草各六分、川芎、桔梗、陳皮、木香、烏梅各八分、當歸、白芷、防風、茯苓各一錢、半夏五分、生薑三片、棗二箇、水二鍾を煎じて服し、もし患處に水があつて乾かぬには、知母一錢、土貝母一錢を加へる

【瘰癧を消す】　傳信方――穿山甲を沙を和して炒り、牛皮膠を切碎いて麥殼で炒

つて各二兩、土貝母、連翹各一兩を共に末にし、大人は三錢、小兒は二錢を用ゐる。

【汗斑を治す】　集驗——土貝母一兩、南硼砂一兩、氷片一分を共に研末して搽れば癒える。　——家寶方では、硼砂をただ五錢を用ゐる。暑期に汗の出るときは頻りに搽ればそれで效がある——

【鼠瘡を治す】　彙集闕紹堂方——大鯽魚一尾、皂角內の獨子を一歲に對して一箇の割合、川貝母三錢、土貝母二錢を用ゐ、皂角子、貝母を魚の肚中に入れて黃泥で包裹し、陰陽瓦で炭火で焙じ乾して性を存し、研つて細末にし、毎服三錢を食後に黃酒で調へて服す。百日間葷を忌む。

【下發背】　慈惠編——生甘草、炙甘草各五錢、角刺二錢五分を土で炒り、土貝五錢五分、半夏一錢五分、甲片二錢五分を黑く炒り、知母二錢五分に葱、薑を加へて水、酒で煎じて用ゐる。二劑にして癒える。

【刀割、斧砍、夾剪、鎗、箭の傷損】　集驗に云く、土貝母末を敷く。血を止め、口を收める。

【毒蛇咬】　祝氏效方——急に麻油一碗を飲めば毒の心を攻むるを免れる。再び土

貝母四五錢を末にして熱酒を沖して服し、再び酒を飲んで十分に醉ふて安臥する。少時して藥力が患部に到達し、酒が化して水となり、傷口から噴出する。水の盡きるを候つて碗内の貝母の渣を傷口に敷く。垂死のものもみな活きる。

【腫毒の初起】百草鏡に云く、この方は異人から傳へたもので、應驗響の如く、重きものも三服に過ぎず、輕きものは一二服で、初起のものは散じ、已に成つたものは自ら潰れ、且つ口を收め易い。甲片を炙き搗いて六錢、全當歸五錢、花粉八錢、白芷五錢、廣皮三錢、土貝母を研つて二錢、銀花一兩、角刺三錢、赤芍六錢、防風五錢、甘草節六錢、乳香を炙いて別に研つて一錢、沒藥を炙いて別に研つて一錢、蘇木二錢、川牛膝一錢、川斷五錢を酒、水各半で煎じた汁の渣を去り、沒藥、乳香末を調へて服し、汗を取る。雞、犬、喪中の男、女、僧、尼の觸犯を忌む。必ず靜室に避けて藥を服す。趙貫栽云く、この方は攻、散に專らなもので、藥力が甚だ重い。ただ壯實なる人だけに施すべきもので、虚弱者は服してはならぬ。

按ずるに、貝母には甜と苦との差異があり、川と象との區別がある。百草鏡に云く、川に產するものを川貝といひ、象山に產するものを象貝といひ、甚だ大なるも

川綢トハ四川省特產ノ絹綢ヲイフ。

のを土貝と名ける。川に產するものは味が甘き間に微かに苦があり、總じて他の地に產するもののやうに一味の苦だけで甘くないもののやうでない。藥に入れては能く氣を補し、痰を利して寒でない。虛せる人にこれが適する。象貝は一味の苦、寒で、能く堅痰を化す。性の利いことが判る　土貝になると功は膿を化し、專ら癰毒を化す。性は燥にして潤はない。象貝はみな小さく、土貝は獨り川產のものよりも大きいのだから、やはり差異がある。綱目には功用を區別して記載しなかつたが、或はその時代にはまだこの種がなかつたのであらう。又、用藥識微に云く、川貝中の一種で、巴東に產するものが獨り大きい。番人は紫草貝母、大不道地と名ける。陝西に產するものはまた西貝と名け、また大貝と號する。張石頑云く、貝母は、川產は味が甘くして最も佳し、西產は味が薄くしてそれに次ぎ、象山のものは微苦であつて又それに次ぐ。一種の大きくして苦いものは僅に能く毒を解す。いづれも心を去つて用ゐる。現に川中には、やはり一種の錢ほどの大いさのものを產するが、土人はこれを粉に擣き、漿にして川綢に刷くに用ゐ、藥に入れることをば知らない。かくして見ると、土貝は川中にもやはり產するので、浙江だけに限つたわけで

はない。庚子の年の春、川中から歸つたある友人が、予に貝母を土產に持つて來た記憶を喚起したが、大いさは錢ほどで、皮が細く白くして黄を帶びた斑があり、味は甘かつた。この種は龍安に產し、乃ち川貝中の第一で、多く得られないものだといふことだつた。それが事實とすれば、川中の甜母にも大なるものがあるので、特に金川子だけが獨り甜いのではない。並に附記して考證に俟つ。

草棉

綱目には、木棉の條下の註に「棉に二種あつて、木に似たものを古貝と名け、今は訛つて吉貝といふ。草に似たものを古終と名ける」とある。これは今俗に棉花と呼ぶ、乃ち草棉である。按ずるに、代醉編に、棉花の種は番使黄始が傳へたもので、宋末に始めて江南に入つたとあり、沈黄門焆は、番中には青黄白の三種あつて今特に傳つてゐるのはその白いものだけだといつたが、實は江浙は草棉を多く種藝し、木棉は罕に見るが、その草棉中にもやはり黄色のものがあるから、盡くが白いものばかりではない。藥に入れては白いものを勝れたものとする。綱目には棉花油はあ

（和名）しろばなわた。
（學名）Gossypium herbaceum, L.
（科名）あふひ科（錦葵科）
木村（康）曰ク、今日本邦ニ知ラルルわたノ類ハ凡ソ左ノ如シ。
Gossypium barbadense, L. べにばなわた、半灌木、枝條ハ紫色、花冠ハ黄色、濃紅心、熱帶原產。
G. barbadense,

るが、花、及び子の功用の説明を悉してないから補つて置く、
百花鏡に云く、花は血を止め得る、殼は膈を治し得る、膈食、膈氣には棉花殼を用ゐ、八九月採り、多少に拘らず煎じて、茶に當てて飲む。三日にして癒える。鵝を食ふことを忌む。

藥性考に云く、草棉は甘し、溫なり。寒を禦ぎ、冷を卻ける。燒灰は血、凍瘡を止め、穩子熱に敷き、虛を補し、腰を煖め、損油毒昏目を治し、癬疥等に塗る。

子　性は熱、味は辛である。腸風を治す。救生苦海――棉子丸。棉花子を取つて黃黑色に炒り、殼を去つて末にし、陳米の濃汁に黑砂糖を加へたもので桐子ほどの丸にし、每日空心時に三錢を滾水で服す。三觔まで服すれば根を斷つ。

○腸紅の祕方。集驗――棉子を炒つて末にし、白糖を拌ぜた米湯で和して服す。

○血淋の止まぬもの。許氏方――炒り燥して細末にし、三白酒で二錢を送下すれば立ろに止まる。

○白帶沙淋。救生苦海――調經門の香附散中に棉子仁を用ゐてある。

○赤白帶下。百草鏡――棉花子を黑く炒つて殼を去り、末にして米糊で丸にし、

var. maritima, Watt. あめりかわた、一年草、花冠ハ黃色、紫心。
G. herbaceum, L. しろばなわた、一年草、花冠ハ綠黃色、紫心、熱帶亞州原產。
G. hirsutum, L. var. religiosum, Watt. ばちなわた。花冠ハ黃色。
G. Nanking, Meyen (G. herbaceum, Matsum.) わた、きわた、一年草、花ハ黃色、印度原產。
G. Nanking, var. rubicunda, Watt. あかばなわた、亞灌木、花ハ紫色、稀ニ白色。
溝口氏ハわたノ莖皮及ビ根ノ水浸液ヨリ子宮緊縮性ヲ有スル結晶性物質ヲ得テ「ェクホリン」ト命名セ

ルモ其性狀詳カナラズ。種子ハ約二〇%ノ脂肪油ヲ含有シ主トシテぱるみちんヨリ成リ少量ノおれいん等ヲ混ズ。又種子中ニハ「ゴシポール」ト稱スル「エノール」性ノ有毒物質(結晶)約〇・六%ヲ含有ス。「ゴシポール」ハ脂肪油ニ可溶性ニシテ粗製綿實油中ニハ約一・五%ヲ含有スルヲ以テ食用ニ供シ得ベキ精製綿實油トナスニハ通常 アルカリ」ヲ以テ處理ス。新鮮ナル根(米準局方)ハ通經藥トス、用量二瓦。種子ハ母乳ノ分泌ヲ催進スル效アリ、煎劑(五・一〇〇)ヲ用フ。本植物或ハ同屬植物ノ種子ヲ原料トセル催乳藥ニ次ノ製劑ア

毎服三錢を、赤帶には砂糖湯で服し、白帶には白糖湯で服す。

○種子最妙方　棉花子、砂糖各三錢を酒に冲して服す。

○痔の薰洗。傳信方――鬼饅頭、棉花子、烏菱殼、鳳尾草等分を湯に煎じ、先づ薰じて後に洗ふ。疼む場合には乳香を加へ、痒きには楊柳鬚、或は木稜藤を加へる。

○又ある方では、棉花子を槐樹の梗、葉と共に湯に煎じて洗薰する。自ら癒える。

○下血、血崩の止まぬもの。百草鏡――棉花子を燒灰して性を存し、酒で服すれば立ろに止まる。

○便毒。濟世方――棉花子を瓦で煆いて性を存して末にし、毎日空腹に二錢を酒で服し、三回連服する。全く消し、兼ねて血崩を治す。

○陽痿不起。祝氏效方――棉花子を水に浸して曬し乾し、燒酒を拌ぜて炒り、殼を去つて仁半觔を用ゐ、破故紙を鹽水で炒り、韭菜子を炒つて各二兩を末にし、葱汁で梧子大の丸にし、毎服二錢を空心に酒で服す。

○痢疾。救世苦海――棉花子仁を新瓦で炒り、油を去り焦して研細し、毎服二錢を、紅には燈心湯で服し、白には好陳酒で服す。

リ。ヤマイン（東京三共株式會社）、ラクタゴール、英國Pearson & Co.）、ネオミルヒン（大阪鹽野義商店）
種皮ニ生ズル毛茸ハ綿絲ノ原料トス。種子ヲ壓搾シテ得ラル綿實油ハ大豆油ト共ニ最モ安價ナル植物油ノ一トシテ其用途廣シ。
溝口龍三—衞生試驗所彙報二四（大、一三）二七六。
A. Withers and F. E. Carruth: Science 41, (1915) 432; 藥誌四一四（大、五）七三七。
F. E. Carruth: J. Am. Chem. Soc. 40, (19 8) 647.

○瘰癧、棉花瘡。集驗——棉花子一斗を用ゐ、燒酒を拌ぜ和して炒り燥し、灰を去つて再び拌ぜ再び炒り、黑くなるを度として殼を去り、再び抄して擣いて末にし、砂糖で調へ和して三錢づつを服す。一升ほどに過ぐれば癒える。

○壁蝨を除く。易堂驗方——硫黄末を棉花子に拌ぜて烟に燒いて薫ずる。二三回で絕える

○中風の口眼喎斜。便易良方——棉花子を黑く炒つて末にし、乳香末三錢、紅糖二兩とを飯後に黃酒で送下すれば癒える。

○腸風下血。不藥良方——生柿子二個を竹刀で蒂、核を切り去り、棉花子をその柿の内に入れて蓋ひ、好瓦上で煆いて性を存して細末に研り、米飮で熱調して服す。重きものも三服で全癒する

○穀道に瘡を生じたるもの、俗に偷糞老鼠と呼ぶ。不藥良方——棉花子を炒り、殼を去つて粉に磨り、每日朝、晝、夕の三回、糊に打つて一碗を服す。半月で全癒する。

○腎子の大小偏墜を治す。回生集—— 棉子を湯に煮て甕に入れ、腎囊をその甕口

に注入し、湯の冷えるを俟つて止める。二三回でその冷氣が散じて自ら癒える。

○癮疹赤風。醫學指南——乳香、沒藥各三錢、棉花子、白礬各六錢を末にし、黄酒で化して服す。汗を出して癒える。

○風、蟲牙疼。家寶方——韮菜子、黑核桃肉、棉花子各一兩分を末にし、蠟糊で丸にし、火酒に浸して疼む處で咬む。直ちに止む。

○痔漏。家寶方——棉花子仁六兩、烏梅六兩を共に搗き爛して梧子大の丸にし、朝、夕三錢づつを服し、開水で送下する。全部を服すれば癒える。

○經水過多で止まぬもの。婦科濟人書——棉花子を瓦器で炒つて烟を盡して末にし、二錢づつを空心に黄酒で服す。

○小便血。劉羽儀經驗方——棉花子を炒り枯して性を存して末にし、熱した火酒で調へて服し、七日後に左脚の大指節上の毛のある處に豆大の艾を丸にして火で灸すれば止まる。

○盜汗の止まぬもの。劉氏驗方——棉子仁三四錢を毎日湯に煎し、一碗を空心に服す。三四日で止む。

○腸風　○腸紅下血で危篤に垂たるも、徳勝堂方――淮棉花核一升、槐米七錢、天目芽茶四兩を泡けた汁を用ゐ、二味を炒り燥して茶汁の中に入れて復た泡けてまた炒り、數回かく繰返し、汁の乾くを度として末に磨り、毎服三錢を空心に酒で調へて服す。三日で立ろに癒える。

○牙宣を治す。蘭臺軌範――棉花核を灰に煆いて擦る。

○吹乳を治す。郎與祖方――棉花子一兩を打碎き、酒、水と共に煎じて服す。

○陰囊腎子の腫大を治する方。集驗――棉花子仁の煎湯で洗へば自ら癒える。

○血崩。龔雲林萬病回春――棉花子仁を黃色に炒り、甘草、黃芩と等分を末にし、毎服二錢を空心に黃酒で服す。

○又、集驗良方――陳棕、棉花子二味を灰に燒いて性を存し、黃酒で送下すれば止まる。

○虛怯、勞瘵の久嗽、吐血の止まぬもの、集效方――棉花子を多少に拘らず童尿に一夜浸して末にし、毎服一錢を側栢葉湯で服す。諸藥の奏效せぬものにこの方が甚だ效驗がある。酒で調へて服すれば血崩を治す。

○集聽に云く、棉子仁は血を止めて塞しない。凡そ血症、及び婦人の經病、帶下、崩淋には醋で七回炒つて用ゐる。

○心疼、腹痛。集聽——側柏葉を米泔水に三日浸して日に一回水を易へ、曬し乾して黑く炒り、棉子仁末一觔を柏末八兩に配合し、若し熱が甚しいときは、等分に配合する。

○種子方。集聽——棉子仁の淨肉四兩を燒いて三回酒を拌ぜて曬し、熟地二兩、枸杞一兩、兎絲子、破故紙、茯苓、山藥、陳皮、五味子、連翹、何首烏各二兩を蜜で丸にし、鹽湯で空心に四錢を服す。

○痔漏管。周氏家寶方——棉花子仁を炒り、急性子を炒り、草麻子仁を炒り、各等分を末にし、毎服三錢を空心に好酒で服す。輕いものは半月、重いものは一个月で管が自ら退く。

○出血の止まぬもの。家寶方——棉花子を灰に燒いて性を存し、末にして敷く。

○崩帶。家寶方——陳連蓬を灰に燒いて性を存して五錢、棉花子肉を灰に燒いて性を存して三錢を共に一服とし、無灰酒で調へて服す。

［文火で後半身が不遂となり、筋骨の疼痛するを治す］ 核桃仁、棉花子仁、杜仲を炒り、巴戟、砂仁、骨碎補、枸杞子、續斷、牛膝各二兩、大蝦米四兩、兎絲餅四兩を燒酒二十觔で煮て服す。年高きものの場合には、附子、肉桂各一兩を加へて酒で服し盡し、渣を曬し乾して細末にし、煉蜜で丸にし、毎服二錢を酒で送下する。

［打老兒丸］ 良朋彙集方――久しく服すれば天年を延べ、疾を却ける。棉花子一觔を炒つて殼を去り、核桃肉四兩を打ち爛らし、小米麪で打つた糊で丸にし、重三錢を滾湯で服す。

［仙傳蟠桃丸］ 臥雲山人の傳へたもので、大いに補益あり、諸虛百損を治す。棉花子の淨仁を取つて乾し、燒酒を拌ぜて透下し、黃酒と水と平對して一炷香の間蒸し、紅棗を黃酒で煮熟して淨肉を取つて各一觔、歸身、牛膝、枸杞を倶に酒で浸し、蓯蓉を酒で洗つて泥、甲を去り、山茱萸を酒で潤して核を去り、兎絲子を酒で蒸して餅にし、白魚膘を麩で炒つて泡とし、白茯苓を人乳で蒸し、故紙を鹽水で炒り、熟地を酒で煮て飴のやうにし、以上の藥を各四兩、淨巴戟を酒で洗つて心を去つて五兩を細末にし、煉蜜で丸にし、三錢を朝夕、酒、水の任意のもので送下する。

【棉花子丸】 年希堯集驗良方に云く、鬚を烏くし、腎を煖め、子を種す。陽虛の人にこれが宜し。棉花子十數觔を滾水で泡過し、蒲包悶に盛り入れて一炷香の間で取出し、曬して殼口を裂かしめて仁を取り、いづれも外皮を去つて淨仁を用ゐ、その仁三觔から油を去り淨め、火酒三觔に一夜泡けて取起し、三炷香の間蒸して曬し乾し、故紙一觔を鹽水に一夜泡けて炒り乾し、川杜仲一觔を外粗皮を去つて黃酒に一夜泡けて曬し乾し、薑汁で炒つて絲を去り、枸杞子一觔を黃酒に浸して蒸して曬し乾し、兎絲子一觔を酒で煮て絲を吐くを度とし、共に末にして蜜で桐子大の丸にし、二三錢づつを服す。

【長春丸】 腎虛、精冷の症を治す。集驗良方——魚鰾一觔を蛤粉で炒つて珠にして極めて焦し、棉花子の淨仁を取つて一觔を油を去り淨めて蒸し、白蓮鬚八兩、金櫻子を子毛を去り淨めて一觔、金釵石斛八兩を炒り、蒺藜四兩、枸杞子四兩、五味子四兩を炒り、鹿角五觔を薄片に鋸いて河水で三晝夜煮て、角を去つて汁を取り、熬膏して藥末を和して桐子大の丸にし、三錢づつを服す

【健步仙方】 凌雲集——棉花子仁一觔の淨肉を燒酒三觔で炒り乾し、枸杞子四兩

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

を酒に浸し、杜仲四兩を鹽、酒で煮て炒り、兎絲子四兩を酒て炒り、歸身二兩、破故紙四兩を酒で洗つて炒り、胡桃仁四兩と共に末にし、煉蜜で桐子大の丸にし、毎服三錢を空心に滾湯で服す。

紫草茸

藥大椿痘學眞傳に云く、紫草茸は古本には見ない。近刻に但だ紫草の項下の註で、紫草茸は手に染まるものを佳しとすと説明してあるが、竟に別に一種あることを知らなかつた。予の幼時、世叔華泓卿の家に紫草茸があつて、痘を發する神丹としてあるのを見たことがある。それはその家の高祖の學士鴻山公が外國へ使したときに携帶して歸つたものであつた。予はそれを貰つて收藏し、血熱毒壅、失血煩悶、頂陷不起、痘疔、腫脹の患者のある毎に、清解藥中に四五分を研り加へて用ゐたが、神效を奏せぬはなかつた。惜いかな方書に記載はないが、敢て擅に本草に增入することはしない。近頃神應心書を見たところが、これだけには紫草茸を標出してあつて、色は澹紅、烏思藏に出る。大樹の枝上に著き、白蠟のやうなもので、その價

は千金ほどする。特に痘を發するに神の如きのみならず、酒で調へて一二錢を服すれば、能く諸腫毒、惡瘡を治すといひ、又、順手に一錢を擂つて酒で服すれば力能く催生する。これは瀕水の譚應夢が屢〻その效を獲てゐる。併せて正を請ふといつてある。西番の貢僧の語るところで、近頃に至り、やはり茸は紫草の嫩苗でないことが判つた。復た臙脂渣を紫草茸と誤認してゐるが、この說は更に謬である。

○按ずるに、紫草は、本草諸方ではいづれも根を用ゐた。草宙獨行方に、豌豆瘡の發せぬを治するに、紫草を煮た湯を飮むとあり、後世一般に相承けて用ゐてゐるところを見ると、これを痘を治するに用ゐて、血を涼じ、毒を解したのはこれから始まつたものだ。曾世榮の活幼新書に、紫草は性寒なり。小兒の脾氣の實せるものには用ゐてもよいが、脾氣の虛せるものは反つて能く瀉を作すものである。古はただ茸のみを用ゐたもので、それはその初に陽氣を得てゐるといふ點から、類を以て類に觸れる意味で、痘瘡を發するに用ゐるわけだとある。して見ると茸を用ゐた事實は此に見ることが出來るのであるが、烏思藏に產する一種のあることはやはり未だ聞かぬところである。葉氏のいふところに據れば、また紫鉚のことらしくもある

が、やはり的解はない。その物を親しく試みて效驗を經てゐるといふのだから、その說を存して以て後の博訪に俟つ。

痘、及び諸腫毒、惡瘡を治し、催生する。

己亥の年の冬、餘杭で劉挹淸少府に過つたとき、その祖父は曾蜀藩に奉職したことがあつて、家に西藏の紫草茸があつた。いづれも指頭ほどの大いさの塊になつたもので、色は紅くして琥珀のやうに明透なものだつた。葉氏の記載したことは謬でないといつた。

翟良痘科釋義に云く、痘科に紫草を用ゐることは、古方ではただその茸だけを用ゐたもので、その氣輕く、味薄く、淸涼、發散の功ある點を取つたものだ。凡そ紫草を服するには、必ず糯米五十粒で制する。それで冷性が胃氣を損じて泄瀉を致すことがなくなる　ただ大熱便祕のものには必ずしも加へない。

獨脚連

獨脚一枝連、八角連を附す。

（和名）ききやう。
（學名）Podophyllum veripelle, Hce.
（科名）めぎ（檗木

科）
木村（康）曰ク、（Giles, A. Henry 等ハ獨脚連ニききやうヲ充ツ。Diels ハてんなんしやう科ノ Arisaema Tatarinowii, Schott. ヲ充ツレドモ當ヲ得ザルカ、倘 Diels ハ Arisaema Bockii, Engl. ヲ大獨脚連トス。

〔獨脚一枝蓮〕
（和名）無シ。
（學名　未詳。
（科名）未詳。
木村（康）曰ク、めぎ科ノ Podophyllum ノ類ナランカ。

粤西偶記——廣西に生ずる。草は黄連のやうで根が極めて太い。これを藥肆の倉庫に入れると、諸藥の香氣の盡く消すものが眞物である。三脚、五脚のものはこれに次ぐ

百草鏡——この藥は廣東に產する。根の太さは拳ほどのもので、春期に發苗し、霜雪を經ると枯死するが、善く藏つて冬を過ごせば來年その宿根から復た發苗する。高さは一尺ばかり、葉は杯ほどの大さがあり、さながら荷葉に似て、色は綠で柔く、厚く、莖には細毛がある。六七月に莖が起ち、莖には白毛があり、花は開いて微に垂れ、山蘭に似て小さく、その色は微紅である

稗史——鄱陽の山間に一種の草が生える。始め萠芽した時は蓮蓬に似てゐるものだ。俗に獨脚連と呼ぶ。居宅の隙地、及び園圃中に移植すると蛇、虺が敢てその下を過ぎらない。王季光の宅後の榛莽叢中に蛇穴があつて、常に出て人間に害を爲して困つたので、この草數本をその穴の外へ種ゑた。するとそれ以來その患をなさなくなつたが、暑期になるとその穴の中が甚しく臭いので、園丁に土を掘つて捜させると、死蛇が十數條あつた。蓋し草の氣に熏じられて潰したのである。又、一小蛇が

外から來たが、その草の傍へ往くと立ろに化して水となつた。

〔採藥錄〕――獨脚黄連は、苗、葉は土大黄のやうで、表面が青く裏面が赤く、根は直くして黄色である。この草は、根下に數條の赤練蛇あれば方にそれである

按ずるに、綱目には、鬼臼もまた獨脚蓮と名けるとあるが、疔を治するの說がなく、集解下の註に至つては形狀にまた少し異同がある。故に此に補つて置く。

庚戌の年、予が臨安にゐたとき、盛天然といふ醫士から聞いた話に、その地は古城で、餘杭と界を接したところだが、獨葉花といふを產する。山坑に生えるもので、天日を見ず、その形は一葉で中に一朶の紅花を含み、その花はさながら蓮花のやうな形狀で、葉の心から透出し、下に根があつて獨蒜の形狀をなしてゐる。その花、葉は人聲を聞くと根内に縮入して了つて見ることが出來ない。これに遇つたときはその場合に目記をして置いて掘る。それでやはり根はあるが、その葉と花とは根を割いて捜しても形迹がないものだ。もしこれさへ得たならば、如何なる毒蛇咬なるを論ぜず、根を以て摩れば蛇毒がなくなつて了ふ。もし誤つて蛇を服して鼈に變じたときは、少量を湯に煎じて服すれば瘥える。併せて能く一切の毒蟲螫、一切の蠱毒、

草木の毒、咽喉の十八種の病を解し、いづれも神の如き效驗がある。凡そ人の鼻に紅色を發し、痱癗を生じて非常に掀癢するものをば瘡蟲食鼻といふ。この根を磨つて塗れば立ろに癒える。これ乃ち天生の神物である　山行中にもしこれに遇つたならば、手に持つた物は何物なるとを論ぜずそれを擲ち、それをそのまゝに鎭らせて置いて然る後に再び掘れば、その物は形を隱せないものである。凡そ獨葉花の生えた土地は、四圍約一尺ばかりは草が生えない　これは手で取つてはならず、また鐵刀を以て取つてもならぬ。必ず竹刀で掘取るべきもので、それらならば根を傷めないものだ。蓋しこの草は蛇が最も喜んでその旁に蟠る。それは凡そ蛇が人を咬み、亦は人の毒に中ると必ず殼を退くものであるが、もしこの物を覓めてその旁に一夜臥せば人の毒が解し、殼を退かなければならぬ患を免れるのである。大毒蛇が都てその根の旁に喜んで蟠るところから、その土地には最も毒があつて、人の手を近ければ手が爛れるものだ　しかしその根を得れば反つて能く百種の大惡蛇の毒を解す。乞丐がこれを捜し取つて非常な寶を得たものとしてゐるといふことであつた。

疔腫、癰疽を治す。根を或は醋、酒で磨つて塗る。葉を癰腫に貼れば能く消く。

【蛇咬を治す】　祝氏效方——獨葉一枝花を用ゐる。渓灘の浮土上に生えるもので、根は鼠糞のやうだ。根を口で嚼んで瘡上に搽る。

【退疔奪命丹】　萬病回春に云く、この丹は專ら疔瘡を治す。防風八分、青皮七分、羌活、獨活、黄連各一錢、赤芍六分、細辛八分、殭蠶一錢、蟬退四分、澤蘭葉五分、金銀花七分、甘草節一錢、獨脚蓮七分、紫河車、卽ち金線重樓七分、右を剉んで五錢を先づ服し、金銀花一兩、澤蘭一兩、これには少し薑を用ゐる。生薑十片を倍して共に搗き爛し、好酒で旋熱して渣を去つて熱服する。酒を飲まぬものならば水で煎じてもよし。然る後に酒、水各一半で生薑十片を煎じて熱服し、汗を出し、病が退減した後に再び大黄五錢を加へて共に煎じて熱服し、通じをつける。二三回にして餘毒を去る。もし膿があるときは何首烏、白芷梢を加へ、脚に在るときは檳榔、木瓜を加へ、通利する必要ある場合には青皮、木香、大黄、梔子、牽牛を加へる。

一**獨脚一枝蓮**　百草鏡——山間にある。二三月に苗が發して菅茅、俗に乾苛の叢中に生じ、獨莖が出て葉がなく、高さ一尺ばかりになる。莖は强く、青白色で、莖の端に一の疙瘩があり、晩秋になつて疙瘩に蓮に類した花を生ずる。その根は黄麻根

（和名）　みやをさう
（漢名）　未詳。
（科名）　めぎ科（蘗木科）
木村（康）曰ク、獨脚蓮ニテ擧ゲタルききうモ八角蓮ニ充ツルモノアリ。

と相似たものだ。

疔腫、癰毒、流注を治す。

八角蓮

湧幢小品——綏寧にこれを産する。これで蛇を伏し得るもので、諺に、八角蓮を識つてゐれば蛇と共に眠れるといふ。

一切の毒蛇傷を治す。

按ずるに、瀕湖の綱目には、鬼臼があつて、やはり毒蛇傷を治すとあり、鄭樵の通志には『八角盤、即ち鬼臼。今世間に所謂獨脚蓮がそれだ』とある。或は粤語に類擧、その名を八角蓮と呼ぶ』とあるが、一向に判らない。附記して考證に俟つ

汪連仕草藥方——八角盤の金星の出るものを金星八角と名け、嬰兒が取つて獨脚蓮といひ、俗に獨葉一枝花と呼ぶ。根は赤朮のやうで眼が多く、馬目のやうだ。今世間では馬目奪公と呼ぶ。一切の毒力を消し、能く堅を軟にし、膿に透る。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

露花粉

粤志――露花は番禺、蓼涌に生ずる。狀態は菖蒲のやうで、その葉は節の邊に刺がある。葉が落ちてから根を火で焔いて置くと、枝幹に成つて花が多くなる。花は叢葉中に生じ、その瓣は大小やはり葉ほどで、色は瑩白で柔く滑に、芒刺がなく、花は蓮心を抱いて穗のやうになり、朝、夕香露がその苞中にあつて、渴を解し得る。又、粉があつて藥に入れ得る。その他の土地に生えるものは、蕊が落ちて子を結び、子は瓜ほどの大いさのもので、路頭花といひ、多く香しくない。ただ露花は盛夏の時の露花で始めて熟するもので、花を盃を覆ふて壓曬したものが香しく、茶子油中に落せばその氣の馥烈なものだ。これを露花油といふ。蓼涌、及び增城地方で善くこれを作る。遲く開くものをば寒花といひ、香はますます淸徹であるが、油とするわけに行かぬ。その東安山中に生ずるものは、叢が卑くして葉が小さく、春から秋に至るまでみな花があり、水に近いものが尤も香しいが、やはり油とはならない。兒女の肌膚に塗れば汗を止める。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

通血香

西洋に產する。色は乾醬のやうだ。百草鏡に云く、陝西に產し、羊羢行商人が携帶して杭へ來て賣つてゐる。

血症、及び肝血氣を治す。藥に入れて最も良し

【臌脹】救生苦海――通血香一錢を亞腰葫蘆一個を取つて子膜を去らずにその內に入れ、再び酒に入れて煮て、開いてあつた蓋を合縫して封固し、鍋に陳酒を入れてその酒の中へ葫蘆を懸け、挨定して傾倒せぬやうにし、鍋に蓋を密にして三炷線香の時間を度として煮る。煮る時はその香が屋敷の外までも透るものだ。完全に煮てから葫蘆中の子膜、幷に藥を取り出して焙き乾して末にし、每服一錢を空心時に酒で服し、五日間を隔てて一錢を再服し、葫蘆中の藥全部五六錢を服し盡せば癒える。この力は廣筆記に記載があつて、脾虛に濕あるものを治すといつてある。

【瘰癧】良朋彙集にある瘰癧を治する內消方――紫背天葵一兩五錢、海藻、海帶、昆布各一兩、海螵蛸五錢、貝母、桔梗各一兩、通血香三錢、右の藥を細末にし、酒

糊で桐子大の丸にし、毎服七十丸を食後に溫めた黃酒で送下する。

【痔漏通腸】 海藥祕錄――胡連追毒方 專ら痔漏を治す。遠年のものと近日のものとに拘らず、漏あるもの、或は通腸、及び汚泥が孔から出るものには、先づこの方を用ゐて膿血を追ひ盡し、後に黃連閉管丸を服して效を取るが最も穩である。胡黃連八錢を切片して薑汁を拌ぜて炒り、刺蝟皮一個を切片して黃に炒つて末にし、通血香八分、必ず眞なるものを用ゐて研末し、麝香二分と共に和勻し、軟飯で麻子大の丸にし、毎服一錢を食前に酒で服す。服藥後に膿水が反つて多くなるは藥の功であつて懼れるに及ばない。

【黃連閉管丸】 胡黃連の淨末八錢、甲片を麻油の中で黃に煠でて五錢、石決明を煆いて五錢、眞通血香六分、少くてはならぬ。槐花五錢を共に細末にし、蜜で麻子大の丸にし、毎服一錢を空心に清米湯で服し、朝、夕二服する。重きものも二十一日にして功を收める。この方は刀針、掛線の苦痛なるものを用ゐず、誠に起廢の良方である。もし漏の邊に硬肉が突起してゐるときは、蠶繭二十一個を加へ、炒つて末にしてこの方に和入する。この方はまた全身の諸漏をも治す。屢〻試みて屢〻奏效した。

【臟連丸】痔漏は新、久を論ぜず、畢發すると下血し、痛み、肛門の墜重するもの、膿血が止まず、腫痛し、坐することの困難なるもの、いづれも治す。胡黄連の淨末八兩、通血香一錢半を用ゐ、雄猪の大腸を端から一段の長さ一尺二寸を溫湯で洗淨し、連末、及び通血香をその腸中に灌入して兩端を白絲で緊く扎り、酒二斤半で新砂鍋中で煮て、酒が乾くを度とし、取り上げて腸と藥と各〻搗いて泥のやうにする。もし藥が爛れてゐるときは一時曬して復た搗き、桐子大の丸にし、毎服七十丸を空心に溫酒で送下する。久しく服すれば根を除く。又、白銀定子と名ける。漏の孔あるものを治するには半月用ゐれば功が現はれ、神效がある。

【三品一條鎗】白砒の淨末一兩、白礬の淨末二兩、明雄黄二錢四分、通血香八分、乳香一錢二分を用ゐ、先づ砒、礬を極細末に研り、鐵杓で鎔して餅にし、炭火に入れて煆いて烟淨して取出し、火毒を去つて末にし、雄黄、血香、乳香の細末を和し入れて錠子に作つて條にし、漏中に插入し、直に痛處に透るまでにして止め。毎日三回、七日にして止める。半月にして痔が結して癒える。もし痛みがなほ痊えぬときは生肌散を用ゐて口を收めるがよし。

○生肌散。諸痔、諸瘡腫毒を治し、口を收めるに神速にして大いに妙である。乳香、沒藥、海螵蛸を三黄湯で煮、寒水石を煆き、輕粉、龍骨を煆き、赤石脂を煆き、冰片と各等分を共に細末に研り、患處に摻つてその上から膏藥を貼る。

野馬豆

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

西藏に產する。これは番僧が草末を撚つて豆のやうな形に合成したものだからかく名けたのである。王怡堂云く、藏中に產する一種の草で、彼の地で野馬草と呼ぶものがある。番僧は日を擇んで採收し、研つて細末にし、淨器中に入れて佛前に供へ、更に日を擇んで合和して藥にする。その藥を合和する日には、彼の地の男女がみな佛前で經咒を誦んでから、合和するに用ゐる草末を研つて丸にする慣例になつてゐて、男の丸にしたものを雄とし、女の丸にしたものを雌とし、その藥にもやはり雌雄の形を分け、雄には上に小さく圓い凸をつけ、雌には長い凹をつけ、色には紅あり黑あり、いづれも菉豆ほどの大いさにし、丸に作り畢ると淨器中に入れて必ず雌雄を合せて一處に置く、すると一二日で麻子屑ほどの小豆が生れ出る。それを藏

紅花で飼つて置いて一日の間を置いて視ると、紅花が次第に少くなつて新に生れた豆が次第に大きくなり、久しくするとまた小豆が生れる。かやうにしてどこまでも絕えずに生殖が續けられて行くのであつて、亦た一の不思議な點である。もし携帶して遠方へ行く場合には、藏紅花をば用ゐないが豆はやはり死なない、ただ小豆を生殖することが出來ぬだけだ。

○西寧の人倍玉藻の話に、野馬豆はまた嘛呢子と呼ぶ。菉豆の半粒ほどの大いさのもので、西藏の地の人は、この豆を得ると每日唵嘛呢叭嘧吽の六字を誦すること數百遍繰返し、豆を丸にする時もまた口にこの六字を念ずる。故にかく名けたのだ。能く胃氣心痛を治するものだが、ただ瘠瘦、癆疾には服することを忌む。それは長化に善くして陰陽を顚倒するからであるといつた。

○馬少雲衞藏圖識——藏中に子母藥といふがある。大いさは菉豆ほどのもので、哈達で潔かに裹んで時を經てば小粒が漸次に增えて、子母相生の義がある。傳說に據れば、達嚛喇嘛が偈咒を默念しながら糌粑で搓つて作るものだからかやうに著しい奇異があるのだといふ。按ずるに、これは卽ち野馬豆である。

哈達ハ紅黃二色ノ薄絹ナリ。

朱排山柑園小識——喇嘛は常に聚會して、米、麥數粒を瓶中に置き、四人でそれを守つて唵嘛呢叭咪吽の六字の咒を誦し、飲食のときには交代して晝夜誦咒を間斷なくし、四十九日經つと瓶中に紅子が滿ちて生じる。大いさは芥子ほどで色は硃砂のやうだ。これを嘛哩子といふ。これを佩びると能く邪を辟け祥を致し、小兒が食ふと痘が稀になる。

○壬子の年、予は戚友の處から嘛哩子數十粒を覓め得て、玻璃盃にそれを貯へて置いた。形は勻く圓く、さながら急性子に似て色が紅い。初め手に入れたときは色が甚だ紅くなく、藏紅花がなくて困つたので、鄉里の河南に產する紅花を買つて屑に研つて拌ぜて置くと、久しくして色が硃砂のやうに紅くなつたといふことだつた。平瑶海先生は偶ま西藏の嘛哩子數十粒を得て、一時玻璃器がなかつたので紙の中へ裹み、佛前に供へて文殊六字眞言を數百遍誦へると、その子は忽ちに多くなり忽に少くなり、また能く紙裏の外に透出し、變幻不思議であつたので、甚だ奇異に感じ、その次第を行商人に話すと、行商人は『この物の性の成り立ちには、もと西藏僧の咒力が入つてゐるのだ。この子を造る方法があつて、現に都中にゐる喇嘛でもそ

れが出來る。毎年四月八日に、大小の喇嘛が佛前に群聚し、德行高き咒文を持誦するもの數十人を選び、鐃、鈴、法鼓を鳴して六字の眞言を七晝夜宣揚してこの丸を作るのだが、丸にするには乾麪を用ゐ、手で搓んで粟米ほどの大いさにし、口には咒を念じ、手には丸を作り、それを金盃に貯へる。丸を作るときには咒力が入るので粒粒みな能く自ら飛び、或は窗に或は机に飛んで堆結し團聚する。その七晝夜の滿願後になつて、その飛ばなかつたものは去り、飛んだものだけを箒で掃き下し、それを諸王、大臣に送つて嘛嚟子と名ける。諸疾を治するもので、變幻の多寡は蓋し自らその成り立ちの性に因つてさやうに現はれるのだから異むに足らない。藥に入れるには西藏で合せたものを佳しとする』と説明した。癸丑の年の冬、上虞の役所で平司馬少君萊仲に遇つて話したとき、萊仲は『曾て中甸に駐在したことがあるが、その地は西藏への要路で喇嘛等がゐた。彼の地では野馬豆を舍利子と呼び、草、木、佛の三種あつて、彼の地の富人は死ぬと必ず一粒を口中に入れる。それで冥途へ行つても明るい光があるといつてゐた。土人は病氣に罹るとやはりそれを服する』といつた。

(和名) 無シ。
(學名) Cordyceps sp.
(科名) 眞正子囊菌門-肉座菌科。
木村(康)曰ク、Cordyceps ノ類ハ種類少ナカラズ、蟬ノ蛹、かゐむしノ類、ぢぐも等種種ノ昆蟲等ニ寄生ス。而シテ冬蟲夏草トシテ普通

〇金御乘の言に、慈谿に耳聾を患つたものがあつて、その家に西藏から持つて來た喇嘛子があつたのを取つて三粒服すると、忽ち兩耳中に轟然たる一大震聲が聞え、數百觔の物を掣ひ去つたやうに覺えて、その後は耳が更に甚しく聰くなつた。ところがその人がある日ふと妓家に泊ると、翌日また故のやうな聾になり、再び服しても一向に效がなくなつて了つたとある。

味微し辛し、性は平である。あらゆる病を治す。彼の地には藥がなく、病があるとこの豆を服する

夏草冬蟲

四川省江油縣の化林坪に產する　夏は草となり、冬は蟲となり、長さ三寸ばかり、下趺に六足があり、脰以上は甚だ蠶に類する。羌人の俗習としてこれを採つて上藥とする。功は人參と同じ。

〇從新に云く、雲、貴に產する。冬は土中に在つて身が活き、老蠶のやうになつて毛があり、よく動く。夏になると毛が土上から出て、身を連ねて共に化して草と

市場ニ出ヅルモノハ是蟲ノ幼蟲ヲ寄主トナスモノニシテ、卽チ本文ノ蠶ニ類ストイフニ該當ス。支那ニ於テハ藥用トシテノミナラズ料理用トシテ珍重サル。四川ヨリ出ヅルモノヲ佳トナス。

なる。もし取らずに置いて冬になればまた化して蟲となる。

〇四川通志に云く、冬蟲夏草は裡塘、撥浪工山に出る。性は溫煖にして精を補し、髓を益す。

〇黔囊——夏草冬蟲は烏蒙の塞外に出る。暑には土から苗えて草となり、冬は土に蟄して蟲となる。

〇青藜餘照——四川に夏草冬蟲を產する。根は蠶のやうな形で毛があり、能く動き、夏期にはその頂に苗が生えて長さ數寸になり、冬になると苗が槁れてただその根だけが殘り、嚴寒積雪中に往往地上に歩行いてゐる。

〇文房肆考——近年は蘇州にみなある。その氣は陽、性は溫である。孔裕堂の述べてあることに、その弟が怯汗を患つて大泄し、盛暑の時でも密室にゐて帳を垂れ、それでも風を畏れること甚しく、病むこと三年にして醫治も效がなく、到底起ち得ぬものと考へてゐたが、適ま親屬の者が四川から歸つて、夏草冬蟲三觔を土產として贈つて來たので、毎日それを葷蔬に和し、肴に作つて燉いて食つてゐると、次第に癒えて了つた。これを見てこの物が肺氣を保し、腠理を實するに確に徵驗のある

ことを信じた。これを使用していづれも效がある

○七椿園西域聞見錄――夏草冬蟲は雪山中に生じ、夏には葉が岐出して韭に類し、根は朽木のやうだが、冬を凌いで葉が乾くと根が蠕動して化して蟲となる。藥に入れては極めて熱である。

○徐后山柳崖外篇――冬蟲夏草は一物であつて、冬には蟲となり、夏には草となる。蟲の形は蠶に似て色が微黄であり、草の形は韭に似て葉がやや細い。夏になると蟲が頭を地に入れて尾が自ら草に成り、蔓草の間に雜錯してゐて蟲だとは思へないが、冬に交ると草が次第に萎黄し、地を出て蠕蠕として動き、その尾はなほ簌簌然として草の部分を帶びて動いてゐる。蓋し氣化に隨つて轉移するの理に依つてかやうな現象があるのだ。鴨肉に和して頓食すれば大いに補す。紹興の平萊仲先生の話に、その父君は曾て雲南麗江府中甸の司馬として在任したが、その地に冬蟲夏草を産した。その草は冬は蟲となり、一たび春に交ると蟲が蛻して飛び去る。土人はそれを知つてゐて取るのだが、それには時期があつて、時期を過ごしては役に立たなくなるといふ。

朱排山柑園小識——冬蟲夏草は打箭爐に生ずる。春は土中から生じて蠶のやうであり、夏は頭上に苗が生えて形が一寸ばかりの長さになり、色は微黄で蠶に比較してやや小さく、三眠ほどの狀態で、口、眼、足が十二あり、さながら蠶の形のやうだ。苗は三四葉に過ぎず、酒に浸して數箇を啖へば、腰膝間の痛楚を治し、腎を益するの功がある。番紅花と共に貯藏すれば蛀せぬ。或は、雄鴨と共に煮て食へば老人に宜しといふ。

潘友新云く、粤中の鴉片丸は夏草冬蟲を用ゐ、鴉片、人參を合せて作る房中藥である。この草は性更に能く陽を興すところを見ると、腎に入ることは判る

甘し、平なり。肺を保し、腎を益し、精髓を補し、血を止め、痰を化し、勞嗽を已し、膈症を治するにいづれも良し（從新）

味甘し、性は溫なり。精を祕し、氣を益し、專ら命門を補す。（藥性考）

按ずるに、物の變化は必ず陰陽相激するに由つて成り、陰は靜にして陽の動なるは至理である。然して陽中に陰あり、陰中に陽あり、所謂一陰一陽互にその根をなすのである。無情が化して有情となる如きは、乃ち陰が陽氣に乘ずるのであり、有

情が化して無情となるは、乃ち陽が陰氣に乘ずのである。故にいづれも一たび變じてはまた本の形に返らない。田鼠が化して鴽となり、鴽が化して田鼠となり、鳩が化して鷹となり、鷹が化して鳩となり、悉く能く本の形に復するものは陽が陽氣に乘ずるものであり、礦石が化して丹砂となり、斷松が化して石となりまた本の形に還らぬものは陰が陰氣に乘ずるものである。夏草冬蟲なるものは陰陽の二氣に感じて生ずるので、夏至には一陰が生ずるから靜にして草となり、冬至には一陽が生ずるから動にして蟲となつて輾轉循環する。腐草が螢となり、陳麥が蝶に化するやうな濕熱の氣を感じたものの如きは比較になるものでない。藥に入れては、それゆゑに能く諸虛、百損を治す。それは陰陽の氣を完全に得てゐるからである。さやうなわけで、必ず冬にその蟲を取るもので夏その草をば取らない。やはりそこに一陽生發の氣があつて用ゐられるからである。

○張子潤云く、夏草冬蟲は、もしその夏草を取つて服するならば能く孕を絶して子がなくなる。やはり黃精、鉤吻の相反の關係のやうなものだ。殆んど亦た物の理の玄奧なる點である。周兼士は、性溫にして蠱脹を治す。近頃の種子丹にこれを用

ゐるといつた。

【老鴨を燉く法】〔夏草冬蟲三五箇、老雄鴨一羽を肚雜を去り、鴨の頭を劈開して藥をその中に納れて綫で紮り、好醬油、酒で普通のやうに蒸爛して食ふ　その藥氣は能く頭中から直に鴨の全身を貫いて、透洩せざるなきものだ。凡そ病後の虛損の患者には、毎服一鴨が人參一兩に匹敵する。

綿絮頭草

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

一名金沸草、一名地蓮といひ、俗に黃花子草と呼ぶ。郊野に生じ、立春後に發苗し、葉に綿絮に似た白毛が多く、立夏になると黃花を開き、一莖を直上し、花は簇をなす。處處の山坂にあるものだ。鄉人は初春にその葉を採り、揉んで粉にして餈に作つて食ふ。淸香があり、堅く韌くして最も口に適する。この草は形が小さくして地に布いて葉を生じ、愼火に似て薄い。摘んでみると白絲があり、色は靑白で本が小さく、剪刀草のやうだ。

○按ずるに、綱目に鼠麴があつて、俗に毛耳朶と名け、葉に白茸があり、また茸

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

母と名ける。宋の徽宗の詩に『葺母初て生じ禁烟を認む』とあるは即ちこの草である。蟻がこの草を食ふと醉ふので、また蚍蜉酒草と名けるとあるが、しかしその功用の點ではやはりただその能く寒熱咳嗽を治し、肺寒を去り、大いに肺氣を升することだけを記載したるに止る。此には別にその功用を補記して置く。

味酸し、性は熱なり。多食すれば目を損ずる。囊風溼癢を治するには、煎湯で洗へば癒える。兒疳梅瘡、下疳には、甘草と共に煎じて洗ふ。

鴉膽子

一名苦參子、一名鴉膽子といふ。閩、廣に產し、藥肆中にいづれもある。形は梧子のやうで、その仁には油が多い。生で食へば人を吐せしめる。霜にし、搥いて油を去つて藥に入れるが佳し。

【痢を治す】何夢瑤醫碥――鴉膽丸、鴉膽子を殼を去つて搥いて油を去つて一錢、文蛤を醋で炒り、枯礬、川連を炒つて各三分を用ゐ、糊で丸にして硃砂を衣にする。或は鴉膽霜、黃丹各一錢に木香二分を加へるもよく、烏梅肉で丸にして硃砂を衣に

する、二方倶に菉豆大の丸にし、粥皮、或は鹽梅皮、或は圓眼乾肉、或は芭蕉子肉で包んで十一二丸を吞めば立ろに止まる

【裏急後重】　青囊旅抄――鴉膽、卽ち苦榛子を殼を去つて肉を留め、龍眼肉で包み、一歳に一粒の割合で白滾水で服す。

【痔を治す】　金御乘云く、近頃閩中の板客はみな鴉膽子を携帶して來る。痔を治するに神の如きもので、患者があつたときは七粒を圓眼肉で包んで吞下せば立ろに癒える

【至聖丹】　冷痢久瀉を治し、あらゆる方で效驗なきものも一服で癒える。凡そ痢の初起は、實熱、實積は知り易くして治し易いが、ただ虛せる人が冷積で痢となつたものは、醫師の多くは正しき著意がない。蓋し實熱の症は、外候は身熱し、煩躁し、唇焦口渴し、肚疼窘迫し、裏急後重し、舌上に黃胎があり、六脈が洪數なるものがあつて、證候が既に急であつて治するもやはり急であり、輕きときは疎利し、重きときは寒下し、それで積が去り、その陰陽を和して癒えぬものはないのであるが、虛せる人が冷積で痢を起したものに至つては、外に煩熱躁擾なく、內に肚腹の急痛

がなく、赤白相兼ねるがあり、裏急後重がなく、大便が流痢し、小便が清長となる これは陰性の遲緩に由るので、それで外症が急でないのである これに遇つたときは姑息ではならぬ 但だ集成三仙丹で下してその積を去る、もし急に下さねば、必ず虎を養つて患を貽す結果となり、その積が日久くして漸次に下墜し、竟に大腸の下口、直腸の上口の交界の處に小曲摺が生じてそこに隱匿するに至る それが腸穢の最深の處で、藥が到達せぬ處である。その證は乍ち輕く乍ち重く、或は癒え或は發し、便は乍ち紅く乍ち白く、或は硬く或は溏し、全く一定の狀態がない。かくてはたとひ神丹を用ゐても分毫も奏效しないものだ。蓋し積が腹內に在らずして大腸の下に在るので、諸藥はこの點まで達する頃には、性力が已に過ぎて盡く粃糠となつて了ふ。いかでこの沈匿せる積を能く去り得ようぞ 所以に冷痢で三五年から十數年に至つて癒えぬもののあるはこの關係に由るのである。古方では巴豆を丸として用ゐて下したが、それでは久病で虛してゐる人には恐らく輕輕しく用ゐ得なかろうといふ懸念があるので、今では至捷至穩なる鴉膽子の一味を以て治するのである。この物は閩省、雲、貴に產する。諸家の本草にはまだ收載されてないが、藥肆には

いづれもある。形は益智子に似て小さく、外殼は蒼褐色、内肉は白くして油があり、その味は至て苦い。小鐵鎚で輕くその殼を敲けば殼が破れて肉が出る。その大いさは米ほどのものだ。敲き砕いたものは用ゐず、專ら完全な仁を用ゐる。三五歳の小兒には二十餘粒、十餘歳のものには三十餘粒、大人には四十九粒を用ゐ、天圓肉を取つて包み、小兒には一包に三粒、大人には一包に七粒として緊く包み、空腹に呑下し、飯を食つて壓し、それで下行せしめ、更にこの天圓で包裹してあるものを藉りて直ちに大腸の下に到達せしめる。この藥はいづれの場合でも峻厲でなく、復た肚痛せぬ。大便の時を俟つて魚腦のやうな白凍が出て來るのが卽ち冷積である。もし白凍がなほ出ないときは、一二日を過ぎて一服を再進し、或は微に數粒を加へる。その後は再服の必要がない。服した時は葷、酒を三日間忌み、鴨肉を一个月間戒める。それからは根を除いて永く再發せぬ。もし翌日腹中が虛痛するときは、白芍一枝、甘草一枝を用ゐ、各重さ三錢を紙に包んで水で潤し、火で煨熟し、取上げて搥爛し、湯に煎じて服すれば立ろに止む。この方は隱祕するに忍びず、これを書に筆して公表し一般人の用に供する。

【痢疾の神方】醫宗彙編——白石榴を灰に燒いて一錢、眞鴉片を切片して二錢、鴉膽子を殼を去り紙に包んで油を壓し去つて三兩、人參三分、枯礬二分、海南沈香三分を共に細末にし、粥で調へて重さ五六釐の丸にし、曬し乾して磁瓶に收貯し、紅痢には蜜一匙を用ゐて滾水で調へて服す。紅白を兼ねたるには陰陽水で送下する。肚脹するには滾湯で服す。水瀉には米湯開水で送下する。油膩、腥、酸のものを一个月間忌む。

元寶草

江浙の田塍の間に生ずる。一莖直上し、葉は節に對して生え、元寶を上に向けたやうで、或は三四層、或は五六層になつてゐる。この草には兩種あつて、一種は兩葉が莖を包んでやはり節に對して生え、一種は獨葉で莖が葉の心を穿つてゐる。藥に入れては獨葉のものが勝れてゐる。

○百草鏡——元寶草は陰土に生じ、水に近い處に多くある。穀雨の後に苗が生え、その葉は中が濶くして兩頭が尖り、梭子のやうな形で、穿つた莖が直上し、或は五

(和名)未詳。
(學名)未詳。
(科名)未詳。

六層、或は六七層になつてゐる　小滿節後に黄色の花を開く。氣、性は涼である。辛し、寒なり　百草鏡――性涼である。陰を補し、吐血、衄血、跌撲、閃腰、挫疼、癰毒を治す。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

雀梅

一名酸梅といふ。葉は薔薇のやう、結實は梅のやうで小さい。

百花鏡に云く、ある一種の山雀梅は、枝が蔓曲せぬ。この樹は實らない　また高大なるものもある。按ずるに、綱目では、主治に惡瘡を治するとある外、いづれも記載がないが、此にその功用を補記して置く。

○綱目の郁李の條下に、詩疏の、一名雀梅とあるを引用してあるが、これとは同名異物であつて、やはり癰毒を治することをば言つてなかつた。

葉　酸し、寒なり。乳癰、便毒を治するに奇效があり、熱を瀉し、毒を解す。

（和名）未詳。
（學名）未詳。

鐵烏鈴

（科名）未詳。

采藥書——又、鐵鈴草と名ける。その本は色黒く、葉、梗、根は堅く實して鐵のやう、その汁は黑くして鬚を烏く染め得る。

主治は、楊梅惡瘡、風氣癱瘓、損折筋骨、いづれも酒で煎じて服す。（汪連仕方）

嬭酣草

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

俗に奶孩兒と名け、處處の人家で種ゑてゐる。葉は尖り、大いさは指甲ほどで、枝梗があり、夏期に細い紫の花を開いて簇をなし、結子もやはり細い。今は一般に盆内に種ゑる。婦人が暑期にこれを採つて髮に挿せば膩膻を避け得る。

芳香があつて惡を辟け臭氣を去る。辛し、溫なり。中を和し、霍亂吐瀉を止め、氣を行し、血を活す。瘡を發したものは、これで鼻を塞げば寒熱をして次第に輕からしめる。

土當歸

（和名）うど。
（學名）Aralia cordata, Th.
（科名）うこぎ科

荷包牡丹の根であつて、今一般に活血草と呼ぶ、即ち土當歸である。

汪連仕云く、その根の搗汁を酒に冲して服すれば、人をして沈醉せしめる。金瘡の聖藥である。

（五加科）
木村（康）曰ク、うどニ獨活或ハ當歸等ヲ充ツルハ當ラズ。

開金鎖

從新に云く、江浙に產する。葉は萆薢のやうで高さ三四尺、根は首烏のやうで稜がなく、肉は白色で紋がなく、略ぼ菝葜に似て刺がない。

苦し、平なり、風溼を袪る。蒼朮、當歸と共に用ゐれば手、足不遂、筋骨疼痛を治す。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

鐵指甲

李氏草祕——その草は、葉は指甲に似て、墻脚、堦岸、石砌の間に生ずる。

○王安采藥方——この草は松樹上に沿ふてゐるもので、一名佛指甲といひ、一名寄生といふ。

諸癰毒、火丹で頭面が腫脹し、將に危篤なるものを治す。少し皮硝を入れて搗い

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

て罨すれば立ろに癒える。（李氏草祕）

牙疼には煆いて末にして擦る。立ろに效がある。（王安）

雪裡青

荔枝草を附す。

一名土犀角といひ、一名過冬青といふ。田塍の間に生え、葉は大名精のやうで小さく、地に布いて生え、枝梗がなく、葉に細い白毛があり、四季を通じて凋まず、雪の日に小さい白花を開く、又、荔枝草も雪裡青と名ける。

○百草鏡に云く、雪の日に小さい白花を開くものは乃ち過冬青である。三月に莖が起ち、花は白くして穗になり、夏枯草のやうで毛のあるものは雪裡青と名げる。味苦し、大寒なり。熱を瀉し、咽喉急閉を治するに、擣汁を灌ぐが甚だ效がある。

王氏驗方に云く、能く上焦に行り、腫痛を治し、風火結帶を散ず。咳血には、雪裡青根と精猪肉の切片とを層層に隔てて開白酒で淡煮し、爛れてから食ふ。

○肺痿には、雪裡青の擣汁に蜜を加へ和勻し、二回分づつ作つて服す。毎日五七

囘服すれば七日にして全癒する。

○齒痛には、雪裡青の搗汁を痛む處に含み、再び酒で和して少量を服す。

○痔には、雪裡青湯で洗ふ

○喉に吹く。薄荷一兩、雪裡青五錢に氷片三分を加へ、末にして喉に吹く。或は鼻孔に吹くもよし。

○肺癰。集效方——雪裡青の搗汁を酒に沖して服すれば立ろに效がある。

○黄雨巖云く、危篤の肺癰痿症には、第一に雪裡青の搗汁を服す。もし吐すれば尤も妙である

○單雙蛾を治す。木蓮蓬、雪裡青根、葉の搗汁を米醋を滾らした中に沖入し、少許を含み咽んで吐出すれば癒える。

茘枝草　一名皺皮葱といふ。丹術家で爐火に入れて用ゐる。

○百草鏡に云く、茘枝草は冬が盡きて發苗し、霜雪を經て枯れず、三月莖が抽き出て高さ一尺ばかりに近く、細い紫の穗に成つた花を開き、五月に枯れる。莖は方で中が空である。葉は尖長で面に麻纍があり、邊に鋸齒がある。三月に採る。辛亥

（和名）未詳。
（學名）未詳、
（科名）未詳。

の年、予が臨安の署中に寓居したとき、荒圃中にこの物の多くあるのを見た。葉は深青で日に映じて光があり、邊に鋸齒があり、葉の背は淡白色で絲筋紋があり、綴綻すると麻蘂の凹凸が最も分明に露れ、冬を凌いで枯れない。いづれも獨瓣で、一叢に數十葉あり、砌草の間に點綴してまた雅觀なものだ。

性涼にして血を涼ず。葛祖遺方——咽喉の十八種の症を治し、癰腫、楊梅、痔瘡を消す。

【急驚】集聽——茘枝草汁半鍾で水飛した硃砂半分を和勻して服す。立ろに癒える。

【小兒の疳積】集聽——茘枝草汁を茶盃中に入れ、水に觸れない雞軟肝一個に銀針で數箇の孔を鑽り開けてその汁の中に浸し、汁を肝に浮べて飯鍋の上に置いて蒸熟して食へば癒える。

【喉痛、或は乳蛾を生じたるもの】救生苦海——茘枝草を搗き爛して米醋を加へ、絹で筯の端を裹み縛つたもので數回喉中に點入すれば癒える。

【雙單蛾】集效方——雪裡青一握の汁を茶鍾へ半の滾水に冲して服し、痰あるを吐出する。もし痰がないときは雞の羽で探つて吐かす。もし口が乾くときは鹽湯、

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

醋湯で渴を止める。絶對に青菜、菜油を忌む

【痔瘡】　活人書――雪裡青汁で槐米を炒つて末にし、柿餅で搗いて桐子大ほどの丸にし、每服三錢を雪裡青の煎湯で服す

【白濁】　張菉滸傳方――雪裡青草を生で白酒で煎じて服す。

【無名腫毒】　葉天士效方――雪裡青一握、鮮なるものが佳し。金剪刀を加へて共に搗き爛し、酒糟半鍾を入れて共に搗いて敷く。必ずしも頭を留めずしてよし。輕きは自ら散じ、重きは膿を出すが妨なし。

【鼠瘻を治す】　經驗廣集――過冬青、卽ち茘枝草、又、天名精と名ける、五六箇を鯽魚と共に鍋に入れて煮熟し、草、及び魚を去つて汁を數回飮めば癒える。

汪連仕草藥方――鳳眼草、卽ち茘枝草。土人は賴師草と名け、醫家は隔冬青と名ける。血を涼し、崩、漏を止め、一切の癰毒を散ずるに最も效がある。

落得打

一名土木香、山雄黄、五香草といふ。從新に云く、近き處にある。苗は高さ一尺

ばかり、葉は薄荷のやう、根は玉竹のやうで節がない。搗爛らすと粘る。

○按ずるに、從新に說明してあるものは、今一般に紫接骨といつてゐるもののやうである。落得打は予の養素園中に嘗て種ゑてあつたが、苗は長さ二三尺、葉は細碎で蒿、艾のやう、秋小さい白花を開き、結子は白色で穗に成り、纍纍として水紅花のやうだが、ただ白色なだけである。故にまた珍珠倒捲簾と名ける。跌打損傷を治するに神效のあるもので、嘗て記憶してゐるが、辛巳の年、小婢が足を踏み外して二階の梯から墜ち、瘀血が積滯したとき、この草の擣汁を採つて酒に冲して服ませ、滓で傷處を罨してやると、やや一時ほどで疼塊が散じ。內瘀を瀉出したことがあつた。葉に淸香のあるものがこの藥であつて、家で種ゑて二三年經つたものを藥に入れて用ゐるが良し。野產のものは藥に入れて草氣があり、胃弱のものがこれを服すると多く吐くものである。

○百草鏡に云く、この草は立春後に始めて發苗し、十月に枯れ、八月に花を開く。苗、葉は菊、艾のやうで、岐尖があつて薄い。五月に嫩枝を採つて藥に入れる。

○李氏草祕——七葉草、一名落得打、一名活血丹といふ。草とは名けるが實は樹

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

であつて、その樹の高さは一二尺のものもあれば九七尺のものもあつて等くない。搗汁を酒に和して服すれば、打傷、撲損、疔瘡、腫毒を治す、煎じて痰核瘰癧を洗へば久しき間に自ら消する。敏按ずるに、此には木本だといつてあるが、これはまた一種のものがあるのだらう

甘し、平なり。跌打損傷、及び金瘡出血を治す。いづれも根を用ゐて煎じて服す。或は搗いて敷けば膿を作さない。

葛祖方――跌打損傷、無名腫毒を治し、瘡瘀血、死肉を去り、痛まぬ。

百草鏡に云く、性甘く香し、温にして脾の經に入り、風を去り、氣を調へ、血を活す。

花　牙疼に擦り、頭風、及び風氣を治す。

苦花子

一名毛連子といひ、また小葉金雞舌と名け、また苦花椒と名ける。藥に入れるには梗、葉いづれも用ゐる。

疔瘡、瘴毒、蛇傷、熱腹痛、熱喉風を治するにいづれも效がある。擣汁を水に擂(す)り、夏は冷服し、冬は溫服する。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

佛手草

朱烺齋任城日鈔——杭州秦亭山の聖帝殿の厨房の後にある石臺上の草は、形狀が百合のやうだ、百合草と名け、一名佛手草(ぶつしゆさう)といふ。寺僧はこれを刈つて賣つてゐるが、香を合せる者がこれを藥に入れる

瘡を治するに何種のものなるを論じない。惡瘡はこの草の煎湯で洗へば癒える。

敍按ずるに、王安の采藥方に、射干(やかん)、一名佛手草とあるは瘡を治するものでない。故にこの草とは別である。

草石蠶

餘杭の山中に多くある。葉は大葉の金星(きんせい)に似て、根は黑色で蠶のやうだ。

○按ずるに、甘露子もやはり草石蠶と名けるが、これとは別である。

（和名）ちよろぎ。
（學名）Stachys Sieboldi, Miq.
（科名）唇形科。

○前溪逸志——銅官山に生える石蠶藤であつて、石を土とし、形は蠶である。採つて食へば風痺を癒し得る

○本草の石蠶は乃ち蠶に似た石で、眞の蠶ではないが、藤の蠶は石に根ざす石の蠶であつて、土に穴する。格物の君子に非ざるよりは、いかで能くその名號を辨じ、その性情を識り得ようぞ。

虎傷で口の收まらぬものを治するにこれを用ゐる。虎咬で瘡と成り、口の斂まらぬものには、末にして上に摻れば痂になる。風痺、羊毛疹

敏按ずるに、王安の采藥方に「金星鳳尾、卽ち寶劍草は、その根を石蠶と名け、能く硫黃毒、蛇毒を解し、發背癰疽、結核等の症、竹木魚刺、黃疸、熱淋を治し、眼疾、陰淫瘡を洗ふ」とあるが、これをいふならば藤蠶ではなくして甘露子なることが明だ。

毛葉仙橋

猫舌仙橋を附す。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

一名翠梅草といふ。百草鏡に云く、春期に發苗し、葉は狹く尖り、糙澀にして微し毛があり、三月に碧色の花を開き、五月の間に至つてその莖が蔓延し、土に黏つて根を生じ、兩頭が橋のやうになるからかく名けたのである。三月に採り、根を去る。性寒である。葛祖方――失力黄を治し、能く諸瘡の熱血、風火氣毒を退ける。

○百草鏡に云く、風火を散じ、溼熱を利し、白火丹、疥瘡を治し、精を澀する。

○白濁には、毛葉仙橋三錢を酒で煎じて服す。

李氏草祕――仙橋草は、形は橋のやうに地に倒れて根を生じ、葉は柳に似て厚く、背が紫色のものが多く、秋紫の花を一條開く。疔瘡諸毒、癧腫を治するに、この草の搗汁に酒を加へて服す。發狂して死に垂たるものでも口に入れば生きる。

○汪連仕云く、葉の細いもので、紫背仙橋は背が必ず紫色である。延蔓し地に倒れて橋のやうになつたものでなければならぬ。土人は疔瘡草と名ける。能く疔腫を消して根を拔く。蒼耳草と合せて酒で煎じて服す。

猫舌仙橋　汪氏草藥方――猫舌仙橋は葉の面に刺が生えてゐる。草本で、地に搨して生じ、花は青紫で、水澤の旁に多く産する。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

疔瘡を治し、黄疸、一切の溼火を理す（汪氏）

荷包草

一名肉餛飩草、一名金鎖匙といふ。古寺の園砌の石間に生じ、地連錢に似て葉に縐紋があり、形が腰包のやうで、青翠で美しいものだ。

○百草鏡に云く、二月、十月に發苗して亂石の縫中に生じ、莖は細く、葉は芡實ほどの大いさで中が缺け、形が餛飩の包を挂けたやうだからかく名けたのだ。蔓延して地に貼りつき、節毎に根を生じ、極めて繁衍し易い。山家の階砌、亂石の間に多くある。四月、十月に採る。時期が過ぎると無くなつて了ふ。

性は微寒である。黄、白火丹を治し、溼火を去る。神仙對坐草と兼ねて用ゐる。

○五臟を淸し、熱眼に點け、吐血を止め、痔瘡を洗ひ、婦人の經を調へる。鹽を忌む。

【水腫の初起】百草鏡に云く、活きた鯽魚の大なるもの一尾を、磁片で割開して鱗、及び腸血を去り、紙で拭淨して水に當てぬやうにし、その腹に荷包草を填滿し

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

腰包ハ辨當。

て甜白酒で蒸熟し、草を去つて魚を食ふ。

溼熱を利し、黄白疸、臌脹、白濁、經閉を治す。搗汁を熱眼に點ける。煎じた湯で痔瘡腫痛を洗ふ。(百草鏡)

【疝氣】 周氏家寶——荷包草を研り爛し、汁を酒で送服する。この草は、形は荷包に似て上面に二子がある。初生時には葉があつて子がないが、六七月になるを須てば生ずる。

【黄疸】 家寶方——荷包草と螺螄三合を共に搗き、汁を澄清して煨熱して服す。

【眼中に疔を生じたるもの】 眼科要覽——肉餛飩草を根、葉を連ねて用ゐ、酒漿板と和して搗き、汁を二三囘飲めば癒える。——酒漿板、卽ち酒釀糟である——

【蛇咬】 家寶方——鶴頂紅、卽ち灰藋、肉餛飩、野甜菜の三味を共に搗いて敷く。

鼠牙半支

(和名) 未詳。
(學名) 未詳。
(科名) 未詳。

高山石壁の上に生じ、立夏の後に發苗する。葉は米粒ほどの細いもので、蔓延して石に絡まり、その根が石の罅隙を嵌し、白くして鼠牙のやうだ。百草鏡には各種

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

の半支七十二種を擧げて記載したがこれを第一としてある。

○百草鏡——鼠牙半支は二月に發苗し、莖は白く、その葉は三瓣が一に聚り、層積して蔓生し、花の後に枯れる。四月に黄色で瓦松のやうな花を開く。性は寒である。癰腫を消し、溼鬱水腫を治す。諸毒、及び湯烙傷、疔、癰等の症、蟲蛇の螫咬を治す。蔣儀藥鏡拾遺賦——半枝蓮は蛇傷を解するの仙草である。

【半枝蓮飲】百草鏡に云く、一切の大毒、發背、對口、冬瓜、騎馬等の如き癰を治し、初起のものは消し、已に成つたものは潰し、膿を出しても少い。鼠牙半支一兩の擣汁に陳酒を和して服し、渣を敷いて頭を留める。汗を取つて癒える。章南閩試效の方である。

狗牙半支

虎牙半支を附す

陰溼の地に生ずる。立夏の前に發苗し、葉は尖つて細く、品の字のやうな形式を

なし、層覆して生え、夏至(げし)の時に瓦松に類した黄色の花を開き、花の後に枯死する。その年に雨水の多いときはその草が必ず茂る。葉の大なるものを虎牙といふ。

【癰、疔、便毒、黄疸、喉癬を治す】救生苦海――狗牙半支の擣汁に陳京墨の磨汁を加へて和勻し、喉を漱(くちすそ)ぎ、一日に四五回咽すれば、甚しきものも半月にして癒える。

○天蛇頭(てんじやづ)疼(とう)の忍び難きもの。醫宗彙編――半支蓮と香糟(かうさう)とを用ゐ、搗き爛らして少し食鹽を加へ、包んで患處に當てて置けば疼が止む。

虎牙半支　功は同じ。

汪連仕采藥書――虎牙半支は、性は寒、涼にして毒なし。葉が片方大なるものは羊角半支、葉が扁にして大なるものは馬牙半支であつて、倶に陰山の谷中に生ずる。疔腫、火毒、痔漏を治するに神效がある。

(和名)　未詳。
(學名)　未詳。
(科名)　未詳。

馬牙半支

一名醬瓣半支、鐵梗(てつかう)半支といひ、又、山半支と名ける。石壁上に生じ、葉は大き

(和名)　未詳。
(學名)　未詳。
(科名)　未詳。

くして叢生じ、圓くして醬中の豆瓣のやうだから名けたのである。

○百草鏡に云く、醬瓣半支、又、旱半支と名ける　葉は醬中の豆瓣のやうで、石上に生じ、或は燥土、平陽にいづれもある。蔓生で、二月に發苗し、莖は微し方で水紅色をなして細紅點子があり、霜を經て彫まない。四月に黃色で瓦松のやうな花を開く　山左地方ではこれを菜茹にする。

○江獻祥云く、この草に二種あつて、紅梗と青梗との別がある　婦人の赤白帶を治する第一の妙藥であつて、赤帶には赤梗のものを用ゐ、白帶は白梗のものを用ゐ、採つて搗汁半酒盞を取り、酸迷迷草、これにも赤白の二種あつて、赤帶には赤きものを用ゐ、白帶には白きものを用ゐて搗汁半酒盞を取り、和勻して紹酒半盞を加へ、煮熟して一服すれば止まる。永く再發せぬ。

性は寒である。癰腫を消し、溼熱を治し、水を利し血を和す。腸癰、痔漏、蛇咬、疔疽、便毒、風痺、跌撲、黃疸を治す。汗斑に擦るが尤も妙である　○百草鏡——跌撲には、醬瓣半支一握の搗汁を陳酒に和して服す

〔瘧を絕つ〕　家寶方——醬板豆草を六月六日の雞鳴時に採り、略ぼ洗つて一日間

蒸熟して曬乾し、乾かぬときは焙じ、毎一觔に老薑一觔を配して磨細して收貯し、發瘧一日のものは一錢、二日のものを二錢、三日のものは三錢を酒で調へて服し、服して後に酒を飲んで徹底醉ふが妙である。合せる時には雞、犬、婦人に見られることを忌む。神效がある。

【狗咬】 酒で瘡口の血を洗淨し、醬板半支を擣いて上を罨する。一二日で痂になつて癒える。(王小靜試驗)

【瘰癧】 金養渟云く、馬牙半支を菜にして常服すれば、多年の瘰癧がみな消する。屢〻試みて屢〻奏效した。

【急痧を治す】 醬瓣草を陰乾し、毎服三錢を水で煎じて服す。

【淋疾を治す】 奇方類編——芝麻一把、核桃一個、石上の馬牙半支を共に搗き、滾した生酒に冲して服す。

【水臌を治す】 汪連仕云く、醬瓣草を取り、麝香と搗き合せて臍眼に貼る。人が五支里を歩行するほどの間にその水が下る。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

狗尾半支

百草鏡に云く、頽れた垣墻の側に生じ、人家の荒圃中に尤も多い。俗に狗尾草と呼ぶ。葉は茅のやうで、六月狗尾のやうな形の花を開く。採收したならば花と莖の下截とを取つて陰乾して用ゐる。綱目では、狗尾草の條下にただ疣目を穿ち、赤眼、惡血を去ると記載したに止つて、別の功用を言つてない。故に此に補つて置く。

【疔、癰、癬を治す】面上に生じた癬には、草數莖を取つて軟に揉み、時に拘らず搓めば癒える。

【風粟癮疹】狗尾草の莖で瘀血を刮出し、風を避ける。數回にして自ら效がある。杭集三方に記載がある。

【羊毛疔】家寶方——一名羊毛痧といふ。狗尾草の煎湯を內服し、外用には銀針で紅瘰を挑破し、麻線で瘰中の羊毛のやうな狀態の白絲を擠出すれば癒える。否れば脹死する。

金雞獨立草

【喉風を散ずる】採藥志に云く、喉癰を散ずるの聖藥である。

敏按ずるに、これは翠羽草であつて、併記すべきであつた。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

神仙對坐草

一名蜈蚣草(ごこうさう)といふ。山中の道旁にいづれもある。蔓生で、兩葉相對し、青く圓くして佛耳草に似てゐる。夏小さい黄花を開き、毎節間に二朶(だ)あるところからかく名けたのだ。按ずるに、外科全生に、この草は梗、葉が長く青く、冬を經て衰へずといつてあるが、實は春生じて秋枯死するものだ。衰へぬとの説は謬(あやまり)である。

○百草鏡に云く、この草は清明の時に發苗し、高さ一尺ばかり、山の陽陰の場所に生え、葉は鵝腸草(がちやうさう)に似て節に對し、立夏の時に小さい花を開く。三月に採る。時が過ぎると無くなる。

○王安采藥方——一名地蜈蚣。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

【黄疸の初起。又、脫力虛黄を治す】○百草鏡——神仙對坐草、三葉白、荷包草、平地木、茵陳各三錢を水で煎じ、三服に分けて朝、晝、晚に服す。一服で全癒する。脫力虛黄には五劑を用ゐる

祝氏效方——洞天仙草膏を用ゐる　又、毒蛟には、この草を搗いて汁を飮み、渣で傷口を罨する。立ろに癒える

【一切の痧氣】劉羽儀驗方——仙人對坐、靑木香の二味の搗汁を酒に冲して服す。立ろに效がある。

反胃、噎膈、水腫、鼓脹、黄白火疸、痧氣、陰症傷寒を治す（王安）

紫羅欄

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

白花のものが良く、溪澗に產したものが尤も佳し。その根を藥に入れる。多く服してはならぬ。人をして吐瀉して胃氣を傷めしめる。

臌脹腫滿を治し、水道を淸利する。土に產したものは跌打損傷を治す。根を取つて搗き、酒で少量を服す。（汪連仕採藥書）

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

（一）甌トハ浙江省ノ永嘉江一帶ノ地ヲ指ス。

龍鬚草

野席草、烏龍鬚を附す

一名叉雞草、綫袍草、鐵線草、鐵線筒、人字草といふ。扁蓄に似て小さく細く圓い、綱目の石龍芻とは別である。

○百草鏡に云く、山澤に生じ、穀雨の後に發苗し、野蓆草と相類するが、ただ蓆草の葉は直上し、この草は横に生えて地に布き、小滿の時に莖が抽き出て靑い細な花を開く。

○德勝堂傳方——棒槌草、また丫雞草とも名ける。跌打を治す

○汪連仕方——（一）甌地方ではこの草で席を織る。石龍芻、草龍芻の名があり、後に芻を訛つて鬚とした。土産のものは卽ち叉雞草であつて、又、鹿跑草と名ける。一切の瘡疥を治す。眞の席に織る龍鬚に至つては、その性溫、和であつて、風火を散じ、大いに溼熱を理す。

口咽の諸毒、火症、牙痛を治す。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

野席草　山澤の水旁に生ずる。席草に比較してやや短く細い。また龍鬚草とも名ける。淸明の後に苗が生え、小滿の時に細小な花を開き、根は竹根に類して黒色である。藥に入れるには根を取つて用ゐる

血崩、風氣疼痛、鶴膝風、夢遺を止める。酒で煎じて服し、湯に煎じて洗ひ、汗を出す（草藥鑑）溼熱を利し、癃淋、精濁、崩中、溼瘅、鼻衄、痄腮を治し、目を明にし、疣痛、口咽諸毒、火症、鶴膝風を治す。（百草鏡）瘰癧痰核（王用予）鼻中の不時の出血には、野席草根を煎じて服す（一盤珠）

【齒牙が疼痛し、動搖して落ちんとするもの】○仁惠方——野席草根を湯に煎じて茶に代へて服す。一二日で牙疼が自ら止み、永く再發せぬ。齒牙の動搖するものも石のやうに堅固になる。

烏龍鬚　徐上云く、ある鄕人が田野を行く時、老柏樹上に細く長い草が一叢あつて、燈心のやうな狀態で下垂してゐるのを發見した。一道士はそれを指して、これは烏龍鬚と名けるもので、五福星が樹を照したためにこれが生えたものだ。取つて曬して貯藏して置けば、痼疾一切の血症を治し得るものだといつた。その鄕人は敎

(和名) 未詳。
(學名) 未詳。
(科名) 未詳。

の通りにしてその後用ゐて見ると、頗る效驗があつた。

癰腫、一切の血症、勞瘵を治す。

眞珠草

菜部にある眞珠菜とは異ふ。

臨症指南に云く、珍珠草、一名陰陽草、一名假油柑といふ。この草は、葉の背に小珠があり、晝開いて夜閉ぢ、高さは三四寸のもので、人家の墻脚下に生え、處處にある。癸亥の年、予が西溪に寓居してその土地を視察した時、山野の間の道旁である小草を見た。葉は槐のやうで狹く小さく、葉の背に小珠が生じてゐて、鳳仙子ほどの大いさで纍纍として直く綴られ、霜を經て紅くなつてゐた。土地の者に詢ねてみたがいづれも識るものがない。偶ま歸つて指南を閲し、始めてこれが眞珠草なることを悟つた。夕刻取つて視るとその葉が果して閉ぢてゐた。

小兒のあらゆる病、及び諸疳瘦弱、眼の盲せんとするものを治し、いづれも效がある。末にして白湯で服し、或は魚肉を蒸煮して食ふ。(指南)

(和名)　未詳。
(學名)　未詳。
(科名)　未詳。

九龍草

百草鏡に云く、石上に生えて一丈餘に蔓延し、節の處に根が生え、苗頭が極めて多い。葉は絨細で青色である。又、九頭獅子草と名け、又、金釵草と名ける。按ずるに、綱目では、九龍草は僅に雜草中に附記されただけで、引用した楊淸叟外科方の一條に述べてあるその苗、葉は、この草のやうではあるが、楊梅のやうな紅子を生ずるといふに至つては誤である。

【性は溫である】　血脈を行らし、風痺、跌撲損傷、雙單蛾、痛風を治す。

【奶癰】　家寶方——九龍草を搗いて醬板と共に罨する。

【臭蟲を除く】　經驗廣集——九頭獅子草を取つて寢臺の四隅に置き、一隅毎に二三顆を草薦下に置いて自ら乾くに任せる。臭蟲を去ること神妙である

【紅白蛇纏】　王氏祕方——九龍草を焙じて性を存し、麻油で調へて搽る。周氏家寶——毒蛇咬を治するには、九龍草の搗汁半碗、雄黃二錢を酒に沖して服すれば痛が止む。この草に生ずる楊梅のやうな紅子の搗汁も喉痛を治し得る。按ずるに、これ

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

は楊淸叟外科所載の形狀と同じである。或は同名異物であらう。獅子草とは逈に殊なるものだ。並に存して考證に俟つ。

石打穿

鐵筅箒を附す。

葛祖方――一名龍芽草、石見穿、地胡蜂、地蜈蚣。○百草鏡――地蜈蚣は神仙對坐と相似てゐるが、ただ葉上に紫斑のある點が別であり、且つ神仙對坐草の花は毎節に兩朶であるが、これは莖の端に攢聚し、或は三四、或は五六相聚つてゐる點が別である。これは石見穿ではないかと思ふ。

○龍芽草は山土に生ずる。立夏の時に發苗して地に布き、葉には微毛が起つてゐて、莖は高さ一二尺、寒露の時に花を開いて穗に成り、色は黃で細く小さく、根は白芽があつて尖つて圓く、龍芽に似て頂に黃花を開くところから金頂龍芽と名け、一名鐵胡蜂といふ。それは老根が黑色で形がそれに似てゐるからだ。又、一種の紫頂龍芽は、莖に白毛があり、葉に微毛があり、寒露の時に莖が抽き出て、紫で穗に

成つて花を開く。俱に二月に發苗し、葉は對生して地に貼し、九月に枯れる。七月に採る。

○按ずるに、石打穿は、綱目では有名未用下に列してあつて、たゞ痛を止め、大風、癰腫を治することを言つただけで、その他の用途を言つてないが、葛祖遺方にはその功用が甚だ廣く記載され、竝に諸名がある。これを百草鏡に就いて考へるに、龍芽の二種と地蜈蚣と倶に一物ではない。その功用を論ずれば、石打穿は黃疸を治し、地蜈蚣は跌撲、黃疸を治す。故に百草鏡ではその用途の相同じきところから、地蜈蚣下の註に、石打穿ではないかと思ふといひ、龍芽草下の註に、また石見穿とも名け、主治が下氣、活血、理百病、散痞滿、跌撲、吐血、崩、痢、腸風下血とあつて、明明として二種の功用が各ゝ異つてゐる。葛祖方が何ゆゑに混じて一としたものか判らないが、この書は明末から傳つたもので、或は舛訛があつたものか。或は的確にその知識があつたものか、敢て妄斷は出來ない　此に附記して再考に俟つ。

○敏按ずるに、蔣儀藥鏡拾遺賦に「咽膈の痰を滾し、翻蟣の胃を平にす。石打穿を識得するは誰ぞ」とあつて、註に、噎膈翻胃は、從來醫者も病者も羣つて相畏懼

し、以て不治の症としてゐるが、余はこの劑を得て十たび投じて九たび效を擧げた。啻に饑荒に對するの粟、隆冬に於けるの裘の如きのみではない。乃ち歌に作つて以てこれを誌す。歌に曰く『誰人か石打穿を識得するや、綠葉深紋鋸齒の邊、濶さ寸に盈たず長さ更に倍し、圓莖枝抱起つて相連り、秋黃花を發いて細瓣五なり。結實は匾小にして針刺攢り、宿根本を生ず三尺許り、子は春苗を發し弟肩に隨ふ。大葉の中間に小葉を夾み、層層對比して相新鮮。味は苦辛平にして肺臟に入り、腸を穿ち胃を穿つて能く堅きを攻む。莖葉を採掇して擣いて汁を用ゐ、蔗漿白酒佐使して全し。噎膈にこれを飲めば痰立ろに化し、津嚥すれば平復して功最も先んづ。世眼愚蒙知る者少く、岐黃識らず名浪に傳ふ。丹砂句漏は葛仙の事、余は養生を愛して數言を著す』とある。この歌の中に言つてある形狀に據れば、また鐵筅帚らしくもある。故に竝にその說を存して附錄して置く。

○癸丑の年、余は親しくこの草を家園に植ゑて見たが、それは小著の後に薹が抽出て大著になると花を著け、蕊を吐き條を抽き出て穗になり、さながら馬鞭草の穗のやうで、その花は黃で小さく、條上に攢簇してゐるものであつたので、始めて馬

鞭草は花が紫だから紫頂龍芽なる名があり、この草は花が黄だから金頂龍芽と名けたのだといふことを悟つた。地蜈蚣とは甚だ相類せぬものだが、この草にも地蜈蚣なる名があるところから、百草鏡に、石見穿ではないかと思ふといつたのである。

○李氏草祕——石見穿は竹林等の處に生じ、葉は少くして艾のやうだが、花は高くして一尺ばかりある。打傷、撲損、膈氣を治す。これで見ると石見穿の葉は艾のやうなもので、又、石打穿の葉の深紋があり鋸齒があるとは合致しない。

葛祖方——宿食を消し、中滿を散じ、氣を下し、吐血の各病、翻胃、噎膈、瘧疾、喉痺、閃挫、腸風下血、崩、痢、食積、黄白疸、疔腫、癰疽、肺癰、乳癰、痔腫を療ず。

【乳癰の初起】百草鏡——龍芽草一兩を白酒半壺で半碗までに煎じ、飽食後に服す。初起のものは消し、膿と成つたものは潰し、且つ能く膿の出るを多くなくする。

鐵筅箒　山間に多くある。莖は綠にして方に、上に紫線紋があり、葉は紫頂龍芽に似て微に白毛がある。七月に小さい黄花を開き、結實は筅箒の形のやうで能く人の手を刺す。故にまた千條針と名ける。

(和名)　未詳。
(學名)　未詳。
(科名)　未詳。

○百草鏡——芒種の時に花を開いて簇を成す。

○種福堂方——鐵筅箒、卽ち石見穿である。綱目には、馬蘭子もまた鐵筅箒と名け、その葉は薤に似て根は刷帚のやうだとあるが、これとは全く別である。草寶に、鐵筅箒は、葉は紫頂龍牙に似てゐるが、毛がないだけ別である。七月小さい黄花を開き、結實は筅帚に類して能く人の手を刺すところからかく名けたのである。黄疸には、この草の乾いたもの一兩を用ゐ、白酒で煎じて服す。四五劑で癒えるとある。

風痺、血崩、黄疸、吐血、跌撲、鬼箭風を治するに神の如くである。擣いて肩癰、鶴膝風に敷く。鮮のものを根、葉を連ね、もし秋、冬で根が老いたときは葉を取り、汁に飛麪を加へて調勻し、包紮して湯に煎じ、瘡疥を溶すれば立ろに癒える。

【風痺、鶴膝等の風を治す】○茅崑來效方——鐵筅箒三兩、龍眼肉半觔を酒で煮て飮む。○又ある方。鐵筅箒、白毛藤、地蘇木、龍芽草、蒼耳草各一兩を酒で煎じて服す。五劑を用ゐる。

【風痺の藥酒】○救生苦海に云く、幷に跌打、瘋腫を治す。鐵筅箒、八角金盤根、白毛藤、蘇木、絡石藤各一兩を酒に十日間浸して用ゐる。

【跌打傷】　金居士選要方――鐵筅箒三兩を酒で煎じて服す。

【脚症】　蔣雲山傳方――石打穿草を月を按じて草頭一個を取り、三月には三個、四月には四個といふやうに月で數の多寡を分け、搗汁に人乳、羊乳汁を攪勻して服す。立ろに效がある。

【面上の斑黶】　朱子和方――鐵筅箒の地上に自ら落ちた葉、幷に子を取り、湯に煎じ澄淸して洗面する。三四回でその斑が自ら消する

【鶴膝風】　種福堂方――石見穿草を根、梗倶に紅色のものを用ゐるが佳し、枝を連ねて倶に用ゐる。秋、冬で根、梗が倶に老いたときは、葉半分を用ゐる。倶に當日取つた新鮮なるものを要する。一夜隔てたものは用ゐてはならぬ。鐵筅箒草一分と共に用ゐ、飛麪少量を加へ、共に膝眼內に打紮する。

狗卵草

一名雙珠草といふ。人家の頽垣、古砌の間に生ずる。葉は小將軍草に類して小さく、穀雨の後に極間に細碎なる花を開き、細子を結ぶ。子は腎に似て、又、椒の形

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

に類し、青色で微毛がある。立夏の時に採る。

○百草鏡に云く、蔓延して生じ、喜んで土墻の頭上に生える　三四月に採るもので、五月には無くなる。二月に發苗し、乃ち小草である。三四月の間に節椏中に子を結ぶ。子の形は外腎のやうで内に二箇の細核がある。

性は温なり。疝氣を治し、下部に行り、大汗を發して妙である。腰痛を治す。

【疝氣】　瀠寮方——狗卵子草を用ゐ、鮮のもの二兩を搗いて汁を取り、白酒を和して服す。餓ゑた時に藥を服し盡し、醉うて寢具を暖に被て睡る。大汗を發して自ら癒える。この草は性温であつて、能く下部に達するものだ。もし鮮のものがないときは、三四月に預め採つて曬し乾して保存したものを用ゐる。もし乾いたものを用ゐる場合は、ただ一兩でよし。白酒で煎ずる。紫背天葵五錢を加へて共に煎ずれば更に妙である。

庚戌の年、予は臨安の官舍にゐたが、屋後の荒圃に多くこの草が生えてゐた。驚蟄後に發苗し、小將軍に似て葉がやや小さく、色はやはり淡綠である。春分後に細碎にして藕合色の花を開き、節椏に花があつて子を結ぶ。子は狗卵のやうで頗る壯

滿観る可きものだ。その草は地に蔓り千百穗併に一根であつて、立夏の後に多く槁れる。予と同一建物に住んでゐた許氏の子が、少年にして痲を患ひ、發すると厥を作したが、この草を酒で煎じて服し、後に永く再發しなかつた。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

一粒金丹

一名洞裏神仙といひ、又、野延胡と名け、江南地方では飛來牡丹と呼ぶ。處處にある。葉は牡丹に似て小さく、根は長さ二三寸、春小さい紫の花を開いて穗になり、柳に魚を穿したやうである。結子は枝節の間に在り、生では青く、老いると黄になつて地に落ち、復た豆大ほどの小枝子を生ずる。その根下には結粒があつて、年深いものは大いさ指ほどあり、小なるは豆ほどである。一種の黄花のものは蒿屬であつて、根にはやはり子が無いものだ。採取して慢用してはならぬ。

跌打損傷、風氣を治し、癰腫、便毒、瘰癧、天蛇毒、鴉翅毒を消す。擣つて火丹、痔腫、風痺、閃朒、腰痛に敷く。

【腫毒の初起】百草鏡——一粒金丹根上の子一兩を取り、搗汁を陳酒に和して服

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

す。併に瘰癧の初起を治す。

兎耳一枝箭

獨葉一枝鎗、金邊兎耳、兎児酸を附す。

陰山の麓に生ずる。立夏の時に發苗し、葉は他に布いて生え、兎耳の形に類する。葉は厚くして邊に黄毛、軟刺があり、莖、背にも倶に黄毛がある。寒露の時に心が高さ五十ばかりに抽き出て、上に倒刺があつて軟だ。卽ち花であつて、毎枝にただ一花である。故に一枝箭と名けたのだ。藥に入れるには綿で裹んで煎じる。毛載が肺を射して人をして咳せしめる恐があるからだ。

○百草鏡——兎耳一枝箭は、葉は橄欖のやうな形で邊に針刺があり、ただ七八葉が地に貼いて生え、八月莖が抽き出て一尺近くになり、花は枸穗のやうで萌刺があり、莖、葉に毛がある。七月に採る。小鹿啣、銀茶匙、忍冬草、月下紅等の名がある。

○汪連仕云く、兎耳箭は、初生の苗をば金茶匙と名け、血分に入り、吐血を止め、

肺癰を治す。王安采藥方には、葉底の紅きものを金茶匙と名けるとある。

性は寒、味は苦し。血を行らし、血を涼じ、肺の經に入つて肺火を淸し、吐血、勞傷を治し、血を調へるに最も效があり、怯弱の要藥である。肺癰、肺痿、黃疸、心疼、跌打、風氣傷力、咳嗽咯血、腫毒。

【腸癰、肺癰、縮脚癰】慈航活人書——白石楠葉の嫩腦十二箇、兎耳草二兩を好酒で煎じて服す。肺癰は二服、腸癰、縮脚癰は一服で癒える

【骨蒸勞怯】吳普仁方——兎耳一枝箭で鷄を蒸して服す。

獨葉一枝鎗　深山に生じ、四五月の間に土人が採取して市に賣りに出す。長さは二三寸、一莖に二梗あり、一梗に葉があり、葉は兎耳に似て、又、箭頭に似てゐる一梗は細く尖つて新たに抽き出た竹萌のやうだ。故にかく名けたのである。

○百草鏡——獨葉一枝鎗は山原に生じ、淸明の時に發苗し、穀雨の後に枯死する。長さは二三寸、一葉一花で、葉は橄欖のやう、花は錐鑽に似てゐる。

味甘く淡し。功用は一枝箭と同じ。○朱燉齋任城日記——諸毒蟲咬には、獨葉一枝鎗草を生で擦れば癒える。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

金邊兎耳　形は兎耳草のやうで地に貼して生え、葉の上面は淡綠、下面は微白で筋脈があり、緣邊に黃毛が茸茸として金色をなし、初生時には葉がやや捲いて兎耳の形のやうだ　沙土の山上に最も多い。

味甘く淡し　虚勞吐血を治す。

兎耳酸　汪連仕草藥方——卽ち穿地鈴である。跌打損傷を治す。

金線釣蝦蟆

川野山石の間に蔓生する　葉は三角風に似て光潤で青黃色を帶びてゐる、根は金線釣蝦蟆と名け、又、獨脚蟾蜍と名け、また金線重樓とも名ける、準繩の痘毒方中にこれを用ゐてある　綱目の草河車、及び蚤休ではない

○丹房本草——金鈴草、一名挂金藤、また金線釣蝦蟆ともいふ。その子の狀態は鈴のやうで、莖を折斷すると乳汁のやうな液がある。自然汁を取つて雄黃を伏し、硫黃を制す。その霜は雌黃を煉り汞を煮得る。

○百草鏡——金線釣蛤螞は山土に生ずる　莖蔓は紅く、根は細く、葉が大きくし

て金鎖匙に類し、芒種の時に穀精の花のやうな花を開く。根を採つて藥に入れる。

按ずるに、防已もこれと相似てゐるが、但し根の形が似てゐない。蛤蟆は莖が甚しく紫でなく、葉が甚だしく圓くなく、尖岐があり、葉中の蛛網紋が明ならず、多くない點が別である。

○草寶に云く、金線重樓は陰山の麓に生じ、根には蟾蜍に類した疙瘩があり、土に入ること深くないので土を刨つて取り易い。その性は涼であつて、乃ち吐藥である。小滿の時に發苗し、蔓が延びて色は紫である。葉は相對せず、黃龍藤に類して柔軟であり、葉上に蛛網紋があつて甚だ鮮明である。もし葉が圓くなくして微し尖り、紋が鮮明でなく、莖が甚だ紫でなく、形が蟾蜍に類せぬものならば、それは防已であつて重樓ではない。

○汪連仕草藥方――紅線のものは金線吊蝦蟆、青莖のものは漢防已である。

○王聖俞云く、重樓根はさながら三足蟾のやうで、その根の旁にまた根が生えて蟾蜍を結し、年久しきものは、一本を掘り取るとその下根に數十の蟾蜍があつて、纍纍として横に掛つてゐる。其の力が最も大である。

○趙貢栽云く、金線釣蛤蟆は、生のものが力が大きく、乾けるものはややそれに次ぐ、凡そ大毒はこれを服すれば必ず吐く　一般に多くは懼畏して用ゐないが、しかし吐して後にはその病が失へた如くなり、毒は即ち内消するものである。凡そ發背で毒氣が心を攻めるものは、この草でなければ治癒せない　もし小毒の場合ならば斷じて用ゐてはならぬ　藥力の性が大なるために病がそれに相當し得ない　相當し得なければ偏勝の害がある

性は平、味は苦し　癰を消し、風を去り、毒を散する　百草鏡――根は性涼である、癰疽を托し、腫毒を追散し、瘰癧を治し、外科の聖藥である。

○採藥志――腸癰を治し、風を追ひ、毒を敗る。

○葛祖方　痰涎を吐するに瓜蒂の代用となる。

○偏鵲心書　金線重樓、俗に金線釣蝦蟆と名ける。採取したならば外の黑皮を去り、石槌で打碎する。鐵器に觸れてはならぬ。曬し乾して末にし、小磁瓶に收貯し、凡そ一切の痰涎を吐する必要ある症に遇つたとき、これを瓜蒂の代用とするが最も妙である　風痰結胸には、一錢を陰陽水で和して服し、傷寒で瘧となつたもの

には、一錢を發作に臨んで空心に水で和して服し、禁口痢には一錢を流水で服す。鐵器を忌む。

【跌撲傷】張氏傳方——根の搗汁を取つて酒を和して服し、渣を敷く

【藥を天膏藥と名ける】腫毒の破爛したるに貼れば、能く毒を拔き口を收める。拍熱して毒に貼れば能く毒水を拔いて外に出す　酒で煎じて服すれば心疼を治す　水に磨つて痔に搽り、膏に煎じて百病に貼る

○汪連仕草藥方——天膏藥は、疔瘡、惡毒、流注、痄毒、鼠瘻を治す　生酒と合せて搗いて服すれば毒を敗るの功がある。多くこれを食へば人をして吐瀉せしめる。

雞蝨草

この草は深秋にあるもので、紫の花を開き、子は椒核のやうである　處處の原隰にいづれもあり、葉は苧麻葉のやうで氣が臭いところから雞蝨と名ける　必效方に云く、海寧の沈清芝は風毒を患ひ、五六个處に穿流して非常な疼痛であつたが、この草を覓めて服し、一劑にして癒えた。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

【風毒流火を治す】一握を取つて酒で煎じて吃ひ、或は酒に入れて一炷香の間煮て渣を去つて服す。いづれも效がある。

老君鬚

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳

百草鏡に云く、この草は立夏の後に發苗し、葉は何首烏に似て微し狹く、對生し、莖と葉と倶に微に白毛があつて、首烏の莖、葉の光澤あるやうではない。根は白微に類し、白くして極めて多い。故にかく名けたのだ。藥に入れるには根を用ゐる。

○王安採藥錄——老君鬚は溪澗の邊に生じ、藤が起つて二三尺になり、梗は青く、根鬚は白黄色で數十條ある。能く痔を消す。

○按ずるに、王三才醫便に「老軍需は春、夏、秋、冬常にあり、青くして叢草を出てゐるところが氣高い。莖藤は青く、葉は櫃葉に似て尖つて小さく、根は鬚のやうで白く、芋頭に似たもので、根が藤を牽いて去る。俗に社公口鬚と名ける。やはり腫毒を治するもので、根を採つて擂り、生酒で服し、渣を患處に敷く」とある。味辛し、性は熱であつて瘀を破る。毛氏瘰癧方にこれを用ゐて瘰癧を治すとある。

【痞結を治す】　醫便――痞結が年久しくして龜鼈となりたるものに累に用ゐて極めて效があつた　老軍需一味を、春、夏は莖、葉を用ゐ、秋、冬は根を用ゐ、多少に拘らず、好生酒一罐を用ゐて、外に鯽魚一尾と藥とを共にその罐に入れ、日沒時に煮て魚の熟するを度とし、患者をして先づ魚を食はしめ、次に酒を飲ましめ、再び藥渣を痞結の至る所に撲ち、翌朝これを去る。大小便に物が下れば卽ち效があつたのである。もし反應がなかつたときは三五回連服する。その物の跡がなくなり、言ふべからざる神效がある。

余曉園云く、風痺を治し、血瘕、面黃、痞塊を消す。

汪連仕云く、老君鬚は、根は細くして白微のやうだ　氣を理し、腫を消し、關格を通利し、毒を敗り、癰を消す。いづれも酒で煎じて服す。

王安采藥方――金釵草の根を老君鬚と名ける　龍虎丹を合すに用ゐ、三十六種の風症、癱瘓、鶴膝等の風を治す。

葛公草

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

(和名) へんるうだ。
(學名) Ruta graveolens, L.
(科名) へんるうだ科(芸香科)
木村(康)曰ク、へんるうだハ歐洲ノ原產ニシテ屢々培養セラルル多年草ナリ。全草中約〇・〇六%

傳信方に云く、葉は蛇卵草に似て、又、吉慶子に似てゐる。表面は青くして蒙があり、裏面は白色で三葉が分れ、枝梗は薔薇に似て刺がある。四月の間に子を結ぶ。根を取つて用ゐ、子も藥に入れ得る。

「血症を治す」傳信方に云く、葛公根一兩を鐵器を忌んで木擊で碎き、水二大碗で煎じて一碗とし、好酒一碗を加へて再び煎じて茶杯に八分ほどにし、就寢時に服す。服して後に寢具を被て全身を暖にし、手で胸膈、臍腹を數遍磨り、翌晩も前の如くにして一兩を再服し、その次の日にまた前の如くにして一兩を服し、三日連服すれば癒える。

葛祖方――葛公草、一名家母藤。脚氣腫疼、沙木腿を治す。搗汁を熬つて膏にし、鵝翎で患處に掃き、乾けば潤ほす。

芸香草

職方考――雲南府に產する。能く毒瘡を治す。蠻夷地方に入る者はこれを携へて身に著ける。もしこの草を嚼んでも味のないときは蠱に中つたことが判る。その場

合急にその汁を服して吐けば解し得る

按ずるに、雲南志に、昆明に產する。二種あつて、丘葉のものをば丘葉芸香と名け、韭葉のものをば韭葉芸香と名ける。瘴瘧を治すとある

藥性考に云く、五葉になつて生えるものは昆明に產し、瘡毒等の疾を治し、專ら能く蠱を解す。擣汁を服す　韭葉芸香は能く瘴瘧を截る。蠻夷地方には邪蠱が多いが、この草を携ひてゐて、嚼んで見て味のないときは中毒なることが判る

雲南志——蠱を解し、毒瘡を治す　一切の瘡毒、瘴瘧には、いづれも擣汁を服す

藥性考——味辛し。治症は同じ

鏡面草

滇南志——滇中に產する。能く血脈を通ずる。○按ずるに、この草は今は處處にあり、階砌の石畔に多く生え、葉は指面ほどの大いさで圓く、その邊は微に碎齒を作し、葉の面が鏡のやうに光つて深綠色である。土人は蟢兒草と呼び、又、地連錢と名ける。花の開くを見ずしてただ葉が見えるだけのものだ。やはり鏡面草と呼ぶ

ノ精油ヲ含ム、精油ノ主成分ハ「メチルノニルケトン」ニシテ其他「メチルヘプチルケトン」、此兩種ノ「ケトン」ニ對應スル「アルコール」ソレ等ノ醋酸エステル、ピネン、シネオール等ヲ含有ス。又金草中「ルチン」トイフ「フラボノール」配糖體ヲ含有ス「ルチン」ハ加水分解ニヨリ「クエルセチン」葡萄糖及「ラムノーゼ」ヲ生成ス。（ウ植二〇、六二一）全草ハ茶劑トシ（瑞、佛、獨）方ニ驅風、通經ノ目的ニ賞用ス、多量ハ有害ナルヲ以テ注意ヲ要ス。又「ヒステリー」ニ效アリト本植物ノ葉ヲ書籍ニ挿入シ置ク時ハ蟲害ヲ防ギ得ト。邦藥植、一七五。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

が、滇中に産するものがこの類なりや否やは判らない。

性は涼である。肺火で膿血を結成するもの、癰疽を治す。（採藥誌）月閉には、敝蓑（へいさ）に和して酒で煎じて服す。（滇南志）

石將軍

一名紫羅毬（しらきう）といふ　秋期に紫色の圓暈（ゑんうん）のある花を開く。高山の石上に生ずるもので、立夏の後に苗が生え、葉は龍芽草に類して略ぼ小さく、節に對し、高さは一尺に過ぎぬ　根の本は勁（つよ）く細くして六月雪に似てゐる。

○謝芸溪云く、西湖の鳳凰山にある。石岸の旁に生じたものを藥に入れる。土上に生えたものは甚だ肥えてゐて、治症に卽驗を擧げ得ない。葉は椐木（きよもく）のやうで對生し、梗は方で色は紫、高さは一尺餘、細かな紫花を開いて毬になる。能く血を活し、風を疎し、瘀を消し、腫を散ずる。

味淡（あは）し、性は平である。一切の跌打損傷を治す。血瘀の散ぜぬには搗汁を服し、或は水、酒で共に煎じる。風寒閉塞、或は癰疽の初起の如きもこれを服すればいづ

れも效がある

五葉草

これは火葬場の上の草である。程雲來郎得方に、五葉草と名くとあるが、亦た形狀は記載してない。

能く痘後の眼翳を移す　この草を搗いて豆大ほどの一小餅にし、左眼に翳のある場合には、右眼角の肉上に貼れば右眼に移つて行く、再びこの餅を左眼角の肉上に貼ればその翳は移つて鼻梁內に行く　その時この餅を去れば翳膜が除ける

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

蛇草

諸羅志——形は波稜に似て小さい白花を開く　按ずるに、綱目に蛇眼草があつて、古井、及び年深き陰溼の地に生え、形は淡竹葉のやうで葉の背に紅圈があり、蛇眼のやうな狀態だ。搗いて敷けば蛇傷を治すとあるが、これと同一物なるや否や判明せぬ。附記して考證に俟つ。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

蛇傷を治するに、根を連ねて搗いて傷口を罨し、かくて酒で煎泡して服すれば立ろに癒える。

汪連仕采藥書――蛇眼草、郷間に産し、蘆叢、水澤の旁に甚だ多い。一切の蛇傷、疔、痔を治す。俗に蛇口半枝蓮と呼び、又、落得咬と名ける。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

千年健

朱排山柑園小識――千年健は交趾に出るが、近頃は廣西諸土郡に産する　形は藤のやうで長さ數尺、氣は極めて香烈であつて藥酒に入れられる　風氣痛の老人に最も宜し。この藥を服食すれば萊菔を忌む。

筋骨を壯にする――酒に浸して鑽地風、虎骨、牛膝、甘枸杞、二蠶沙、萆薢と共に理風として用ゐる――胃痛を止めるには酒に磨つて服す。

木村(康)曰ク、A. Henry ハめぎ科ノ Holboellia cuneata, Oliv. ヲ千年健ニ充ツ。

蜈蚣萍

溪澗、田港の止水中に生ずる。流水では生えない、形は蕨、萁のやうで、中の一

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

莖の兩旁に細葉が對して攢り、蜈蚣の狀態に似てゐるところからかく名けたのである。葉は頗る糙澀で浮萍のやうに光澤でない。綱目の水藻の集解下に馬藻があつて、やはり對生して形も微に似てゐるが、實は一物ではない。蓋し藻は食へるがこれは食へない。故に主治もやはり別である。俗に邊箕萍と呼ぶ。

○羣芳譜——麻藻萍の異種で、長さは指ほど、葉は相對して聯り綴り、萍のやうに點點として淸輕なるものでない。按ずるに、麻藻、卽ち今の蜈蚣萍である

【蝨を治す】　同壽錄——蜈蚣萍を曬し乾し、烟に燒いて熏ずれば一切の跳蚤、壁蝨みな除ける。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

老鸛草

龍柏藥性考補遺——山東に產する。

味苦くして微し辛く、風を去り、經を疎し、血を活し、筋骨を健にし、絡脈を通ずる。損傷、痺症、麻木皮風には、酒に浸して常に飮めば大いに效がある。或は桂枝、當歸、紅花、芎藥等の諸味を加へる。藥に入れるには莖嘴を用ゐる。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

鬼香油

汪連仕草藥方――鬼香油は、細葉のものを天香油と名ける。根、葉を連ねて搗いた汁は、その味が香油のやうだからかく名けたのだ。

○李氏草祕――鬼香油の苗、葉は香薷のやうである

ある人が大腿が腫痛し、二三月にして膿があり、內潰して出すことが出來ず、危篤に垂たる容體であつたが、これで上を罨すると破れて膿を出し、數服で癒えた

この草の汁で敷藥を調へるが尤も妙である

諸癰腫毒、冬瓜癰、附骨疽を治す（李氏草祕）冬瓜癰、附骨疽には、この草に甘草一錢を加へ、醬板、鹽花を入れて搗いて罨するが有效である

肌膚を潤ほし、顏色を滋くし、瘡毒を敗る。土人はただ蛇咬、蜂螫、蠱毛傷に葉を取つて擦る。（汪連仕草藥方）

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

肥兒草

龍柏藥性考補遺——廣西の平樂縣に産する小兒一切の疾、及び痧脹に要藥として需要される。

玉叉草

李氏草祕——この草は葉が對して梗が圓い。田に近き水溝中に生ずる。打傷、跌腫、損折を治するに搗汁を服す　諸腫毒を罨する

汪連仕采藥書——草裡金釵は、黄花を開き、葉は細く、獨苗が直上に伸びて醒頭草のやうだ　金瘡を治し、血を活し、白濁遺精を治す　白花を開くものは草裡銀釵、白玉釵草であつて、婦人の白帶、白淫を治するに、生で白酒を合せて煎じて服す。

(和名) 未詳。
(學名) 未詳。
(科名) 未詳。

石蛤蚆

百草鏡——山土に生ずる。根は皮の色が紅い　薬に入れるには根を用ゐる。○周維新云く、石蛤蚆、乃ち映山紅の根である。○花鏡に云く、山躑躅を俗に映山紅と名ける　杜鵑花に類してやや大きく、單瓣で色が淡い　もし滿山に生ずればその年

(和名) 未詳。
(學名) Rhododendron sp.
(科名) しやくなげ科(石南科)
木村(康)曰ク、A. Henry 及 Giles ハ映山紅ニしやくな

げ科のしなのさつき Rhododendron indicum, Sweet. ヲ充ツ。又E.H.Wilson ハソノ變種 R. indicum, Sw. var. ignescens, Sw. ヲ充ツ。

本種ニツキテノ成分ノ研究ハナキモ、歐洲産同屬植物中ニ有毒成分トシテ「アンドロメドトキシン」ヲ含有スルモノ多數アリ、本種モ亦同樣ノ有毒成分ヲ含有セン。

は必ず豐年である。紅、紫の二色あつて、紅いものは汁を取つて物を染められる。○李氏草祕——石蛤蚆は、苗は長さ二三尺、莖は方で葉は竹葉に似てゐる。根は形が蛤蚆のやうで石のやうに堅い。

○敬按ずるに、汪連仕方に、映山紅根を翻山虎と名け、土人は搜山虎と呼ぶ。癧瘺を治して能く根を拔く。風を醫するに、巴山虎と合せて酒で蒸して服し、二虎丹と名けるといつてある。その功用を核ねて甚だ懸隔はないけれども、その形狀を考究するに確かに一種のものではない。李氏草祕の所載を以て是とすべきであらう。

煎じて梅瘡を洗ふ。能く風塊を消す

【風氣痛】祝穆效方——地蜈蚣草、石蛤蚆草各等分を紹酒で煎じて服す

【腸癰】景岳新方——腸癰が小肚角に生じて微腫し、小腹の隱痛して止まぬものは、もし毒氣が散ぜねば漸次に大きくなり、內攻して潰れると大患となる。急にこの藥を以て治すべきである。先づ紅藤一兩ばかりを好酒二碗で午前に一服して醉臥し、午後に紫花地丁一兩ばかりをまた前のやうにして煎じて服す。服して後に痛が必ず次第に止むが效の現れである。然る後に再び末藥を服せば根を除く。○末藥

の方。——當歸五錢、蟬退、殭蠶各二錢、天龍、大黃各一錢、石蛤蚆五錢、老蜘蛛二個を新瓦上に置いて酒杯を蓋せ、外から火で煆乾して性を存し、前藥と共に末にし、空心に酒で調へて一錢ばかりを服し、毎日漸服すれば自ら消する。——經驗廣集では石蛤蚆の葉を用ゐてある。——

【禿瘡】不藥良方に云く、即ち肥瘡が日久しくして延蔓して片となり、髮が焦げて脫落するもので、又、癩頭瘡と名ける。先づ艾葉、鵝糞の煎湯で瘡痂を洗淨し、再び猪肉湯で洗ひ、随つて躑躅油を用ゐる　躑躅花根四兩を搗き爛し、菜油一碗で煎じ枯して滓を去り、黃臘少量を加へて布で濾し、冷えるを待つて青布に蘸けて搽る。一日三回。氈帽を戴いて風に當らぬやうにする。毒を散じて能く癢を止め、髮を生ぜしめる。久しく搽れば自ら效がある。

【疔腫諸毒】○李氏草祕　石蛤蚆を酒に磨つて服す　少し口に入りさへすれば垂死のものも生きる。この草があれば疔瘡の患を恐れない　諸腫毒には醋に磨つて敷く

(和名) バナナ。
(學名) Musa, paradisiaca, L. subsp. sapientum, O. Kuntze
(科名) ばせう科
木村(康)曰ク Giels ハ香蕉ニばななヲ充テ甘蕉ニれうりばせう Musa, paradisiaca, L. ヲ充ツ。共ニ本條ノ香蕉ノ原植物ト認メテ可ナランカ。

香蕉

皇華紀聞——粤の地は濕熱で、一般に痲瘋に感染するものが多く、その病人の居た室には人が敢て處らず、必ず香蕉を種ゑる。これは木本で實を結ぶものだ。それを屋敷内に種ゑて置くと、一二年後にはその毒が盡くその樹中に入つて了ふので、始めてその家に住む。

雨廣雜志——蕉の種類は甚だ多く、子はいづれも甘美であるが、香牙蕉を第一とし、龍奶と名ける。奶とは乳のことで、龍の乳のやうだといふのである。多くは得られぬものだ。しかし、これを食へば寒氣が心に沁み、頗る邪なる甜味と考へられるところがあるもので、その葉には硃砂の斑點がある。植ゑるには必ず木で夾んで置く、さなくば實を結んだ時に風のために必ず吹き折られるものだ。故にまた折腰娘と名ける。凡そ焦は葉が必ず三で、三が開くと三が落ち、落ちても地に落ちずしてただ莖の間に懸つてゐるもので、乾せばそれに物を書けるものだ。花は心に出て、一心毎に一莖が抽き出て花になり、雷を聞いて坼け、坼けたものは倒に垂れた菡萏

（一）糞トハ肥料トシテ加ヘルノ意ナリ。

のやうになつて層層瓣を作し、瓣中には蕊がなく、悉く瓣ばかりで、次第に大きくなると花が瓣中から出る。每一花の開くのは必ず三四个月でそれで總て花が畢り、一花が總て十餘子になり、十の花があれば總て百餘子に成り、小、大各房をなし、花に隨つて長じ、長さ五六寸ばかりになり、先、後相次ぎ、兩兩相抱くもので、その子は同時には生ぜず、花は同時には落ちない。一年中花、實が代謝して、寒期を歷ても凋まず、子は三四个月にして始めて熟する。粤地方では嬰兒に乳が少ないと熟蕉子で養ふ。又、酒に浸すと味が甚だ美である。その蕉心の嫩く白いものは煮として食へる。綱目の芭蕉の條下には各類の記載はあるが、香蕉に於ては獨り明晰になつてゐない。此に粤志に依つて補つて置く。

麻瘋の毒を收める。

五雜組——鳳尾蕉はその本が麁大なもので、四五尺長さの互葉が魚刺のやうに密比し、高さはやはり一丈餘ある。又、番蕉といふがあつて、鳳尾に似てゐるが小さい。流求から來たものだと傳へられてゐる。これを種ゑると能く火の患を辟けるもので、これは水の精だといふことだ。枯れた時は鐵屑を（一）糞し、或は鐵釘をその根

に釘てば復活する。蓋し金能く水を生ずるのである。盆栽にすれば甚長くならず、一年に纔に一葉落ちるだけで、長さを計つても一寸にならず、また甚だ花を開かない。予はこれを三十年種ゑてゐたが、僅に二回花を見ただけであつた。その花はやはり芭蕉に似て、色は黄で實らない。

鐵樹葉

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

東洋に産し、舶商が携帶して來る。葉は篦箕のやうで兩旁に生じ、細尖瓣を作してゐる。嗅いで見ると梅花の香に似た清氣がある。

○按ずるに、羣芳譜に、鐵樹は海南、閩、廣に多くある。その花の狀態は、鐵絲燈籠のやうで廣く千瓣を張り、瓣が各一花であるとある。程扶搖花鏡には、鐵樹葉は石楠に類し、質理は細厚、幹、葉はみな紫黑色、花は紫白、瑞香のやうで四瓣でやや少團である。一たび開けば累月凋まない。嗅げば草氣がある。海南人の言ふところでは、この樹は黎州に極めて多く、一二尺長さのものがあり、葉は密にして花が紅く、樹はさながら鐵に類してその枝椏が穿結し、甚だ畫意がある。盆栽として甑

賞するに最も佳し、但し一般には罕に見るものだから珍奇なものとして翫べるのだといふ　横州馴象衛の殷指揮貫の家に鐵樹があつて、丁卯の年に遇ふ毎に花が開いたといふが、五臺山に出るものは一定して六月十九日に花を開く　楊萬里の詩の註に、鐵樹葉は蒻に似て幹が紫、密節菖蒲のやうだとある。この諸說のやうでは、同一鐵樹でも開花と枝葉とがまたかやうに同じくない。今洋中から持つて來るもの、及び世俗に藥に入れて用ゐてゐる鐵樹葉は、形が箆箕のやうである。その樹は鐵屑で壅つて置けば盛になるといふところに據ると番蕉の葉であつて、その鐵を食ふといふところからやはり鐵樹と名けたのだ。その性がやはり肝を平にするは、その相制する點を取るので、これを使用するに、やはり頗る效驗がある。謝肇淛の五雜俎に、番蕉は能く火の患を辟けるといひ、將に枯れんとする時、鐵屑を糞し、或は鐵釘でその根に釘てば復活する。蓋し金能く水を生ずるものだ　盆栽にすれば甚だ長くならず、一年に纔に一葉を落下し、長さを計つても一寸にならず、また花を作さず、三十年にして僅に二回花を見ただけだといひ、また芭蕉に似て色が黃で實らぬといひ、羣芳譜に、鳳尾蕉、一名番蕉は鐵山に產する。もし少し萎えたときは鐵を

紅く焼いて穿てば活きる。平常鐵屑を泥に和して壅へば茂つて子を生ずる、分種すれば容易に活きる。江西の塗州にあるといひ、花鏡に、鳳尾蕉、一名番蕉といふ。鐵山に産し、江西、福建にいづれもある。葉は長さ二三尺、毎葉細尖瓣を出して鳳尾のやうな狀態をなし、色は深青で冬も凋まぬ。少し萎黄したときは鐵を紅く焼いてその本に釘てば依然として活きる。平常水を澆がずして生鐵屑を泥に和して壅へば自ら茂り、且つ能く子を生ずる。分種して容易に活きる。極めて能く火の患を辟ける。一般に多く盆栽とし、庭中に置いて奇玩とするといつてある。友人唐振聲は、東甌にゐたとき鳳尾蕉を見たが、土人はみな鐵樹と呼んでゐるといふ。これで見ると現に一般に用ゐられてゐるもの、及び洋船が齎して來る葉は、いづれも番蕉の葉であつて、眞正の鐵樹葉でなかつたことが判る。瀕湖は、陽草部にただ甘蕉、蘘荷を列して、虎頭、鳳尾等の蕉に就ては概ね言ひ及んでゐない。或は當時はまだその性が知られなかつたのかも知れない。此に錄してその缺を補ふ。

肝を平にし、統て一切の肝氣痛を治す

【難産】鐵樹葉三片を水で煎じ、一碗を服すれば直ちに分娩する（指南）

鐵樹

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

家寶眞傳に云く、また鐵連草とも名ける。鐵山、銅壁の上に生じ、又、鐵石の上にも生える。いづれも草本ではない。形は屏風のやうで、その狀態は孔雀が尾を分張したやうだ。色は黑く、枝は細く、刀で砍つては斷れぬが、斧で打てば折れる。

一切の心、胃、及び氣痛を治す。煎湯を服すれば立ろに癒える。

藥性考——鐵樹は色黑く、葉は石楠に類し、丁卯の年に逢ふと花を開く。花は四瓣の紫白色で、形は瑞香のやうで圓く小さく、香はない。樹は高さ數尺ある。血を止め、痰を下す。その花は一般に採つて痰火を治す。

留靑日札——鐵樹花は海南に出る。樹は高さ一二尺、葉は密にして紅く、枝はみな鐵色である。海底に生ずる。諺に、鐵樹が花を開くといふは、得難いといふことの喩である。

虎頭蕉

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

福建に產する。臺灣五虎山のものが佳し。一莖獨上し葉は莖を抱いて生え、相對せず、形は蕉に類して小さく苗は高さ五六寸、秋期に莖が起ち、蘭に似て色の紅い花を開き、結實は刺があつて篦麻子に類し、外面は苞狀をなしてゐる。高さ三四尺のものならば美人蕉と名けるもので、一類の二種に屬するものである。——現に閩の沙縣にも產する——

草寶——虎頭蕉は、性溫にして大に猛く、毒があり、能く風痺を治す。凡そ服するには二錢を過ぎてはならぬ。服して後には必ず風を避ける。もしそれを愼まねば必ず風疹を發するものである。

風痺を治し、性熱にして風を去る。

【血淋、白帶、一切の吐血を治す】舟車經驗方——芭蕉一大片を鍋に入れて炒り乾し、性を存して末にし、黃酒で調へて服すれば立ろに效がある。この方はまた一切の吐血を治す。美人蕉を用ゐるならば更に妙である。

菼草

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。
木村（康）曰く、百合

宦遊筆記——南方地方では蘞麻と呼び、北方地方では蝎子草と呼ぶ。黔地方には遍地にある。葉は麻に類して毛刺が多く、觸れると人を螫し、忍び難く腫痛する。この毒は蜂、蠆、蝎、蝮よりも甚しいものだ。

墨莊漫錄——川、陝地方に一種の惡草があつて、野に羅生してゐる。その枝、葉は、拂へば肌肉に入つて瘡疱と成り、浸淫し潰爛し、久しく癒えないものだ。卽ち蘞麻である。白香山の詩に『颶風千里黑く、蘞草四時青し』とあるは、この草は花があつて實がなく、雪の下でもやはり青いからである。

人海記——塞山に毒草がある。人の肌膚に中ると、毒が蜂、蠆よりも甚しい。唐山營から汗鐵木嶺を踰えた外邊の地にあり、俗に蝎子草と名ける。蘆の高さは四五尺、葉は麻のやうで、嫩い時は馬秣の用に供するが、霜を經ると辛螫するので觸れられない。綱目では、蕁麻の條下に、ただその蛇毒に塗り、風瘮に點けることを記載したに止つて、他はみな言及してなかつた。悉く補つて置く。

瘋を浴する。——采取して煮汁で洗ふ——また家を肥し得る。

科ノにら Allium odorum, L. ニ充ツルモノアリ、誤リナリ。寧ロいらくさ科ノいらくさ Urtica Thunbergiana, Sieb. et Zucc. ノ類ナラン。蝎子草ニ同科ノ Girardinia heterophylla, Decne. = G. palmata, Gaud. ほそばいらくさ Urtica dioica, L. var. angustifolia, Ledeb. 或ハ Urtica cannabina, L. 等ヲ充ツ、ほそばいらくさノ歐産種 U. dioica, L. ハ歐洲ノ民間ニ於テ糖尿病ニ效アリトス。近年藥理學的ニ實際血糖減少ノ作用アルコト證明セラレ其作用アル性狀未知ノ物質ヲ「ウルチン」ト命名セリ。新鮮ナル此草ノ植物ノ嫩毛ニ觸ルレバ疼痛竝ニ發泡スルヲ以テ有害植物トシテ注意ヲ要ス。ソノ刺戟ノ成分ハ蛋白質樣ノ物質ナリトイフ。

A. V. Marx und E. Adler; Arch. f. exp. Path. u. Pharmak. 112 (1929) 29;。藥誌五三三（一九二六）六一六。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

解暈草

即ち廣東萬年青である。

今は一般に廣東萬年青と呼ぶ。葉は建蘭のやうで深く厚く、冬に入つても凋まぬ。初め苗でた芽は背が紫色をなしてゐるが、長ずると色が青くなり、夏紫花を開いて穗に成り、また麥冬のやうな狀態でもある。その根に子があつて、分苗して種ゑれば極めて繁茂し易い。この物が粤中から出たから廣東萬年青と名けたのだ。綱目にある有名未用の吉祥草の下に瀕湖が引用した吉祥草は卽ちこの草であつて、やはり吉祥草とも呼ぶ。世俗に、婦人が寢室にこの草の鉢植を陳べ、それを產室まで移し入れて、能く產厄、及び血暈を解すといつてゐる。この草は色澤が翠潤であり、葉莖頸直で箭のやうなものだが、產室に入れると葉がみな軟く垂れ、色も槁瘁し、必ず數月を經て鮮艶に復する。また一の不思議な點だ。その根下の子を藥に入れて用ゐる。――海寧周世任云く、この草の根下の子は大いに子宮を冷す。凡そ婦人が斷產せんとするときは、子百粒を取つて擣汁を服す。永く妊娠しなくなる――

性は涼、味は甘し。血を理し、肺を淸し、火毒を解し、咽喉の七十二の症に對する要藥である。

【急驚を治す】活人書――洋吉祥草根の擣汁を用ゐ、冰片少量を加へて茶匙で灌ぎ下す。三匙で立ろに甦る。

萬年青

一名千年藴といふ。濶葉で叢生し、毎枝獨瓣で岐梗がなく、葉は頗る靑く厚く、夏になると玉黍のやうな狀態の莛を生じ、叢綴した小花を莛上に開き、冬に入ると紅色の子を結ぶ。性山土に善く、人家で多く植ゑ、浙地方では婚禮に多くこれを用ゐて禮物の函に添へる。それは四季常に靑くして長春の意味あるを取つたものだ。

百草鏡――四月八日の浴佛の日に、杭州の習俗では人家に植ゑた萬年青の葉を多く剪つて街上へ擲ち、人に踏まれると長じ易く、且つ新葉を發して密茂するといつてゐる。藥に入れるには葉を採つて陰乾する。煎じて坐板、痔瘡を洗へば極めて效がある。他の日に採つたものに勝る。

(和名) おもと。(學名) Rhodea japonica, Roth. (科名) ゆり科（百合科）木村、康、日ク、(Giels ハ萬年青ニおもと及ビ同シクゆり科ノ Tupistra chinensis, Bak. ヲ充ツ。おもとヲ充ツルヲ普通トス。おもとノ根莖ハ配糖體「ロデイン」ヲ含有ス。「ロデイン」ハ「ヂギトキシン」ニ類似スル强心作用ア

リ。最小致死量ニ於テ約三倍強力ナリ。利尿作用モ亦同様ナリ。局處作用及嘔吐作用ハ「ヂギトキシン」ニ比シ著シク弱シ。根及「ロデイン」ハ「ヂギタリス」葉及其製劑ノ良好ナル代用品タリ得ベク、臨床上優良ナル強心藥ナリトイフ。村島泰一—Tohoku.Jour. exp. Medic. 8(1927) 405.

土宿本草——雁來紅、萬年青はいづれも汞を制し得る。

甘く苦し、寒なり　咽喉急閉を治するに、擣汁に米醋少量を入れて灌ぐ。痰を吐して癒える。——藥鏡に云く、その根は多く草薫氣を作し、腹に入れば人をして嘔吐せしめる——子は分娩を催す。——從新に、乳香湯で一粒を呑む。男は左、女は右の手中に帶びて出るとある——

藥性考に云く、味苦く微し甘し、毒を解し、胃を淸し、火を降し、能く吐血を止める　紅棗七箇を劈開したものと共に煎じて飮む。嫩葉を陰乾したものを用ゐる。根は喉痺を療じ、以て心を養ふ　葉が短くして尾の圓いものが眞なるものである。

【白火丹】　祝氏效方——萬年靑の搗汁を服す。

【痔漏】　○家寶方——萬年靑葉の汁を取り、もし汁が無いときは根を用ゐ、水少量と共に搗いて汁を取つて搽る。

【老幼の脫肛】　慈航活人書——萬年靑を根を連ねて湯に煎じて洗ひ、川五棓子末を上に敷けば立ろに效がある。

【一切の跌打損傷】　活人書——山芝麻、橡栗樹花、萬年靑花、鐵脚威靈仙汁を黄豆大の丸にし、毎服一丸を陳酒で服す。

【頭風】　嵩崖雜記――碎蘆丹。頭風を治すること神の如し。萬年青根を尖に削り、硃砂を蘸けて鼻孔内を塞ぐ。左痛には右を塞ぎ、右痛には左を塞ぎ、兩邊痛には双方を塞ぐ。神效がある。清水を鼻涕で取下し、一晝夜で妙である。

【蛇毒】　德勝堂傳方――萬年青を磨つて塗り、渣で罨する。いづれも妙である。

【陰囊大】　萬年青根の搗汁を熱した陳酒に沖して服す。三回にして癒える。

【痔瘡腫毒で歩行困難のもの】　活人書――猪腿骨を兩頭を去り、萬年青と共に砂鍋に入れ、水で一炷香の間煮て熱に乘じて薰じ、溫んだとき洗ふ。一日三回、數日にして癒え、永く發らない。

【纏喉風】　經驗單方――萬年青の根頭を切碎いて打爛らし、汁を絞つて灌下らし、痰涎を吐出すれば好し。もし口を閉ぢるときは牙刷で挖開して灌下し、吐かぬときは再び髮梢を喉間に進めて探る。

汪連仕云く、萬年青は俗に冬不凋草と呼ぶ。瘡毒を治し、濕熱を收め、脚氣を洗ふ。湯泡火傷、天泡瘡、白蛇纏には搗汁を搽る。

王安采藥方――中滿、蠱脹、黃疸、心疼、哮喘、咳嗽、跌打傷を活す。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

李氏草祕——萬年青は、今は酒肆で多く種ゑる。能く眼蠱を解し、白火丹を治す。末にして酒で一二錢を服すれば癒える。又、噎膈を治す。

仙半夏

各種の麯を附す。

近頃は諸醫いづれも用ゐ。藥肆にも多く製して備へてある。傳說に、製法は仙人から傳はつたといふところから仙半夏と名けたといふ。能く痰を化すること神の如きものである。信ぜぬならば、半夏七八粒を研つて痰碗の中へ入れて見ると、直ちに化して淸水となる。その法は、大半夏一觔、石灰一觔、滾水七八碗を盆に入れ、攪ぜ涼し澄淸して渣を去り、半夏を盆に入れて手で攪ぜ、日に曬し夜露し、滿七日にして撈出して控乾し、井花水で三四回洗淨し、三日間泡けて每日三回づつ水を換へ、撈起して控乾し、白礬八兩、皮硝一觔、滾水七八碗を用ゐて、礬、硝を共に盆に入れて攪き涼し、溫くなつたとき半夏をその中に入れ、七日間浸して日に曬し夜露し、七日に滿ちてから取出し、淸水で三四回洗つて三日間泡け、每日三回づつ水を換へ、

取出して控乾して後藥に入れ、甘草、南薄荷各四兩、丁香五錢、白荳蔻三錢、沈香一錢、枳實、木香、川芎、肉桂各三錢、陳皮、枳殼、五味子、青皮、砂仁各五錢、右計十四味を切片し、滾水十五碗に入れて涼溫になつたとき、半夏とその藥と共に盆に入れて滿十四日間泡け、日に曬し夜露して攪ぜ、藥を取出して半夏と同じく白布で包住し、熱坑中に置いて器皿で扣住し、三炷香の時間が經つた時、藥と半夏とを分胎し、半夏を乾して取收めて用ゐる　痰火があるときは、これを服すれば一日にして大便に魚膠に似たものを出し、一夜にして盡く痰根を除き、永く生じない　綱目には、半夏の條の附方に半夏を製する法は記載してあるが、その製法はこれと同じくない　現に藥肆で賣つてゐる仙半夏は、ただ半夏を浸泡してその汁味を盡し去り、然る後に甘草を用ゐて浸し曬してあるので、口に入れると淡くして微し甘く、全く本性を失つてゐる。名は仙半夏といふけれども、方に照した製法でない。醫家はやはり虛せる人にして痰あるものを視るとこれを用ゐ、性は平、和であつて、燥烈で傷めることはないと考へてゐるが、これは半夏の渣滓を食ふと異らない。何の益があらうぞ。

痰を淸し、鬱を開き、氣を行り、痺、痰疾を理す。中風不語には、七八粒を研つて井花水と共に送下し、手で一炷香の間腹上を摩運すれば、醒めて能く言語が自由になる。敬按ずるに、龔雲林は『仙方製半夏は痰を化して水となし、壯人の痰火、有餘の症を治するにこれを服すれば效がある。虛人の痰には服することを忌む』といつた。

各種の半夏麯。綱目の半夏の條の修治下に、韓飛霞醫通の半夏麴を造る法を引用して、能く各病を專治するとあるが、またその製法を記載してなかつたから、特にこれを補つて置く。

生薑麯　薑汁に浸して造る。淺近の諸痰を治す。

礬麯　礬水で煮透し、兼て薑を和して造る。最も能く水を卻け、淸水痰を治するものである。

皂角麯　皂角を煮た汁を煉膏し、半夏末を和して麯にする。或は南星稍を加へ、麝香を加へる。風痰を治し、經絡を開く。

竹瀝麯　白芥子等分、或は三分の一を用ゐ、竹瀝で和して成つたものに略ぼ麯を

加へて和す。皮裡、膜外の結核、隱顯の痰を治す。

麻油麴　麻油に半夏を浸し、五日間浸して炒乾して末にし、麪を和して造成する。油は燥を潤すものである。虚欬、内熱の痰を治す。

牛膽麴　臘月の黄牛膽汁に略ぼ熟蜜を加へて和造する。癲癇風痰を治す。

開鬱麴　香附、蒼朮、撫芎等を蒸膏し、半夏末を和して造成する。鬱痰を治す。

硝黄麴　芒硝十分の三を用ゐ、麴と共に煮透して末にし、大黄を煎じた膏で和成する。中風卒厥、傷寒の下すべきもの、痰に由るものを治す。

海粉麴　海粉、雄黄を半夏の半の割合で入れて煉蜜で和造する。積痰沈痼を治す。

霞天麴　黄牛肉の煎汁で膏に煉つたものを霞天膏と名ける。その膏で半夏末を和して麴にする。沈痾痼痰を治す。以上の諸麴はいづれも造麴法に照したものである。草で七日間盦ふて黄衣の生ずるを待ち、風の處に懸けて置く。久しければ久しいほど佳し。

建神麴

范志麴、白酒藥麴を附す。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

福建に産する。泉州府の開元寺で造つたものが佳し。この麯は百草を採つて罨成するものだから、又、百草麯といふ。黒色のもので、煎じても塊を成して散ぜず、清い香氣をなすものが眞なるものである。色の黄淡を帶ぶるものをば貢麯といふ。力は和、平であつて青黒なるものの力の大なるに及ばない。この麯は陳ければ陳いほど妙である。

藥性考――泉州の神麯は微し苦く、香しくして甘い。風を捜し、表を解し、胃を調へ、痰を行り、嗽、瘧痢、吐瀉を止め、能く温疫、嵐瘴を安じ、疹を散じ、斑を消す。感冒頭痛、食滯心煩には、薑煎で或は二三錢を温服する。この製造に就ては、百草の法が秘して傳へられないといふことだ。有名なものは范志の塊造方で、端にそれを用ゐれば應效がある。遠方への贈物として一般に歡ばれてゐる。

蔡氏藥帖に云く、風寒、暑濕の頭眩、發熱、表汗は立ろに癒え、能く積を消し、胸を開き、膈を理し、胃を調へ、脾を健にし、及び四時未定の氣、兼て能く瀉を止め、腫を消し、及び飲食不進等の症、又、能く霍亂吐瀉、咳嗽、赤白痢疾、小兒の傷饑、失飽一切の症を止める。もし遠方への旅行で水土の適せぬ場合、瘴氣肚痛に

いづれも效を取ること神の如くである。

○范志齋蔡協德は泉州府の城西街の東塔前に住し、百草神麯を製造する。卽ち今の建麯である。毎個重さ半觔、或は四兩である　乾隆辛卯の年の五月、蔡氏が恰も麯を製造してゐる際、突然ある客が來て、百草を視て嘆じていつた。當今の男女、老幼は秉氣が衰薄だから、恐らく元氣を傷めるであらう。予に奇方がある。凡て藥は九十六味で、それを君臣、佐使に配合し、別に十二味、靑草、紫蘇、薄荷等の物を加へ、搗爛らして湯に煎じ、凡て一百零八味を合せて製して小方塊とし、毎塊一兩とし、端午、及び六月六日の日の諸神會聚の時を按じて、みな法に依つて製造すべきものである。藥性は平、和にして氣味は甘く香しい。遠行の者はこれを準備して、茶に代へて常服するがよし。大人は毎服三錢を水一碗で七分に煎じ、小兒は毎服一錢五分を水一茶鍾で六分半に煎じ、饑、飽の時に服す。生菜を忌む。ただ妊婦は服してはならぬ。この藥は切片して湯に煎じても藥滓が散らない。必ず形色を確むべきもので、淡黃のものが眞なるものである。

○福建泉州府城內の范志吳も萬應神麯で名を馳せてゐる。氣味は中和で香が淸く、

甘くして淡い。能く風を捜し、表を解し、胸を開き、膈を快くし、胃を調へ、脾を健にし、積を消し、食を進め、中を和し、酒を解し、瀉を止め、水を利し、四時不正の氣、感冒、發熱、頭眩、咳嗽、及び傷食腹痛、痞滿氣痛、嘔吐、泄瀉、痢疾、飲食不進等の症を治す。瘧瘡の初起には、これを用ゐれば邪毒を托し、又、水土の適せぬもの、瘴氣瘧痢を治す。遠方への旅行には尤も常服すべきものである。大人は毎服三錢を水一湯碗で七分に煎じ、小兒は毎服一錢半、或は一錢を水一大茶鍾で七分に煎じる。毎一錢を破つて五六塊にする。外感の發熱、頭眩、咳嗽、瘧疾、嘔吐には、いづれも生薑を加へて共に煎じ、泄瀉には烏梅を加へて共に煎じ、ただ痢疾の一症には必ず倍加して用ゐ、大人は五錢づつを、小兒は二三錢づつを、好箇茶心を加へて共に煎じる。毎觔の價銀一兩六錢、もし匣裝を用ゐるときは毎個五文。店は學院考棚邊の桂檜巷内觀音亭頂南畔の第三間に在る。范志吳氏の看板を目印とされたい。

白酒藥麯　藥性考に曰く、白酒藥麴は松江が有名である。良薑四兩、草烏半觔、吳萸、白芷、黄柏、桂心、乾薑、香附、辣蓼、苦參、秦椒の九味一兩等分、菊花、

薄荷二兩丁皮、丁皮、益智(やくち)五錢、杏仁と共に細末にし、滑石五觔、米粉一斗、八河沙を拌勻して丸に造つて乾す　これを用ゐて釀した酒は芳馨(はうけい)であり、炒焦して拌ぜて食へば滯積の消することと靈妙である。

帕拉聘

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

七椿園西域聞見錄――帕拉聘(はくらつへい)といふは草の根であつて、全く三七に似てゐるが、ただ色が藍、或は黑である　溫都斯坦(をんどすたん)に產する。同地の人は多く往來採取し、仲買を通じて回城へ賣つてゐる。痰を治するものだといふが、中國の人はその地へ往つたことがないから、實際にそれを嘗め試みたものがない。

一切の陰冷、痼疾を治す。これを服すれば立ろに除く

一枝蒿

（和名）あきのきりんさう。
（學名）Solidago Virga-aurea, L.
（科名）きく科（菊科）

紹郡(せうぐん)の府佐李秉文は久しく西域地方を旅行した人だが、その話に、巴里坤(はりこん)に一種の藥が出る。一枝蒿(しかう)と名け、深山中に生じ、枝葉がなくして一本だけ上上に莖える。

氣味は蒿のやうだ。四月の頃に牧馬の使用人が馬を驅つて山に入り、その草を採收して携へ歸り、膏に煎じて遠方の旅行者に賣つてゐる。蘭州まで行商人が持つて來て賣つてゐる

血を活し、毒を解し、一切の積滯、沈痼、陰寒等の疾を去り、風を驅り、怯を理す。

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

香草

石振鐸本草補――西國に香草を産する。山野に徧く生え、樹の高さは一尺ばかり、枝幹は蚪曲し、冬を經て彫まず、花は小さくして色は紫白、實の成つたとき中に小黑粒があり、春期にそれを揷めば活きる。肥を惡み潔を喜むのだ。夏になると小蟲が生じ、蠅卵が著き、ために小さい白點と絲綱とが著く。それは去るがよし　衣袖で觸動すると芬芳人を襲ふので、紉つて佩になる。その花を採つて衣服を藏する箱に入れて置けば能く諸蟲を辟ける　その枝、葉を焚けば能く瘟疫、嵐瘴を辟除し、室内の穢氣が自ら除ける

主治は、鬱を解す。凡そ心懷の憂悶には、布に包んで左脇下の傍に置く。能く胸膈をして舒暢せしめる。○蚤、虱、壁虱を除くには、枝、葉を取つて暴乾して粉にし、布に包んで肌膚に貼けてゐる。多いほど效がある。○體に風寒を受けて不快なるには、枝、葉の煎湯に浴して後に睡る。片時にして癒える。○物を食つて味の判らぬには、葉を酒で煎じて空腹に飲み、麪と共に食ふ。舌の本が津津として十分に食へる。○顏面に黑瘢のあるものには、葉を取り、或は水、或は酒で濃煎し、毎早朝顏に塗る。能く瘢を滅して顏を滋くする。○齒痛動搖には、醋で葉を煎じて熱に乘じて擦り、漱ぐ。○又、胃火が盛で口の臭きもの、頭に風痱多きもの、幷に髮が穢れて人に觸れ、記舍――腦である――の堅固ならぬものを治す。葉を取つて水で煎じて服す。時に醋を加へる。特に頭の外部の病を除くばかりでなく、幷に頭の內司を裨ける。蓋し人の記舍は腦に在るものだからである。

敏按ずるに、以上の所說はいづれも泰西から出たものだ。石氏の本草にその形狀、功用を核ね示してあるところを見れば、今一般に奶孩兒草と名けるものがこれに近いやうである。但し奶孩兒草の正名は鰤酣草であつて、霜を見ると萎え、竝に冬を

經て凋まぬものではなく、春に入つて子を種ゑるもので、その宿根からは發苗せぬ。また莖には一尺ばかりで虬曲した枝幹もある。或は泰西は地が暖く土壤が肥えてゐるので、粤中の茄は冬を經て樹になるやうなわけかも知れず。或は又、別に一種の木本のものがあるのかも判らぬ。姑くその說を存して考證を俟つ。

臭草

（和名）未詳。
（學名）未詳。
（科名）未詳。

本草補――泰西には既に香草を產するが、復た臭草を產する。薫しきと蕕きとは同じくないが、效用の點では同一だ。その本は高さ一尺餘、小さい黄花を開く。花蕊を摘んで陰乾して用ゐるもので、葉と同功である。結子は實ると裂けて四房に分れ、毎房に數粒の子がある。春、秋二期の中頃にいづれも種ゑるがよし。春期に枝を挿しても活きる。霜雪を畏れない。やはり肥を喜ばぬもので淸水を澆いて置く必要がある。人が手で捋ると臭氣が拂拂たるもので、穢汚、朽腐のものなどの比較にならぬものだ。その功用はやはり香草と等しく、樹下に植ゑると能く樹上の蟲を殺し、圃中に植ゑると能く蛇、蝎、蜈蚣等の諸毒を辟ける。

泄瀉、及び小便不通には、臭草の葉を取り、或は生、或は煮て食ふ　服毒、幷に蛇、蝎、蜈蚣等の毒には、急に臭草の葉を取つて生で食ふ　その毒は自ら解す　腹中の蛔蟲には、清油で臭草葉を煎じて搗爛して臍上に敷く。遂に使君子を食ふに勝るものだ　鼻血には臭草葉を取つて搗爛らし、鼻孔を塞げば直ちに止まる　危急の重病で昏暈するには、葉を採つて醋で烹て搓み熟し、鼻を塞げば直ちに醒める。耳痛には臭草葉を搗爛して自然汁を取り、石榴皮の中に入れて煨いて耳中に滴らす。目痛には葉を清水中に入れて二三夜露し、葉にその水を蘸けて眼に點ける　目力過勞には臭草葉の自然汁に蜂蜜一滴を加へ、幷に略ぼ小茴香を加へて自然汁を調和して眼に點ける　久しくして明に見える　楊梅瘡には自然汁に略ぼ好酒、幷に清水、粉を加へ共に煎じたもので治す　婦人の心氣痛で、病が子宮の上冲に由るものには、臭草葉を嗅ぎ、癒えるを度とする。大庾曹上士が嘗てこの方を用ゐてその靈驗を嘆稱してゐる　小兒の大便腸出には、好酒で臭草葉を煮て搗爛らし、布を用ゐて膏にして貼る。

本草綱目拾遺第五卷　終

昭和七年十二月十一日印刷

昭和七年十二月十五日發行

頭註國譯本草綱目（第十二冊）拾遺

非賣品

翻譯者　鈴木眞海

東京市日本橋區通三丁目八番地

發行者　和田利彥

東京市日本橋區通三丁目八番地

印刷者　氣賀林一

東京市日本橋區通三丁目八番地

刊行所　春陽堂

電話日本橋五一・六四一・三七八八

振替口座東京一六一七

東京・日東印刷株式會社・印行